THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十五年　第六號　第三百八十三號



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥 **健腦丸** を要求す

島村博士證明
健腦丸
腦病良藥
KENNOGWAN

主効
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を増進す。

改正價藥

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓[illegible]拾錢
三週分	貳圓[illegible]拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舗 大阪市順慶町 東京市箔屋町 丹平商會藥房

■故泡鳴氏を不朽に傳ふる傑作の集大成

泡鳴五部作叢書

逝ける泡鳴氏の著作等身に及ぶも、其の代表作として自ら許し世また之を認めたるは、實に上掲の五部作也とす。五卷相一貫せる自傳的小說にして、二千數百枚に亘る空前の一大長篇小說と稱すべきもの。愛慾の鬪ひを材となし、人間獸性のどん底を暴露して、百鬼暗に行くの活圖畫を展べ來り、そぞろに讀む人の心を寒からしむるところに、作者の特色と長所とを殘りなく見るを得可し。逝ける大泡鳴の藝術家としての全豹を知ると共に、思想家としての一面を併せ窺ふ可き代表作に接せんとする人に、敢へて此の『五部作叢書』を薦む。

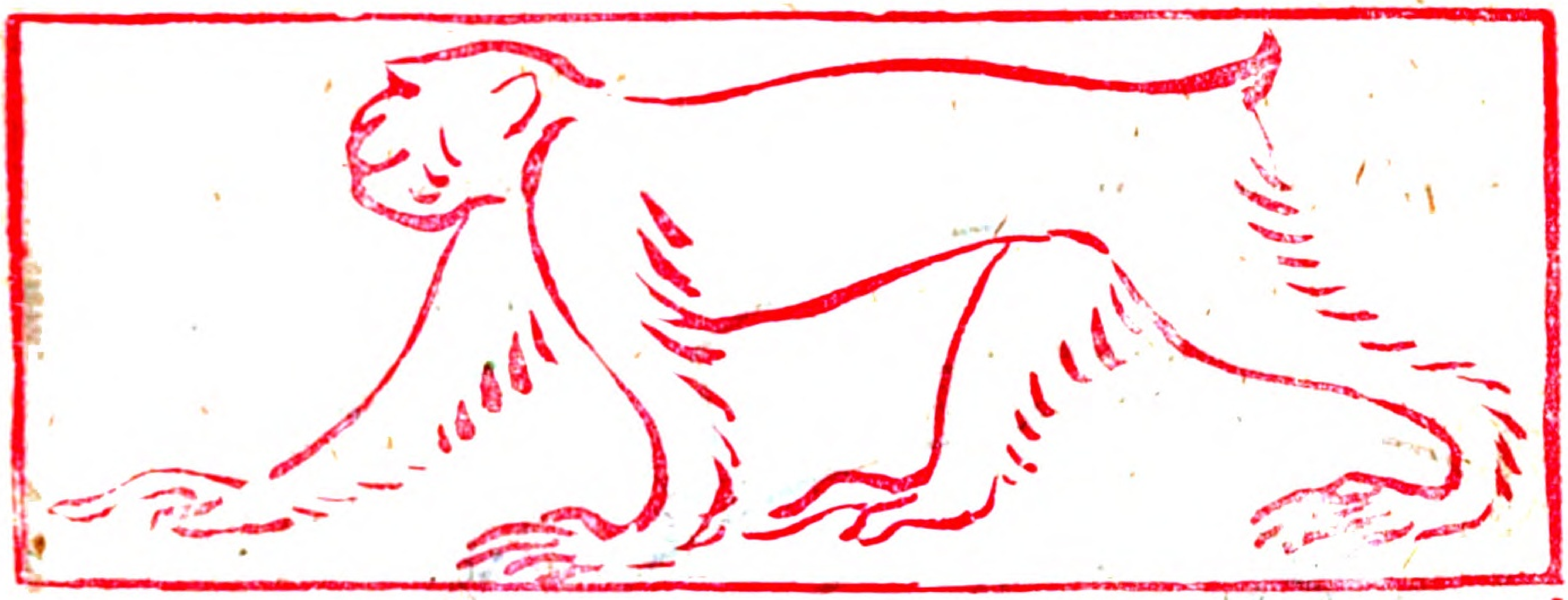
◆洋布上製美本◆定價各壹圓廿錢◆送料八錢◆

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

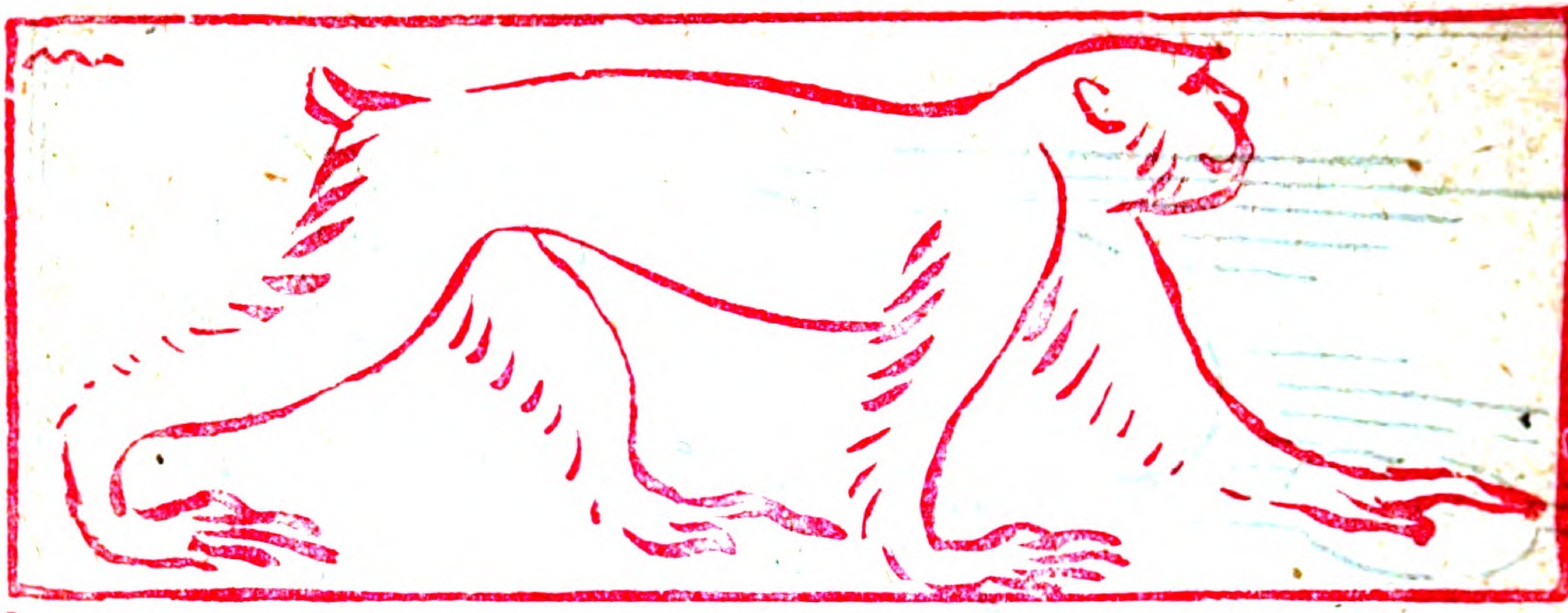
新潮社

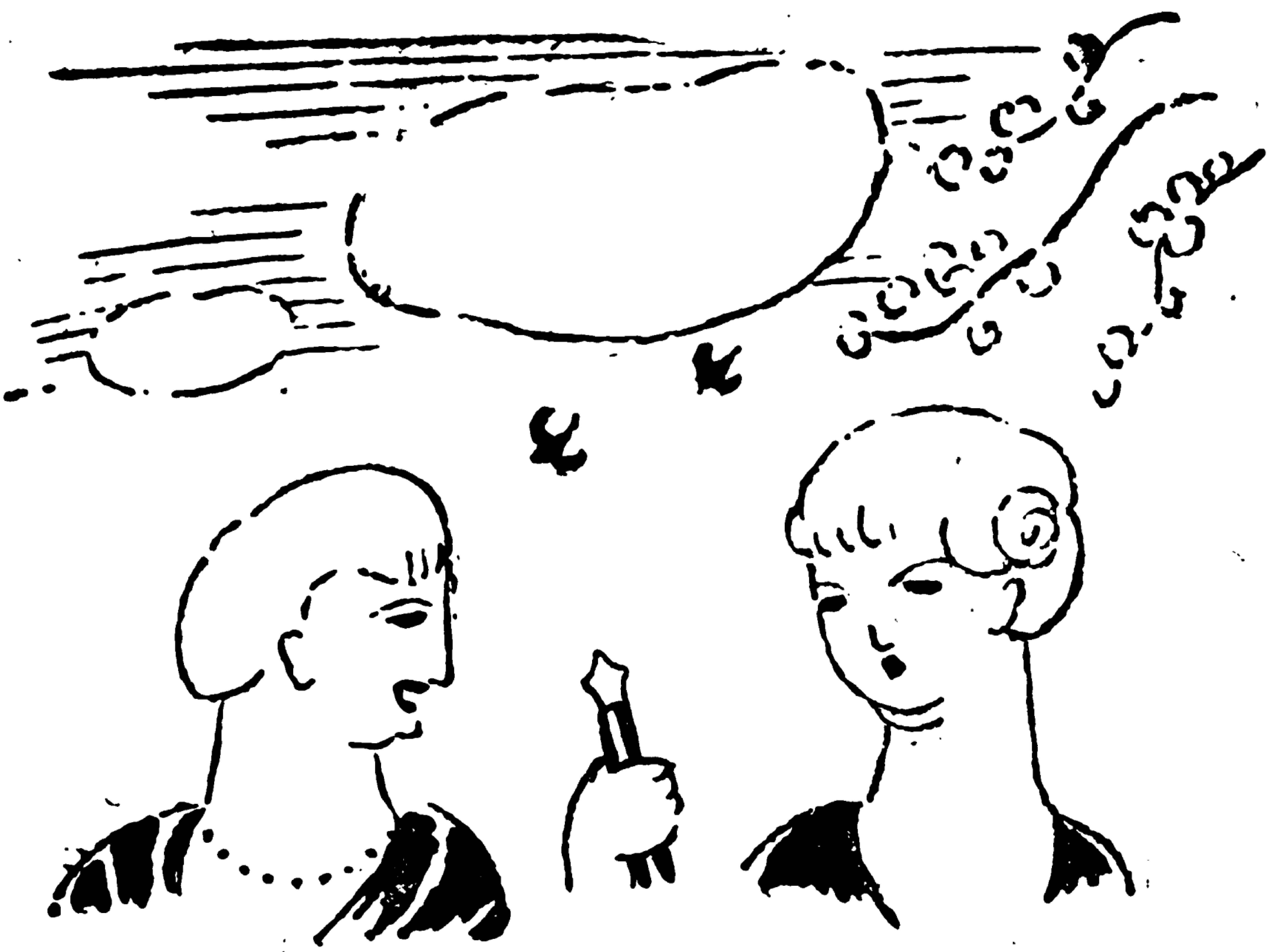
電話番町 長 八〇九番
八九九番


いゝものは
やはりいゝ
鷹印帽子は
いつもよい
絶品質主義



中央公論第卅五年六月號目次







"LAKE ALBANO WITH CASTEL GANDOLFO"
BY J. R. COZENS.

文壇十三名家執筆

ワイルド全集

◎藝術の爲の人生か、人生の爲の藝術か唯美主義、官能主義、色情主義の藝術化されたる大名著は悉く収めて此寶庫にあり

第壹卷（小説集）◎再版出來◎

◎オスカア・ワイルドの生涯　本間久雄◎ドーリアン・グレイの畫像　矢口達◎アーサア・サヴイル卿の犯罪　秋田雨雀◎カンタウイールの幽靈　同人◎模範金滿家　同人◎W H氏の肖像　同人◎秘密の無いスフインクス　矢口達◎

第二卷（戯曲集）◎再版出來◎

◎サロメ　中村吉藏◎フロオレンスの悲劇　本間久雄◎パヂウア公爵夫人　楠山正雄◎ウヰンダミヤ夫人の扇　島村民藏◎理想の夫　坪内士行◎

第三卷（戯曲及童話集）◎最新刊◎

◎ヹラ　小山内薫◎眞面目なる事の必要　谷崎精二◎何んでもない女　河竹繁俊◎柘榴の家　矢口達◎

◎（各册ポイント細活字印刷中判形箱入◎定價各金二圓八十錢紙數七百頁内外リード製金箱押◎郵送料各書留十八錢）◎

第四卷詩集　日夏耿之介氏執筆

◎六月中旬發行　定價不定

發行所　東京市麴町區飯田町一の二　株式會社天佑社　振替東京一〇二八番　電話番町一一七九番

白木屋呉服店

◆格安品大賣出し　六月一日より

◆帷子地大賣出し　同一日より

◆薩摩、久留米、大和絣、新柄陳列　同一日より

◆特製夏洋服、外套、レインコート陳列　引續き開催中

◆團扇、扇子、岐阜提灯、簾、陳列　引續き開催中

◆田中良氏芝居スケッチ展覧會　六月一日より

總選擧後の政局

今次總選擧戰の結果は、豫定通り政友會の大捷に了つた。形の上から云へば、政府は國民多數の信任を得て一層其基礎を堅くした譯である。殊に其の普選尙早の黨議は所謂穩健なる大多數國民の明白なる贊同を得た譯である。

然るにも拘らず、世上には早くも內閣讓渡しの噂あるは何ぞや。國民多數の信任ありて而も更迭を必要とするは、憲政普通の常例ではない。

傳ふる者は曰ふ。政友會は新に議會に絕對多數を占めた。而して其勢威の未だ傷けられず又國民的反感の未だ著しく蝟集せざるに先ち、姑く引退するを得策とする。政府に對する民心の倦怠が轉じて反感とならざる樣に、彼は早晩官僚の一派に政府を明け渡し以て他日の再起を待つであらうと。蓋し政局の行き詰るや、議會多數の利器を擁して官僚を輔くるを約し、官僚亦當該政黨の勢力を挫かざるの條件の許に政權を讓り受くるは、從來彼等黨人の慣用手段であつた。官僚亦單獨にては政局を維持し得ざる當今の時勢に鑑み、所謂情意投合の慣れ合ひ政治を屢々した事は、最近の歷史に明白である。政友會の從來の經歷から推せば、引退の口實を閣員乃至首相の病氣其他に藉り、不得要領の裡に政府を官僚の手に渡し、以て天下の公器を黨略の爲に弄ぶといふが如きは、必しも有り得べからざる事ではない。

口實を何に藉るにしろ、現政府の早晩引退せざる可らざるは疑を容れない。何故なれば、政府に對する國民の信望は恐らく目下の勢を以てして日一日と減退し行くを以てゞある。見よ。普選速行の要求は今後益々熱烈なる國民的要求たらんとして居るではないか。政府の陰に陽に之を抑壓するに激せられて結局何處まで行くか分らない。之と相關連して勞働問題があり、又政局の行詰りを一層早める原因として對支對西等の外交問題もあれば財政經濟上の諸問題もある。一時の偸安を貪る姑息政治は何時までもボロを出さずには居ない。蒔いた種子は刈らねばならぬ。政府の壽命も大抵先きが見へ始めた。今度の選擧で獲た絕對過半數は實は欺き掠めた多數に過ぎざることは、今更申す迄もない。

然らば政府は事實上早晩更迭せねばならぬ。併し更迭するにも順序がある。憲政の運用に大切な事は、結局善良なる結果を見る事ばかりでなく、其の歸處に到る道筋を汚さない事である。政友會をして引退せしめよ。併し乍ら引退に際して黨利の爲め公益を犧牲に供するの惡計に成功せしむる勿れ。彼等は今次選擧の結果を以て國民多數の信任我にありと云ふ。國民多數の信任を誇る間は、彼等に引退の機會を與ふる理由はないではないか。彼等が如何しても引退せやうといふなら、其は必ずや其の所謂國民的信任に對する疑惑を自認した後で無ければならない。さうすれば最も強く國民の聲を代表して政府の更迭を促した在野黨が、後繼者となり、更めて議會を解散して國民の信任を問ふと云ふ事になる。少くとも此順序を取るでなければ立憲の常道は維持されないのである。

中央公論



第卅五年第六號
六月號
第三百八拾三號

トルストイの剩餘價値論

――「我等何を爲すべきか」はトルストイの「資本論」――

井箆節三

(一)貨幣の缺陷から見た經濟

賀川豐彦君もいふ、「今日までの產業組織に於て最も不都合な點は、サンシモン派の人々が「レント」と呼び、トムソン及びマルクスが餘剩價値と呼び、メンガアが不勞所得と呼ぶものが發生することである。とにかく問題に、遊んで居ても利子で食へる人があり、地代が年に幾十萬圓も入る人があり、一日に一寸電話をかけただけで幾百萬圓を儲ける人があるに拘らず、一方には朝から晩まで一生懸命に働いて、それでもまだ食へない幾千萬人の勞働者があると云ふとで

ある。そこでマルクスは簡易に之を資本家が餘剩價値を發生さす爲だといふが、餘剩價値が社會的に何故發生するかに就ては、彼は何事も書いて居らない。成程、餘剩價値が發生することが無ければ、勞働者の發生させた價値量は凡べて勞働者に歸つて來る筈であるが、餘剩價値として資本家が奪ふものがあるために、勞働者の收入は實に僅かなものになるのである。しかしマルクスの資本論の方程式から見れば、餘剩價値の函數といふものは決定的のものであつて、それは何等社會進化の上の意義を持つて居らぬものである。即ちマルクスは餘剩價値が何故發生するかに就いて論じて居らないのである。」(「改造」三月號)

マアルクス以後の社會主義者は種々の重大な誤謬に纒はれて居るが、中にも最も致命的な誤謬は謂ゆる餘剩價値說である。――謂はゆる餘剩價値說で不勞利得略奪の理由が說明せられるとの誤解である。私は百人のマアルクスをも說破する確信を以て斷言するが、謂はゆる剩餘價値說を以てしては、價値略奪の原因を說明することが出來ない、資本主義の罪惡を立證することは出來ない。マアルクスの剩餘價値說は寧ろ資本家辯護論になる。

但し賀川君も剩餘價値の發生する根本原因を悟らずに居る。同君に從へば、「不勞所得を發生せしめたものは、經濟的にいへば勞力ではあるが、心理的にいへば民衆の欲求にある。資本家に不勞所得を增加せしめるものとは知りながらも、勞働者が工場を慕つて食べるだけで善いから使つてくれと申込んで行く所に、資本家の不勞所得が知らずして發生するのである。即不勞所得なるものは、資本家の側からいへば、勞働の餘剩價値から發生するけれども、社會の側から言へば、民衆の要求から發生するものである。利子も地代も利潤もみな同一の理法に因らぬものは無い。たとへば茲に一勞働者が正當な賃銀で全く餘剩價値無くして勞働したとしても、その製品に對する社會的需要が非常に多くなつて、その市價が急に倍加すれば、資本家が全く餘剩利潤の利得なくして勞働者に賃銀を支拂つたとしても」「その社會的需要の增加に由る市價の騰貴によつて、不勞所得が發生する。「しかるに今日の資本主義は、此社會的要求に全く社會化の無いとを利用して、私腹を肥さんとして居るのである。資本家の考へでは、之は勞働者が發生した價値でもなければ、自分が發生したものでも勿論ないが、產業的にはまだ社會として其の不勞所得を受取る機關が無いから、自分が預つて置か

うといふので、私人的に收用して居るのか、今日の經濟組織である。」(「改造」十二月號)

賀川君の此の說明では、その根本的誤謬に於て、マアルクスの說と同じとで、不勞利得は資本家が略奪するではない、社會が奉納するのだといふことになるから、寧ろ資本家擁護論になつて、資本家攻擊論にはならない。それは賀川君が「眼球の缺陷より見たる宇宙觀察」を書いて、「機構の缺陷より見たる經濟組織」を書かないからである。「機械の人間壓迫史論」を書いて、「貨幣の人間壓迫史論」を書かないからである。賀川君は、「殘酷の歷史」に於ても、食人と戰爭とを擧げて、貨幣の殘虐を漏らして居る。食人――戰爭――營利。かういふ順序で人類の略奪は進化して來たのだ。

食人でも戰爭でも、强者と弱者との間にのみ行はれる。双方の力量が全然平均して居れば よし戰爭は起つても、勝利は五分々々である。食はれるとか負けるとかいふ者はない。賣買でも同じことである。賣手と買手とが全然平等の條件を以て價値を交換すれば、双方共に平等の利益を受け、決して一方が損をして、一方が得をするといふことはない。卽ち「營利」は不可能である。さうして此の「營利」といふのは、經濟的略奪の別稱である。

資本家が一日二圓の賃銀(貨幣)で勞働者の勞力を買つて、その生產した結果(商品)を三圓にも四圓にも賣ることが出來る。これは一體何故であるか。賣手(ヴエンダ)は商品の代償に受取つた二圓の貨幣を二圓にしか利用することが出來ないのに、買手は貨幣の代償に受取つた二圓の商品を三圓にも四圓にも轉賣することが出來る。これは一體何故であるか。――經濟學者は(マアルクスも)貨幣を定義して「交換の媒介及び價値の尺度」だといふが、それは果たして眞理であるか。

賣手は受取つた貨幣に公定價格があるから其れに制裁せられる。買手は受取つた商品に公定價格が無いから其れに拘束せられない。賣手の受取つた價値には彈力が無い。買手の受取つた價値には彈力がある。賣買卽ち價値の交換に於て、又は其の結果に於て、賣手は買手よりも不利であり、買手は賣手よりも有利である。――一方は不利、一方は有利、それでも「交換の媒介」か。交換の媒介とは、利益と利益との交換ではなくて、有利と不利との交換か。二圓で買つたものが三圓にでも四圓にでも賣られる、それでも「價格の尺度」か。價格の尺度とは、二圓を二圓に賣るのでなくて、三圓にも四圓にも賣ることか。

若し買手のみが賣手に對して貨幣といふ公正證書を交付する代りに、寧ろ賣買双方から相互に公正證書を交換したならば如何。たとへば貨幣といふ買錢に對立して賣錢ともいふべき切符を公定したなら、賣買價格の公證が片務的でなく双務的になつて、二圓で買つたものを三圓に賣るといふことは不可能になるのでないか。二圓の賃銀で生産した商品を三圓で賣るには、賃銀と引換に受取つた二圓の切符以外に、更に一圓の切符が必要で、それを得るには、自腹を切つて、更に一圓だけの買物をしなくてはならない。彼が自腹を切る分には、幾ら多く切つたとて、彼自身以外には、誰にも不利益を及ぼさない。また、さうなれば誰も二圓で買つたものは、必ず二圓で賣ることにして、決して三圓には賣らない。

勿論、需給の關係によつては、即ち買手さへあれば、二圓で買つたものを十圓に賣ることも出來る。けれども、さる代り更に他の場合に於ては、十圓で買つたものを二圓に賣らなければならない。(何故なれば、二圓のものを十圓に賣つた時に、八圓の切符が失はれたから)。無論、此の關係は複雜である。二圓で買つたものを三圓に賣り、五圓で買つたものを八圓で賣り、七圓で買つたものを四圓で賣り、十圓で買つたものを九圓で賣る。さういふことは有るであらう。けれども全額を差引すると、賣つた總額も二十四圓、買つた總額も二十四圓、即ち賣買の內容は、(商品)に於ては錯雜したが、(價値)に於ては平均した。――吾々の祖先が始めて貨幣を發明したときには、交換の目的は玆にあつたか、それとも五十圓賣つて、三十圓買ひ、二十圓を貨幣のまゝで蓄積するにあつたか。

交換の媒介が蓄積と略奪との媒介になつたのは何故か。價値の尺度が轉賣する者の勝手に左右せられるのは何故か。貨幣といふ仲人と財產といふ花嫁とが混同せられたのは何故か。「金」といふ受取證文と「富」そのものとが同一に考へられるやうになつたのは何故か。金錢といふ交換の奴隷が勤勞又は商品といふ主人を支配するやうになつたのは何故か。人間が勤勞又は商品といふ目的よりも金錢といふ手段を尊重するやうになつたのは何故か。此の媒介と蓄積との、仲人と花嫁との、證文と商品との、奴隷と主人との、手段と目的との、地位の轉倒は何處から來たか。――交換と營利との明白な混同は何處から來たか。――貨幣制度の缺陷から、然り、交換組織の缺陷から。

しかるにマアルクスは不覺にも、彼の炯眼を以てして、此經濟組織に於ける最大缺陷を看過した。彼は價値論の原因

を、交換組織の中に求めずして、生産組織の中に求めた。蓋し彼は貨幣は一種の商品と誤解した。彼は「貨幣が一種の商品である兆候は既に十七世紀から現はれた」といふ。さうして「價値の本則」として、商品と商品との交換は常に「等價の交換」であるから、賃銀と勞力との交換も、商品と商品との交換であつて、即ち等價の交換であるから、資本家と勞働者との取引に於ては、即ち交換の行程に於ては、價値は略奪せられない。マアルクスは斯う考へたから、價値略奪の原因を、交換行程に求めずして、生産行程に求めたのである。

これ、しかしながら貨幣制度の一大缺陷を看過した結果であつて、社會主義の致命的缺陷は、經濟組織改造の基調を、交換の改造に置かずして、生産の改造に置くにある。現に賀川君の如きも、經濟心理を分析して、「生産の心理、分業の心理、投資の心理、流行の心理、廣告の心理、勞働の心理、分配の心理、發明の心理、競爭の心理、獨占の心理、消費の心理、所有の心理、階級鬪爭の心理、保險財產集積の心理、吝嗇の心理、利得の心理、能率の心理、市場の心理」なぞと、隨分種々の心理を數へ上げたが、遂に交換の心理を逸した。(「解放」三月號)

「國富論」の冒頭に於て、アダム・スミスが道破した如く、分業と交換とは相待つて經濟發達の基礎である。しかるに在來の交換には前記の如き重大な缺陷がある。貨幣又は交換を全廢するならばともかく、苟も貨幣制度を維持する以上、之に根本的改革を加へなくては、如何に生産組織を改造しても、略奪は依然として行はれ、資本主義は絶滅しない(現にリエニン政府では、食料の賣買其他に於て、資本主義の根絶に絶望して居るといふことである。またリエニン政府では、貨幣制度を打破するために、ルウヴル紙幣を濫發したが、その目的に達する能はず、これまた遂に斷念して、寧ろ貯蓄銀行を設立し、三分の利子を許すことにした)。これ價値の略奪は、生産の行程に於て行はれるのではなく、交換の行程に於て、行はれたるからである。

(二)マアルクスの剩餘價値說

マアルクスに從へば、剩餘價値の生産は生産の行程で行はれる。後に述べる如く「剩餘價値」といふ呼稱は不當であ

るが、とにかく價値が生產の行程で生產せられるといふ見解は正しい。大山千代雄君の指摘した如く、福田博士が價値は流通の行程で生產せられるといふのは誤謬で、多分生產と略奪とを混同したか、又は生產と交換とを混同した結果である。また河上博士がマアルクスの謂ふ價値は交換價値のよだといふのも誤謬で、多分生產と交換とを又は生產と略奪とを混同したのである。

價値の生產は生產の行程で行はれる。しからば價値の略奪は？マアルクスは「價値の略奪」とは謂はないで、「剩餘價値の生產」といふ言葉を使用する。（高畠素之君は何故か之を「生產」と謂はずして「產出」といふ。多分「生產」といふと「剩餘價値」の生產者は勞働者でなくて資本家だといふことになるからであらう。）また彼は「略奪」を何故か「實現」と謂ふのである。——マアルクスに從へば、剩餘價値の生產は生產の行程で行はれ、餘剩價値の實現は交換の行程で行はれる。——何故しからばマアルクスは「實現」と謂つて「略奪」と云はないのであるか。試に高畠素之君の解說によつて其の理由を聞いて見やう。（「改造」十月號參照）

「高いものを安く買ひ、安いものを高く賣るといふことは、價値の本則と矛盾する。何故ならば、商品相互の交換は、原則としては、只だ同一の價値の交換としてのみ行はれるからである。

そこで利潤の出處は、結局之を生產行程の中に求めなければならぬ。しかし生產行程の中といつても、生產機關そのものは決して利潤の原因にはならぬ。生產機關は唯だ自己の有する價値を其儘生產物に移轉するに過ぎぬからである。そこで利潤の原因は、結局勞働力の中に之を求めるの外はない。

資本家は勞働者に賃銀を支拂つて、その勞働力を買取る。即ち價値を價値に換へるのである。原則としては、同一の價値を以て同一の價値を購ふのである。故に資本家と勞働者との間の取引は、資本家と資本家との取引、もしくは資本家と消費者との取引と同じく、原則としては寸毫も不正でない。資本家は勞働者からヨリ大きな價値をヨリ小さな價値で買ふのではない。勞働者が資本家に引渡す勞働力は、原則としては、資本家が其の代價として勞働者に支拂ふ價値以上の價値を含まない。

故に價値として商品として見れば、勞働力は決して利潤の原因とならぬ。勞働力が利潤を生ずるのは、商品としての勞働力ではなく、旣に資本家の手に渡つて後の使用價値としての勞働力である。資本家は勞働力を勞働として使用する。勞働は卽ち勞働力の使用價値體である。」云云。

私は問ふ、一體、マアルクスは「資本論」を、資本家を排難する爲に書いたか、それとも擁護する爲に書いたか。――「生產機關は決して利潤の原因とはならぬ」?（それでは何故生產機關を資本家から勞働者に引渡せと要求するのか）。「勞働力は決して利潤の原因とはならぬ」?（それでは何故利潤を資本家から勞働者に引渡せと要求するのか）。「資本家の考へでは不勞利得は社會のものだが、社會に之を受取る機關が無いから、自分が預つて置かうといふ」?（そんな考へで利潤を追求して居る資本家がアンドリウ・カアネギイ以外に一人でもあるか。）「賃銀と勞力との交換は、等價と等價との交換であるから、資本家と勞働者との取引は寸毫も不正でない」?「資本家は勞働者からヨリ大きな價値をヨリ小さな價値で買ふのでない」?「勞働者が資本家に渡す勞力は資本家が勞働者に拂ふ賃銀より高價なものでない」?――成程、マアルクスの誤解するやうに、貨幣も勞力も商品だとすれば、さういふ理屈も成立つかも知れない。假に成立つたとしても、貨幣は普通の商品と違つて、公定價格に縛られて居る。貨幣は普通の商品と違つて、二圓で買つたものを三圓にも四圓にも賣ることが出來ない。――故に普通の商品と普通の商品との交換ならば、等價の交換だとも謂はれやう。けれども貨幣は特別である。貨幣との交換は特別である。貨幣と商品との交換に於ては、「價値の法則」は破壞せられる。少くとも商品と商品との交換と商品と貨幣との交換とは區別して考へなくてはならない。マアルクスは頻りに「原則」といふが、その「原則」なるものは、貨幣と商品との交換に於て、旣に破壞せられて居る。マアルクスは此事に迂濶であるから、幾ら論じて行つたところが、價値法則の眞相を看破することが出來ない。――彼は謂はゆる原則が何故原則として行はれず、謂はゆる法則に變化するかを、左の如く說明した。

然るに勞働力の使用價値體としての勞働の分量は勞働力の生產に費された勞働の分量よりも常に大きい。勞働力の價値は此の小さい方の勞働量によつて定まり、その使用價値は此の大きい方の勞働量となつて現はれる。此の大小勞

働量の差額が即ち資本家の贏得する利潤の基礎であつて、マルクスは之を剰餘價値と呼んだ。産業利潤、利子、地代などは此の剰餘價値の様々の顯現態に過ぎぬ。

即ちマアルクスの意見では、資本家は正當な「寸毫も不正でない」價格で勞働者の勞力を買ふのであるが、さて之を買取つて、自己の手に渡つた後に、その勞力を使用して、「勞働の生産的消費」によつて、利潤即ち剰餘價値を産出するといふのである。さうすると勞力を使用して利潤を産出する者は、勞働者ではなくて資本家であるといふことになる。――「私は君の勞力を一日二圓の賃銀と交換する、此の取引は寸毫も不正でないぞ。さあ、よし、買つた以上は私のものだ、之を成るべく上手に使用して、成るべく多くの利潤を生産しやう。かうして生産した剰餘價値は、勿論全部私のものだ。全部私のものにしても、それは寸毫も不正でない、悉く私の働きだ。俯仰天地に愧ぢないのだ。」――マアルクスは宛も資本家自身又は彼の代辯者が言ひさうなことを言つて居る。

利潤即ち剰餘價値は、資本家が正當な値段で勞力を買ひ「勞働の生産的消費」を行つた結果、産出せられたものだとすると、利潤の生産を行つた者、剰餘價値の産出を行つた者は、勞働者ではなくて資本家だ。資本家が利潤を獨占し、剰餘價値を壟斷するのに、何の不正があるものか。――これは私が言ふのではない、マアルクスが言ふのである。――こんなことで價値略奪の内幕が暴露出來たら、それこそ「勞働の生産的消費」とかいふ資本家の手品以上の奇術である。「剰餘價値は生産の行程に於て生産せられ、交換の行程に於て實現せられる。」―何といふ凡庸な見解だ。實現せられるのではない、略奪せられるのである。略奪の結果が實現せられるのだ。賃銀と勞力との交換行程に於て既に略奪せられて居たところの價値が、製品と貨幣との交換行程に至つて即て實現せられるのだ。資本家と勞働者との取引に於て前に略奪せられた價値が、資本家と消費者との取引に至つて後に實現せられるのだ。

全體、「剰餘價値」といふ言葉からして、資本家辯護的である。「勞働の生産的消費」といふのも然り。マアルクスは交換組織の缺陷に無知で、ひたすら生産組織の中に略奪の原因を發見しやうと局促したから、「資本家が勞力を正當な價値で買收して、勞働を生産的に消費する結果、必要價値以上に剰餘價値が産出せられる」といふ如き資本家辯護論に落ち

たのである。彼は必要價値の略奪を剩餘價値の生産に讃美するのだ。

私は高畠君に問ふ、「泥棒の剩餘價値」說は何故誤謬か。——商人が農夫から百圓の馬鈴薯を九十圓で買つて何等の價値を加へずして而も百十圓に賣る、さうして二十圓を儲ける。これ彼が生産したのではなくて略奪したのである。故に之を剩餘價値の生産といふのは明かに誤謬である。けれども之を價値の略奪といふのは明かに眞理である。若し「剩餘價値」とは生産價値ではなくて略奪價値だとしたなら、カウツキイが「此の商人の儲けを剩餘價値といふなら、泥棒の得物は悉く皆な剩餘價値でなければならぬ」といふ、その泥棒の得物こそ、その商人の儲けこそ、正しく謂はゆる剩餘價値即ち略奪價値ではないか。

「賃銀と勞力との交換は、原則としては不正ではないけれども、唯だ細則として、資本家が利用する勞働の分量は、勞働の生産に費される勞働の分量よりも、常に大きいのであるから、勞働者は賃銀に相當する價値以上に勞力を資本家に提供する、資本家は賃銀に相當する價値以上に勞働者の勞力を利用する、即ち原則としては等價の交換であるから正當であるが、細則としては等價の交換でないから不正である。」——何といふ支離滅裂だ。

何故原則が行はれないで、何故細則が行はれるか。「資本家が資本を獨占するから。」——何といふ愚な答辯だ。——これは誰にも明白な如く、價値の略奪と資本の蓄積との因果關係を轉倒して居る。彼は資本の蓄積が原因で、價値の略奪が結果だといふ。それでは最初の資本は如何。)實は略奪が原因で蓄積は結果である。略奪が可能なればこそ、蓄積も可能なのだ。マアルクスの大好物、方程式で說明すれば「食人——戰爭——貨幣」腕力の略奪から武力の略奪へ、武力の略奪から金力の略奪へ、かういふ順序で昔から略奪は發達進化した。古代の商業史を見ても、未開人の商業を見ても、商業は略奪から進化したことが明白である。ホメロスの時代には、海賊は商人と同業であつた。ギリシアの神話ではヘルメスは商業と盜賊との神である。

ギリシア時代にも會社組織の資本主義は頗る盛大であつた。蓄積は勿論であつたけれども、貨幣が發達したからである。近代の資本主義も、ワットの蒸氣發明よりは、コロムブスのアメリカ發見に負ふ所が多い。アメリカの産金が貨幣

經濟の發達を激發したからである。しかるに賀川君でさへ「器械の壓迫史」ばかり書いて「貨幣の壓迫史」を書かない。此の金力の略奪は何に依つて防遏し得べきか。生產の改造か、分配の改造か。いな、「錢を制するには錢を」幣制の改造によつて、交換の改造によつて、然り、唯だ一種の切符によつて。

(三)トルストイの不勞利得論

私はかねてトルストイとマアルクスとを折衷するために隨分苦心を重ねたが、マアルクスには殆ど絕望した。しかし私は意外にもトルストイに驚くべき光明を發見した。洵にトルストイさへあれば、マアルクスは殆ど無用である。——私はトルストイの「さらば我等何を爲すべきか」をトルストイの說教書とばかり考へて居たが、深く善く味つて見ると、これこそトルストイの經濟學であつた。トルストイの「資本論」であつた。いな寧ろトルストイの「資本論」と「經濟學批評」と「共產黨宣言」との三つを一つに兼ねたものであつた。此書の前半はトルストイの剩餘價値論であつて、此書の後半はトルストイの唯心史觀說であつた。

トルストイに唯心史觀說のあるのは、今更異とすべきことではない。現に私も久しい前から之を祖述して居たのである。しかるにトルストイの剩餘價値論に至つては、眞に意外も意外である。それもトルストイの宗教臭い素人談義ならばともかくであるが　これほど徹底した剩餘價値論は又とあり得ずといふべきほど、徹底に徹底して居るのを見ると、唯だ是れ驚くのみである。

一八八一年——トルストイが五十四歲の時——に、トルストイは永年住馴れた田舍からモスクワに移住したが、彼は早速モスクワの貧民研究に熱中した。彼は慈善を勵行したが、遂に其の無效を悟つた。それは自分が金持では、自分の持つて居る金をチビ〳〵貧民に施したところが、その金は何時しか金持の自分へ歸つて來て、貧民の手には留まつて居ない、貧者は幾ら働いても依然として貧者であるのに、富者は儲けやうと思はなくても自然と儲かることを發見したから「私は片手で多數の人間から數千コオペクを奪ひながら。片手で少數の人間に數コオペクを投げてやるのを、慈善

と迷想して居たのである。」

「私は善を始める前に、私は悪を捨てねばならぬ」。人に物を施す前に、人の物を奪ることをやめなくてはならぬ。「私は人を扶けやうと思ふ。故に私は先づ以て、一方では人の物を略奪することを止めると同時に、一方では人を誘惑するやうなことも止めなくてはならぬ。しかるに幾世紀來行はれた種々の複雜な事情の爲に、私は謂はゆる金の權力の持主になつて居る。自分は何もしないのに、幾百幾千の人間が私の爲に働かざるを得ないといふ事情になつて居る。自分では之等の人々を哀れみ扶助して居る積りで居たのに。」

「自分で稼いだ金を以て三コオペクを巡禮に施したシモンこそは、確かに巡禮を扶けたといはれる。何故かといふに其の三コオペクは、シモンが勞働した結果を眞に代表するものだから。しかるに私は人の爲に少しも働いたことはないから、私の金は私の勞働の結果とは謂はれない。故に私は金錢には、金錢の價値といふものには、また之を所有することには、何か不正な害悪が潜んで居るなと思つた。そこで私は考へた、金錢とは一體何であるかと。」

誰でもトルストイの此誠實な疑問を嘲笑ふことは出來ない。現に是は昨年のことであるが、私は「東洋經濟新報」の石橋湛山君が私に向つて、「僕には貨幣(マネー)とは何かといふことからして、もう一度考へ直さないと、さつぱり分らなくなつた」と、正直に告白するのを聞いた。かういふ正直な人達こそ、まだしも貨幣が何であるかを知るに近い人達である。若し經濟學者が一人でも、貨幣が眞に何であるかを、十分に見極めたら、社會問題解決の祕鑰を掴むことが出來て、ゴルデウスの綴は其れによつて解かれた筈である。

そこでトルストイは考へた「金錢！　金錢とは一體何か？　金錢は勞働の結晶である。これが普通の答辯だが、私は之を疑つたので、金錢とは何かを知る爲に、經濟學に走つたのである。すると經濟學はいふ、金錢そのものは不正でも有害でもない、金錢は社會生活に必要な要素として自然に發達したものであつて、第一には交換の便利のため、第二には價格の便利のため、第三には貯蓄のため、第四には支拂のため、必要缺くべからざるものであると。」

「私の懷中に不必要な三ルウヴルの金が餘つて居る時に、私がほんの口笛一つ吹けば、如何たる文明の都會でも、此の

三ルウヴルの金の爲に、どんな下等なことでもしやうといふ人間が百人でも集つて來る。しかるに經濟學に言はせると、それは金錢の爲ではない、國民經濟が完備して社會組織が發達した結果である。」——剩餘價値の發生を社會的原因に歸する人達は、よく此の言葉を味ひ給へ。

「經濟學者の說明によれば、金持が他人を自由にするのは、何も金錢の爲ではない、勞働者が當然の報酬を十分に受取ることの出來ないのは、資本や地代や賃銀や生産やの關係が複雜で、おまけに分配と消費との關係も手傳ふからだといふのである。」——マアルクスの剩餘價値說を見よ。

「率直に言へば、金錢を持つて居る人間は、それを持たない人間を自由にすることが出來るのだ。ところが經濟學はいふ、そんなことは一片の空想である、すべて如何なる生産でも、土地と資本と勞力との三種の要素が働いて居る、しかるに勞働者は土地と資本とを持たないから、之を持つ者の爲に支配せられる。」——マアルクスの剩餘價値論を見よ。

「一體、經濟學が解決すべき根本問題は何であるかといふに、一部の人間が金力を利用して、種々の權利を獲得し、金錢に乏しい人間を奴隷にする理由如何、唯だこれだけのことである。」——然り、經濟學の職分は如何にしたら價値の交換が正當に行はれ、價値の略奪が防遏せられるか、之を研究するになる。即ち眞の經濟學は「交換の社會學」である。生産や消費の學問ではない。生産や消費の學問は農業學や料理學やである。また生産や消費は人民の私事であつて、政府の干渉すべきことでない。政府は唯だ交換の不正に干渉すれば善いのだ。

金錢が略奪と奴隷との原力になるのは何故であるか。「普通の常識で考へると、之に對する答へとしては、それは金錢の爲である、金錢は本來人間を奴隷にするものである、と言はざるを得ないであらう。しかるに經濟學は之に反して曰く、それは金錢の本質から起るのではない、唯だ一部の人間が土地や資本を獨占するからだと。それでは何故土地や資本の持主は其他の人間を抑壓するのか。それは彼等が土地や資本を獨占して居るからだ。——經濟學者は問ひには答へないで魔術の周圍ばかりぐる／＼廻つて居る。——何故一部の人間は自分の持つて居た土地や道具を略奪せられるのか。經濟學はもつと眞面目に此の問題に答へなくてはいけない。眞面目に此の問題を正視したら、徒らに命題の堂々廻り

を繰返すが如き不眞面目をやめて、經濟學も僞科學でなくなるだらう。しかし此樣な問題に解答を與へることは容易であつて、質朴な人間ならば、誰にでも明白である。一部の人間が其他の人間を壓迫するのは金錢の爲であるといふことは、改めて言ふまでもないことだ。しかるに經濟學は之を否定して、金錢は交換の媒介に過ぎないから、壓迫や奴隸とは無關係だといふ。——果たしてさうか否かを見やう。」

これからトルストイの貨幣研究が始まる。さうして貨幣研究は自ら奴隸と略奪との研究に亘る。——最初には甲の部落の土人が、乙の部落に侵入して、家畜や穀物を略奪する。其後になると人間を略奪して、奴隸にするの利益を發見する。其後になると奴隸には衣食を給養する必要があるから、それより利益な方法をといふので、今度は土地を略奪して、之を人々に貸し與へ、運上を徵收することにする。近世になつてアメリカが發見せられ、金貨の流通が膨脹するに及んで、金錢が人間を奴隸にする最良の道具に採用せられ、其上に有らゆる經濟關係が成立した。一八五九年から一八七四年に亘つて、イギリスがフイジイ島を占領するに至つた歷史は、古代から近代までの略奪と奴隸との變遷を短日月間に代表して居る。最初は大砲、最後は金錢、これが略奪の武器であり、これが奴隸の原因であつた。金錢は常に交換の手段よりも寧ろ略奪の手段になる。人間は本來自由であるのに、金錢が社會に現はれると、直に例の「鐵則」が行はれて、地代はドン〳〵暴騰し、賃銀は極度まで下落する。しかるに經濟學者はいふ、金錢は無害で必要な交換の媒介であると。「吾々の百姓は、一本の杖の力よりも一ルウヴルの金の力が怖ろしいものであるぐらひのことは、とうの昔から知つて居るが、之を正視することを欲しないのは唯だ經濟學者だけである。」

「金持が穀物なぞを買占めて暴利を貪るといふことは、吾々の眼前で始終行はれることではないか。だから吾々は金錢と暴利との關係如何といふことを、嚴重に探査する必要がある。しかるに經濟學者はいふ、金錢と略奪とは全然無關係だと」。はたしてさうか？「經經學者の主張によれば、金錢は商品の一種であつて、唯だ普通の商品に比較して貯蓄や支拂る便利だから、交換の媒介に選擇せられたのだと」。はたしてさうか？「僞科學——經濟學の研究者は好んで物々交換なぞを連想するが、そんなものは實際社會には行はれて居ない。」

然り、トルストイのいふ如く、今日吾々の社會には物々交換などは行はれて居ない。こんなことは小兒でも知つて居る。しかるにミルでもケネエでも、貨幣は一種の商品だから、今日の貨幣經濟も亦た實質に於て物々交換だといふ。しかしながら私が前に叙べた如く、金錢は決して商品ではない、金錢は公正證書である。假に商品だとしても、貨幣は普通の商品と違つて通用價格の公定せられた商品である。一種特別の商品である。普通の商品と對等に取扱ふべからざる商品である。故にトルストイは斷定する、「凡そ金錢の行はれる所には、必ず略奪が行はれる。苟も略奪の行はれる所では、價格の公正は破壞せられる。故に金錢は交換の眞正な媒介とはなり得ない。」ああ、此の三段論理こそ、古今東西の經濟學上最上一等の眞理である。百千萬卷の經濟學書にも優つて尊い眞理である。

トルストイの經濟論はまだまだ續く。けれども私にはもうこれで十分である。――彼の經濟學はマアルクスの經濟學の如き、高慢な、氣取つた、廻りくどい、學者が頭痛鉢卷で、一字一句の末までも、用心深く、ごまかされないやうに、おづ／＼さうして一生懸命、詮索しなくては分らぬやうな、もしくはそれでも分らぬやうな、下郎の色文みたやうなものではない、百姓にでも町人にでも、誰にも一目瞭然である。唯だ「僞科學」の迷信者にだけ、どうしても分らぬ經濟學である。さうだらう、今日の經濟學は科學ではなくて迷信だから。――私は唯だ一句だけを最後にトルストイから引いて置かう。「洵に金錢は他人の勞力を私用する可能又は權力である。金錢は舊式の奴隷制度である。それが舊式の奴隷制度と異なるのは、奴隷に對して何等人間的な關係を有せず、全然非人格的だといふことである。」

（四）私有財産主義と剩餘價値説

かやうに貨幣が略奪の道具であることを看破した結果、トルストイは貨幣廢止を主張したのであるが、また社會主義者にも貨幣廢止を主張する者もあるが、貨幣なしでの交換は、極めて素朴な時代又は極めて高尚な社會に於てでなくては、その實行が困難であつて、前記の如く、現にロシアでは失敗を經驗したのである。

且つ貨幣の弊惡を憎んで貨幣そのものを廢止するのは、宛も盜人の害惡を憎んで盜人を死刑するやうなものである。

それでは如何にすべきかといふに、人間は生かして置いて、窃盗を禁止するのだ。貨幣は略奪の公認であるからとて、貨幣を廢止するのは、盗人は有害だからとて、人間を刑殺するのである。貨幣は保存して置いて、略奪を禁止しなければならない。さうして略奪を禁止するには、貨幣と對立して、買手と賣手との双方をして双務的に交換價格を公證せしめる爲に、一種の切符を制定すれば、それで宜しいといふことは、私が前に論じた如くである。

たとへば賀川君が前に引いた如く、「勞働者が正當な賃銀で全く剩餘價値無くして勞働したとしても、その製品に對する社會的需要が非常に多くなつて、その市價が急に倍加すれば、資本家が全く餘剩價値の利得無くして勞働者に賃銀を支拂つたとしても」その社會的需要の增加に由る市價の騰貴によつて、不勞所得が發生するといふが、貨幣と切符とを並用する私の私有財産主義社會に於ては、そんなことは行はれない。現に賀川君の擧げた例に取れば、「たとへば日本の綿布絹糸のやうなものである。」絹糸一梱の相場が二千圓から五千圓に昇騰したとしても、不勞利得なぞは發生しない。製糸家は三千圓だけ貨幣に於て得ると同時に切符に於て失ふ。生糸を買つた織物屋は貨幣に於て三千圓を失ふと同時に切符に於て得る。他人の生産を高く買ふと同額だけ自分の生産も高く賣る。自分と他人との交換價値を相殺（プラスマイナス）すると全然同額である。

勿論、買つた物を賣つた物よりも有利有效に使用消費することとは出來るけれども、それは自分の消費藝術が優秀な結果であつて、その爲に何等何人に不利を與へない。それが買手の不利になるのは、當人の消費藝術が拙劣だからといふに過ぎない。即ち使用價値に於ては賣買双方の利害が一致しないだらうが、マアルクスもいふ如く、元來使用價値は主觀的なものであるから、客觀的に利害を比較評價することが出來ない。故に交換價値に於てさへ略奪が行はれさへしなければ、それで差間ないわけである。使用價値まで一致させやうとすれば、人間を一人殘らず同心一體にしなくてはならない。それはマアルクスにもトルストイにも出來ない藝當である。

それから高畠君はいふ、「マアルクスの剩餘價値説に反對する批評の殆ど全部は剩餘價値の出處を流通行程に求めて居る。之等の批評は三種に大別することが出來る。第一は使用價値と價値とを混合する説。第二は商品の交換或は賣買が一般

に同じ大いさの價値の取引でないといふ說。第三は或る一部の商品所有者が其の商品を價値以上に賣るといふ說。」さうしてトルストイ及び私の說は此中の第二に該當する。

第一の說――福田博士の說は、價値が生產の行程で生產せられるのではなくて、交換の行程で生產せられるといふのだから、全然問題にならない、最初から落第である。つまり博士は生產と交換とを混同し、又は價値の生產と價値の略奪とを混同してゐる。

第三の說――「泥棒の剰餘價値」說は、高畠君は之を「珍說」だといふが、必ずしも珍說ではない。唯だ價値の生產と價値の略奪とを混合したまでのことだ。即ち高畠君の言ふ如く、「たとへば或る商人が農夫から百圓の價値ある馬鈴薯を九十圓で買つて、それを百十圓で洋服屋に賣ると二十圓の利益を占めるが、しかし之が爲に價値の總額は微塵も增加しない。即ち最初は 100(農夫)+90(商人)+110(洋服屋)=300 であつたが、今度もやはり 90(農夫)+110(商人)+100(洋服屋)=300 であつて、全體の上には一文も生じない。」即ち交換の行程に於ては價値は一文も生產せられないのである。「尤も」高畠君はいふ、「尤も之によつて右の商人は二十圓儲けることになるが、しかし其の儲けは、價値增加の結果ではなく、却つて他の取引當時者の有する價値が減少した結果である。かくて前の場合と同じく、社會全體の價値は微塵も增加しない。」だから私は言ふのである、「その儲けは當人が價値を增加させた結果ではなく、即ち生產した結果ではなく、他人の生產した價値を減少させた、即ち略奪した結果である。」と。即ち社會全體の價値は微塵も增加しないけれども、或人と或人との間に、交換の行程に於て、價値の略奪が行はれたことは事實である。高畠君はいふ、「そこでカウツキイは、もし此の商人の儲けを剰餘價値といふならば、泥棒の得物は皆な剰餘價値でなければならぬと言つて居る」と。私に言はせると、此の商人の儲けを剰餘價値といふも略奪價値といふも、それは經濟學者の自由だが、商人が何等の價値をも附加せずして、二十圓を儲けたとすると、商人の儲けは泥棒の得物と同一である。即ちいづれも生產の結果ではなくして略奪の結果である。故に此說は、剰餘價値生產の說明としては珍說であるが、剰餘價値略奪の說明としては珍說ではない。

第二の説に就いて高畠君はいふ、「たとへば茲に洋服屋がある。彼は何かの手管で實際五十圓の價値に相當する雜紗服を七十圓で賣りつけることが出來た。かくて彼は二十圓の儲けを得る。それが即ち剩餘價値たといふのである。」私はいふ。「彼の手管が勤勞でなくて、彼が何等の價値をも附加しなかつたとすれば、彼の二十圓は不勞利得である。剩餘價値と呼ぶと略奪價値と呼ぶとは學者の自由であるが、とにかく生産の結果ではなくて略奪の結果である。何故なれば、交換の行程に於ける價値の「增加」は、生産の結果ではなくて、略奪の結果であるから。」

しかるに高畠君はいふ、「成程それは儲けに違ひない。」即ち略奪に違ひない。「しかし世の中に買ふことなしの賣手といふものは一人も無い。洋服屋は其の原料を雜紗問屋から買はねばならぬ。彼は更に其の賣上で種々な生活品をも買はねばならぬ。そこで若し商品交換の原則が一般に破壞せられるといふことになれば、問屋は彼に安い雜紗を高く賣り、味噌屋も米屋も皆な低い價値を高く賣りつけるから、結局彼が賣手として得た「剩餘價値」は、買手として皆な賣手に取られてしまふことになる。かくて社會全體から言へば、剩餘價値を得る者が一人も無くなり、結局利潤存在の事實を説明することが出來なくなる。」

けれども、餘人はいざ知らず、私は此樣な詭辯によつて籠絡せられる者ではない。高畠君に從へば、略奪はお互樣だから、結局相殺せられるといふのである。勿論、價値の相互略奪は、商人と商人との間に於ける略奪に過ぎないから、社會全體の價値が微塵も之が爲に增加しないこと、即ち之が爲に「剩餘價値」が生産せられないことは事實當然であるが、しかし價値の略奪が行はれることも事實である。さうして相互の略奪は或る程度までは相殺せられる。何故なれば、人間は各自が賣手兼買手だから。けれども完全無缺に相殺せられるか。若し「然り」といふならば、しからば吾々が「暴利」を非難するのは何故か。彼の奸商を辯護して「暴利」はお互樣といふか、「略奪はお互樣」といふか。

奸商が十圓で買つて百圓に賣る。そのため物價は騰貴する。けれども實際に於て一般の物價は、奸商が食つた暴利ほど、それほど騰貴するのではない。これ奸商の略奪によつて、奸商の購買力が增加し、世人の購買力が減少するからである。憐れな洋服屋の二十圓は容易に相殺せられるであらう。巨大な資本家の一億圓は容易に相殺せられない。高畠君

は、彼の洋服屋を犠牲にして、此の資本家を擁護するか。

貨幣は他人の購買力を制限するものである。その貨幣を受取つた者は、一圓を一圓にしか通用することが出來ない。貨幣で商品を買つた者は、二圓にも三圓にも賣ることが出來る。「貨幣は自分の購買力をも制限するではないか。」然り、如何なる富豪でも一億圓の貨幣を二億圓に通用することは出來ない。けれども一億圓の大金は、些々たる小金とは違つて、買占力を持つて居る。此の買占力は持主の販賣力を助長する。

百姓でも町人でも知る如く「資本に乏しい悲しさに、品物を高く賣ることが出來ない。」こんな普通の事實をも「僞科學者」は否定する。「小資本家は大資本家よりも製品を高く賣るではないか、大資本家は小資本家よりも品物を安く賣るではないか。」然り、唯だ獨占力即ち買占力に乏しい時には。——競爭會社の資本金一千萬圓は獨占會社の資本金五百萬圓にも劣るから。一貫目の金剛石が唯だ一つしか無い時には、乞食が之を發見しても、隨分高價に賣るであらう。それが數多く有る時には? 唯だ之を買占めた金持だけが高く賣る。

即ち貨幣といふものは、成程「科學的」に言へば、貧者にも富者にも公平だが、實際社會の事實に於ては、貧者の爲には彼の購買力と販賣力とを制限し、富者の爲には彼の買占力と販賣力とを助長する。貧者は彼の純潔な高價た良心や節操をさへ僅かな目腐れ金で賣らなければならない。しかるに富者は彼の下劣な安價な良心や節操をさへ大枚の金で賣るではないか。勞働者に百萬圓を與へて見よ、彼はもはや彼の勞力を安價では賣らないであらう。故て曰く「金錢は略奪の可能である」と。

何も珍らしい眞理ではない。「資本論」なぞは讀まなくても百姓でも町人でも知つたことだ。唯だ富者だけが之を實行して、貧者には實行が出來ない、出來ても相殺せられてしまふ。しかるに僞科學者——經濟學者は、此の明白な事實を否定して「略奪はお互樣だ」といふ。「最も進歩的な經濟學者——社會主義者てさへも」(これはトルストイの言葉だ)可憐な洋服屋の二十圓を犠牲にして、横奪な資本家の百萬圓を擁護する。——科學は常識で明白な眞理を往々にして否認する。

高畠君の例を借りると、資本家は先づ80の資本を準備し、更に20の賃銀を以て勞働者の勞力を買收し、生產機關と共に消費すると、その結果100を生產する。即ち20の剩餘價値を產出する、これ「資本の原因であり、また其の唯一の目的である。」しかし私に言はせると、マアルクスは剩餘價値の「產出」と謂つて、さも資本家が勞働者から正當な取引で勞力を買つて、それを生產的に消費して、資本家自身が生產したやうに言ふが、即ち生產の行程に於ける生產の結果のやうにいふが、實は交換の行程に於ける略奪の結果である。

高畠君が言ふ如く、「資本家は道樂に生產事業を營むのではない。」即ち彼は最初から略奪の可能を豫知してゐる。彼は算盤に諮詢する、「20の賃銀は40の商品を生產するか。」算盤が確信を以て答へる、「必ず40を生產します、責任を以て保證します。」これ即ち資本家の心理だ。しかるに製糸家が貨幣に於て三千圓を得ると同時に、切符に於て三千圓を失ふとしたら、即ち購買力と販賣力とが完全に牽制するとしたら、それでも略奪の心理は存在するか。それでも交換の行程に於ける價値の略奪は可能であるか。

交換の心理を想像せよ、謂はゆる剩餘價値は賃銀と勞力との交換行程に於て既に略奪せられて居る、それが商品と貨幣との交換行程に於て即て實現せられる。しかるに高畠君はマアルクスに倣つていふ、「交換行程は單に剩餘價値を利潤として實現するに止まり、その實現せられる剩餘價値は既に生產行程に於て產出せられて居る」と。20といふ賃銀と40といふ商品とを比較したとき、少くとも資本家の心理に於て、賃銀と勞力との交換に於て、資本家と勞働者との取引に於て、即ち第一の交換行程に於て、利潤は既に略奪せられた。しかるにマアルクスは、之を利潤とは謂はず、資本家の生產行程で剩餘價値が產出せられたといひ、商品と貨幣との交換、資本家と需要者との取引、即ち第二の交換行程で利潤が實現せられたといひ、第一の取引も第二の取引も、等價と等價との交換であるから「寸毫も不正でない」といふ、價値の略奪を「產出」と謂ひ、略奪の成功を「實現」といふは、これ資本家攻擊であるか、又は資本家擁護であるか。

（五）生產の哲學と交換の哲學

高畠君はいふ、「マルクス經濟論の目的とする所は資本家的生産方法である」と。何故マアルクスは資本家的生産方法よりも資本家的交換方法を彼の經濟論の目的としないか。――資本主義の弊害が、資本主義の目的が「剩餘價値」の略奪が、生産の方法よりも交換の方法に依存することは、マアルクス自身の經濟論が明白に暗示して居るではないか。（明白な事實に無知だから、明白に暗示するのである。）

少し高畠君の一説（「改造」十月號參照）を讀んで見やう。――曰く、資本家的生産は商品生産の最後の且つ最も著しき歴史的形態であつて、その特徴は單なる財貨の生産を目的とせず、商品の生産を目的とすることである。換言すれば資本家的生産方法に於ては、生産者は自己の使用（即ち消費）を目的とせず、他人に對する販賣（即ち交換）を目的として生産する。（私は問ふ、消費を目的としないのに、何故「勞働の生産的消費」などと辯護するのか。）

曰く、さうして此の生産物が、一度他人に渡つた後、その他人が果たして之を使用するか否か、また如何なる形式で使用するか、それは生産者に於て少しも顧慮する必要は無い、彼は唯だ自己の造つた（嚴密には造らせた）物を、他人に販賣すれば善いのだ。（私は問ふ、「嚴密には造らせた」といひながら、資本家を「生産者」とは如何。資本家は生産者か交換者か。いはゆる「生産的消費」は「嚴密には」生産か略奪か。略奪は生産の行程に於てか、または交換の行程に於てか。）

曰く、即ち生産者は自分の使用の爲に財貨を生産せず、只だ市場の爲に商品を生産するのである。さればマルクスが其の不朽の大著「資本論」の冒頭で言つたやうに、「資本家的生産方法の弘く行はれる社會の富は、商品の尨大なる集積として表面に現はれ、個々の商品は即ち其の富の單位形體を成す。故に吾々の研究は商品の解剖から始まる。」（私はいふ、「資本家的生産方法」といふ言方からして、私には資本家辯護的に聞こえる。何故「資本家的交換方法と謂はないか。いや、もつと適切な文字があるではないか。）

曰く、勿論、商品の所有者に取つては、使用價値の有無は問題でない。彼等は只だ之を交換しさへすれば善いのである。資本家制度の下に於て、その交換の目的が剩餘價値の産出もしくは實現に在ることは後に説く。（私はいふ、交換の

目的を產出といひ實現といふのが資本家辯護的であることは前に叙べた。）

曰く、物を、商品たらしめるものは其物の交換價値である。故に其物は只だ交換の爲の存在を續けて居る。間のみ賣品なので、一度消費の爲の存在に入るや否や、頓に其の商品性を失墜する。故にマルクスはいふ、「使用價値は直接には一定の社會的關係の卽ち交換價値の依つて以て自己を表現する物質的基礎である」に過ぎない。社會の富は曾て單なる財貨（卽ち使用價値）の集積であつた時代もある。しかるに資本家的生產方法の行はれる現代に於ては、富は純然たる商品（卽ち交換價値）の累積として表面に表はれる。かくの如く商品は直接には只だ交換（或は賣買）の爲にのみ存するものである。

かくの如く、私はいふ、マアルクスは活版屋の勞働者が眉を顰めるであらうほど、しきりに「交換々々」といふ。しかるに、それにも拘はらず「資本家的方法」を形容する場合には、「交換」といはないで「生產」といふ。故に私は疑ふのである、彼が「資本論」を書いたのは、資本家を批難する爲か、又は辯護する爲かと。

私はマアルクスが經濟價値の、唯だ生產の行程に於てのみ生產せられるもので、毫も交換の行程に於て生產せられるものでないことを證明せんとした、その誠意には感服する。價値が交換の行程に於てのみ生產せられるなぞといふ低能學者は問題にならない。寧ろ其の低能の偉大なるに驚き入るのみである。けれどもマアルクスの學說では、何故生產の行程に於てのみ生產せられる價値が、交換の行程に於てのみ略奪せられるかを、徹底的に說明することが出來ない。故に彼は「剩餘價値」の「生產」とか「實現」とか謂つて、端的に價値の「略奪」とは謂はない。如何にもして略奪を「略奪」と謂ふまいとする者の如く、しきりに「剩餘」とか「生產」とか「實現」とか謂つて、略奪の周圍を「堂々廻り」して居る。

メンガアも指摘した如く、「現今の社會組織は、將來の社會組織の根底と成るべきものが、勞働全收權であるべきか、又は生存權であるべきかといふ、社會主義の根本原理に對して、何等の定見を持つて居ない。」さうだらう、マアルクスの理論では、謂はゆる「剩餘價値」が「生產の行程で資本家によつて生產せられるのか、又は交換の行程で資本家によつて略

奪せられるのか」を、的確に斷ずることが出來ないから。

けれども是は要するに貨幣を商品と誤解した其の誤解の結果である。「腕力—武力—金力」古來價値の略奪は——「略奪の道具」は斯ういふ方程式で進化した。マアルクス曰く、「貨幣は他の商品と齊しく商品である」と。そこで斯ういふ結論が生れた「貨幣と商品との交換——賃銀と勞力との交換は、價値の原則として、等價の交換であるから、寸毫も不正でない。また商品と貨幣との交換——製品と賣價との交換も、同じく寸毫も不正でない。即ち交換の行程に於ては生産も略奪も行はれない。從つて交換の手續には不正は無い。不正は交換の行程以外で行はれるに相違ない。」

丁度トルストイが「金錢の價値には何か不正な害惡が潛んで居るな」(「さらば我等何を爲すべきか」第十六章)と疑つたやうに、マアルクスも亦た「交換の行程以外に何が不正が隱れてゐるな。」(「資本論」第一卷第五章)と疑つた。そこで不正の原因を生産の行程に求めたのであるが、しかし彼に言はせると、「勞働者の勞働力は、一旦資本家の手に渡つてしまへば、もはや勞働者のものではなくて資本家のものであるから、雇傭條件に違反せぬ限り、資本家が如何やうにも之を處分することが出來る。」即ち如何に多量の「剩餘價値」を「生産」しても、それは勿論「資本家のもの」で、資本家が之を占領するのは「寸毫も不正でない。」それは資本家が「等價を交換」した結果で、彼は「寸毫も不正」な交換をしたのではない。「剩餘價値」と呼んでも「必要價値」と呼んでも、要するに資本家が「勞働の生産的消費」によつて「生産」したものだ。「泥棒のマアルクス奴」と呼んだところが、單にさう呼ぶだけのことで、それだけでは「マアルクスが泥棒だ」といふ證明にはならない。故にマアルクスは「剩餘價値の略奪」と謂はないで、「剩餘價値の實現」といふ。勞働者は之を「剩餘價値」と惡罵しても、資本家は平氣の平左衛門で、正々堂々と「剩餘價値を實現」して居る。「こねめ、そねめ」が落ちである。

一匹の狐が、紳士に化けて、村落へやつて來た。彼はポケットで金貨を鳴らせながら、百姓達を雇つて、盛んにテムプラを製造した。彼が滿腹した後、殘つたテムプラを村の料理店に賣つて、山へ歸つて行つた。しかし百姓が受取つた「金貨」は實は木葉であつた。そこで彼等は庄屋に訴へた。庄屋は氣取つて曰つた、「金貨とテムプラとの交換は不正でな

い。何故なれば、それは即ち商品と商品との交換——等價の交換であるから。尤も金貨の貰方が少い。それは君等の生活費を標準にしたからで、生活費以上のテムプラは剩餘價値だ。尤も其の剩餘價値は、君等のものではない、紳士のもだ。尤も彼のテムプラ工場を共有にして、製造したテムプラを一同で平等に分配すれば、剩餘價値も平等に分配せられるのだ。」「尤も先生」の學説に感心した百姓達は、再び紳士がやつて來た時、紳士に提議して、工場を共有にし、紳士から貰木を借りて、テムプラを製造して、それを村の料理店に賣つて、「剩餘價値」を平等に分配したら、成程此前よりは多くの金貨を受取ることが出來た。しかし其の金貨は村の料理店から材料を仕入れる時拂つたと同じ金貨であつたから、紳士が元金だけを受取つて歸つた後で見ると、それはやはり木葉であつた。そこで或る老人が曰つた、「これは正しく狐の仕業だ。その金貨には確かに何か魔術がある。多分最初から金貨ではなくて木葉だ。」すると紳士が三度目にやつて來た。百姓達は紳士から金貨を受取るや否や、彼を嚴重に捕縛した。さうして火を焚いた中へ、すべての金貨を投込んだ。金貨は木葉の如くメラメラと燃えてしまつた。そこで紳士が狐だと證明せられたので、百姓達は彼を殺して、その火で肉を煮て食つた。狐はテムプラで肥つて居たから、大變に旨かつた。

テムプラが生産の行程で生産せられるのは事實である。テムプラと金貨とを交換するとき即ち交換の行程でテムプラが生産せられるなどと言ふのは誤謬である。「マアルクス學の二大家」ですら生産價値と交換價値とを混同するのは畢竟價値が生産の行程で生産せられ、交換の行程で略奪せられるのを、生産と略奪とを混同するからである。即ち略奪を生産だと誤解するのである。不正は生産の行程よりも交換の行程にある。最初から金貨なぞを取らないで、「僞のテムプラ」の代りに「狐のテムプラ」でも拵へて食へば善いのだ。

一體「價値の原則」とは何か。マアルクスもいふ如く、價値は商品と商品との社會的關係によつて決定せられる。即ち「價値の原則」は人間の造つたものである。人間の造つた社會的假定であるから、人間の都合次第で如何やうにも變更せられる。現に「價値の原則」は人間によつて盛んに破壞せられて居る。原則だとか理法だとかいふ客觀假定の爲に人間の主觀的自由を屈從せしめやうとするこそ、科學迷信であつて、宿命的な絶對不動な客觀的原則なぞといふものは、

人間の前には一つも無い。ロマン・ロランが喝破した如く、唯一の宿命は意思の自由である。(「之を客觀すれば則ち宿命、之を主觀すれば則ち自由」などといふ解釋も、その解釋がやはり客觀的である。)此事は既に「賃銀の鐵則」が鐵則でないことによつて證明せられた。マアルクスは「賃銀の鐵則」と共に「價値の原則」を棄てなければならない。

まづ「價値の原則」から目醒めよ、「等價の交換」から目醒めよ、「金錢即商品」から目醒めよ、「木葉の化物」から目醒めよ。公定價格――その背後に政府の權力――を持つた「商品」と、それを持たない――社會的關係によつて動搖する――價格不定の商品と、此の二つのもの丶交換が、果たして等價の交換であらうか。「權力」の發達した社會では、貨幣は硬貨から紙幣へ、紙幣から手形へと進化する。これ貨幣は商品ではなくて、商品に對する受取證文――公正證書に過ぎないから。さうして公正證書といふものは、賣買當事者が双方から一通づゝ取交はすべきものである。

マアルクスは明かに「價値の原則」といふ前提に於て誤つて居た。俗人の哲學に曰く、「凝つては思案に能はず」と。眞なるかな言や。マアルクスは凝りに凝つて、誤つた「資本論」を造つてしまつた。私は寧ろ平凡なトルストイの資本論が繰り返す、「凡そ金錢の行はれる處には、必ず略奪が行はれる。苟も略奪の行はれる處では價値の公正は破壊せられる。故に金錢は交換の眞正な媒介となることは出來ない。」「洵に金錢は他人の勞力を使用する可能又は權力である。」

社會事業の要諦

東京市社會局長　窪田文三

一

一言にしてこれを掩へば、社會事業の理想としては、社會に行はるゝ凡般の罪惡を絶滅し、その暗黒面を掃蕩して、凡そ社會に生々育々する總ての民人をして、その幸福を増進せしめ、以て文明生活の德澤に均霑せしむるに在り。玆を以て、尠く共、吾人の所謂社會事業なるものは、素より、世に行はるゝ救恤、慈善乃至は賑恤等、狹義に局限せらるゝもののみにあらず、況むや衣食住の提供のみを以て、能事了れりとなすものにあらずして、文明生活の病根に遡源して、これを根治するを以て、その理想となす可し。而も吾人は勿論、一面に於て緊急を要する社會的疾患の對症療法の、重大なる任務を忘却し、又はこれを無視するものにあらず。恰も醫師が患者を取扱ふ態度に於けるが如く、巧みに對症、根治の二面を併せ行ふて、後患なきを期せむとするもの爲り。然れ共、これが理想の實現は素より至難の業に屬するのみならず、社會人心は刻々に流轉し、その現象は亦日々に變遷して已む所を知らず。かるが故に、社會問題の解決、社會事業の施設は、單に一定の期間を以て、一擧にしてこれを終了せしむること能はざるは、亦恰も、醫師が患者の一病根を絶滅し得たれ共、新に襲い來る他の疾患を如何ともす可からざるが如し。この意義に於て、吾人は賑卹五術、救荒六策、撫卹八議、十二荒政、乃至は賑卹十五法と云へるが如き、單純なる古代の社會事業乃ち仁政を以て滿足せざるは勿論にして、彼の賑恤又は恤救と云ふが如きも、單なる用語てのものが、何等活動的意義なくして、甚しく消極的に失するの嫌あるを遺憾とするのみならず、時としては、誤りて濫施の弊に陷り、下層人民の惰性を增長せしめて、却てこれを罪惡に接近せしめ、又、勞を避けて逸に就くの邪念を催さしむることなきを保し難きを注意せざるべからず。小人は玉を抱て罪あり。凡そ斯民をして懶惰の風に馴れしめむか、その弊や、遂に堪ゆ可からざるなり。乃ち、

俚諺に食を乞ふもの三日に及べは、終生これを辭すること能はずと云ふ所以こゝに存す。かくの如きは賑に代ふるに工を以てせる、古代の名君賢相が周到なる用意を尊重せざるを得ず。何れの時、何れの所に於ても、働かざるものが飢へざる可からざるは當然にして、何等の異とす可きにあらず。果して然らば、他の單純なる善行嘉言を旨とする慈善に據る可きやと云ふに、これ亦、これのみを以てしては、十二分の効果を期待し難し。かのビスマークが千八百八十四年、その政府提案の勞働保險法の説明に際して、力説したるが如くに、健全なる勞働者には勞働を與へざる可からず、これによりて自活せしむ可きのみ、その虛弱なるものにはこれに救護を加へよ、而して、その老衰するに及むでは、これをその天壽を樂しましむるに足る施設を以て迎へよ、と云ふは略、吾人の所謂社會事業の理想なるものの一部と、一致する所にして、被惠者をして廉恥心を失はしめざる範圍に於て、慈善の効果を尊重す可きは勿論なれ共、一歩を進めて、その計畫を積極的となし、未だ事の慈善を要する狀態に陷らざるに先ちて、これを防止するに如かざるなり。乃ち古の荒政と稱するものが、未だ水旱風水震の五厄に會せざるに先ちて、これを未荒に備へたるの精神は、これを轉じて、今の社會政策の精神、社會事業の理想となす可し。要するに、社會事業の性質は頗る複雜にして、その樣式も亦多岐なるが故に、これを一括して世の宗教家、教育家、慈善家の手に委ね、以て安むず可きにあらず。國家及び自治行政機關に於ても、これが事業を擔任する獨立の官公署又は局課を設けて、その規模を壯大にし他の宗教家、教育家、慈善家、新聞記者、其他の後援を得て、これと力を協せ專心その事に當らざる可からざるのみならず、從て、この事業の員に加はるものは、苟も博愛同情の心に富み、堅忍不屈の勇氣を有し、亦寔に能く斯業の性質を解して、身を挺して難に赴くの慨あるものたらざる可からず、若し、虛榮の爲め又は生活の爲めにのみ、これに投ずるものありとせば、遂に事業は不振を免る可からざるなり。

二

今、海外諸邦に於ける社會事業發達の跡を顧るに及びて、特に吾人が前述せる所と符合するもの多きを覺ゆ。これを概括的に見る時は、古代の社會事業が專ら施與にのみ沒頭したるに反して、近世の經營は下層民人を訓錬して、これに活動力を加ふるにあること、諸邦の社會事業史に一貫する、最も顯著なる一致點なりとす。換言すれは、眼前口頭の救恤と雖も、素より多大の價値なきにあらず、而も、長へにこれを救ひ、自覺的に奮

起せしむると、その効果の差果して幾何なりや。乃ち現代の社會事業は、屑々區々の仁政を以て甘むず可きにあらず、高邁遠大の理想を掲げて、敢て社會人心を刷新し、斯民を沈淪の以前に救ふを以て、その理想となす可し。實に、この點を以て現代に於ける海外諸邦社會事業の特徴とす。かくの如く救貧は末枝にして、防貧を以て根幹となすの一事に於ては、諸邦恐くその軌を同しうすれ共、素より社會事業たるや、錯綜粉糾極りなき社會の實狀を以て、その經營施設の對象となすが故に、時勢の推移と共に、その樣式內容に變化なきこと能はず。今、これを略述すれば、古代に於ける社會事業は、概ね、宗教の感化の下に在りて、篤志の個人が多少の社會奉仕の念を含みて、個人的に施與恤救を試みたるに止まり、その動機としても、敢て經國濟民の大業に出てたるものにあらず、全く主觀的に止まりて、寧ろ因果應報の教理に支配せられたる結果なることは、これを印度の佛典に就て見るも、將た又、基督教の舊約全書に關して窺ふも、その胚胎する所を知るに難からず。これに次では、名君賢相が時としては人心收攬の策として、甚しきに至りては領土、擴張の具として、社會事業の一たる恤救慈善を行ふもの續出せり。吾人は假りにこれを以て、慈惠主義の社會事業と命名す可し。然かも皆な何れも、個人的經營たるに止まり、且つ幾何かの利己心をも挾むこと勿論なれ共兎も角も、作の善政主義社會事業、即ち例へば希臘に行はれたるものゝ如きが、後世に至りて、社會事業を以て國家又は公機關の經營となすの、結果を生ずるに至りたる事は、疑ふの餘地なきは勿論なり。かくの如く、古代の社會事業が、その端を宗教の支配に發せるが故に、中古より近代の初頭に及びても、社會事業の大半は寺院の經營に委ね來れるが、恤救主義の餘弊たる濫施は遂に禍をなして、窮乏續出、亦これを如何ともす可からざるに至り、特に伊太利に於てその甚しきを示せり。而して、これ等の寺院事業に反駁を加へて、新社會事業の曉鐘を撞けるものゝ一人に、英國のマルサスあり。彼はその人口論中に於て、特に英國寺院の社會事業を非難して、經濟學的見地よりする、社會事業の一大革新を呼號せるが、かくの如く、近代社會事業に黎明の光を投じたるものは、實に經濟學の發達に存す。近代社會事業は古代の個人的、主觀的なると全く相反して、公益的、客觀的たるに、その特徴を發見す可し。而して近代社會事業が、國家又は公機關の經營に歸するに至れる、他の大源因としては、十八世紀以來、英國に於ける、機械工業の異常なる發達と、佛國に於ける民主々義の勃興とが、その新形勢を激成せしめたるの事實を看過す可からず。かの機械工業の盛りなりし英國に於て、勞働組合の發達

が、頗る順調なるが如きも、これを以て社會事業の功に歸して、決して異議ある可きにあらず。而も、英國マンチエスター派の舊經濟學が、自由放任主義なるに反して、獨逸に興れる新經濟學派のシモラー、ワグネル等が、國家社會政策を提唱して、社會事業が國家又は公機關の事業たるの基礎を固めたるは、掩ふ可からざる事實なりとす。乃ち、近代社會事業の發達は、最も新經濟學に負ふ所大なるものあるなり。

三

試みに、現在海外諸邦に於て行はるゝ社會事業の一班を窺ふに、何れの國に在りても、救貧と防貧との兩施設を有せざるものはなく 凶饉、失業に對しては勿論、保健施設としては療養、浴灌、營養保護及び分配、住居の諸方面に意を注ぎ、自營扶掖施設としては授産、金融、勞働紹介の諸機關を具備し、教化施設としては特殊教育、圖書館、禁酒事業等のあること、比々皆な然らざるはなし。今、一々これを列擧するは、その煩に堪えざるのみならず、この短稿の能くする所にあらざるが故に、その主なるものを示すに止めんも、英國にては夙に社會事業の發達せるにも拘はらず、規模の稍大なるものは、槪ね、私人又は私人團體の經營に係り、倫敦に於ける有名なるアレキサンダー簡易食堂の如きは千九百年に創立せられ、その開業式には兩陛下これに臨幸せられたるの歴史を有し、成績の佳良なること、世界の冠たるに恥ぢず。又、ロートンハウス合宿所は千八百九十二年の創立にして、その經營は會社組織なれ共、圖書、娛樂、喫煙、浴灌、乾燥の各施設に至るまで、一として整頓せざるはなく、この種の機關としては最も推重せらるゝものゝ一たり。更に又、倫動の社會事業を談ずるものゝ、決して看過す可からざるは、救世軍の活動にして、育兒院、婦人救濟所、姙婦院、貧民救濟所、合宿所、簡易食堂、職業紹介所、授産場、出獄人保護所等、凡そ社會事業に亘る一切を網羅して、これを行はずむば已まざるの慨あり。獨逸にては、伯林の郊外にウイルヒヨウ病院あり。又別に結核療養所あり、ミユンヘンに勞働博物館あり、大規模の託兒所あり、更にエツセンに在るクルツプ工場が、風俗、健康、住居、教養、貯蓄等の施設に關して有する成績は、人の皆な嘆賞する所なり。由來、獨逸は勞働保險の發祥地たれば、これが成績の佳良なるは論ずるまでもなく、到る處の都市には人事相談所、職業紹介所と共に、住宅紹介所の設けあらざるはなし。更に獨逸に於ける社會事業の特色としては、エルベルフエルト式施設乃ち監査制度の發達せることを擧げざる可からず。轉じて佛國に在りては、公營質舖の發達を以て、巴里に於

ける社會事業の特徴となす可し。凡そ質舗に關する列國の政策を見るに、これを三種に別つことを得可し、その一は質舗の營業を私人に委して、毫も官公署の施設なきもの、英米兩國これなり。その二は全く官公署の經營に屬し、絕對に私人の營業を認容せざるもの、佛國を初めとして拉典族の諸邦これなり。その三は公私竝行にして獨逸、墺太利これなり。公營質舗の制度を本邦に移植するの可否に就ては、當然別個の問題に屬するのみならず、特に奈良朝以來の傳統的商習慣たる私人營業を、一擧にして撲滅するが如きは、事實の問題としても、容易ならざるが如し。兎も角も、下層金融機關としての勢力ある公營質舗は、巴里に於て最も長足の進歩を遂げたり。海を超えて紐育に至れば、千八百五十三年の創立に係る、兒童保護協會の如きは、慥かにその出色の一に數ふ可く、先づ簡易なる實業教育を授くるの傍、主として獨立の農民を養成するに力を致しつゝあり。又、紐育は勿論、北米各都市にて採用せるビッグボーイ式施設は、獨逸のエルベルフェルト式の一變態とも見る可く、これ亦特色の一に數ふ可し。最後に、社會事業及び都市計畫の模範と稱せらるゝ、英國グラスゴー市、米國クリーブランド市に就て略述すれば、グラスゴー市は、牛津大學と共に、蘇國の二大學たるグラスゴー大學の所在地にして、その市營事業としては下水、水道、

市街掃除、瓦斯、電氣、貸家、浴場、洗濯所、勞働紹介所、市場、屠場、避病院、公園、圖書館等何れも完備せざるはなく、特に保健施設に關しては、獨逸に行はるゝエルベルフェルト式、乃ち監察制度を應用して、多數の保健監察員をして市內を巡視せしめ、監察員中には婦人をも採用せり。監察員の任務は不正食料品を摘發するは勿論、一室の容積一千立方呎以下なるものに對しては、嚴にその收容人員を制限する等の細心なる注意をも加ふ。又、大規模なる煉瓦燒却所の設けありてこれに依りて生ずる灰の如きは、煉瓦又は人工石材を製造するのみならず、一方これを利用して電氣を生ぜしめ、更にその熱湯を以て浴場用に供するの設備をも有せり。市の貸家は千八百八十六年市區改正に際してこれを創め、採光通風頗る佳良なり。勞働局はこれに遲るゝこと十年、千八百九十六年に創立せられたるが、勞働紹介の成績は開設初年度に於て、夙に二割二分を示せりと云ふ。別に二百人の看護婦を使用する、ラックピル避病院あり、大消毒所あり、死亡率の減少せること頗る顯著なるものあり。かくの如くグラスゴー市の社會事業は、市役所の活動なれ共、米國クリーブランド市の社會事業は、主として同市商業會議所の建策する所に係れり。尤も各國一般商業會議所の職責としては、その地域內に於ける産業の調査、指導、啓發を以て第一義とな

すものなれ共、米國に於ける各商業會議所は、却て社會問題の解決、都市計畫の遂行に重きを置くの觀ありて、單純なる受動的、消極的の事業のみにては滿足せず、常に商工業の利益增進と共に、市民の福祉擁護の任務重大なるものあるを忘れず。就中、近世式商業會議所の模範として、廣くその名を傳へられたる此のクリーブランド商業會議所が、如何に市の社會事業に對して潑剌たる活動を試みたるかは、米國に在る有力なる三十餘の商業會議所の書記長が、辭を揃へて、これを推賞し、又、クリーブランド市民そのものも、その會議所を敬重し、これを懷慕するの餘、遂にこれに名付けて、市民の家となすに至れるに就て見るも、思半に過ぐるものある可し。斯く公共的精神の振作に就ては、クリーブランド會議所は力を極めてこれが奬勵をなし、會議所を中心として市民を統合するに成功し、以て公共的活動の策源府となれり。乃ち、千九百二年には貧民窟問題を提げて、輿論を喚起し、委員を選みて細民の生計狀態を精査して、一方オハヨ州政廳に警告し、更に、同市の家屋建築條例をも制定せしめたり。この條例は範を全國に示せるものにして、專ら保健設備、災害の防衛に意を注ぎ、多數の密集會同する家屋の如きは、特に嚴重なる特別規則を設け、規則に牴觸する建物は、これを改築するまで、その使用を禁じ、若し條件に適合せざる建物を放任せんか、市は與へられたる權力を以て、これを破壞することを得可し。而して、前述の委員は、或一部落約五千人の貧民が、僅に十個の浴槽を有するに過ぎざるの事實を發見し、當局に訴へて特別支出を求め、彼等の爲めに三個の宏大なる浴場を造營したり。又別に貧民の爲に運動場をも設けたるが、千九百十四年には政黨の猛烈なる反對に屈せずして、市の教育事業を刷新するの案を立て、其他、河川港灣の調査營養資料の調査、交通及び道路の整理、工業區域の水道に對する特別高壓裝置の取付、或は區街の名稱を改めて、市の公益思想普及の資料となす等、苟も公益の存する所、罪惡の潛む所、これを追求して已まざるの精神は、これが爲めに年々五百回乃至七百回の會合を開くの一事にても看取せらる。凡そ人口稠密なる都市が、一方に於ては市民の利益を增進すると同時に、猶、他の方面に在りては社會的落伍者を生じつゝあるが如く、クリーブランド市も、近年人口の增加率に比しては、遙かに大なる貧民の增加率を發見したり。千九百四年に於ける同市の慈善的設備は、五十一個所にして、到底、滿足なる成績を擧ぐる能はざる狀態に在り、茲に於てか、慈善組合の委員會を組織して、洽く、既存の慈善事業を調査し、美名の下に利を營むものなきに至らしめたり。その意義し市民の義捐をして最も有効ならしめ、眞の慈善事業を

保育せむとするに在り。委員會はかくして、選抜したる慈善團には證明書を交附し、該證書なきものに對しては、市民をして顧ることなからしめたり。而も、市民の不注意よりして、誤りて僞善團に寄附するが如きことを發見したる際には、相當の注意と說明とを與へて、以て社會事業の實効を圖りしが、この組織は北米全土の注意を喚起し、千九百十年には紐育、ピッバーク等各都市は、人をクリーブランドに派して、その事業を研究せしむるに至れり。遮莫、慈善事業の如きは、素よりその經營困難にして市の最も有名なる慈善會の如きも、猶且つ、資金に窮して活動意の如くならず、乃ち、千九百七年に於ては、同市の慈善團體の數六十一の維持費を寄附する篤志者は、五十餘萬の市民中六千人を出です。而も、總金額の三分の一は、僅々十三人の手より醵出せられ、この事實は千九百九年の調査に於ても、略同樣なりき。而して、寄附金の受入先によりて、その額にも大差ありて、自然右に厚く、左に薄しと云ふ結果を生じ、兎角普遍性も缺き勝ちなれば、一切の寄附金を一先づ中央に集めて、然る後、これを各慈善團に合理的に配布するの計畫を立て、オーベリン專門學校のウヰリアム氏を以て、中央慈善會組織委員長に推し、千九百十三年より活動を開始したるが、この組織の下に寄附金額も俄遽に增加し、冗費を節約し、事業を整理し、その効果は着々として擧り、クリーブランド市社會事業史にハ一新紀元を劃せりと稱せらる。千九百九年には又、石炭拔取事件に關して成績を擧げたり。この事業たるや、日常の些事に過ぎざるが故に、殆むと問題となすの價値なきが如しと雖も、市民の福利を希ふ熱誠は、如何に微細の事も及ぶかを知り得るが爲めに、最後の一項として示さむに、元來、クリーブランドに搬送せらるゝ石炭は、何れの運送方法に依るを問はず、途中にて必ず減積するを常とし、これ皆、沿道の貧民の拔取に係るものと看做され居たり。而も、調査の結果は石炭の拔取をなすものは、常習犯の徒にあらずして、却て、外國人たる婦人又は小兒なることを發見したるのみならず別に極貧の故にはあらず、單純なる發作的慾望に過ぎざる意外の事實に逢着したり。その報告書に曰く、『この種の行爲は敢て刑を科す可きにあらず、唯、彼等の本國たる歐洲に於ては、社會の制裁と、竊盜防止とに就て、適當の手段を講じ、又、彼等の道德觀念も緊張したりしが、一旦、米國に移住するや、隣保の親しみ漸く薄く、公德思想の弛緩に發して、事の玆に至れるものと認む。拔取らるゝが爲めの年額九萬弗の損失は、當市の富と比して云ふに足らざるものなるが、善良の斯の民をして、敢て、この事あるに及ばしむるに至りしは、輕々に看過す可からざる社會的現象に

して、而も社會事業の不備に乘じて起りしものなりとせば、その罪は一等にあらずして、寧ろ市の社會事業經營者にあり』と。かくて物質的の損耗よりも精神的の墮落を以て恐る可しとなし、これが救濟を講じ、幾何もなくして、期待の結果を生ずるに至れり。これを要するに、歐米各都市を通する社會事業としては、苟も、同一社會に生存するものは、その職業、財產、區域等の相違せるを問はず、その間には必ず何等かの交涉あり、聯絡あることを示し、納稅者又は寄附者に對しては、稅金又は寄附金が如何に有效に使用せられ、或意味に於ては、納稅は取りも直さず、最大利益を收むる投資なることを周知せしむるに足る、何物かの成績を示しつゝあるなり。

四

本邦に於ては、大寶令が初めて恤賑のことを定めて以來、凶饉、備荒貯蓄等に關して幾多の法制及び施設を見たり。例へば、義倉の制度の如き、又は、米價調節を目的とする糶糴の法の如きものあり。又、聖德太子の創設に係る施藥院、療病院貧民收容を目的とする悲田院、敎化を目的とする敬田院の存せしが如きは、人の能く知る所なり。特に盲人の保護に就ては、我が官民の古より心を用ひし所にして、その制度の如きも頗る完備せり、而も、社會事業が長足の進步も遂ぐるに至りしは、全く江戶幕府後のことに屬し、幕府及び地方各領に於ても、盛んに施療、授產、起工等をなしたるが、猶、未た一時的乃至地方的たるの領域を脫せず、その變遷の如きも大體海外諸邦と同しく、初めは宗敎的にして、漸くにして行政的たるに至れり。然れ共、幕末に及びて、佐藤信淵の提唱せる、貧民を開發事業に使用するを目的とする種樹園の制度、育兒を目的とする慈育館の制度、託兒を目的とする遊兒廠の制度、その他療病館敎育所の制度の如きも、現代の社會事業の樣式內容と頗る接近せるものあり。特に二宮金次郎の自助主義社會事業に關しては、刻下海外に於ける社會事業と符合する所尠からざるなり。別に、寛政三年、松平定信が江戶に籾倉を設けて、町費を節約してその剩餘の七分を積立てしめ、以て、凶歉時疫、鰥寡孤獨に對せしが如き、所謂七分金の制度は、その餘澤今日に及びて、東京市養育院の資金の一部となりたる、その遺德決して沒す可からざるものあり。本邦に於ける社會事業の現況は人の能く知る所なり。一々その細目を列擧するの必要なきのみならず、海外に於ける社會事業と雖も、世界の大戰を期して、一大回轉を示さむとする情勢に在るが故に、茲には單に歐米にのみ發達して、本邦に於ては餘りにその成績を示さゞりし事業に就て述べん。養育院、職

業紹介所、施療病院、圖書館、公設市場、簡易食堂、特殊教育等に就ては、既設幾多の事業ありと雖も、未だ不完全なるを免れず、託兒所、幼少年保護所、勞働合宿所等の設備に至つては、極めて微々とし振はず、更に獨逸のエルベルフエルト式監察制度、乃至は米國のビッグ、ボーイ式友誼制度を應用したる相談員制度の如きも、大に研究す可きものたる可し。我國に於ても之が研究、實行なきにあらざるも更に一層この制度にして活用せられむか、社會の面目一新するや疑ひなきなり。これを要するに、上述の如く、社會事業の理想は、社會に行はるゝ凡般の罪惡事を絶滅し、その暗黒面を掃蕩し古代に專ら行はれたる恤賑主義より、一歩を進めて積極的となり、その事業を擴大にし、大に規模を張りて、その理想に向つて邁進しつゝあるなり。希くは、我國の社會事業も歐米のそれに比して遜色なく、益々多事ならんとする社會問題に對して確實、敏活の働きを現はさん事を祈る。

新獨逸の研究

成り下つて蓋を明けた新獨逸

文學博士 三宅雪嶺

（一）

従來留學生が獨逸に最も多く、隨分獨逸に就いて知り得た筈であるが、制度及び學術を主にし、民族其者に就いて知る所が少かつた。民族に就いて知らぬでなく、生活狀態を詳かにし、秘密をまで探り得たのがあつても、事變が無ければ分らぬ事がある。平時見馴れた立派な建築物も、地震で壞れて內部の分る事がある。獨逸の事は何でも知つて居るといふ程でも、立派に出來上つて居る所、又は立派に出來上らうとして居る所を觀、その破壞した後如何になるかに考へ及ばぬ。獨逸帝國を建設し、歐大陸の覇權を握り、力を世界に及ぼすの勢力あつては、藥石も醫、唯感嘆せずに置けぬ。何でも獨逸を參考にせば可いとなる。延いて獨逸の法律や規定や其沿革や、可也に知識を得たとし、帝國政府を除いた獨逸が何狀であるかは考へ樣も無く、考へようとも仕なかつた。そこで事實が人の豫定を裏切り、獨逸を變じて別の獨逸と爲し、新な獨逸は如何なるものである乎、新に考へねばならぬ。

（二）

美人と云ひ醜婦と云ひ、大いなる違ひが有つて、一皮剝けば何程の違ひが無い。新興國としての獨逸帝國は列國の羨む所であつたが、窮迫狀態の獨逸共和國は誰も羨まず、寧ろ呆れて見て居る。「昨日まで世界を脅かし、今日世界に侮られる」と、演劇の科白のやうで、眼前の事實に外ならぬ。斯かる事が有り得べきか何うか、疑ふても現に有るに相違ない。盛衰興亡の測り難き事、以て察するに足る。實は國家の興亡と云ふても、成金の運命に似て居る。買つた株が俄かに騰り、百萬長者千萬長者に

成り、世間に羨まれるが、株が暴落し、悉く賣拂て債は返らず、人の怨み又は嘲ひを招く。而して人間を見れば、前も後も別段の變りが無い。富豪と貧窮と世間の待遇が違つても、當人自らに何の違ひが有るか。それに據つても、人を判斷するに成敗を以てしてならぬ事が分る。分つても普通に成敗を以て判斷する事になつて居り、斯く判斷せねば談柄の大部分が消滅する。獨逸帝國の興亡は成金の成上りと、成下りとに過ぎぬ。而して獨逸夫れ自らに就いて知られた所が甚だ少く、今や漸く之を知らうとするに傾きつゝある。

（三）

獨逸の官僚及び軍閥は諺と成る程であつて、本場でもあり、又それ丈けの働きを爲した。官に組織及び設備が整ひ、痒い所に手の屆く有樣であり、他の國々で之に則らうとしたのも偶然ならぬを知る。然し形式の整ひ、事毎に型に嵌まり、而して見えぬ所に缺陥ある程恐るべき事は無い。獨逸帝國の組織はカント哲學の範疇の如く、何事も型に嵌め、型に嵌まらぬ物の始末に困しむ。カントの哲學は見事であつても、それ丈けで止まり樣が無く、さりとて進む事が難しく、「カントに還れ」といふの餘儀ない事に成る。還つて何程進むか、進み得るやうで、見るべき結果が無い。獨逸帝國の組織は天晴れであつても、思はぬ缺陷が潜まぬとせぬ。世界戰役を起したか、起されたか、敵味方互に辯解する所あるが、何にしても獨逸側で必勝を期し、計畫の間隔した所が少くない。人間の智慧で全く誤り無い事を望むべきでなくても、官僚及び軍閥の計畫が粗漏であつたとせねばならぬ。勝敗は時の運、必勝を期して進み、それで敗るれば仕方が無いと云へるものゝ、獨逸側では失敗と共に如何なる禍を招くかを想像もしなかつた。勝つに定めて居り、萬一勝たなくても互角の勢で分れ、更に譲つて敗れると假定し、尚ほ勝捷の利益を得ぬ丈けの事にしたらしい。戰敗と共に敵國から如何に手酷しく要求し來るかを察したならば、何とか別に爲し樣があつたらう。勝ちさへすれば可く、敗けたとて別段の事無いやうに考へたのが、慘目な結果を招いた所以である。一旦敗れるとなつては並大抵の事で無く、帝國を根柢より覆すの餘儀なきに立ち至るのである。要求が酷に過ぎると云ふたとて、抵抗の仕樣が無い。自ら戰敗國に對して過酷に要求しながら、戰敗國として敵から過酷の要求無いと思ふのは蟲の好過ぎる話であつても、當事者は兎角蟲の好過ぎる傾向がある。戰敗國と共に皇帝が他國に逃げ出さねばならず、帝政が共和と成り、多大の賠償金を拂はねばならぬなど、全く考へなんだ。人の智慧は其處ま

で及ばぬと見える。皇帝及び其贊成者も頭腦の健康を損はぬ限り、必ず後悔して居らう。斯くと知つたならば早く二州を佛國に還附し、戰役を切上げたものをと思はう。個人ならば死して已むべきであつても、國家の禍を招き、取返しの附かぬ事にしたのは自ら恥ぢねばならぬ。

（四）

然し成上る事あれば成下る事あるを免かれぬ。成下つて身代を投げ出し、爾後如何に生存して行くかゞ當面の問題に屬する。ヰルヘルム一世の下に大宰相ビスマルクが手腕を振つた帝國は最早一場の夢に化し、疲れ果てた數千萬の民衆を如何に爲すべきか。如何に爲るも爲らぬもなく、民衆に於て何とか處置せねばならぬ。敵國に抵抗するの力無く、何と云はれても從はねばならず、從ふては何時國運を恢復し得るか殆ど全く希望が無い。希望が無くても生存するの必要がある。敵國に於て容赦せぬにしても、人が生存し得ぬやうな事を爲さうとはせぬ。種々の事情が有り、相應の餘地を與へ、體面をも保たさうとする。そこで舊獨逸帝國の民衆は共和國民として最善を盡くすべき順序になる。何の狀態に成るかと云へば、事情頗る複雜なるにせよ、露國と多數少數の關係を顚倒するものと觀て可い。獨逸は或る程度まで露民と共通し、之を越えて特別の狀態を保つ。共に大體に於て社會主義でありながら、露で多數派とする所が獨で少數派、露で少數派とする所が獨で多數となつて居る。ボルセヰキ其事が多數派を意味する。露國では少數派が穩健で失敗し、ケレンスキーが他國に遁れるの已むを得ぬに至り、而して多數派が過激派とせられ、レーニンが其首領と成つて居る。獨逸では社會民主黨が主戰論に贊成し、戰後の責任を分擔せねばならぬ。然し戰後比較的多く勢力を占め、種々の反對を受け、又多少變遷しつゝエーベルトを大統領とし、外交の衝に當り來つた。露のボルセヰキと主義を同じくするスパルタクス團は、頻りに奮鬪したるに拘らず、畢に敗北に歸し、領袖たるリーブクネヒト、ローザ・ルクセンブルク等が殺された。謂はゞ露國でリーブクネヒトが成功し、獨逸でケレンスキーが成功した勘定に成る。

（五）

獨露常に何程か脈絡を通じ、レーニンの活躍に獨逸が與り、リーブクネヒトの活躍に露國が與つて居る。少くとも運動費の後援がある。而して表はれた結果を全く異にするのは、國情を異にするに由來する。露國は農民多く、其滿足を得さへすれば

平穏にする事が出來る。特別に商工業者の利害を考へなくても、農民が安堵する丈けで事が濟む。トルストイが出ても出なくても、自づとトルストイの主義が行はれる。際限の無い廣い土地に幾許かの田地を得、以て生活すればそれで可い。譯の分らぬ事に鍬を棄て、銃を擔ひ、命を捨てねばならぬとあるので不安心に成るが、一家眷族耕して食ひ、唄つたり踊つたりすれば別段の心配が無い。勞働者の收入を平等にし、首相を始め皆同樣の生活狀態となれば、不平の云ひ樣が無い。舊貴族は困より、商工業者は頗る苦痛を感ずれど、多勢に無勢、何とも致方無く、之れ亦一日を安樂にすれば可い事になる。露國の將來は明白を缺くにせよ、斯かる狀態にて續くの可能性無いとせぬ。獨逸は之に比べて商工業が隆盛であり、到底民衆をして悉く農民と平等ならしむる譯に行かぬ。聯邦組織のみでも複雜なるに、階級が複雜であり、財產を沒收し、收入を均一にするなど、極めて難い。大變亂を經ねば實行する事が出來ぬ。スパルタクス團が失敗に了つたのも當然の事とする。スパルタクス團の命名が讖をなしたか、稍羅馬のスパルタクスと運命を同じくする。かの羅馬の奴隸解放者は奮鬪の後敗滅に了つた。敗滅した者に肖つたのは失敗に了るを示したとも云へるであらう。只羅馬のスパルタクス程の働きを爲さずに了つた丈けであつて、意氣込は似て居る。羅馬の事情が奴隸解放者の成功を許さなんだと同じく、獨逸の事情が過激派の成功を許さなんだ。然し社會黨の立場よりせば、露で過激派が勝ち、獨で過激派が敗れても、露獨を通じて社會主義が蔓延し、露で敗れた少數派も社會主義、獨で勝つた多數派も社會主義、勝つても敗けても社會主義者中の派別たるに止まる。獨逸の多數派から觀れば露國の多數派は異端者であり、露の多數派から觀れば獨の多數派は異端者であるが、他から觀れば等しく社會主義に屬し、唯主義の解釋及び實行を異にするのである。而して之を異にするのは全く國情の違ひからである。

（六）

露國も獨逸も帝國から共和國に變じ、急變の甚だしいものであるが、共に初めて政府が何の爲めに存在するかを知る樣になつた。知ると云へぬならば、眞面目に考へる樣になつた。前には政府關係の事は唯與へられたものであり、其何たるかを知らうとせず、知らうとしても眞相に觸れる事が出來なんだ。今は露國の心有る者が皆等しく政府の存在する所以を理解し、民衆の幸福から考へる樣になつた。之れが利益であるか何うかは人の解釋次第であるが、兎も角も前に經驗し得なかつた事を經

鼓して居る。獨逸の言論は種々の[illegible]をなり、[illegible]が[illegible]に反抗し、伯林に政府を置くを好まぬやうな事も與へるが、簡單に云へば、茲で押へて來た所のものが聲を上げた形になる。列國に對する國家として頗る損しても、人類として自らの位置及び價値を知るに近い所がある。何程まで其價値を認めるか、新に秩序を定めようとし、共和榮え如何にて定まる。他國に在つては禍を蒙るの當人ほど適切に感じ得なくても、歷史ならで得られぬ材料と思ふ所をば、眼の前に得る事が出來るやうになつた。以前の獨逸研究は國家社會の外面であり、今後の研究は共內面に得る所があらう。

獨逸共和國の不安と其恢復

「大阪每日」獨逸特派員　上西半三郎

獨逸は何時の日如何なる形式を以て恢復するか、新しき獨逸共和國の運命は如何との問題は單に獨逸一國許りの問題に非ず、世界的の懸案として興味と實益に富んで居る、云ふ迄もなく、獨逸の將來を卜するには先づ現在の赤裸々なる眞相を研めて中[illegible]となさぬものが、然も日本に傳へらるゝ獨逸に關する報道は時として獨逸政府自身の宣傳であり、又英佛側の宣傳であつて其眞相を掩ふて居る憾がある、又所謂獨逸通の獨逸觀も「昔の獨逸帝國」の觀念を固守して何事ぞ新しき獨逸を解するに古き觀念より割出さうとするの弊に陷る、偶々、革命後の獨逸を見て來た人の觀察も獨逸政府の庇護の下に官製の統計を集めて成つたものであつて、一面を見て半面を逸する觀がある、私は革命後、日本の新聞記者として獨逸に入り昨年十二月迄伯林ワイマールに駐まつて、親しく見聞した處と手づから集め得た材料とを以て、多少乍ら此大問題に觸れて見やう、云ふ處或は世の所謂獨逸觀獨逸論と異なるかも知れない、先づ獨逸共和國の僞らざる眞相を摘錄する。

獨逸に革命が勃發してから今月迄一年有半、共間革命史上の常態たる第二の革命は起らないが、紛擾に次ぐに紛擾を以てして寧日なき有樣であつた、然し激動し乍らも移り行く政變の波を靜に觀察すると、其間一定の波のリヅムが見出される、其は社會民主黨の勢力減退であり、反動派と過激派の揚頭に外ならない、そして今日の狀態は政權を掌握せる社會民主黨中心の三政黨と反動各派と過激派との三派鼎立となつて居る、社會民主

黨は獨立社會黨と共に革命の遂行者として又功勞者として政權を握り、獨立社會黨が野に下ると共に、更に中央黨と獨逸民主黨とを誘つて兎も角今日迄政權を握つて來た、然し、社會民主黨が革命を成就し政權を握り得たのは、國民の大多數が革命を眞に希望し、社會民主黨を援助したゝめではない、國民の多數は唯社會民主黨の行動に反對もせず、又之を援助もせずして單に好意の中立を持したに過ぎない、一昨年十一月の崩壞の當時國民は唯々講和の締結と、生活の改善とを希望して居つた、此機微を見たる社會民主黨は、我黨は講和促進を目的とす、我黨が政權を執らば國民生活の改善を立處に行つて見せると宣傳したゝめに、國民の大多數は社會民主黨に信賴して其爲す處を靜に好意を以て傍觀した、此が獨逸革命の眞相であつて、獨逸革命は國民多數の爲す處に非ず、實に兩社會黨の人々に依つてのみ爲されたのである、然も社會民主黨が廟堂に立つて以來、講和に締結されたが生活は改善されない、食物の如き戰爭中と少しも異らないものしか口に入らぬ、其上物價は日に々々騰貴して戰前の十五倍、戰爭中の十倍となる、マークの爲替相場は下落して戰爭中に比し十分の一に迄下る、軍隊は解散したゝめに警察權は行はれない　秩序は亂れる、此困難と無秩序は、敗戰者の當然受くべき處であつて、如何なる名君、大政治家と雖も之を救濟する事不可能であるが、國民は社會民主黨に期待する處が大なりし丈、今に於て社會民主黨の無能を以て此困難と無秩序の原因なりとし、社會民主黨を以て獨逸國民の敵なりと迄思ふに至つた、昨年六月、シャイデマン內閣が講和調印問題のため辭職し、バウエル內閣が成立した頃から、特に此國民の反社民主黨熱は熾烈となつた、十一月ヒンデンブルグ元帥が伯林に現れた頃から獨逸の社會狀態は冬期の困難な時期に入り、政府は國民怨府の中心となり、本年三月反動革命の騷ぎにも、社會民主黨政府は纔に外國の力を借りて其存續を保ち得たに過ぎない。

社會民主黨の勢力失墜と並行して併せ考へらるゝのは反動運動の進行と過激派の勢力消長とである、反動派と云つても、ルーデンドルフ元帥を中心とする舊普魯西將校の一團もあれば、ヒンデンブルグ元帥を擔がうとする舊將校の一團もあり、チルピッツ一派の排英主義者の一團、國民黨民族黨等政黨員の一團から、大學生連の運動等があつて各派間聯絡も統一もなく、又之を一丸として指揮せる大人物もないが、此等の團結が等しく目的とする處は、社會民主黨中心の政府を倒して、獨逸を立憲君主制とする事にある、勿論將來の君主は強ちホーヘンツオル

レルンの人たらずとも可なり、ヒンデンブルグでも巴威のルプレヒト親王でもいゝ、現今の國步艱難を更に困難ならしむるものは實に社會民主黨の自由主義であるから、之を倒壞して獨逸に王政を布き、責任内閣制を以て英國風の國體とする事により國難が救はるゝと信じて居る、殊に國民の多數が現政府に反感を抱くに至つて、反動各派は順風に帆を揚げて勢力を得來り、反動思想は加速度を以て國民間に傳播しつゝある、即ち反動派は社會民主黨中心の現政府の勢力失墜と反比例して其勢力を得來つた。

過激派に至つては反動派と異なり、現政府の共和主義、民主主義、國家社會政策を微温なりとするものであるが、反動派と等しく現政府の一敵國たるの觀を呈して居る、等しく過激派と云つても、獨立社會黨の目差す處は社會主義である、革命の當初、社會民主黨と獨立社會黨が發表した政綱を比ぶると兩者間に殆んど差異がなく、單に生産の國有の程度の差のみであるが、爾來社會民主黨は其公約せる政綱即ち社會主義の實行を果さず獨立社會黨は忠實に社會主義に猛進せんとして居る、昨年一月、獨立社會黨が野に下つて以來、兩黨間の溝渠は日一日と深くなり、事實上の政綱も一は國家社會政策、他は國際社會主義と全然異なるものとなつた、尤も獨立社會黨中には政權掌握の手段として、社會民主黨と提携すべしと云ふレデブール。故ハーゼ等の右派があり、又直接行動を以て政權を取れ、スパルタキストと行動を共にせよと云ふ左派もあるが、十一月に領袖の大更迭を行ひ過激分子たるコーン。ドイミヒ等が新に黨の主權を握りライプチツヒの大會に於いて新に政綱を發表し、獨立社會黨は斷乎として社會主義の實行に進む旨を宣明し、現内閣との提携を峻拒し、社會主義に進むためには國際間の横斷運動を採るべしと公言して居る、即ち獨立社會黨はマルクスに歸つたものであつて、獨逸唯一の社會主義黨なる事を宣明した、從つて同黨は少數の黨員の例外を除き、黨としては左傾の著しきものがあり、到底政府とは融合出來ず、寧ろスパルタキストと接近の可能性を多くした。

過激派中左に位するスパルタキストは露國過激派の分身が外ならない、革命當初、スパルタキストの多數の人々は獨立社會黨と行動を共にし、舊帝政の倒壞に力を致したが、十一月九日兩社會黨の六人委員會が成ると共に、之に參加せずして野に下つた、爾來、斷乎として政府との融合提携を拒絶して、獨立社會黨以上に現政府の一大敵國として繼續し來つた、其唱ふる處が共産主義であり、之に達する手段として無資産階級の獨裁政治を主張して居る、即ち共和政體よりも勞働者の專制政治を執

り、國家の領域を越えて國際勞働者の提携を主張し、手段として軍隊の組織を必要なりと云ふも、勞働者のみより成る赤衛軍を認め、其財政策經濟政策も社會主義の範圍より進んで共產主義を採らんと云ふ。(私は過激主義が社會主義の一變形なりと云ふ說を採らない)故にスパルタキストは其主義に於いて現政府と一致せないのみか獨立社會黨とも一致しない、たゞ現內閣倒壞の手段としてのみ獨立社會黨と一致し得るに過ぎない。

社會民主黨中心の政府は當初からスパルタキストを眼の敵として其壓迫と絕滅に全力を注いだ、昨年一月及び三月の伯林騷擾は卽ち政府とスパルタキストとの爭いであつた、然もスパルタキストは騷ぐ每に勢力を失墜し、昨年の秋には殆んど悲境に沈淪した、爭ふべく多くの武器はあるも彈藥なく、露國より來る軍資は續かず、ノスケの軍隊のために殆んど手も足も出ない目に會つた、然し乍ら本年三月、反動運動の騷ぎが勃發すると共に、政府はスパルタキスト壓迫の手を緩め、之が橫行を默過して寧ろ之を以て反動派に對抗すべき牽制たらしめんとしたゝめに、三月四月、又もやスパルタキストは勢力を盛り返し、獨逸內所在に勞農政府を樹立するに至つた。

今日の處スパルタキストは、聯合國が社會民主黨援助を決すると共に再び凋落して居るが、其潜勢力は到底絕滅すべくもあらず、登錄黨員は僅に三萬五千程であるが、何れも主義に忠なる人々の結合であり、例令露西亞がブルジョアの天下と變ずるとも、獨逸のスパルタキストは刈除し得べくも思はれない、勿論、其勢力の少なるより見て、將又獨逸の民性より見て、獨逸が過激化されスパルタキストの天下となるとは思惟されないが、非常事變が突發し、又は新たな政治上の條件が出現せざる限り、スパルタキストは一勢力として獨逸內に殘るであらう。

斯く三派の鼎立せる今日の獨逸共和國はどう見ても不自然なる基礎に立つて居り、其國家としての基礎も不安定だと云はざるを得ない、更に其不自然、不安定なる點を云はんが、第一、革命後の獨逸は帝制政治から政黨政治に入つたのであるが、云ふ處の政黨政治とは、決して理論上に所謂政黨政治を意味しない、右に述べた社會民主黨中心の現政府が政權を執つたのは、昨年一月の憲法制定國民議會の總選擧に、議員四百二十一名中、社會民主黨が百六十三名、中央黨が九十二名、獨逸民主黨が七十五名の多數を制し得た當然の結果であるが、今日の處、在野黨たる右黨側の國民黨民族黨、左黨側の獨立社會黨は、他國の政黨政治の國に於いて見る如く、政府と其政策を異にせるのみならず、實に其國體論政體論迄も異にして居る、卽ち在野黨

は、昨年八月十一日發布された共和國憲法を認めて居らない、從つて、保守黨又は過激派が政權を握れば、更に憲法から改正せなければならぬ理屈である、又獨逸外交政策の根本たる講和條約及其實施に關しても、政府黨は表面上だけでも其實施に誠意を持つと聲明せるに反し、右黨側は昨年六月の講和條約討議議會に見る如く、此條約を實行不可能なりとして反對して居る、又獨立社會黨は、國際主義の立場に立つて居るから昨年六月には講和を希望せるため條約調印說を採つたのであるが、其條約の內容には全然反對である、從つて政府者が變れば、外交策も單に政策の末でなく、根本から改めらるゝ事となる、此點は政策のみを異にして抗爭せる政黨政治と趣を異にする、即ち形式上から見ると、國民議會議員選擧に政府黨たる三政黨を選出した二千三百八萬九千九百九十三名のみが現在の共和國を認めて居る事となる、此れ等を好む議論の樣であるが、前にも述べた樣に、實際に見ても、國民の頭は多く反動運動に傾いて居る、一方には少數乍ら根強い過激思想がある、即ち國民の大多數は現制度の謳歌者でもなく、共和國の讃美者でもない、尤も國民議會は已に解散せられたから、六月六日に新憲法に據る獨逸議會議員が選擧さるゝのであるが、一般の觀察は、總選擧に政府黨たる三黨は依然多數を制するであらう、然し、多數と云つても、社會民主黨などは非常に議席を失ふだらうから、辛うじて多數を得るに過ぎまい、或は多數を得る事出來ないかも知れぬと見られて居る、又新憲法に依れば、國家の主權は、ホーヘンツオルレルン家の手から放れて國民全體の手に移つた、然し乍ら、國民全體が主權を持つて居るとは名許りで、主權は事實上社會民主黨の手に歸して居る、そして、社會民主黨の背景たる猶太人の掌握する處である、猶太人は多年の苦境から今日の榮位を贏ち得て、喜びと誇りの美酒に醉つて、國民大多數の形式上の後援もなく、實際上の同情もなく、三日天下を期し乍ら横行濶歩して居る、國民の基礎を有せざる政府があり、國民と國家が離反する、其處に不自然もあれば、國家としては不安定のものと云はねばならぬ。

　加ふるに現今の獨逸においては、主權を握るものは軍隊の力に依らねばならず、軍隊の向背は內閣維持の必要條件である、前國防相ノスケ氏は總司令官として二十餘萬の正規軍を命令して居つた時、其軍隊は必しも政府の擁護者でもなく、共和の辯護者でもなく、軍隊の大部分はノスケ氏に心服し乍ら、社會民主黨の政策を快からずとし、寧ろ立憲君主制を追慕しつゝあつた、三月の反動革命の騷ぎは餘りに突發的であり、計畫的でなかつたために、軍隊は曖昧なる態度を採つたが、其一部分は直

ちに、反動派たるリユツトウキツツ將軍に加擔した、反動騷ぎの結果ノスケ氏は責を負ふて辭任し、民主黨のゲスレル氏が後任となつたが、ゲスレル氏は一個の飾り物に過ぎない、ノスケ氏の後任に就いて種々案もあり計畫もあつたが、手腕家を國防相にする事は危險であるから、當り觸りのないゲスレルを飾り物として大臣たらしめ、國防省陸軍部長ラインハルト少將が其實權を握る事となつた、ラインハルトならば純粹の軍人であり政治家でないから、他から之を動かさうとすれば動かす餘地もあり、自發的に事を起さないだらう、然し軍隊内の空氣は依然現政府に不滿の感情を持つて居るから、軍隊の問題は未解決である、社會民主黨としては、現今の正規軍を解散して新に社會黨の軍隊を組織するか、或は之を自家の藥籠中のものとせねばならぬが、第一の方法を採れば軍隊が騷ぐし、第二の方法も今日の處絶望である、故に現政府は爆發物を抱いて噴火山上に座するの感をし乍ら軍隊をどうする事も出來ない、若し右黨が政權を握れば今日の正規軍は其まゝ之に悅服しやうが、過激派が天下を取ると、軍隊との問題は現今以上に困難となるだらう、即ち政權を握る者は必ず軍隊を手中に納めねばならぬのに、軍隊と政府とは乖離して居る、そして一獨立國の觀を呈し乍ら徐に破裂と總勘定の日を待ちつゝある、之れ獨逸不安定の事實である。

此國家の不安定なるに加へて、獨逸の社會は實に混亂裡に彷徨しつゝある、當路の大臣は、夙夜政務に勉勵する事勘く許りだが、其勤勉は虛心坦懷獨逸の將來を思つての勉め振りでもなく、又社會主義のために盡さんとする高遠なる理想から出たものでもない、唯社會民主黨のために、そして自己一身の安固のために計る底のものであつて、如何にして勞働者を懷柔し得るか、如何にして來るべき六月の總選擧に多數を制し得るかを念とするのである、從て國家百年の大計を樹つるの暇なく、當面の彌縫策に其日を暮して居る、其他の大小官吏は、何れも舊官僚其儘だが、革命以來一回も增俸されず生活難と不平に其日を過ごし、任意に執務時間を短縮して、怠業に怠業を重ね、舊帝政時代の榮時を夢み乍ら事務を阻礙せしめて居る、殊に警察官吏の怠業に至つては其極に達し、警察權は全然地に墜ちて犯罪は少しも檢擧されず、警察は交通整理と戸籍事務をのみ執り、保安は軍隊警察に一任されて居ると云つて可い、其他一般國民も、資本家は租税の誅求と財産沒收を恐れ金儲に努めず、金なき者も當分日和見の態度を採り怠業を續ける、從つて總ての社會機關鐵道電車電話電信より金融信用總ての機關が圓滑を缺いて混亂

裡にあり、今日の活動的と組織と秩序とを誇りとした古の獨逸國民の姿は見られない、之れ四年半の戰爭中困苦に堪へ革命を經て講和に入り、依て緊張から弛緩に移り行く人心の經べき當然の經路とも見られる、卽ち獨逸國民の怠業は一時的のものであつて、其混亂も過渡期の現象なりと考へられない事もないが、何にせよ社會の混亂其物は事實であり、今日の處、何の日此混亂が回復するか逆睹する事が出來ない。

更に獨逸が如何に疲弊せるかを見るに、獨逸が戰爭のために被つた疲弊は佛國伊太利程甚しくはない、唯、講和條約實施の結果として其疲弊は實に甚しきものがあらう、卽ち、獨逸は戰爭よりも革命のために苦しみ更に講和條約が着々實施さるゝに及んで、其困難は實に意想外に甚しきものがあらう、今講和條約を嚴格に勵行せんか、其農耕地を割讓する事により、食糧自給國より食糧輸入國に變じ、年々千五百萬噸の穀物と多數の家畜を輸入せなければならぬ、石炭に於いても年々約一億萬噸宛を輸入し、鐵も年々五百萬噸宛を輸入せねば戰前同樣の工業隆盛を期し得られない、其他アルサス・ロレーンを失つたがためにカリーの獨占權を失ひ、錫鉛石油等に於いても失ふ處多く、到底工業を以て國を立つる事が出來ぬ、船舶に於いても千六百噸以上のもの全部を失ひ、殘る處は千噸以上のもの十一隻、千噸以下のもの五十二隻となり辛うじて沿岸航路しか行へない、又鐵道、新敷設は制限せられ、外國貨物を輸送する時は其運賃に於いて條約に拘束せられるダンチッヒ港を失ふは勿論、漢堡港でも其一部をチェック・スロヴァク國のために借與せねばならぬ卽ち講和條約の結果、獨逸は其經濟關係に於いて、食糧自給國より食糧輸入國と變じ工業國たる事不可能となり、商業國としても立ち行かない、之に加ふるに、戰費たる內國債は約九百億馬克外債を合して千二百億馬克となり（之は財產沒收を以て償却する事に決定した）租稅は累年增加し二百七十七億馬克に達し不換紙幣も亦增加して約九百億馬克に達して居る、此經濟と財政上の窮境は國內產業を疲弊せしめ、更に社會の混亂を誘起し、國家の存立を不安定ならしめる。

斯くも不安定なる獨逸、混亂せる獨逸、經濟財政上疲弊すべきポテンシアリチーに富める獨逸が果して何時の日、如何なる形式を以て恢復すべきかは、今日之を推斷する事、難中の難事である、唯之を推測せしむるに足る指示を玆に述べて滿足して居らねばならぬ、曩に獨逸社會の混亂と、國民の怠業狀態とを述べたが、之れは過渡期の現象と見るのが穩當である、一部の獨逸通は獨逸が已に秩序整然と、恢復の門出にあると推斷し、又獨逸

見學者も其表面だけを見て獨逸にては已に着々と秩序が回復されてあると傳へる者あるも、實の處今日尚混亂狀態を脫せず、多數の國民は怠業から目醒めない、但し北獨の將士に依つて運命を開拓し、三十年戰爭の跡と、七年戰年の跡とを巧に切り拔けフリードリツヒ大王に依つて統一と秩序を訓練せられた獨逸國民は此まゝ滅亡すべき筈がない、獨逸帝國としては建國以來五十年なるも獨逸民族としてはブランデンブルグ公國以來三百年、多大の國民的訓練を得て居る、此國民的訓練は、社會人としての訓練であつて、故フリードリツヒ・ナウマンが云つた樣に「大我の中へ小我を沒入する事」である、即ち獨逸人には國家の一員としての意識が尤も深刻に植え附けられて居る、之が食物缺乏白熱日案共働のために掩はるゝとき、何日かは現はれる時期が來る、尤も怠業の極に達したと云はれ其勞働能率が戰前の五分の三に下つた獨逸四百萬の勞働者も、政府が最高經濟會議を創設し勞働者に產業立法權を與へ、職業委員會の組織を公認して、勞働者に產業關與の權能を與へてから、獨逸の同盟罷業數は減じ、勞働者は少數過激者を除く外は漸次目醒めて來た、右黨の人々は、社會民主黨さへ廟堂から去り、猶太人が政權から離るれば直ちに怠業から醒めるであらう、即ち混亂も國民の怠業も永續すべきものではなく一時的の現象である。

然し乍ら三派鼎立の將來に關しては如何になり行くや、豫斷を許さない、或は之が永遠に繼續して獨逸の國家を弱め、其恢復を不可能ならしむるかも知れぬ、獨立社會黨は政府と到底融合は出來ぬ、スパルタキストとも一致はせず、兩者は別個の政黨として唯反政府の旗下に步調を共にするであらう、此兩者より成る過激派は或は向後、時々、直接行動に出で、或は暴發事件に誘致されて一時非常の勢力となる事がないとも限らないが、然し其勢力は已に限定されて居る、大多數の國民を集め得るものではない、即ち彼等は獨逸の天下を取る事が出來ない、唯、時に應じて其勢に消長はあるが、大體微弱乍ら一團體を組織して永久に何れの政府に對しても敵國として殘存するであらう、現政府と反動派との勢力消長は六月上旬に行るべき獨逸議會の總選擧の結果に待つ處が多い、私は此總選擧を觀測して政府三黨は辛うじて多數黨たる事を得るか、或は僅の差で少數黨になるかも知れないと云つたが、私の見る處では、社會民主黨が六十名內外に減じ、中央黨が七十名に減じ、獨逸民主黨は七十名內外即ち現政府黨は二百名內外となり國民黨と民族黨は合して百七十名內外に增加し、獨立社會黨は五十名に增加すると見て居る、即ち政黨三黨連盟と反動派たる保守兩黨との差を三十名內外と見る、然し若し議會內に於いて現政府黨が

少数黨とならば獨立社會黨も政府黨に加はつて反動派の政權掌握を妨げるだらうから、何れにしても反動派が近く政權を執るべしとは思はれぬ、然し現政府黨が政權を繼續して掌握して行くとするも、反動派は機會ある毎に事を起し、從來の不統一にして秩序なかりし反動々派が統一せられ、又適當の首腦者、指揮者を見出して、茲に一大勢力として政府を惱ますであらう、唯、聯合國の政策としては社會民主黨中心の政府援助を繼續するであらうから、此反動派の蹶起は最後の勝利を得る事甚だ困難である、然し乍ら國民の多数が覺醒して來る、猶太人を惡む、反動思想に感染すれは、或は社會民主黨政府を倒壞するかも知れぬ、否今次の總選擧に多數を占むるかも知れぬ、反動派が政權を握り、王政を復古する迄には外國との關係が面倒であらうが、若し此に成功して獨逸が立憲君主制とならば、獨逸としては秩序が速に恢復せられ、國民が勤勉になる可能性が尤も多い、其にしても其時政權を離れた社會民主黨と過激派二黨はどうするか、現政府が繼續するとも、王政が復古せらるゝとも、社會民主黨と反動派兩派の爭は政策上の爭ひでなく根本の爭ひであり、死を賭しての爭ひである、何れかの形に於いて永遠に殘つて獨逸の國家を毒し、其國民を苦めるであらう。

然し乍ら獨逸の恢復に尤も障害となる者は實に先に述べた講和條約實施其物である、講和條約の本文は已に發表せられ、之に依る獨逸の損害は如何程なるかは、已に知られて居るから茲に詳説はせないが、若し之を嚴格に實施されんか、上にも述べた樣に獨逸は自滅の外はない、否、獨逸と聯關して歐洲の諸國は經濟的に破壞せられる、之がために講和條約の改訂は、今日、單に獨逸側許りの希望ではなく、英伊兩國にも改訂論が流行する、來るべき、スパーの最高會議は必しも條約改訂會議でないかも知れぬが、少くとも條約改訂準備會議である、私は講和條約が改訂せられ對獨經濟條件が緩和さるゝものと思ふ、若し之が緩和されなければ、例令獨逸社會の秩序は回復し、獨逸國民は勤勉となり、三派の政爭は休止しても、其經濟財政上の疲弊のみで、獨逸國家の回復は十年二十年の間は到底不可能であらう。

獨逸の將來に關しては悲觀の材料が多い、一部の獨逸人は樂觀說を吐き、大言壯語して居るが、悉しく數字を調査し、實情を見ると回復は中々の難事である、國民が如何に勤勉であらうとも、經濟上の數字の前には如何する事も出來ぬ、財政上の事實、其を動かす事は出來まい、獨逸政府の公書でも、時局に關する個人の著書でも、其最後には必ず「働け々々、其が現在の窮境を救ふ唯一の道なり」と書かれてある程、國民の勤勉は必要

と見られて居るが、彼等の覺醒は先づ第一に來り昔の勤勉なる國民に立歸るであらう、そして之に次いで、講和條約は改訂せられ、多少緩和せられるであらう、唯、三派鼎立の將來はどうなるか、永遠に融和出來ない三派は永遠に鼎立して國家の回復を妨げない迄も、實に獨逸の恢復の途上に横はる一大障害でなければならぬ。（完）

敗殘の獨逸

文學博士 高楠順次郎

敗殘の獨逸の實際は、外間の想像以上に悲慘の狀態に陷て居るのである、而してその悲慘の狀態は、獨逸の主腦分子として、最も健全にして勤儉性に富めりとせらるゝ、中産階級に於て最も甚しいのである、予が昨年末獨逸の諸處を見舞つた時に、既にその餘りに甚しきに驚いた、而してその實狀が歐洲隣接の諸邦に餘りに知れ渡つて居ないのにも驚いた、我國は最も多　の人を最も早く獨逸に送り入れたのである、而るに我國にも悲慘の實狀は十分に知られて居ない、予が獨逸を去つて以來、既に半年に近い、而もその實際は寸毫も改善せられたと云ふ報知には接しないのみならず、凡ての報知は反對に惡化しつゝあるを示して居るのである、墺國は既に飢饉狀態に陷つたといふ昨年末に、老練なる「テレグラフ」記者は、獨墺の差は僅に六ケ月であると云つた。たとひ墺國と同一狀態に至らずとするも、少くとも飢饉狀態への道を辿りつゝあるは掩ふべからざる事實である。

物資の缺乏は、獨逸一般の苦しめられつゝある所であるが、殊に食料の缺乏と燃料の缺乏とは、中産階級――成貧――の最も苦めらるゝ所である、その苦しみを不平なしに忍受して居る勤儉性と服從性とは迚も他國人の企及ぶべからざる所である、燃料は泥炭や、木炭や半化石炭の混用も出來る上に、溫浴、煖房を禁じ、瓦斯、電氣を節し、各戸僅に一室を煖むるに止むるなど精細の注意により、既に昨冬を經過したのであるから、今年の冬期に於てこれ以上の寒苦を嘗むる必要もあるまいと思はれる、食料に至りては全くその趣を異にし、一般に乳と肉との缺乏に苦んで居るのである、兒童と病者とに與ふべき乳がない、兒童は五百人乃至八百人を瑞、蘭、丁の諸邦に送り、その營養を回復して送還せしむるなどの窮策を執りつゝあるのであるが、兒童の榮養不良に陷るものは日に益多く、チョコレートの菓子を命の綱と賴む幼兒の母親は列を爲して店頭に待て居る、實に酸鼻の情に耐へぬ有様である、小兒科病院に於ける榮養不良の病兒の眞相

は驚くべきものもあるそうである、小學校では兒童の學事の進步が著しく遲鈍になつたとのことである、これらの事情は、昨今小泉軍醫が歸朝したから專門家の報告として今に聞くことが出來るであらう、兒童に乳がないと同じやうに、壯年者の榮養に資すべき肉類がない、全國殆ど菜食に甘んじて居る有樣である、如何に勤儉性に富むと云つても、かゝる菜食狀態が永く續けば續くだけ、國民の能率は衰退するわけである、老壯者が一たび重病に冒さるれば、その抵抗力なき爲に忽ちに斃るゝ人が多いのである、この乳と肉との缺乏は容易に回復の望みもない、牛や羊を主として家禽類を佛國のみに渡すべき條約面の總數は二十三萬二千頭である、而して本年の四月八日を以て引渡した數は僅に二萬三千頭で、まだ十分の一しか渡して居ない、或る地方では燃料も食料も割合に豐富な處もないではないが、これも貨車の缺乏で、その調節が十分に行はれない、條約では機關車五千を渡すのであるが、まだ殘りが四十二渡さねばならぬ、貨車は十五萬を渡すのであるが、まだ四千四百六十を渡さねばならぬ、こう云ふ具合に獨逸に必要な秣草を取上げて食はせずに乳を搾り取られるやうなものであるから、これから牧畜を盛んにし、食料を豐富にする經營は甚だ困難なのである、一時は農牧時代の獨逸をも建設せんとした位であるから、二十萬や三十萬の家畜を渡したからとて影響のある筈はないのであるが、四年の戰爭で牛も馬も殆ど食ひ盡して哺乳用のものを存してある位の程度である、この上にかゝる大數を外國に引去られるのには獨逸の今日に取りては非常な打擊である。食料、燃料の缺乏の上に、最も困るは爲換相場の低落である、このマルークの低落は輸入の杜絕を意味するのである、時に浮沈はあるが昨冬あたりと今と比べて見ると更に一倍の低落である、今日の狀況では外國の物資を輸入することは殆ど不可能と謂はねばならぬ、昨冬ですら經濟學者は今のまゝであつたら結局國家破產であると云つて居つた、外債も試みた、案のじやう佛國に反對された、今では賠償基金の意味の外債募集か、內國債の利子不拂か、內國富豪財產の沒收か、この三方法による外は、國家破產を免るゝ方法はないのである、限定外債の募集は聯合國の許可さへ得れば行はるゝであらう、內債利子の切捨はどんなものであるか我々には分らないが、經濟學者には之を主張する人もある樣子であるから、危急存亡の秋には行ひ得るものと思はる、財產の沒收、少くとも半分の沒收は現社會黨政府は曾てより目論見つゝある所である、紙幣檢印の如きは、その前提であると見て宜しいのである、本年三月二十九日に官報に發表したと云ふ新所得稅は、朝日記者の報知に依ると、非常の苛稅である、一千瑪

の所得税は一割である、次の一千瑪は一割一分と云ふやうに累進法で五十萬瑪に達した頃には、五割九分になり、五十萬瑪以上は六割となつて居る、昨年十一月廿日頃に、予の在獨中提案された原案では、全部金高で示してあるから精確には示されないが、今回の發表よりは、稍苛酷である、今回の新税法は多少緩和されたものであらうが、一種の國難犧牲税でもあり、又一方には資本征伐法であるは云ふまでもない、所得税は地面、企業、財産、勞働の所得に課するもので、知識階級勞働の範圍では、まだ耐へられぬ底の重税とも云へない、一萬瑪で一割九分、二萬瑪で二割七分、四萬瑪で三割四分、十萬瑪で四割五分、二十萬瑪で五割二分位のものである、資本家で地面、企業、財産に依つて生活するものは、必この上の收入であるから、大抵皆半額以上を取上げられるのである、併しこの新所得税ではなか〱獨逸の現狀は救濟し得られぬであらう、どうしても上に擧げた三方法の一つを選ぶ外はないと思はれる。

而るに、食料も調節され、燃料も供給され、マルークの低落も救はれ、外國から物資輸入の道も開けたとしても、獨逸の前途はまだ〱樂觀を許さないのである、獨逸が今日に於て最も困難して居るのは人物の缺乏である、獨逸革命以後國家の料理に任じつゝある人々は、由來反抗政策にのみ腐心した人か、又は實業社會に沒頭して居つた人である、人物どころではなく本省内に於ける專門の知識もなく、部内を統御する能力も疑はしいものもある、されば國民は多くを望まない、内閣の信望は已に地に落ちて居る、ベルサイユの平和條約＝獨逸から見れば非人道の條約＝を默認して調印して歸國するは當然である、迚も佛國の猛虎に對抗して國際不和の風雲に乘じて、獨逸の運命を旣倒に回復すると云ふ大業は期待し得ないと信じて居るらしい、中產階級には、隨分人物もあるべき筈であるが、これは殆ど發言權を得ないのであるから一齊に聲を潛めて萎靡に甘んじて國步艱難の時代を經過せんと試みて居るのである、要するにこの方面にも平地に波瀾を起こすの勇者は居ないのである、カイゼルは軍國主義にその生命を存して居つたのであるから一國の人才は多くこの方面に走つたのである、この軍人方面には尙潛龍があるとは一種の期待となつて居るのである、併し百萬の兵を擁して尙事を爲さない元帥將軍が軍隊を離れた今日河伯(かわっぱ)が陸に上つたと同樣である、愈々何れの隅を搜がしても國家の進運を托し回天の事業を委するに足る人がないとすれば、獨逸に於ける人物の缺乏は或は統一教育の弊ではあるまいかと思はれる、萬人が萬人、一律に訓練して一樣に發達することを强要する底の統一敎育は、獨逸系の敎育法であつて、自發的に天能を

發揮し、その性格を自由に陶成せしむる自由教育は羅甸系の教育法である、羅甸系の教育法は佛に在つて天才教育となり、英に在つて人格教育と化して居る、英國が大戰の結果としてこの點を會得したのは天與の恩光であると謂はねばならぬ、獨逸が餘りに統一に偏した教育の弊で人物の缺乏を生じたのであるかどうかは一の疑問としても、實際に於て人物の缺乏は憐けなく感ぜられる。

如是物資問題とヴルータ問題と人物問題とが、眼前に横はつて居つて新獨逸の建設が果して望まれるであらうか、獨逸の所謂識者に獨逸の回復を問ふ時は、必回復すると號するのである、而かも今後十年にして如何に回復し、二十年にして如何に回復し、將た國運の回復は五十年にして完成するか、百年にして完成するかと問へば、如何なる人もその見込は立たぬと答へるのである、樂觀論者は多く獨逸民族の勤勉性に重きを措き、悲觀論者は多く過激派の跳梁に怖れを抱くやうであるが、獨逸の過激化も亦一の回復方法であるから、露國と異りて稍精神的な經營に向つて人心を收攬し共產政府と作るも亦一策である、必しも惡化し終るものとも云へない、併しその實は獨逸人の性格は過激派とは全く相容れないのである、勞働階級の專制政治の如きは之を受けるには、餘りに教育があり過ぎるのである、そうするとスパルタキステン派も差當り國運を支配することは出來ない、さすればユンケル派が再び帝政を回復することが出來るかと云ふに、是れ亦絶對に不可能である、普魯西には多少カイゼル同情者もあるが、これは獨逸の全盛時代を忘れ得ぬからであつて、その人々とてもカイゼルの世界政策は全然迷妄であることを承認して居る、この兩極派に國運の救ひを求めることは到底望み得ないとなれば、別に新らしい方面から救ひの光はないのである、すると敗殘帝國の幕番は當分現社會黨政府又は出て來之に似寄つた主義の政府に任せて置かねばならぬ、現今獨逸の廿一大學の内ストラスブルヒは佛に取られ、新にケルンとハンブルヒとに新大學が出來たから、結局廿二大學があるが、この大學が到處滿員以上で二部教授まで行つて居る有樣である、そこで或人はこの餘裕があるなら、決して悲慘とは云へないと云ふ、然るにこの大學滿員の盛況は寧ろ中產階級の最後の奮鬪を示して居るものである、大學關係の教師學生の戰死したものも多い、大抵五分の一は死んで居るやうであるが、生存者も隨分多い、生存者は元の大學に還るのは必然である、大學に入らんとして居る内に動員されたものは、歸鄕後は餘裕の許す限り大學に入り身の運命を定めんとするのである、士官として身を立て軍醫として働いたものも、陸海軍解隊の後は途方に迷ひ

身の振方に困難するのであるから、物質的、精神的能力の許す限り、大學に入りて、一層研究を進めて身を立てんとするのである、こう云ふ方面の有象無象が大學に殺到するのであるから、如是滿員の盛況を呈したのである、最後の奮闘は中產階級の止むを得ざる最後運命の試みである、その內密の悲慘を語るものと云はねばならぬ。

旅館、料理屋、芝居、その他の娛樂場の何れも滿員の狀況であるのを見て、獨逸の悲慘は事實でないと考へる人もあるやうである、これは皮相の見である、中產階級の成貧に對して戰爭成金は隨分澤山ゐる、その上勞働階級はストライキ、サボタージュの武器で推寄せたから隨分その狀態は宜しいのである、その上に利に喩る外國人の入來は日に增し盛んなのである、これらの方面に屬する人々は、凡べて第一流の旅館や、料理屋や、又は一般の娛樂場を占領して一時の快を貪り相當に風俗をも亂して居るのである、これは世界の全面に亘りて健康分子の擯斥を蒙りつゝある人類墮落の標範を示しつゝあるので、これも戰爭の悲慘を語る病的現象に過ぎないのである。

以上の事實から考へて見れば、新獨逸建設の前途甚しく遼遠なりと謂はねばならぬ、どうかして敗殘悲慘の境遇を切拔けて、戰前からあつた「カントに還れ」の叫びが强調されて、國運進路の整理が出來、今十年位の間に稍黎明期に近きつゝあるを自覺するに至るならば敗殘の獨逸に取りては最大幸運と謂はねばならぬ。

ドイツの明日

杉森孝次郎

ドイツ人ほど素質と修養の厚い民族が、この儘亡びてしまはふとは考へられない。デンマークの哲學者ヘフヂング氏の語を借りて言へば、價値保存則が、さう考へる事を禁ずる。けれども、目下の形勢は、決して單純なる樂觀を許さない。戰場で二百萬人死んだとすれば、生き殘つた同胞國民の負擔も相當に重い筈ではあれど、二十世紀の今日に於てさへも、戰敗國民の運命がいかに慘憺たるものであるかを、吾人は活教訓として今日のドイツから學ばねばならん。ドイツの次ぎの瞬間を暗黑にしてをる雲は、直接には佛蘭西から來てをる。間接には英國からも隨分猛烈に來てをる。二國ともに自衞の必要上、ドイツを成るなら地上に絕滅させたいのだ。佛に於てこの感は殊に强い。來年の三月末迄に、金貨二百億麻克相當の償金を支拂ふ約束だけは出來てをるが、殘餘の純粹償金がいかほどであるかは、未定

だ。昨今佛蘭西側の見積り額が傳聞されつゝあるやうな次第だ。ドイツに取つては、これ位不安な境遇はないと言ひたい程度の不便だらう。折角財政を整理しても、相手から丸取りに等しい償金額を強要されるかも知れない。しかしながら、財政を整理しないでは、すべての施設も手に着かない。佛英が講和條約の內容を寛大にするか、米國が經濟的援助を與ふるかしなければ、ドイツが浮ぶ瀬はない。けれども、米國は目下歐洲投資を差控えつゝある。一とつには佛英の意思に從つてだ。無論これは對獨投資の場合をいふ。また一とつには金融を引き締める必要上だ。然らば佛英は講和條約の內容を寛大にするであらうか。佛では、どうせ復仇を企てるにきまつてゐる敵の事ゆえ、なまなかに溫情主義を示すは、その復仇期を早着させる禍因となるに過ぎない。なさけに感ずるやうな武士魂あるドイツ人ではないと確信してをる。力に餘裕のない、そして接壤の佛としては、自衞本能の正當發現だ。あまりに過酷に對獨條件を決行しては、償金が取れない。從つて自國の戰後經營が出來なくなるといふやうな論理を、本氣に考へるまでには、もすこし時間が掛からう。英國は懷が大きい。況んやロイド・ジョージ氏は英雄の志願者だ。譲るが如くにして守り、守るが如くにして進取し攻略し行く伎倆は刮目に値ひする。英國が恃む柱は波蘭だ。昨今波軍が莫斯科政府軍を南露その他の地方に於て追擊しつゝある背後には、すくなくとも精神的に英國の大いなる援助があらう。そもそも英國は、獨露相抱いて、その力の恢復するを待つて復仇の擧に出づるならん事を夙に虞れてをる。波蘭を獨立させ、その民族的渴望を滿たしてやり、一方に於ては國際聯盟の民族自決主義に奉公し、他面に於ては獨露間に英國の勢力下に行動する緩衝地帶を設けんとは、英國の政治家の當然着眼した一事であつた。その計畫が、次第に成熟して昨今の現勢に及んだのだ。運よく行かば、波軍といふ人形を操縦する事によつて、莫斯科政府を顚覆する機會を釀成し得るかも知れない。兎に角莫斯科政府が、怪傑フエイサルを抱き込んで、シリア、ヘジアーヅ、それからペルシヤ、印度に反英運動を捲き起さんと意氣込める矢先きに立つて、英國が波蘭を雄起せしめつゝある活圖は、視るからに壯觀だ。英國の對獨策は、露國の興廢によつて最も大きく影響される。若しも現在の莫斯科政府を倒して、多少英國本位の新露國を建設する事が出來るならば英國はドイツを取扱ふ上に甚大の便宜を感ずる譯だ。それこそ擒縱殺活意に任かすやうになる。反英の露と、反英の獨とが、提携する見込がある間は、英國は獨を懷柔する苦心をも要する。

獨の政治組織は再變し、三變するかも知れない。もと〳〵内因よりも外縁が勝つての獨の革命であつたから、その革命は不徹底だ。けれども、帝政はドイツに於て永久に復活する機會を得まい。帝政に戻らない範圍内に於て、ドイツは特色ある政治組織を工夫し、開展し進むであらう。帝政に復らないドイツは經濟組織及び政治組織に於て、目下の莫斯科の如き極左主義にも進むまい。ドイツ民族は組織力に長じてをる。事務の能に秀でゝをる。腦の纖維は露西亞人よりは緻密だ。莫迦氣た擧動には出ない。すべて科學的に目錄を立てゝ實行を勵むだらう。けれどもドイツ民族は、主觀的憧憬は本來強い。音樂を好み、超越哲學を産む所以だ。前進的理想熱もこゝにあり、頭腦の朦朧素もこゝにある。非個性主義がドイツ民族の短處だ。發明なくして應用あり、秩序雷鳴して自由屛息する原因もこゝにある。しかしながら、實を言へば不聰明だから非個性主義なのだ。將來のドイツは、個性主義の教育を受ける要が最も強い。

獨の民の營養不良は戰後今日に至るに及んでいよ〳〵激しい。外國爲替の低落もさうだ。今では一麻克即ち戰前の五十錢弱が遙かに五錢の下に落ちたさうな。食料と原料を外國から買ふ必要には迫つてをれど、資力がない。先づ以て講和條件の内容が確定し、償金額が明らかになり、動かぬ最後の協約に到達するまでは、新規蒔き直しも、局面轉換も出來まい。佛伊英の方では、取れるだけ多額の償金を取ることに話はきまるだらう。ドイツはこれを承認しない譯には行かない。その過酷の條件を一と先づ承認して、おもむろに列國の關係が異變を生じて來るを待つほかあるまい。莫斯科と意を決して結託すれば、一と芝居打てようが、そして光明に向かへるかも知れんが、獨の民情の重心は、露の民情の中心とは緊合しない。すくなくとも北部及び中部の獨人に取つては、莫斯科の空氣は過激だ。獨人は教育されてをる。露の民は無教育だ。露では久しい、久しい革命運動の歴史的準備があつた。獨は、聯合國殊にウイルソン氏の意向に投合する必要上革命を成し遂げた。露のは自發的で獨のは他からの強制だ。獨の心調は進歩的ブルジョワジー乃至貴族主義たる本質を依然として維持してをるだらう。プロリテリアツトが支配する心理にはなつてゐまい。獨は變裝したのだ。變身したのではない。獨には常識はありあまる。寧ろ非常の際に處する雄飛的天才質が足りな過ぎる。スラヴの勞農と手を取つて起死回生の悲壯劇を活演するには、獨人は餘りに文明開化の誇りと粹が高い。趣味が合はんのだ。勿論獨人は利欲のためには趣味も威嚴も犠牲にすることを躊躇しない。莫斯科との挺身結束は、實は獨の打算が遠慮させてをるのだ。レーニン氏は宗教的

だ。獨は常人だ。奇禍もすくなからうが奇功もすくない。レーニン氏は、うまく行かば近東中亞南亞の回教徒を席捲し、乾坤一擲の雌雄戰を英國に挑まん意氣を有す。獨には、カイゼル往いて英雄なし。小藝しか演ぜられない。しかし、善意に解すれば自重だ。形に於て自重するはよい。雄志を內に涵養する策を疎かにするなかれ。

獨と獨系墺とはその民族的大同點を中心として早晚中歐の大勢力とならう。東北歐は露の民族的大統合を出現するだらう。そして佛英伊を相手取つて死灰再燃せん。しかし、この精力の浪費を防ぐ文化運動が、新宗教の實質を具へて地上を聰明の火に蔽ひ包まぬならば、恐怖、欲望、情愛、理性の偶發的、單離的行動に委した方だ、小さな人爲的方法を講ずるよりも、結局有利かも知れない。

各能を組織する術が政治だ。國際的社會のほかに社會なき今明日に於て、大人物出でば、また大常識起こらば、獨人をしてその能を盡くさしむること、佛英伊露各民族をして、その特性を發揮せしむるが如くに、絕對に師父的でなくてはならない。教育的でなくてはならないのだ。クレマンソー氏とロイド・ジョージ氏の骨力あるウイルソン氏とレーニン氏が、新社會の新常識だ。また新世界の新英雄だ。愛國心の競爭も、部分藝としては、面白いが、それが生活の原則となつては、生き甲斐もない世界だ。ドイツの明日は、生活の新原則の成敗によつて暗くもなり、明るくもなる。その成敗の鍵は吾人の各自が握つてをる。

新獨逸の政局

エム、エー、エルエル、ビー　米田實

一

歐洲諸國の中でも、目下最も悲慘な境遇に立つて居るものは、獨逸であらう、五年に亘る大戰で百六十一萬の死者と略ぼ同數の不具者を出し、八百〇二億圓の戰費を投じ、君民上下非常な物資缺乏を忍んだ後、刈り得た收獲はと、檢して見れば、先づ本土では鑛産地アルサスローレン以下マルメディ、ポーセン等約二萬六千萬哩、人口六百萬の地域を失ひ、更らに面積百十二萬八千方哩、人口一千三百萬の海外植民地を失つて、昔年の帝國主義的抱負も一場の夢と消え去つたのである。のみならず一千億圓の償金が課せられて、國民は之が負擔に苦まねばなら無い、否な々々、ありとあらゆる政治的、經濟的難問題

は、目下此國民の前に蝟集して之が解決を求めて居る、その解決にして宜しきを得れば、國土は再び繁榮の巷に復するであらうが、宜しきを得ざれば、衰亡の淵に淪するの外はないと思はれる、同國民は如何にして之に處するであらう乎。

併し予は玆に各種の問題を考へる餘裕を持たぬ、唯だその政治的方面につき一言し度い。

二

獨逸の政治問題には種々あるが、誰も注意せざるを得ぬのは共和政繼續若くは帝政回復如何の問題であらう、之は本年三月カップ博士等の反動的革命騷ぎで、殊更らに世上の注意を喚起した問題である。

知らず獨逸の共和政治は繼續するであらう乎、今後帝政回復の革命は起らぬであらう乎、此起りたる場合、果して成功を見るであらう乎。

予は先づ今後も獨逸に於て帝政派の反動的革命騷ぎが起る可く、決してカップ革命を以て終りを告げたものとは考へない、由來漸進的で無く突如發生した革命にはやがて反動が起り、その反動に乘じて他の革命が起り易いものである、論より證據、佛蘭西の例は如何、十八世紀末の大革命が極端的であつたので其後一八〇二年奈翁の政治が成り、一八一四年ブルボン王朝が復活し、一八三〇年オルリアン王家が立ち、一八四八年共和政治が成つたでは無い乎、然かも之を永續せず一八五二年奈翁三世の政治を見、爾後十九年、漸く普佛戰爭敗北を機として今日の共和政治の基の開かれたでは無い乎、勿論獨佛兩民族間には國民性の差異があり、佛蘭西人の輕くて變化を好むに比して、獨逸人の重くて堅實な點は忘れてならぬ所であるが、同時に一昨年十一月の革命は獨逸の内部的運動から來たと言ふよりも外部からの壓迫に基いたと言つて善いことをも忘れてはならぬ、予は獨逸人民が共和政治を欲せぬと言ふのでは無い、今日彼等の多數は最早共和政治家であること、予の確信する所であるけれども、少くとも當時ウヰルヘルム二世退位和蘭に逃れたのも、社會黨の政府が出來たのも、聯合國が舊帝政の人々と講和せ無いとの立場を取つた爲であつた、換言すれば當時の革命は、共和派と帝政派とが公平な狀態の下に於て國民の前に相爭ひ、その結果共和派の勝利に歸したものであつたならば、帝政派も斷念が出來るかも知らぬが、外力の壓迫てふ一時的現象が加つて居るので、彼等は一層未練を殘さ無い譯には行かぬのである、而してカップ博士の革命は、帝政派の準備未だ成らぬ際、事情の爲め尙早的に勃發したので、帝政派の有力者も之に加ふるも

のが少く、從つて未だ共和、帝政兩派が雌雄を決した關ケ原とは言へ無いのである。

三

依て予は聊か此の點に於ける獨逸の形勢を檢して見度い、之に就き研究の價値あるは、獨逸各政派の狀態及び今回カップ革命を機として現はれた同國思潮の調子是れである。

現下獨逸の政界を見ると、共和政の味方と見る可きは多數社會黨、少數社會黨及びスパルタカス團であらう、多數社會黨は帝政時代でも獨逸帝國議會に於ける最强の黨派であり、舊議會では八十九の議席を有したが、昨年一月總選擧後の新議會では百六十四に激增したのである、此黨派は最終の理想とする所を別として、現在兎も角も『中產階級にも敬意を拂ふ共和政治』を支持せんとするものである、戰時中軍國主義と偸合したと言つて攻擊を受けて居るけれど、帝政の味方では無いのみならず、一昨年帝政顚覆、共和政確立の主要な責任者であるから、中心から共和政治維持論者たること勿論である、少數（獨立）社會黨は舊議會の議員數十九から新議會の二十四に增加したものであるが、之は戰時中も政府反對を繼續し居り、速かに有產階級を打破し、徹底的に社會主義的共和政治を實現せんと企てゝ居るものである、それでも露國流のソウヰニットの政治には久しく贊成しかねて居たが、昨年來ライプチッヒの會議で、レニンに共鳴する決議をなすに至つた、スパルタカスは、議會には勢力が無いが、その代りに暴動を敢てして憚らず、大に世間を騷がして居る、此派は眞正の過激派だが、政體問題としては共和派たること言ふ迄も無い、之に反して帝政派は孰れかと言ふと、その主腦は、現在の獨逸國民黨であらう、同黨は舊議會に於て議員數七十一を有したが、共和政建立後、勢力を失墜し、今や三十四を有するのみである、彼の舊保守黨、帝國黨の後を承けたもので、此大地主、汎獨主義者、大工業家、舊時代官吏等の分子を代表し、最も帝政回復に熱心である、此外に舊議會で議員九十一を有し、新議會でも同數を有して居る基督人民黨は、例の中央黨の後を成すもので、羅馬敎派を代表して居る、此中にはホーヘンツォレルン王家に反對して居る南獨の分子もあるが、幾多の帝政派をも含むことを否認する譯には行かぬ、次ぎに彼の舊國民自由黨及び進步黨の後身たる民主黨に至つては、舊議會の九十から新議會の七十七に議員數を減じたが、此派は資本家を代表して居り、その內に大分帝政派を含んでゐる、要するに帝政派は右の獨逸國民黨に依りて代表せらるゝ分子を中堅とし、更らに援助を基督人民黨及び民主黨及び其の味方より受く

る地位に立つて居るのである。

四

然らば則ち此共和政、帝政兩派は將來決戰を試むる場合、如何なる結果を示すであらう乎、予は之につき本年三月カップ革命が與へた教訓が頗る有益なることを思はぬ譯には行かぬ、同件は少くとも

(一)、軍隊間には猶帝政同情者が勢力を有し、爲めに反動的革命の勃起を容易にすること、

(二)、併し反動的革命は起つても、其成功は困難であり、一旦成功しても不幸短命に終り易いこと、而してその原因が昔年と異り、勞働階級が自覺し且つ完全なる團體行動を執り得るに在ること

を教へたのである。

乞ふ少しくカップ革命を檢して見よう。

本年三月獨逸反動的革命の謀主は、カップ博士とリユトウィッツ將軍であつた、カップ博士は先きに東普魯西から獨逸議會に選出せられて居た保守黨の名士で、獨逸農業協會の理事ともなり、獨逸銀行とも關係があつた人、戰時中には潜航艇建造論を鼓吹し、又た「最後迄戰ふ可し」と叫んだ獨逸祖國黨の首領となつた人である、リユトウィッツ將軍は戰爭の始めに白耳義占領地の總督となつた人、昨年六月ウエルサイユ講和條約調印の際、反對論を唱道したので知られて居る、此人は曾つて大使館附武官として諸大國に在り、現にその妻君は米國人である、此等の面々の外にヒンデンブルグ、ルーデルドルフ等の名將も之に同情を有して居たが、彼等も多くの名流も皆な時期尚早と信じ、急進分子が事を誤らんことを心配して居た、カップ等の革命は少し早まり過ぎたに違ひ無い、第一反動的革命が成功しても、今日の處で聯合國が未だ之を默許する寛量を有するとは思はれ無い、否なカップ博士等と雖も此點を考へたかも知れぬが、何分彼等の計畫が幾分漏れて居たので、急速意を決し事を擧げたと言ふ傾きがあつた。

三月十日リユトウィッツ將軍はエベルト政府に書を致して政府改造を迫り、十三日早朝デベリッツの革命軍兵を率ゐて伯林府に入り諸官廳を占領し、大統領エベルト氏以下内閣員はドレスデンに遁れたこと、世人の知る通りである、然るに玆に特記せねばならぬことは、革命勃發するや、伯林の軍隊――現政府中の大立物であり、鋭腕ありとして名ある國防卿ノスケ氏が信頼して居た所のもの――までも忽ち革命軍に合した點である、即ちノスケ氏は革命軍前進の報に接すると、之を邀撃せしむる爲

め、伯林軍隊を派遣した所が、同軍隊はグリユネワルドで革命軍に會するや、忽ち之と握手し、鉾を逆まにして伯林に向ひ、爲めに内閣の退去を餘儀無くしたのである、若し獨逸軍隊の帝政贊成がデベリツに於てリユトウイツ將軍の下に革命の旗を揚げた軍隊丈けに止らば、予は別段不思議とは思はない、同軍隊は本來東普魯西から來た軍隊で、先きにバルチツク諸州で遠征をやつて居た膨張主義、帝國主義の思想に拿へられ居る軍兵である、併し社會黨政府の味方であつた伯林の軍隊迄斯くの如くなるを見ては、軍隊に於ける帝政熱を想像せぬ譯には行かぬのである、勿論兵卒が熱心な帝政派だと言ふのでは無い、彼等は何分受働的である、唯だ將校連が帝政派である爲め受働的な兵卒を指導して此結果を生じたものであらう、而して此狀態が急に消滅す可きもので無い限り、エベルト政府伯林に歸還し、反動革命失敗した今日と雖も、何時に又た反動的革命が勃發するかも知れず、而してそは軍隊の援助を受くる容易なる限り、一時的成功を見ること丈けは困難でないと思はれる。

五

併し乍ら反動的革命は眞正の成功を齎らしそうには思はれぬ、何故ぞ、今度カップ政府を急速に瓦解せしめた所の勞働團體の勢力は、軍隊などが及びもつかぬ壓倒的性質であつて、立ところにカツプ内閣に致命傷を與へたからである。

外でも無い、エベルト政府は伯林退去と共に全國勞働者に檄を飛はし、「軍人の謀叛が來たつて、全國の勞働者は總同盟罷業を斷行し之を以て彼等と戰へ」と懇訴したのである、之に署名調印したのは、大統領エベルト、首相バウエル及び國防卿ノスケの三名であつた、その結果、勞働者の大同盟罷業は行はれた伯林市を始め主要の都市は之が爲め食料其他の供給斷絶し、運輸機關も停止し、電燈も無くなり、火も無く落漠慘憺たる光景を現出し、人民の困難一方ならぬ有様となつた、伯林の如き八日間の食糧があるのみで、將來どうするかと言ふことが心配になつて來た、カツプ博士の新政府は種々苦心しても如何にとも之を解決するの方法がなかつた、彼等は行詰つて二三條件の下に遂にエベルト政府に和を請ひ、エベルト政府は再び獨逸の支配者となつたのである。

以上の事實は如何に政變に際して總同盟罷業の武器を有する勞働組合聯合團が强大の壓力を有するかを示したものであるが、其後右組合は勢ひに乘じて政局を左右したのであつた、即ちエベルト政府が「勞働組合の大努力を感謝し、帝政派革命失敗した以上、同盟罷業を中止せん」ことを右組合聯合團に求め

ると、勞働組合團は、エベルト政府の妥協的、不徹底的態度が禍を將來に遺さんことを恐れて、罷業中止の條件を之に提出した、これは（一）政府か內閣改造、閣員選任を行ふに當り勞働組合と協議相談せねばならぬこと、（二）帝政革命派の武裝解除及懲罰を行ふことと（三）反動派を諸官職より逐ふことであり此外に五箇條の要求があり、エベルトは大體之を容れねばならなかつた、而して政府は最初守舊的資本家フイツセル、クノ氏を大藏卿としてバウエル內閣を改造繼續せんとしたが、勞働團はクノ氏の就任に反對し、爲めにクノ氏は斷念し、三月二十七日ミユレル氏を首相とする內閣が出來たのである、此事實に照すときは、勞働組合聯合團が如何に總同盟罷業を武器として共和政治維持に活動して居るかが分るのである。

此勞働組合の活動が帝政回復を防止すると言ふことは、兎も角も新現象であり、然かも帝政派に執りては容易ならざる難關を構成するものと言はねばならぬ、十八世紀大革命後十九世紀後半迄の佛蘭西で度々帝政が回復したことは前述の如くであるが此時分には今度の獨逸の如く大同盟罷業を武器とする勞働派の堅固な結束的反對は無かつたのである、卽ち佛蘭西の過去と獨逸の今日との差異としては、第一に兩民族性の相違がある上に、後者には勞働者の團體的大活動が行はるゝのである、從つて帝政回復運動もそれ丈け困難であり、一旦成功に近くとも、其永續が困難なことを思はぬ譯には行かぬのである、

以上は則ちカツプ革命の經驗が獨逸政局觀測の上に與へた有意義な教訓と言はねばならない、併し斯く言へばとて獨逸の政治は依然多數派社會黨の下に安全に繼續すと言ふのでは無い、エベルト政府も講和談判（昨年ウエルサイユ會議のみでなく、其後種々不面目な屈辱外交で人心を失つて居る）の失敗其他、萬事不徹底な遣り口で、守舊派にも、獨立（少數）社會黨にも指彈せられ、三つ巴になつて爭つて居り、勞働團體は往々獨逸社會黨若くは共產主義者の傀儡となる形勢さへあるから、政局は依然不安で、混沌たるものであらう、其內に新らしい總選擧でも行はれたら、何とか面白い開展を見るかも知れない。

獨逸の學術の長所と短所

文學博士　谷本富

一

世界大戰の結果身から出た銹とでも謂はうか、脆くも一敗地に塗つた舊獨逸帝國は、實際憎くいながらも又確に恐ろしい國であつた。否今や既に舊帝國は亡びたとしても、新共和國は矢張りライヒの稱呼を廢せず、獨逸國民は依然獨逸國民であり日耳曼民族は堂々たるチユートニツク人種であつて、元氣旺盛覇氣欝勃たるものがあるとすると、前途亦決して油斷はならないだらう。凡そ戰敗國の悲慘た事は敢て言ふを待たなからうが、併し戰勝國の側でも痛手を被つた創痍は固より急に治癒することはむづかしい。然り而して同じ戰敗國中でも墺地利の窮乏最甚しく、最近に新聞紙上に見えた通信文に據ると、維納市では市民一人が一週間に得られる食料品の全部はパン一ポンド、黑い苦い粗末な小麥粉四オンス、脂肪も同じく四オンス、牛肉鹽漬僅に三オンスであると云ふのに驚いたが、尚ほ諸物價の暴騰は更に驚くべきもので、戰前一リツトル拾五錢の牛乳は一躍して七圓と成り、雞卵一個が貳錢五厘から四圓といふ、殆んど想像にも及ばない馬鹿氣た高直に上つて居るさうな。獨逸とても亦窮乏なのには極つて居るが、是程ではないらしく、昨秋休戰後間もなく入國した大阪の某新聞記者の私信には、伯林の生活は案外氣樂な樣に書いてあつた。否それは啻に日常の生活ばかりではない、獨逸人の夙に命として居た學術方面の研究業績なども亦大した遲滯はない樣で、諸大學は固より閉鎖などは思ひも寄らず、却て一時は其の數をさへ增加したと云ふ事で、戰後は早く學生溢るゝばかりであり、諸學者は皆眞面目に其の專門の業務に從ひて、成績頗る顯著なるものがあると聞及んで居る。それかあらぬか過日も豫ねて取引關係のあつたライプチツヒ市のコエラーといふ一大本屋からは、一九一四年より一九年に至る獨逸出版書籍の總目錄都合百廿八頁程のものが出來たから申込次第送ると云つて來た。

此の際に於て端なく起つた問題は、獨墺諸大學の日本留學生入學拒絕の噂で、新年劈頭東西諸新聞が之を傳えた爲に一寸江湖の耳目を聳動せしめた樣に見受けた。而して一部の人々はそんな事はあるべき筈がないと頻に打消して居た樣であるが、自分は獨逸人の根性から屹度それ位な事は遣るだらうと考へた。

と云ふのは早貳拾年もの昔話と成るが、自分が最初の海外留學中一學期だけライプチッヒ大學に掲籍して居たが、偶ゝ同市日刊の一大新聞は特に社說欄に於て、文化の探偵なる論題の下に、在留日本學生は風采太だ擧らず、一見黄口乳臭兒の樣だが、內實は孰も國內俊秀の人物で、既に大學等の最高學府で相應の地位に在る者を選拔し、學生の形貌を以て遠く此の土に派遣したので、畢竟は吾が文化の秘奥を探り神髓を奪去らうと企てゝ居る探偵であり犬である。從つて吾が大學その外研究所などは須らく彼等に對して速に門戶を鎖し、侵入を防ぐべき筈だと絕叫して居た。自分はこれを一讀して血氣壯な時の事とて、失敬千萬なと憤慨措く能はず、早速同社長に對して面會を申込み駁論を試みやうと焦つたが、平素親密に往來して居た語學教師の溫和な意見に已むを得ず見合した。勿論それは只這の一篇の社說ばかりでなくその前後雜報などでも、兎角に例の黄禍口調で以て吾儕日本人に對し惡口雜言を逞くするので、一度大に遣付つて置かうと思つたからである。それはそれとして元來獨逸人は夙に日本の學界は科學方面は勿論、政治に法律に經濟に財政に否特に軍事に於て、獨逸に負ふ所太だ多く、獨逸は日本の一大恩師であると自任して居たことは爭はれない。されば一旦開戰となつた場合には、日本は一も二もなく獨逸の味方をするものだと獨りで極め込んで居たのも强ち無理はなからう。それが反對に他の敵軍の側に附いたと云ふので、一時は大に怒つた樣で、忘恩の奴輩と罵つて居たと云ふことである。尙ほ其後某所への着電に據ると、一昨年倫敦で開催した萬國學士院代表委員會に於て聯合國側が獨逸を除名し去つた事は、獨逸の學界に非常の反感を喚起し、終に聯合國外人の留學拒絕、獨逸出版物の輸出禁止等を諸大學で決議したから、斯う成つたのだと云ふ事が明になつた。さすればそれは固より獨り日本人ばかりを拒絕するのでなく一應尤な事と解せられんでもないが、併し又別報に據ると、右の電報なるものも出所が少々怪しい樣で、十分に信用するには足らぬらしく、甚しきは寧ろ日本留學生を歡迎するなど云ふ風說さへ傳つて來て居らぬでもない。併しそれは極端に奔り過ぎた見方で、實際は矢張り日本人に對する反感は隨分激烈な樣に見受けられ、現に本年に入つてから在獨大阪醫科大學教授の宮下博士が醫事公論に寄せた書信に據ると、思半に過ぐるものがある。蓋しそれは同博士が倫敦着後その舊師のフライブルグ大學教授アクセンフエルド氏に通信し、それに對して寄越した先方の返信を骨子として判斷したものぢやさうな。

二

何はともあれ獨逸諸大學で留學拒絶と來ては、在來普通一般の考へ方では、それは確に大變な出來事だと謂はなければならぬだらう。之れに就いて東京帝大の醫學部の長與教授は某學會の席上に於て、獨墺諸大學の此の擧を以て暫く事實とするも、それは恐く一個の政略だらうと言はれたと傳聞するが、自分も亦さう思はんでもない。(『醫學及醫政』に據る）然かも最近に歸朝した京都帝大醫學部の松尾博士は其の途次伯林大學參觀談よりして、獨逸醫學の前途を悲觀し、斯道研究の爲にする留學ならば今後は寧ろ佛國であらうと思ふ。從來は語學の關係上佛國との交渉は乏しかつたが、將來は佛國を中心とし、英米等の長所を採つて行くならば宜しい。勿論獨逸をば全然見棄てやうと云ふのではないが、日本の醫學が獨逸其儘でよくも斯くまで眞似る事が出來たものだと驚いた。乃ち博士自分はそれから觀て却て獨逸に留學しなかつたのを喜んで居ると云ふ事が、『大阪每日新聞』に載つて居た。

此の松尾博士の説は一見すると或は痩我慢の様に取れるかも知らんが、自分は必ずしもさうは思はない。されば從來とても早く已に一部の醫家などの中には隨分唱へられて居た様でもあり、何はさて措き自分自身なども醫學ではないが、豫ねて專攻の教育學はお雇教師ドクトル・ハウスクネヒト先生よりの直傳で、純粹ちやき〳〵のヘルバルト派で遣り通して居たが、いつとなく追々不審を懷き不滿を感ずる様に成りつゝあつたので、やがて海外留學を命ぜられる様に成つた時は、特に許可を請うて寧ろ主として佛國の方に長く居る事にしたと云ふ覺もある。

勿論教育學そのものゝ修業としては、佛國では殆んど何ものも得る所は無かつたと告白して憚なからう。將又その後再遊の時にも、獨逸流の産業組合などより別途に佛國で農業組合などを調査して見たが、是れも亦格別に利益する所はなかつたと謂つて宜しい。只例のラヂカル・サンヂカリズムが其の頃漸く頭を擡げ出して居たので、それに關する二三の小册子を繙いて見たのは、追に斬新を覺えたのと、往年初度の留學の時はモンペリエ大學でも巴里の學會でも半面識のあつたジード氏が再遊の時は早く巴里大學の教授に榮進して居たが、その新著の『最近世經濟學史』の出版廣告に接して逸早く購入し、それからも亦少からざる智見を得たと言はゞ言へる位である。

從つて今度獨墺諸大學が留學拒絶より延いて學術封鎖を斷行するとならば、それが吾が國の學術進歩の上に如何なる影響を與へるだらうかと云ふ事に就いては、諸家の見る所は必ずしも同じ様ではない、新聞紙上に據れば現に一昨年の萬國學士院代表委員會に出席した櫻井理學博士は若し果してこれが事實だと

しても、日本としては斷じて何等の痛痒をも感じない。日本は今迄は餘りに獨逸を賴み過ぎて居たが、今後は國際競爭場裡に立つて特立獨步して進むべき所で、聯合國は申すに及ばす、日本としてももう一人で澤山だ。獨逸などを賴みにする時代は既に去つたと言つて居るらしい。又同委員の他の一人なる田中館理學博士は元來獨逸を除名する事にした發頭人は英佛兩國で、吾儕日本委員は別段孰れとも態度を明にして居なかつたのである。併し獨逸の方からは日本をも聯合側の與國の一と看て、好い感情を持つて居ないのは當然である。そこで英國の如きは今後は絕對に醫學生を獨逸に留學させず、却て獨逸から來る者のある樣に成る事を期する位に、種々の研究に最大努力をして居るとすれば、日本も亦その積りで一番大に自覺して勉强せなければならぬ、と言つて居る樣に見受ける。就中田中館氏が英國の事を云々したのは如何にもその通りで『ロンドン・タイムス』は早くロンドンの公立諸病院に於ける研究設備の根本的改正を傳へて居るのを見た。それにしても東京帝大醫學部の小宮醫學博士とやらは此の獨逸の學術封鎖を以てたとへ完全に敢行することは不可能としても、米國と日本とは大打擊を被るべく、別して製藥事業などは酷からうと曰つて居るのに、自分は同感であると言ひたい。

三

露骨に言明すれば自分は少年の時から獨逸語は何だか蟲が好かない樣だし、その長い綴りの詰屈千萬な術語の疊出や、文句の數行を重ねて尙ほ切れないと云ふ長蛇の樣に逶迤たり蜿蜒たるのには閉口するもので、英語の實際的であり、佛文の美術的であるのとは、到底日を同じくして語らるべきでないと考へたが、併し眞に所謂科學的とか理智的とか、左に右理路明晰秩序整然たるの一事は、矢張り獨逸語なり獨逸文の獨擅の樣に思はれる。勿論明晰と謂つてもそれは佛文の樣に平明ではない、否寧ろ太だ澁晦な樣にもあるが、然かも徐に其の筋路を辿つて行くならば、一絲紊れざるの概ある事を多とせなければなるまい。然り而してそれは固より當に言語文章ばかりでなく、一體に學問學風そのもの丶上にも彼此大差のある事は爭はれまい。佛國のものは才華煥發氣を以て勝つと云ふ態で、奇想忽ち天外より落ち來るてふ獨創の氣分には太だ富んで居る。又英國は之れに反して堅實重厚で、何事も別に强いて異を立てず他と爭はす、只實利實用を旨として居るから面白味は乏しい。その間に介在して獨逸は固より必ずしも鋭敏ではないか、孜々として勉め、徐々に其の步を進めて、門より堂に上り奥に入り、巨細漏さず

悉く網羅し織綜し、其處に彼等の所謂ヰッセンシャフトリッヘなる系統體系を組立てる手際は太だ甘いものである。譬喩を以て言はゞ佛國の學問は深山幽谷の鉛源に於ける懸岸千仭の飛瀑の如く、英國のは長江些の奇勝なく、只徐に舟楫を遣るの便あるに似て居る。而して獨逸に至つては這の水流を利用し種々工事を施して、動力とし灌漑用とし運河とし乃至上水下水として上下左右到らざる所なしと謂つて好からう。佛人の獨創は奇拔と共に慧巧にして氣輕であり、愉快らしく、獨逸人のは着眼何となく辛辣で、最初から意地が惡い樣に感ずる。是れは今度の大戰中誰人も早く氣の附いた事であらう。凡そ此等の事は皆是れ拉丁人種と日耳曼人種の根本的相違で、而して拉丁人種は狎愛すべきも日耳曼人種は畏敬せざるを得ない樣だとすると、其處に雙方學術の上にも亦自ら長短が生じて來やう。自分は曩に一旦佛國に留學してから頓に頭腦を一洗し、窮屈の羈絆を脫して自由の逍遙を縱にすることが出來る樣な氣分に成り得た事を今尚ほ大に喜んで居るが、學問と謂ふ方では固より決して獨逸を輕視せんとするものではない。否寧ろ特に尊重せざるを得ない。唯だ一種偏屈な學究的に墮在しない樣に用心すれば好からう。尚ほ又別に米國は新進氣鋭の國柄なる上に、制度が自由であり、財源が豐富である所から、各方面に於て隨分新案創意が

續々と相踵いで現れ來り、特に大規模の施設に至つては復決して何れの國も容易に企及する事を許さないらしいが、併し此の方は何となくデパアトメントストアの趣があり、色々珍柄の品數は取揃へてあつても、奥行は頗る淺し、實はゞ英獨佛の表皮丈を少しづゝ剝取つて寄合せた樣な嫌がないでもない。早く間には合つても無限の興趣はとても湧いて來ない。去れば今後とても吾が國の學術は依然獨逸に待つことが多く、失敬ながらまだ〳〵全然獨立などは急に思ひも寄らぬことゝかと考へる。語を變じて云へば獨逸人の常に誇負するクルツールは色々嫌味も多いが、固より決して無下に擯斥すべきものではない。クルツールは譯して文化と曰ふ。然かも只文化と曰つた丈けでは物足りない。自分は獨逸固有の文化を特にクルツールと呼ぶと看たらば大過なからうと思つて居る。クルツールは英語のカルチユアに當るなど云ふのは、童蒙初學の飜譯には或は可なりとしやうがクルツールはクルツールで實は他に適當な譯辭はない筈である。マア日本魂と謂ふ時それに英佛獨いづこの言葉にしても恰好な譯字はない樣なものであらう。斯くて獨逸の學術を云々するのは、又やがて獨逸のクルツールの好惡を論ずる譯に成るが、世界大戰勃發後聯合諸國の方では獨逸のクルツールを非難する者多く、延いて獨逸の學者を攻擊すること愈々甚しいと云ふ有

様であつたが、若し公平に觀察したならば、獨逸のクルツールはともあれ、獨逸の學術そのものはそんなに侮蔑せらるべきものではあるまい。蓋し戰時聯合諸國の學者が獨逸の學者をぼろ糞に罵詈して措かなかつたのは、實は開戰當初獨逸國で知名の大學教授九十餘名が連署して、世界各國の學者間に羽檄を飛ばせ獨逸の立場を極力回護して、敵國をば却て這の大戰の責任者にしやうとしたからで、件の署名者中にはヘツケルちやのオイケンちやの云ふ碩學老儒までが加つて居た事は、端なく獨逸學者の良心如何を疑問とする樣に成つた。斯く申す自分自身も憤慨の餘り偶ゝ大阪で關西學生雄辯大會が開かれると云ふので、出席の懇囑を受けたのを好機とし、大に欝憤を漏らさうとしたが、急に差支が起つて出講見合と成つて、その儘に措いた樣な次第である。

四

夫れ然り佛國は言ふに及ばず、英米諸國にも種々獨逸の學術や教育制度を攻撃する書物は出版せられ配布せられて、自分も亦逸早く幾種類かを手にした。乃ち今玆には其の梗概を紹介して、所謂獨逸學術非難の一例に供したいが、就中第一番は夫の米人ジエラード氏の手に成つたもので、表題は『カイゼル主義と差向ひで』(J. W. Gerard—Face to Face with Kaiserism)とあり、一九一八年夏紐育で出版されたのだが、著者は誰人も周知の樣に、戰前は伯林駐剳の全權大使であつた人で、確に獨逸通の一人である。該書の第九章は即ちカイゼル國のクルツールを論じたもので、別に獨逸魂との小題を添へてあるから面白い。其處には先づ獨逸人の歷史を遠くバルチツク海岸マリエンブルク城の騎士などの事に遡つて書き初め、獨逸人中でも特に普魯西人の由來蠻的にして血を好み戰爭を好む事を陳べ、更に近世に及んでも詩伯ゴエテ自身の言に由つて裏書が出來ると云ひ、畢竟普魯西人は生得一個の野獸であり、それを開化に由つて一層獰猛にしたもので、化學始め色々の科學に通じ、十分教育せられ、製造工業並に外國貿易に由つて富裕と成つたので、一層殘忍となり血腥くなつたと曰つて、それから一歩を進めて心理的描寫を試み、特に其の生眞面目な事を擧げ、宗教方面より轉じて演劇劇場の事に及び、更に捕虜の取扱方に就ても一言し、最後にいよいよクルツールそのものに立入つて、それは民を隷にするものである、乃ち極めて廉直の賃銀で而かも長時間勞働者を使役し、尚且つ大衆を軍隊的桎梏で束縛して以て、富國强兵の策を立て得たりとして居るに過ぎぬと罵倒し、所謂學問藝術に至つては若しその中より猶太人種の功績を差引いたならば眞に

獨逸人の仕遂げた事は何等言ふに足るものはない。內外科醫術を初めとし、化學に於ても音樂に於ても將た新聞業に於ても永く盛名を博して居る人々は、孰も固有の獨逸人種でないといふ事を、幾多の氏名を列擧してこれを立證して居る。然かも猶太人種の虐待は依然變ぜず、公私自由を與へざること多きは笑ふべしとし、終に獨逸新聞紙の下らない事を色々と批評して居る。

大使の所說には自分は固より相應の敬意を拂ひはするが、併し又決して精確嚴正なる批評と斷言することは出來ないだらう。否何はともあれ戰敗後共和政と成つてからの獨逸は、實は猶太人の天下と成りつゝあると言ひ得るならば、ジエラード氏の論法から行くと、今後獨逸の學術藝術は却て愈々盛に成るだらうとも曰へやうではないか。自分も亦夙に獨逸の學問藝術に於ける猶太人の功績勞力は十分認知する者であるから、或は將來は獨逸の學問藝術は一層目醒しきものがあることを期待せんでもない。

此のジエラード前大使の書物よりも、當面の論題には或は寧ろ同じく米人でキヤピテーンであるグスタヴアス・オーリンガーなる人の書いた『亞米利加の教育上に於ける獨逸の陰謀』(G. Ollinger—The German Conspiracy in American Education)なる小冊子の方が、直接に關係する所が多いかも知れぬ。即ち開卷第一に高等戰略の一部として、先づ獨逸の教育制度は下は小學校より中學校、さてはギムナジウムより大學までも、一貫して軍隊的であり、所謂獨逸クルツールを注入して之れを崇信せさせ、軍國の御用に立てんとするものであることを記述し、然かもそれは固より啻に國內に止らず、遠く外國へも這の優秀卓越なるクルツールを宣傳普及せしめんと企てるもので、其處にクルツールポリチーク即ち文化政策なるものが成立し、先づ諸外國に於て獨逸主義の維持の爲にする一般的學校組合 Allgemeiner deutscher Schulverein zur Erhaltung des Deutschthums im Auslande を組織し、特に米國に於ては着々其の勢力範圍を擴張し、啻に在來の獨逸臣民や獨逸人の血統の者に獨逸流のクルツールを教授し傳授するばかりでなく、米國人をも一般に獨逸化せんと企て、一面には彼等の英國嫌ひを利用して頻に獨逸への遊學を勸誘して種々の便利を與へ、尙且つ一面には又やがて交換教授の制を肇めて、獨逸よりは有爲な人物を派遣して大々的に獨逸クルツールの優秀卓絕なる事を鼓吹し、それと同時に獨逸に來た米國の學者をも甘い工合に籠絡して藥籠中の物にして仕舞ひ、一轉して獨逸主義宣傳の道具に使つて行く實際は、却々恐れ入つたものであると書いてある。夫の有名なる憲法學の大家ジヨン・ダヴルユー・バルジエツスさへも、早く

降參したらしい。然り而して兩米或は世界主義を鼓舞したりする事に於て、苟くも獨逸の爲になる事は毫厘だも拔け目なく、大小種々の組合あり協會あり、別して獨逸語を擴張して英語を壓倒せんと、反間苦肉の策を講ずることを辭せざる有樣は、書中詳細に記述してあるが誠に讀んで驚く外ない。卽ち其處に一九〇一年に國民的獨米聯盟 National German-American Alliance なる永久的組織が出來て、いよ〳〵締結が鞏固と成つた次第である。然り而して年々歲々米國各大學內に手を擴げ、之れに由つて宣傳して行く工合は、又別に一章を設けて記述してある丈けに、澤山の材料が備つて居る樣である。それを大戰に由り終に米國が聯合軍に加擔する事に成つてから、忽然一變して、今や米人は頓に覺醒し、教育の新理想を建立しつゝあると云つて擱筆してある。自分は之れを至極面白く一讀して、獨逸人の愈々恐るべき者なる事を承知したが、併しそれも亦未だ決して獨逸學術そのものゝ非難とは見られない。

五

そこで艫を轉じて佛國出版の書物を獵つて見ると、第一に手に入つたのはフリーデルといふ人の書いた『獨逸戰爭の教育學』 V. H. Friedel—Pédagogie de Guerre Allmande といふもので一九一七年巴里出版に係る小冊子である。その中の第六章にある獨逸大學の政治的役目といふ題は先づ注意を惹いた。其處には伯林大學の位置と使命とを高調し、是れぞ實に全帝國諸學校の中樞で、思想界の牛耳を執らんとするものだとし、開戰の一寸前に上任した新總長フォン・ウイラモキッツ―モエ レンドルフの碌々凡庸にあらず、返に好戰尙武の手腕尋常ならざるものあり、夫の獨逸教授連署の檄文なども或は其の指命かも知れないとしてある。左に右獨逸政府がクルツ―ルと國家とを同一體とし、その宣傳維持の爲には軍隊と教育との二大方便を藉る事は、實にビスマークの鐵血政略の神髓であつて、前にプレスラウの大學を新設したのも、彼の方面に於て墺國人や隣國人に對して普魯西の勢力を及ばさんとする魂膽であり、後にストラスブルグの大學を擴張したのも、亦併合に由る新領土を普魯西化しやうと努めたのである。從つて大戰中も獨逸軍が白耳義を占領するや、早くフォン・ビッシングはガンの大學を再開せんとし波蘭に於ても亦フォン・ベーゼラーはヴアルソヴイの大學を改造しやうと頻に軼掌して居たやうである。獨逸大學は各自獨立であるなどゝ云ふのは鹽の皮で、到る處立派な中央集權が行はれて居ると云ひ、從つて教授諸先生も國家への御奉公の爲に

は曲學阿世毫も憚らないと云ふ事をば、ミュンヘン大學教授のジーベーが生前『ベルリーナー・ターゲブラット』の一九一五年十月三十日の紙上に公にしたる『愛國の義務』なる一文を證據として論述し、例へば伯林大學古代史の正教授として有名なエツアルド・マイヤーの著者なども、概括は虚僞であり、判斷は偏頗であつて、而かも頗る誇張的であることを逐一指摘してある。蓋しそれと云ふのも獨逸學者の研究には毎々ウムレルネン「Umlernen といふ事を遣るからだと云つて居るが、是れは恰も曲學の字に該當するから面白い。

然り而して此のウムレルネンは國史教授上には特に甚しいのは當然で、獨逸の國史教授は主としてジンゴイズムやショヴイニズムの鼓吹の爲にし、延いて敵人を虐待して憚らない樣に成ると云つて居るのも成る程と首肯される。それは最近自分の學友の許に到着したウエーバー――リース合著の世界史二冊の到著を見ても分かる。蓋し此の書は從來高等な學校用の教科書として久しく行はれて居たウエーバーの舊著を、今度リース氏が殆んど全然書き換へたもので、遉に好く出來ては居る樣だが、然かも最終の章に於ける大戰の開始する樣に成つた徑路に就いては、專ら獨逸側に取つて都合の好い事ばかりを書いて、他の聯合軍側の事は一切閑却して仕舞つて居るらしい。此のリースといふ先生は素猶太人であるが、夙に史學大家ランケに私淑した人で、研究方法は其の衣鉢を承襲いで居る樣に見受けられる。嘗て久しく吾が東京帝大文科大學のお雇教師であつた事は、定めて世間でも尙ほ覺えて居やう。自分などは實に其の第一回の講義から聽いた者である。斯の人にして矢張りさうであるとすれば、延いてランケの學風も亦思ひ遣られるが、ランケ以後史學の大家として現に廣く知られて居るランプレヒト教授の如きも亦大々的曲學であると、フリーデルは言つて居る。然り而して又今日倫理道德の方面で碩學の評判高く吾が國でも官學方面には隨分多くの敬慕者を持つて居る樣に想はれる伯林大學のフオエルスター教授は一層甚しい者であり、前揭の戰時總長ウイラモウイツツと一幅對である事を、數頁を重ねて詳論して居るのは大いに注意すべきである。

但し哲學や史學や乃至文學やでは曲學も出來やうが、他の理科や醫科などの方面ではそれは出來ないと言ふ者がある。如何にもその通りであらう。それにしても獨逸では此等の形而下の諸學科さへも亦皆擧げて國家の方便とし、軍國の用に供せんとして居る事は注意しなければなるまい。乃ち這の方面ではたとへ獨逸の學術てのものは立派であるとしても、精神で面白くないと謂はなければならぬ。(因に此のフリーデルの著書はその後

英文に飜譯せられ極近く吾が國にも舶來したさうな。表題はThe German School as a War Nursery と曰ひ、戰爭養育所としての獨逸の學校といふ意味である。自分はまだ手にしないが、敢て一讀をお勧まうす）

六

右フリーデルの言つた所を更に一歩深く踏み込んで獨逸の學術そのものを根柢から批判しやうと試みたものは、同じく佛蘭西人で巴里の大博物館の植民研究部長を務めて居るアシャルム博士の書いた『文明人の科學と獨逸人の科學』Dr. Achalme——La Science des Civilisés et la Science Allmandeで、一九一六年の出版である。是れは敍次整然として秩序あり、名の通り主として獨逸の科學者を評論の對象としたもので、前者に較べると遙に大に看るべきものがある樣である。先づ科學上の眞理の何者たるかに就いて獨逸流の概念を批判し、元來科學上の眞理とは在る儘の事と說明せられたる事と兩者の相一致して違はないことである筈と信ずる。從つてそれは固より劃一不變であらねばならず、國所に由つて異同があることは許さない。一言以て之れを掩へば全然客觀的であつて主觀的ではなく、吾儕は之れを發見する事は出來ても加減する事は出來ないと云ふことは明々瞭々である。然るを獨逸人の頭腦は斯の眞理の客觀的概念を遵奉する能はず、具體的心象を藉つて思惟するに嫻はず徒らに抽象的語辭を重疊して自ら負擔に困却し、而かも性得驕慢にして度し難く爲めに眞理の本領を疎略する弊あり。若し何等か見て以て役に立つべしとせば、彼等は隨分眞理を捏造するに躊躇しないと謂つて宜しい。從つて其の研究方法并に結果の組織も往々得手勝手のものがある。試に彼等の最得意とする文獻的方法に就いて一見しても、既往の文獻を微證するに內外の別に由つて輕重すること著しくて愛憎褒貶の跡歷々指摘が出來る。

乃ち獨逸流の文獻に虛僞の多い事は、同國現代第一流の大家たるオストワードやネルンストやヘッケルなどの著述に於ても容易に例證せられると言つて、先づオストワルド氏が化學の發達を敍述するに方つて、ラヴオアジエーを輕侮し、乃至ゲーリユサックやベルトロー等をも嘲弄し、更に甚しきはウイルエルミーなどの大功績をも知らず顏して不問に附するとは實にけしからぬ振舞である。ネルンスト亦之れと同轍で、頻に獨逸化學者の名を揚げて佛人の事業は抑へんとして居る。ヘッケル亦比較解剖學や生理學の沿革を邀跡するに方つて、劈頭第一にキユヴイエの名を沒了せんとし、更に細胞論の開祖としてシユライデンやシユワンの事を堂々と表彰しながら、同じく組織學の倡首

たるビシャーの事はその姓名をさへ錄さないと云ふ不都合があると蕩々と辯駁して居る。

斯くて又獨逸では一旦眞理として公認せられたらば、誰人も之れを爭ふことが出來ず、一種の科學的獨斷主義に陷らんとする傾向があることに論及し、其の顯著の一例はエールリッヒのトキシンの構成說などであると曰つて居る。蓋しトキソフォーレの一團とハプトフォーレの一團とが、主從の如く相扶けて、その化學的聯鎖の形成で以てやがて細胞の上に惡影響を及ぼしトキソフォーレの少許で以て能く之れを消し盡くすに至るとの說明は、至極巧妙な樣ではあるが、果して每時そんなに簡單に行くものかどうか分らない。實際はそれよりもボルデーやヂュクローなどの其の後續々研究發表して居る樣な一種の物理的說明の方が正しいのではあるかも知れぬ。

否獨逸學者は自家獨斷の學說を振舞はすのみならず、數々英佛等諸外國で出來た新しい考へ方をも竊取して獨逸化し、自分の物として得々たる樣子は鼻持ならぬと謂つて居る。試に一二の例を擧ぐると、外科醫が先づ次硝酸蒼鉛を頓服せしめ而後ち胃腸の手術を施すなどする事は、早く一八九七年に米國にてはバウヂッチ、佛國にてはルー、バルタザール二氏の夙に工風した所である。それを獨逸では稍々後れて一九〇五年にリヂルが行つてからリヂル獨得の手術の樣に誇稱して居るからをかしい。それは現に千九〇三年紐育で出版したウイリヤムスの『內外兩科に於けるX光線』Röntgen Rays in Medicine and Surgery に詳說してあるではないか。將又上顎竇の蓄膿症に對して根本的治療を施すは事は久しくコルドウエル――リュックの手術として知られて居るにも拘らず、一九〇二年になつてから獨逸の外科醫のゲルバーなる者は、新發明の樣に雜誌に書立てゝ居る。

斯くて獨逸には多數の出版物が續々刊行せられ、又コングレッスや何かの方便で頻に吹聽披露して名を賣らんとする者の多々あることは大に警戒せねばならぬ。之れを要するに獨逸は自國の學術が全世界の覇權を掌握して居る樣に威張るけれども、それは例の汎獨主義の空威張で、大概最初は他國人の工夫發明した例を併呑して猫糞を極めて居るに過ぎぬ。

否是れは固より啻に理論の方面ばかりでなく、技術上でも同樣で、特に著しいのは微生物學である。抑斯の微生物學なるものは其の由來する所は遠い。實に和蘭人レウエレホエクまでも遡洄せられるとすれば、それは一六八〇年の昔であるのを見やう。それから第拾九世紀に成つてもラマルクとかヴリユジエールとかヂュジヤルダンとか佛蘭西には澤山の人才が輩出してこれを催進向上せしむるに勉めて怠らず、その外に丁抹にミュラ

ーあり、獨逸にエーレンベルグがあつて、而して此のエーレンベルグが實にコッホの先驅をなして居る樣である。成程コッホは豪からう。併しコッホとパストルとを比較するとなるとそれは又決して同日の談でない。獨逸人は屢々コッホを推して微生物學の開祖の樣に言つて居るが、それは僭越である。勿論コッホに由つて斯學が大々的進歩を遂げた事は誰も爭らまい。然かもコッホ以前に於て早く已に技術には頗る見るべきものがあつた事を思はねばならぬ。而してコッホの折角得意とする所にも却て種々缺點あり、非難あり、純培養方法の如きさへも亦固より一朝一夕に大成したのではなく、其の大部分は佛蘭西人や伊太利人の負うて居る事を想はなければならぬ。

蓋し科學上の技術にも大局に通ずる技師と瑣事に齷齪たる職長との別は自らある筈で、獨逸人は槪ね只職長たる傾がある。畢竟獨逸人は想像力に乏しく、眞に新奇の獨創はこれを能くし得ない樣で、僅に他國人の發明を繼承し彌縫するに止つて居る。現に夫のエールリッヒのサルヴアルサン即ち六〇六號の如きも破天荒の大發明の樣に評判さるれけれども、若しその發明の由來を闡明にしたならば、獨逸人の功勞は些細の部分に止ることを見やう。元來砒素が寄生動物質の疾病の上に非常な功果を有する事は、最初佛人ラヴエランの倡道した所である。それから引續いて同じく佛人のアルマン・ゴーシエが砒素の有機的化合物特にカコヂイラート類の無害なる事を發見し、英人ウオールファーストン・トーマスがアトキシールの偉功あることを明にするあり、佛國の化學者ムネラー砒素ベンゾールを製出し、梅毒に用ひて效驗著しと主張し、ゴーシエ教授これを承認し、又佛國醫師アロポーはヘクチンの名を以て近似の産物を實驗し、着々進歩しつゝある後を承けて、エールリッヒの忍耐は漸く六〇六號を大成したのであるに過ぎないと云ふ事である。因に此處には日本人秦八郎氏の名を逸して居るが、他の所に於ても亦固より北里柴三郎氏の功は錄されて居ない。是れは吾等日本人として不滿であるが、然かも公平に觀たらば右の技師と技手職長の區別に於て吾が同胞多數の研究家は果してその孰れに屬すかるを反省するも亦妙であらう。

七

アシアルムの書物は其の說の當否は暫く措き左に右非常に面白い。まだ此の外に觀察實驗を主とする諸科學や幾何學的精神に迄立入り、カント哲學との交渉に論及して、獨佛雙方の長短をも一々對照して闡明にしやうと試みて居るが、今は略する。而して又自分は最近に及んで別にこれと同巧異曲のものにパピ

ヨールの『佛蘭西の科學と獨逸の學究』 Papillault—Science Francaise Scolastique Allemande. Paris. 1917 のある事を聞知し、略ぼ内容の梗概をも窺ひ得て居るが、本書未着の故に暫くその名を錄するに止め措かう。乃ち自分は更に方嚮を變じて、獨逸人と自稱するヘルマン・フエルノウの『徹底せよデモクラシー』 Hermann Frenau—Durch! Zur Demokratie! なる一書を擧げることにしたい。此の書は一九一七年の春瑞西のベルン市で出版したものであるさうなが、同年逸早く英譯が出來て『來りつゝあるデモクラシー』 The Coming Democracy と題して居る。其の第五章に獨逸の王室と獨逸人のクルツールの概念といふのがあつて、哲學者や大學教授や歷史家や色々な人物の棚下しを、隨分無遠慮に試みて居る。尤もそれは主として文科方面に限つて、理科の事はない。一言すれば獨逸の大學に教授の自由があるなどいふのは、眞赤な嘘で、國家は無上であり、王室は至尊である。教會や宗教や上帝をさへもそれを冒瀆したればとて、別に國法では之れを咎めはしないが、若し國家を非難し王室に對して些の不敬があつたとすれば、それは毫も假借しない。但し斯ういふ風に成つたのも、全く普魯西王室の權威が段々平として進歩し、愈々隆盛に成つたからの事で、昔日は決してさうではなかつたことを思はなければならぬ。ショツペンハウエルは曾て普魯西政府は其の政權の基礎とせる理論に反對の學說を懷いて居る者は、斷じて教授に任命しない。從つて又一切の大學教授先生は悉く國家の官吏であり、服務規律の頗る嚴重なのも當然だが、夫のヘーゲルやシエーリングなどは所謂御用の哲學教授官で、彼等は哲學の爲に活きずして哲學に由つて活きさせて貰つて居るのである。それで以て眞理の公平無私なる研究者たることが望まれやう筈がないといふ風に惡口して居る。勿論其處には近頃に成つて私講師と稱するものが置かれる樣に成つた。それは名義自稱で官吏ではない。然かもそれさへ文部省の監督は頗る嚴重で、實に窮屈千萬であるらしい。蓋し獨逸政府の大學教授に對する懲戒の嚴密なる事は、偶々デルブリユツクの如き日頃誠忠無二として皇帝のお覺えめでたき者でさへも、丁抹臣民に對する排斥政策を苛酷なり野蠻的なりと見て、其の監輯する『普魯西年鑑』 Preussische Jahrbücher で、當局官吏を攻擊したと云ふ廉で、早速懲戒裁判に附せられ、譴責の上に五百マルクの罰金を課せられたのを觀ても分からう。事は一八九九年にあつたさうなが、近く吾が國に於ても森戸事件の起つて居るのを觀て、成程お手本は此處だなと首肯される。否それよりも一層面白いのは、ミュンヘン大學の教授ルードヰッヒ・キッドといふ人が、これより先き『カリグラ』 Caligula と題する一冊

著し、それは古羅馬の皇帝の狂疾を研究したものだと稱して居るが、實際は年少氣鋭のカイゼルの言行を批議したものである事は、誰にも容易に知れるので、非常な好評を博し、忽ち三十版以上に成つた。そこで終に檢事總長から告訴せられ召喚を受けたが、審問せられた時にとぼけた顏をして取り合はず、幸に證據不充分の廉で免訴に成つたのは、眞に命拾ひと謂へやう。

これを要するに獨逸政府の御用哲學はヘーゲルのそれでありトライチユケの政治論も何も皆それから出て居る。獨逸大學の教授は只政府の走狗に過ぎぬ。政論を喋々するなどは固より大に愼まなければならない事で、ヘツケルの樣な世界に名聲の噪いて居る大先生でさへも、政治の事には全然迂濶で、學者たるものゝ之れに干與するは、人柄不相應な事だと云ふ風に思つて居るらしい。歴史家ランケ亦ヘーゲルに並ぶ大家であり、ジーベル、トライチユケ、モンムゼン、ランプレヒト、デルブリユーク、シーマン等、其の看る所言ふ所は固より悉く同じではないにしても、歸する所は皆略ぼ一轍で、凡そ世界歴史の論理的意義は普魯西王室の興隆して、獨逸皇帝の位に卽かれる迄の過程を示現するものに過ぎぬとして居る。斯くして彼等は累遷して樞密顧問に陞任し、閣下の稱號を許されて、餘生を安樂に送る事を以て畢生の目的として居るのは、憐にも氣の毒である。

特にをかしいのは國際公法學者がヘーゲルやトライチユケを基とし、昔のマキアヴエリやメツテルニツヒの議論その儘で僅にそれに近世的衣裳を着せたるに過ぎず。國家は權力なりとの一句を金科玉條視して居るのは、我儘勝手も甚しい。一言以て之れを掩はゞ獨逸の國際公法論は夫の豺狼の樣であり鴟梟の樣であつたビスマークの得意の鐵血政略を骨として、僅に多少の學問的肉を附けたのと謂へる。

然り而して其處に留らず尙又一つ變挺子な新しい科學が起つた事も記錄する値打がある樣に思はれる。それは外でもない、アーリヤン人類學と呼ばれるもので畢竟、獨逸人別して普魯西人の優等人種たる事を證明せんとするの具に供するのである。蓋し斯の學も亦最初は佛人ゴビノウの倡道に出づるもので、彼が一八五四年に著した『人種不同等論』Essai sur l'inegalite des Races は其の根據である。然かも當時佛蘭西では誰人も格別注意を拂ふことなく拋擲してあつたのを、偶々獨逸人の知る所と成り、其の墺地利と戰ひ、佛蘭西と戰ふ毎に大捷を博した所から愈々得意となつて、その　爭の勝敗はやがて人種優劣の適確なる證據なる事を誇示せんが爲に、巧に之れを利用したのである卽ち頭蓋の長短形を以て人種の優劣を判別すべき標準に立てるもので、一旦此の原則を承認することと成つてからは、獨逸の

諸學者は頻に頭蓋測量に從事しモムゼン、ウオルトマン、ドリーズマンス、ライマー、ボツフ丼に英人にしてカイゼルのお氣に入りなるチエンバーレンなどは續々その業績を發表し、早く堂々たる科學の形に仕上げ了つた。そこで獨逸人の屬するチユートニツク人種は長頭なるが故に優等にして當然世界に雄飛すべく佛蘭西人や伊太利人の屬するラテン人種は短頭なるが故に劣等にして、やがて服從を餘儀なくせらるべしと云ふ原則を建立し、用いて以て獨逸の世界政策の基礎としたのは却々油斷がならぬ。さすがのワグナーやニーツエなども知らず〱此の人類學の犧牲となつて居るのは、寧ろ氣毒と謂つて好からう。

是れはフエルノーの言ふ所を節約して紹介したのであるが、這の頭顱云々の事も亦實は未だ確固不拔の定説とは尊信せられず、假に其の主張の通りとしてもそれならば獨逸人よりは遙に英人の方が純良で優秀である事を承認せねばならない樣だからをかしい。否若し之れを吾が國の方に適用するとなると、夫の蝦夷のアイノ人は破格的に長頭なれば獨り優等たりと斷定せねばならぬ。滑稽も此に至つて極まれりと謂つべきである。

八

之れを要するに獨逸の學術は固より立派には相違ないが、以上掲げ來りたる諸家の所見に徴するとそれは何はさて措きお國自慢の汎獨主義の毒する所と成つて、往々にして曲學阿世の譏を免れない樣である。卽ち哲學や史學は言ふに及ばず、別して法政經濟特に國際公法などの學説に至つては、只純粹正眞の道理とは見られない樣な事の多いのを、豫め十分注意して掛らねばならぬ。現に吾が國の如きも明治の中葉よりして故穗積八束博士等の獨逸流の憲法論や何かで何時となく官僚崇拜國家萬能の御用學が幅を利かす樣に成り來つたのは困つたものである。今の上杉博士一派は其の餘藥で、而かも却々容易に枯れさうにない。終に今回の森戸事件などもその爲に引き起された樣な次第である。併し此等獨逸流の哲學史學乃至法政經濟の學とても其の方法が整然と具備し、材料豐富にして理路明晰、思想緻密、體系頗る堂々たる所は、只管敬服に堪へぬ。從つて豫め注意した上で、指を染むれば、或は大過なきに庶幾らう。只佛蘭西や伊太利などにある樣な社會學風の流行はどうも此の官僚的に窮屈千萬な獨逸の畠でないことは明白である。否それには米國の樣な自由な國土は大に適して居ることは爭はれない。それにしても獨逸にも所謂官學系の外にカールマークス一流の社會主義あり、唯物史觀あり、延いて現代世界思潮の源泉たるに至つては、矢張り獨逸は豪いと謂はなければならぬ。

將又理科とか醫科とかの方面に至つては、それはどうしても獨逸が勝ち誇る樣に成るらしい。前掲諸家の中で獨りアシャルム氏は此の方面に於ても盛に獨逸を攻擊し非難して居る樣で、その言ふ所は概ね首肯するに足る樣に思はれるが、併し獨逸人にはたとへ倡道者たり先登者たるの譽なくとも、隱忍徐々に研究を怠らず、終に天下を取る手腕は驚嘆に堪へざるものがある。アシャルム氏の所謂技師と職長との譬喩的區別に必ずしも不當でなく、如何にも面白い樣ではあるが、併し實際細工の仕上げは獨逸人の手際に待つ所が多い樣だとすると、決して馬鹿にはならぬ。蓋し學術界に於ける佛人は出來獨創の才に長じて居り、譬へば信長たり秀吉たる如き所はあるが、終に集大成して天下を掌握する者は、矢張り家康然たる獨逸にあることは、是迄の所では爭ひ難からう。去れば今後は固より獨り獨逸ばかりに偏倚しない樣にする事は、至極結構だが、さりとて又獨逸は戰敗國たり獨逸の學術何かあらんと言ふ者あらば、大に叱責しなければならぬ。只返す〴〵も獨逸の學術を尊重するの餘り、獨逸舊來の國家萬能論や尚武々斷の官僚主義に蠱惑せられる事の無い樣、十分注意する事が肝要であらう。大學に於ける敎授研究の精神なども獨逸流の不自由千萬なものでなく、眞に學術の自由を保證して行かねばならぬ。

斯して最後に自分は獨佛學術の優劣を批判すべき一個の角技場とも謂つべきものゝ出來た事を心竊に面白く思ひ、獨り刮目して眺めて居ると云ふのは、失のストラスブル大學の今度新に佛人に由つて經營せられる樣成つて、既に開校式をも擧げた樣子なれば、從來獨逸人の遣つて居たのと孰が好成績を奏するか實に興味ある見物である。自分も初度留學の折には、佛蘭西より獨逸へ轉學の途中、淹滯日を累ねて、一通り參觀したが、規模固より小ならず、建築宏壯で莊麗なのに目を惹かされた。蓋し此の地に學府のあるのは沿革已に久しい事で、實に一五五八年に古典學の大家ジャン・スツルムがドミニカン派の僧院の一隅にギムナジウムを開始したのが、その基礎である。それが未幾ならず大學をその上に架設する樣に成り、新敎派の學庠として帝室の保護も厚かつたらしい。然かも三十年戰爭には又非常の打擊を被つたが、爾來幾變遷、盛衰必ず一樣でないにしても、左迄盛大とは謂へなかつた。それを一旦アルサスロレーンの地が獨逸帝國の併呑する所と成つてからは、獨逸文化植付の政策上、頓に力を用ふるとなつた爲に、頓に其の面目を一新し、各部良師を網羅し、學生の笈を負うて來り學ぶ者相踵は、開戰前には二千に上り、その約半數はアルサスロレーン以外の產にして外國の留學生も固より少からず、吾が國よりも明治維新の初期

より既に此處に緖を掲げたものは雙手を屈して餘あらう。大澤老博士や村岡博士などは其の先驅で、而して後には又今の京大總長荒木博士も多年留學し、荻原雲來渡邊海旭など云ふ人々も梵語研究の爲に、久しく居た樣に記憶する。夫れ然り、今度佛人がめでたく回復の宿志を遂げた上は、又その文化の中心として、此の大學に力を注ぐは當然で、固より決して獨逸のそれに下らず、單に一個の地方學府ではなく、堂々天下の淵叢とせんとして居るらしい。詳細は昨一九一九年九月十五日の『ルヴュー・デ・デウ・モンド』の卷頭に載せたアンドレ・アレースの「ストラスブール大學の再興とその將來」と題する一文を讀むと分かる。又いよ〳〵開校式擧行に成つて景況の一斑は同年十一月廿七日の『ロンドン・タイムス』の教育週報で承知した。蓋し廿二日は開校記念日として永く臆に記すべきである。

斯く述べ了つた時に自分は又偶々今度獨逸が逸早くケルン市に新大學に興して、暗に夫のストラスブルゲと對峙し、龍虎相爭はしめんとするの壯擧を想出し、非常に痛絕を覺えた。然り而してこれは稍々前に出來たものではあるが、ヴインなる人の「吾が諸大學の新發展と其の獨逸の精神的生活上に於ける位置」Wien—Die neuere Entwichlung unseren Universitäten und ihre Stellung im deutschen Geistesleben. 1915.なる演說の筆記が講和後の初便で送つて來たと云ふ事を聞いて、是非一讀した思つたが、生憎今尙ほ手に入らないので遺憾ながら他日に讓る事にした。（三・一八）

獨逸はどうなる

東京女子師範學校長　湯原元一

物質的に考ふれば獨逸の前途は悲觀に充ちて居る、石炭も少くなる、鐵も少くなる、其上に勞働能率が減り、石炭はあつても鐵はあつても、肝腎の原料が這入つて來ない、這入つて來たとしても、マークの下落で非常に高いものになる、農業も肥料が缺乏で不作勝ちである、食糧問題は未だに解決がつかず民に菜色ありである、好し幸に經濟が順調になつて多少金が出來ても、出來ただけのものは償金に充てねばならぬ、幾ら働いても其結果は人に收められるといふ始末である、で、どうしても眞劍になれない、獨逸特有の勉強（フライス）もこゝ暫らくは躊躇の態である。」

政治も中心が動搖して居る、勞働者の意を迎へて少康を得て居るも、一方には企業心の萎縮を來りて居る、帝政運動の成功は何人も信ぜざるも、ベウエル政府の力量は今日の難局を救ふ

には餘りに脆弱である、大增稅の計畫は出來ても其結果は案じられる、國民財產の何割かを沒收する位の覺悟でやるといふ事であるがさうなれば或は資本階級の自暴自棄を來たすかも知れぬ、勞働者は跋扈する、資本階級は自暴自棄するといふのでは、國を擧げて頽敗する譯で、これでは獨逸の再興は望みないことになる、併しこれは獨逸に限つたことではない。

露國のソヴィエット政府はレニン一派の過激主義を一本調子で押通うし、從はざる者は武力を以て壓倒し、殺戮は其尋常手段である、人を斬ること恰も草を斬るが如しといふ心持で以て敵に對する、こんな事は獨逸の社會黨には出來ない、それ故に彼等の爲す所はとかく煮へ切らない、スパルタキストは獨逸人には容れられさうにもない、それには獨逸人は餘りに穩健である、打算の心に富む獨逸人には露人の如き小說的冒險は出來ない。

講和條約に規定された獨逸に對する要求は過酷と稱するも、城下の盟をなさしめざりし處から見れば、一概にさうとも言へぬ、其代りに擒縱自在の餘地を條約に留保したのは、所謂蛇のなま殺しで、ともかくも生かして置いて取るだけ取らうといふのである、佛國のやうに大切な工業地を荒されなかつたのは幸であつたが、それでも器械ばかり奪つて原料がなくては仕方があるまい、聞けば器械に錆が出て居るのも多いといふ事だ、佛國の困難は獨逸に勝るといふ人あるも意氣が違ふ、戰勝者には戰勝者の誇りがあつて元氣だけでも盛んである。

人心の頽敗即ちコラプション、是れが獨逸識者の最も憂ふる點である、五ケ年に涉る大戰に初めは自ら興奮し、後には他から興奮されて、夢が夢中で戰つたが、キールより伯林に傳はつた革命の警鐘に夢が醒めた時は精力は既に消耗し盡されてあつた。困憊又困憊でどうすることも出來ない、聯合軍も憎いが戰爭の張本人は更に憎い、此機に乘じて危激極端の思想が大に勢を得て、一時は獨逸を擧げて過激派化せんとする樣子も見えた、それは幸に實現されずに濟んだが、不安の念、失望の情は國民の思慮を攪亂して了つた。それに男女員數の不平均、兒童青年の無監督等は日常生活の困難に伴ふて益々風紀上の缺陷を暴露した、併し此のコラプションは獨逸ばかりではない、戰勝者たる英國でも佛國でも同樣である、大緊張後の大弛緩と見れば、早晚常態に復するであらうと思ふ、而かもこれは戰爭に依つて覺醒した、といふよりは寧ろ上氣したる勞働階級に特に多く見らるゝ現象であつて、必しも一般的のものとは謂へない、表面に立たんでも誠意國事を憂ひて居るものも多い、熱が冷めたら心も落着き、且其內には國難救濟の偉人も出るであらうし、又周圍の情況も變はるであらう、所謂窮すれば通ずるに相

違ない。

獨逸の文化は確かに戰爭に依つて大損害を蒙つた、特に道德方面にそれが最も酷いことは前述の通りである、併し彼の如き深刻なる文化を有する國民が更に今日以上に墮落して行かうとは思はれない、由來、獨逸人は自由思索の國民である、普國軍國主義の勃興に眩惑して多少其自由を失つて官僚に迎合したが、それは官學者の一部分である、獨逸の學問藝術は依然として自由に進歩して居る、大戰中萬事不如意の間に在つても研究だけは續けられて來た、科學的アルバイトもなかなか少くない、實に感服の至りである、戰後各大學がいづれも遙かに大繁昌を極むる所を見ても、獨逸人唯一の賴りはその文化に在ることが窺はれる、これは迂遠な遣方のやうだが、長い目で見るとそこに獨逸人將來の幸福が育まれてある。

文化が盛んでも國が亡びては、昔の希臘や羅馬の二の舞を演ずるのではないかと云ふ說もあるが、獨逸の國は決して亡びぬ獨逸は南北に分離するのではあるまいかと危ぶまれた時にも、自分はそれは獨逸人の忍び得ざる所だと云つた、獨逸人の頭を最も力強く支配したものは、今日までゝもカイゼルでもなく、軍國主義でもない、獨逸の文化であつた、獨逸の文化、是れが獨逸人の生命である、實は戰爭も此文化防衞の意味にてなされたのである、此文化の影響を受けて獨逸人の思想の運び方に一種の特質を生じて居る、細かく且深く物を考へて、又その考へたことを互に結び付けるといふことが如何にも巧妙の極に達して居る、所謂組織の力である、この力は長い歲月の間に養はれて居るので、政治上にても社會黨が代つて天下を取つても、その主義こそ違へ其遣口は全然組織的である、破壞的の所が割合に少い、革命と云つて革命らし所が少い、大勢の赴く所は大體に於て見當が付いて居る、二十幾つかの聯邦に分かれて居ても、其上に在つて全體を支配する或物がある、その力で以て獨逸の統一が出來るのである、何んと云つてもまだ六千萬の人口を有つてゐる、而かも善く教育されたる、或は四千萬の人口しかない佛國に比べたら、却つて其將來は有望かも知れない、中歐に蟠居する一大文明國民を、始終敵に取るのは決して得策でない、その内には秋波を送る國も現はれて來るであらう。

昔から國の亡びるのは多くは内から亡びるので、他から亡ぼされたるものは少い、他から亡ぼされるのは先づ内から亡びて居るものである、獨逸は負けたが、殆んど世界の强國を相手にして負けたので、言はゞ負けばえがある、五分五分の力で戰つたら決して負けなかつた、かういふ考へは獨逸人の誰れにもあるに相違ない、それで眞の戰敗者の心にはなれまいと思ふ、況ん

や敵をして一歩だも國土に蹈込ましめなかつた一事は、何時までも其國民的誇りとして歴史上に殘るであらう、今日でこそ戰後始末、目前の難局收拾には或は悲觀或は樂觀して常軌を逸することがあつても、こゝ十年も經過したら、獨逸人はやはり獨逸人として本來の面目を發揮するであらうと思ふ。彼等の國民性は決して一敗地にまみれる程さやうに意氣地なきものではないやうである。

而して今回は軍國主義の舊套を脱して、自由思索によつて色々他に見られぬ藝當を示すであらう、元來を云へば、「自由はゼルマンの山林から出た」と言はれる程に獨逸人は自由就中思想の自由を好む國民である。哲學科學等の榮えるのも實は之が爲めである、自由なくて哲學科學等は榮えるものではない、加之所謂危險思想の發生地も主として獨逸である、マルクスもエンゲルスも皆獨逸人であることは世間周知の事である、軍國主義沒落後の獨逸は軈て其花々しき思想上の事業に依つて世界の注目を惹くであらうと思ふ。

要するに昔から言ふ如く、成敗を以て人を論じてはならぬは勿論、一時の悲境を見て前途の光明を抹殺し去るのも甚だしい短見である、人さへ確かであれば、その力量だけの位置は保てる、如何に抑へても何時しか頭を擧げる、俗に云ふ燒太り、是れが眞理である、心から腐つては仕方がないが、心が健全であれば、一時の災難は憂ふるに足らぬ、必ず恢復が出來る、否、時としては禍を轉じて福となすこともある、マアこんな風に自分は獨逸の將來を見て居る。

獨逸の將來を判ずべき二つの觀點

法學博士 吉野作造

獨逸を論ずる場合に動もすると露西亞を引合ひに出す人がある。普通選擧反對論者などは、普選の實行は我國を陷れて露西亞や獨逸の如くならしむるものであると口癖のやうに云ふ。成程革命に依つて國君を押退けたと云た點と、之を機として國内の秩序が舊の如くなるを得ずと云ふ點は同一だ。然しそれ丈けを以て露西亞と獨逸とを等並みに論ずるのは大なる謬である。露西亞人がロマノフ家を殪した理由と、獨逸人がホーヘンツオルレルン家を押退けた事情とは餘程趣を異にするのであるが、更に獨逸を露國の如く不秩序を極めて居ると云ふのは、大なる見當違ひであらう。一體秩序が亂れて居ると云ふそれ丈けで非議すると云ふのが正しくない。外科の手術を爲た當座暫くの間は、

言ぬ前よりも爲た後に於て却つて氣分の惡いといふ事もある。氣分の善い惡い丈けで健全不健全を說くのは間違つて居る。然し露西亞の當今の紛亂は健康を恢復する前の已むを得ざる惱みであるか否かは今の所熟く分らないとして、更に獨逸が露西亞と同じやうに只徒らに紛亂を極めて居ると觀るのは、餘りに淺薄皮相の觀察のやうに思ふ。露西亞の事は更に別の機會に於て之を說く場合があらう。今は獨逸の將來を考へて見やうと云ふのであるが、之に就いて吾々は先づ露西亞と對照して考へるといふ通弊から脫却する事を必要と信ずる。

獨逸を露西亞と同じものだと觀るの謬なるは前述の通りであるが、初めから之を別物と觀て、其特色をば露西亞と對照して考へて觀るといふ事は亦極めて便宜である。予輩の觀る所では此兩國の革命は、其精神乃至動機に於て同じくない。從つて革命といふ點から觀ると、獨逸は露西亞の如く十分徹底しなかつたといふ特色を有する、是が一つ。次に革命後の社會經營の方針が全然違つて居る事を見る。之れも畢竟は前項の結果に外ならない。卽ち露西亞では革命が先づ徹底的に行はれたから、革命後の社會經營に於ては全然新しき試みが實行せれて居る。之に反して獨逸では多少新しき試みもあるが、又從來のやり方をも保存して居る。謂はゞ舊き物を維持して之に改造を加へて行くといふやうな所がある。夫の復辟運動が起つたなどといふ事實の原因も、亦一つには玆に在ると思ふ。

以上二つの相違は新獨逸の研究を進むるに方つて、先づ第一に念頭に置かなければならない。

露西亞の革命の動機はロマノフ家の下に建てられたる凡ての制度を破壞せんとするにあつた。ロマノフ家を倒す許りではない、その建てた凡ての制度を排斥するのである。而して之を排斥し破壞せんとする所以は、單に今度の戰爭に關する失敗の責任を質すといふのではなくして、前々から、否、ずつと古い昔かり積り積つた不平の爆發の結果に外ならない。其根柢極めて深く、決して一朝一夕の事ではない。從つて革命の精神は都會から田舍に至るまで、天下萬民の腦裡に滲み込んで居つたから、一度革命の勃發を見るや、其勢恰かも燎原の火の如く天下に蔓つたのである。之に反して獨逸の方は如何と云ふに、獨逸國民の大多數はホーヘンツオルレルン家に對し決して現實の深い怨を有つては居ない。無論非常な尊敬も拂つては居ない。ホーヘンツオルレルン家は根原の歷史を尋ぬれば固より成上り大名に過ぎず、制度の上から云つても皇帝は謂はゞ共和國の大統領のやうなものであつた。であるから之が廢立は東洋人の考へる

やうな重大問題とは觀て居ない。然らば何故に之が廢さるゝ事になつたかと云へば、單に戰爭の遂行に關する責任の糺彈と云ふに過ぎない。戰爭も段々行き詰つた、國民の苦痛は只增す許りである。そこで局面を轉換して何とか窮通の道を見出さうとするには、皇帝並に之を圍繞する官僚では駄目だ。玆に於て革命が起つたのである。之に就いては固より露國革命の影響もあらう。而かもそれは根本的な原因ではない。而して其所謂根本的原因なるものも、施政に對する一時的不滿に外ならないのである。故に革命の起るや現政府に不滿なる民衆は一齊に起つて之に響應したけれども、稍々時の進むに從ひ露西亞の方はます〱勢を强むるに拘らず、獨逸の方は熱の冷却を感ずるやうになつた。之れ獨逸の革命が露西亞のそれに比し徹底を缺くものありと云ふ所以である。

翻つて考へて見るに、獨逸の革命が徹底を缺いたといふ事は別に怪しむに足らない。一つには兩國國民性の相違にも由るだらうが、主としては現制に對する不滿といふ點に於て、兩國民の間に大に差があるからである。露西亞に於ては政府に對し所謂怨骨髓に徹する感を國民が有つて居つたけれども、獨逸に於てはさうでない。事實上政府並に行政の當局者は惡い事をして居ない。形は保守專制のやうになつて居るけれども、實際獨逸の官吏は手腕に於て品性に於て槪して甚だ優秀である。であるから國民は豫ね〲彼等に對して不平を有つて居ないのである。寧ろ一般民衆は喜んで彼等の指導を乞ひ、彼等の爲す所に信賴して居つた。田舍に於て殊に此風が强い。大都會はそれ程でもないが田舍などに行くと、官吏と牧師が村長教員と協力して隱然地方風敎の中心となつて居る。獨逸國民の堅實勤勉の美風は主としては玆で養はれて居る。斯う云ふ國民の頭に、而して官吏などの一般に惡政をしない所に、革命の精神を植ゑ付け之を蔓らせるといふ事は頗る困難である。無論歐羅巴の眞中に位して居る國だから革命の議論が無いではない。議論は有るがそれは決して國民の眞實の要求とは成り得なかつた。故に獨逸が革命の一騷ぎをやつたとすれば、それは戰爭で苦んだ餘り一時不平を勃發せしめたまでゝある。革命的空論が偶々其際に乘じて跋扈したに過ぎない。革命の精神は露西亞に於ては成程根柢深きものがあつたが、獨逸に於ては稍一知半解に受取られた嫌がある。

右述べたやうな事情の下に革命が行はれた結果として、露西亞では之が徹底的に行はれて動かない。が、獨逸に於ては行く所まで行かずして、復た昔の經驗に未練を殘すといふ事になつた。言葉を換へて云へば、露西亞では今や全然新しい試みが行

はれて居るのに、獨逸は古い制度の根本的なものは殆と一つも之を捨てゝ居ない。露西亞では前の時代の政治が餘りに亂暴であつたから、今後如何なる政治をやつても前代よりも惡いといふ事は先づ無い。之れ新しき試みが著しき反抗なくして行はるるを許さるゝ所以である。獨逸は之に反して前の時代に於て相應に善い政治をやつて居る。議論としてはいろ／＼缺點を擧ぐる事は出來るけれども、政治の實質に於て國民に大した不平は無い。故に一時革命騷ぎの爲めに施政上に一大變革を加へようと試みても、之は急に好い結果を擧ぐるものでも無いし、豫期の通りにならないと直ぐに昔の方が良かつたと舊い制度に執着する。之が今日獨逸が新舊二勢力の混沌として相鬪ふの狀態に在る所以である。

以上述ぶる所に依つて予輩は、所謂新しき獨逸は新しき露西亞の如く新しくはないと斷ずる。露西亞が新し過ぎる程新しい事は云ふまでもないが、獨逸の新しさは英吉利、佛蘭西の新しさと甚だしく其程度を異にするものではない。其事のいゝかわるいかは自 別問題である。人によつては獨逸が露西亞の如くならざるを遺憾とする人もあらう、又之を大いに安心したと觀る人も無いではあるまい。何れにしても獨逸は露西亞よりも寧ろ英佛と同列に置くべきものである。只一旦革命を經た丈け、物の考へ方が幾分自由に、囚へられないといふ點はあらう。然し露西亞の如く古い傳說と慣習とが全然地を掃つたと云ふのではない。

さうすると獨逸の將來如何を判斷するに必要な點は二つあることとなる。一つは恢復力の問題であり、又一つは對外方針の問題である。

獨逸の恢復力に就いては容易に言ひ難い、否、言ひ難きに非ず、あれ丈けの能力を有する國民だから恢復するには相違なからうが、何時になつたら昔のやうな勢を立つる事が出來るかが適確に言ひ難いのである。時期の言ひ難き事の外、彼が結局英佛等の諸國と步調を合すことが出來ずして遂に土耳古や西班牙のやうな國に成らないだらうといふ事丈けは疑を容れない。然らば國力恢復の問題は單に時期の問題に過ぎないといふ事になる。此點は何人も豫言し難い事であるが、只此事に關聯して吾々の念頭に置かなければならない事は、第一は目下非常に疲弊困憊して居る事である。戰爭中隨分無理をしたから戰爭が濟んで見ると、疲勞の程度がまた豫想以上に强い。第二は其割合に恢復は案外に早からうと斷すべき理由ある事である。そは單に臥薪嘗膽他日の雄飛の爲めに民心が緊張するといふやうな想

像に基いて云ふのではない。民心の緊張は何の途非常なものに相違ないが、茲に吾々の見逃してならない點は、戰後の獨逸が莫大なる國防の準備より免かれて、國民的精力の不生產的費用が著しく減ずるといふ事實があるからである。第三に更に注意すべきは獨逸の恢復力と云ふても、何の方面で獨逸が伸びれば可いかの點である。一般に國力と云ふても、其內容が戰前と戰後に於て必ずしも同一ではない。戰前に於ては何を差措いても金力兵力に於て優れなければ國力の旺盛とは云はなかつた。戰後に於ても同じやうな狀態にならなければ恢復を云々する事が出來ないとするなら、獨逸の恢復は或は永久に見られないかも知れない。けれども今後の世界に於て所謂國力の優劣を比較する時の標準は、恐らく戰前のやうなものではなからう。さういふ新しい意味に國力といふ文字を解釋するなら、獨逸の恢復は更に吾々が普流に考へるよりも一層早く來ると斷じても可からう。然し此事は次の觀點と關聯して考へる事が必要である。

第二の觀點即ち獨逸の對外政策の方針は從來のやうなものであらうか何うか。獨逸從來の政治は內政上に於ては形を保守專制にして、實質は相當に國利民福を親切に圖つたものであつた。所謂善政主義の好模範であつたと云つて可い。然るに對外政策に至つては、名實共に侵略的帝國主義を以て一貫した。之が爲めに國威は張る、商權は暢びる、幼稚なる國民のヴアニテーを滿足するに十分であつた。國民も亦有頂天になつて喜んだ。內政に於ては自由を唱へるものも、外政に於ては政府のやり方に反對しなかつた。之れ獨逸が一般に軍國主義なりと云はるる所以である。而して之は獨り官僚軍閥者流の考へである許りでなく、國民全體が亦之を後援して恥ぢなかつた。そこで諸外國は獨逸國民全體を嫌ふやうになつた。國威の海外に張るは嬉しい、商權の世界に暢びるのも結構だが、只之が爲めに國際交通の平和を害してはいけないと云ふ事に、今日の獨逸國民は深く反省して居るか何うか疑はしい。此點に反省しなかつたから今度の戰爭が起つた。而して最後の失敗は即ち、軍國主義では世の中は渡れないぞといふ事をつくづく教へ込んだのであるけれども、多數の民衆は果して之を諒得したか何うか、此處に問題が殘る。而して予輩の今日まで觀察した所に據ると、此點に就いては丁度我日本と同じやうに、二つの相反する思想が大いに爭つて居るやうである。今政權を取つて居る一派は何處までも國際協調主義で行かうとして居るやうであるが、國民の一般は未だ舊い夢に醉つて居り、而して之を利用して一仕事しようとする保守主義の一派もある。三月の反動革命は即ち其一端に過ぎないが、何う云ふ形で是から爭はるゝにしろ、之が何方かに片着

がない以上は、獨逸の將來に容易に見極めを付ける事が出來ない。舊い思想が一時でも勝たんか、獨逸はもう一度外國の壓迫に苦しまねばなるまい。然し結局に於て獨逸は自由派が勝を占めて、再び文化の先進國として華々しく活躍する時があらう。

「新獨逸の研究」

田邊忠男

「斯くの如くして獨逸の民主々義は獨逸人民が艱難辛苦の後、將に之を建設せんとする時滅されるのである。——而も之を滅す者は戰爭中終始我等に民主々義を齎さんと聲明して居た者に外ならない。獨逸は既に國民に非ず國家に非ず、債權者により取立人の手に委された商的事業である。而して自ら此債務承認の意思あるを證する機會だに與へられない。獨逸國外に常設本部を置く賠償委員會は獨逸國内に於て、曾て獨逸皇帝が享有したりし權力とも比較し得ざる絶大なる權力を握つて居る。此支配の下に獨逸國民は將來數十年間何等の權利無く、又何れの時代の專制治下の人民にも增して其行動の獨立並に經濟上倫理上の進步に對する各人の希望を奪はれる。」以上は「ヴエルサイユ」會議の際、「獨逸財政委員會」が平和條約中の「賠償委員會」規定を批評した言葉である。

新獨逸の前途に關しては種々な說が唱へられるが、日本に於ける重なる觀測は大體樂觀的であると言つて宜い。獨逸の戰前に於ける經濟的勢力、就中海外市場を席卷せる其商品並に金融機關、其工業の背景となつた獨逸文化の誇とも云ふ可き科學、敗戰間際に至るまで燦爛たる軍事的能力はまだ世人の記憶から消え去らない。然る處過去の戰爭、特に周到冷血なる「ビスマルク」公が佛國の經濟力の根本的破碎を企劃した普佛戰爭に於てさへ、戰敗國は常に意想外の急速度を以て其創痍から回復した。斯くの如く世俗一般の人々が戰禍を過小視するため卑近の證據となる可き事實の存在に加へて、經濟學者も亦此意見に裏書して言ふ。「世界の富の中年々生產され其年中に消費される額は非常に大きい。各國が忽ちにして戰爭其他の大なる經濟的災禍より復活するは主として此事實に基く。」而して過去半世紀間の各國資本主義經濟の發展は實に目覺ましく、如何なる深謀深慮の政治家の先見も之と拮抗し得るだけの破壞力を有する講和條約を立案し能は無かつた。

以上の信念は冥々の裡に各人の思想を支配するが故に、此見地よりすれば前揭の「獨逸財政委員會」の反駁は支拂額を少くせんと欲する商人的駈引である。併て自分一個としては此度こ

そは世人の樂觀的期待は裏切られ、獨逸は——自分が最後に暗示せる異常の經路を取らざる限り——獨り經濟的政治的のみならず文化的に見込無き國民となると思惟す。此度の對獨講和條件は二つの方面から見て獨逸經濟の繁榮と並存せざるものである。其一は社會主義的經濟に赴かんとする獨逸經濟を長く資本主義的規律の下に置く點に於て、其二は資本主義的經濟を維持せしめんとして其發達の條件を悉く奪つた點に於て實に徹底的獨逸經濟破壞案である。自分は出來るだけ大きな見地から此說を證明して見よう。此說明中獨逸の經濟力の推算に當つて「ジエー、エム、キーンス」氏の名著「平和の經濟的效果」に負ふこと多大なるは豫めお斷りする。

對獨平和條約中の經濟關係事項は海外に於ける獨逸勢力の根絕と賠償金の獲得を表面の目的とし獨逸經濟力の破壞を隱れたる目的として居る。海外に於ける獨逸勢力の根絕は獨逸が社會主義國となり、其生產の目的は利潤の增加に非ずして國民の現實の福利であり、海外より金を獲得するに非ずして國民の慾望の十分なる滿足を計るための使用價值の增加である場合、或程度まで無頓着で居てよいかも知れぬ。併し如斯く生產の組織目的動機に革命が起つた時只條約のため、他國民に金錢を支拂ふためにのみ全經濟組織を資本主義的生產制度に保つ可き必要ありとすれば如何。露西亞が過激派政府に依り兎も角制度上社會主義國となるや直に之迄の公債特に外國公債の無效を主張した此行動は『「プロレタリアート」は「ブールヂョア」の非行の責任を負はず』と云ふ一片の理論のみに根據した理想家の馬車馬的暴擧では無いと思ふ。露西亞の如き巨額なる外債の償還及び利子支拂の必要ありとせば何うしても國內の全經濟組織を資本主義的に保たねばならぬ。卽ち交換價值特に外國貨幣に對する價值を標準とし金の獲得を目的として組織せねばならね。然るに斯くすれば獨り社會主義經濟組織の本質たる、效用を標準とし國民の人間らしき生活を目的とする生產をなし得ざるのみならず、又「ブールヂョア」と「プロレタリアート」の間に從來の如き權力的關係存せざるに至り且つ大體「プロレタリアート」が企業の指導者となりたる場合、「外國資本家のため金の獲得」なる目的は彼等の經濟行爲の動機となり得ない。資本主義組織の下に許容せらるゝ程度の利己心の滿足は到底問題外である。强烈なる利己心に對應する有力なる動機は奉公心のみである。露國が勞働を軍隊的規律の下に生產的に組織し得たるは奉公心を動機となし得たからである。社會主義國と成りたる後外國資本家のために勞働せしむるは全然不可能であるか若しくは奴隸勞働の如く甚しく不生產的なものとなる。露國の公債破棄の宣言は經

濟上の必要である。

露國の外國公債も、獨逸の條約による賠償責任とは到底同日の談では無い。以下の叙述により明なる如く獨逸の破壞されたる經濟力を以てしては殆んど永久如斯き巨額の責任額を完濟し得る見込無く、且つ獨逸の場合に於ては獨り賠償責任として國民生活を羈束するのみならず、「賠償委員會」は直接に獨逸國民の經濟生活に干渉する權力がある。獨逸は其國內的關係に於ては折角社會主義國となる條件を具備したが、國際的關係に於て全然此目的を拋棄す可く强制されて居る、之を經濟學的言語に言ひ換へれば經濟原則(Wirtschafts prinzip)に於て社會主義となり經濟制度(Wirtschaftliche Organization)に於て資本主義を維持せねばならぬ。『古き甕に新しき酒を盛る可からず』獨逸の經濟が此二主に使へ得ざるは明白である。社會主義の經濟は事每に拘束せられ、從來の如き貸借對照表の能吏たる潑剌たる「ブールヂョア」と賃銀制度の桎梏の下に營々として勞働する從順なる「プロレタリアート」無き形骸のみの資本主義は單に其だけでも舊の如き能率を發揮し得ない。對獨條約の起草者のみならず凡ての人は條約の此意味に於ける經濟破壞力を注意しないやうである。自分は經濟原則と經濟制度の矛盾を重大なものと考へる。

暫く上記の問題を度外視して獨逸は從來の如く全力を盡し資本主義的發展を計ると假定するも、平和條約は其實質的基礎を破壞した。戰前獨逸の經濟力の源泉となつたものは一精神的要素を別として－(一)世界各地に於ける商業的施設(就中貿易銀行、商館)(二)巨大なる商船隊(三)發達せる工業である。「クレマンソー」の指導の下に平和條約の經濟條項は之等の組織的破壞を企てた。先づ割讓地に於ける官有財產は無代償にて(波蘭土、丁抹に對する場合を除く)沒收され而も其に關して獨逸政府の負ふ債務は殘存する。舊海外領土に於ける獨逸本國人民の經濟的發展は讓受國の規定する所に從ふ。單に官有財產のみでは無い。之等の地域及び聯合國內の私有財產は買却の上聯合國民の對獨國民私債權、獨逸同盟國內に於ける聯合國人民の利益に關する債權の滿足に充當し、殘余は賠償委員會又は政府に送附する。獨逸が支那洪墺露勃の國內に於て公共事業及び特許事業に關する利益又は權利は獨逸政府が取得の上「賠償委員會」に交附するを請求し得。其他墺洪勃土に對する政府の支拂又は償還の請求權は聯合國に讓り、支那暹羅「リブリア」「モロッコ」「エヂプト」に於ける特權を拋棄し、聯合國墺洪土勃露に於ける管理又は行政の權能を行使する委員會、國立銀行、代表機關其他國際的性質を有する金融上又は經濟上の機關の管理又は行政に參加

する資格無し。一言にして云へば獨逸の資本主義が半世紀に亘りたる努力の結果海外に扶植したる經濟的勢力を一掃し得るのである。

第二に獨逸貿易の血脈とも云ふ可き商船隊は戰時中の抑留沒收により殆んど影を潜めたる外、千六百噸以上は全部、千噸以上は半分、「トロール」船漁船は四分の一を「賠償委員會」に引渡し、尙聯合國の請求により五ケ年間年額二十萬噸の船舶を建造せねばならぬ。

第三に獨逸の工業は根柢を失はねばならぬ。獨逸工業をして今日あらしめた物的條件は疑も無く鐵と石炭の豐富なるとであつた。然るに獨逸工業中心地たる「ライン」地方の工業の維持に缺く可からざる「ア」「ロ」二洲及び「ザール」溪谷（之は十五年の後「プレビシツト」の結果獨に買收權生ずるかも知れず）の石炭、東部普魯西亞の工業の死活に關する「シレジア」の石炭（之は「プレビシツト」の結果により奪はるゝか否か決定す）は凡て奪はれ、若しくは奪はれんとして居る。之等の諸地方より產する石炭の量は全國產出額の三分の一に達す。加之北佛炭礦破壞賠償として約二千萬噸、外に佛白伊「ルクセンブルグ」の諸國に大體十ケ年間年二千五百萬噸を輸出する義務がある。千九百十三年に於ける石炭總產額及び消費を基礎とし「キーンス」氏の計算する所にすれば、坑元消費を除き條約後の獨逸國の產出額は一億一千八百萬噸であるが、戰後、稼働時間の短縮其他の經濟的原因により出炭量は著しく減少し、獨逸官憲は其減少率を三割と見て居る。さすれば出炭總量は八千二百六十萬噸、此に對し其に相當する消費量は、若し工業及び運輸を戰前の狀態に保つとすれば、一億一千萬噸である。然るに尙四千五百萬噸の輸出の義務ありとすれば獨逸の工業の將來は知る可きでは無いか。

鐵に對する條約の影響は一層苛酷である。千九百十三年鐵礦の七割五分は「ローレンヌ」が產出したが之は全く失はれた。其他獨逸の商工業發展の必要條件である關稅の規定運輸の機關は同じく聯合國のため根本的なる制限を破つた。先づ輸入關稅に就いては五ケ年間の最惠國條款、「エ」「ロ」二洲「ルクセンブルヒ」波蘭品の五年乃至三年間の自由輸入を認め、「ルクセンブルグ」を關稅區域より除外し、「ライン」左岸を自由區域とす。鐵道に就いては讓與地の鐵道及び諸施設を千九百十八年十一月十一日の現狀に於て引渡すのみならず、機關車五千貨車十五萬輛を目下の如き車輛缺乏の際に引渡し、河川船舶の一部をも讓渡する。

獨逸が前揭の如き破壞せられたる經濟力を以て年々幾千の賠償に耐え得るか、又直に「賠償委員會」に引渡し得る資產は何

程あるかに就いては固より正確な數字は無い。千九百十三年「ペルフエリツヒ」は獨逸の國富增加年額（土地財產の價格騰貴を含まず）を二十億弗乃至二十一億二千五百萬弗と推算したが、「キーンス」氏は戰時中の營養不良よりする勞働能率の低下、施肥をなさざるため土地生產力の減少、材料牛馬の缺乏、資本保存設置の閑却等の原因と前記の如き經濟上の損害より見て五億弗を超えないとの意見を持し、又現に獨逸政府が直に「賠償委員會」に引渡し得る資產を（一）金銀三億弗（二）船舶六億弗（三）外國有價證券五億弗乃至十二億五千萬弗とし、其中金銀は獨逸貨幣制度維持のため殆んど手を觸れ得ざるが故に、其他の種類を合し此項目に屬する資產價額は多くとも十二億五千萬弗乃至十七億五千萬弗の間であると主張して居る。

獨逸の賠償責任に就いては平和條約第二百四十四條に其範圍を定むるも其定額を決定しない。「キーンス」氏は總額を三百二十億弗乃至四百四十億とし佛國藏相「クロツツ」氏は七百五十億弗とする。其賠償方法は千九百二十一年五月一日迄に五十億弗を償還し（獨領の聯合軍駐在費は此内より優先的辦濟を受ける）他は大體五分の利息一分の基金償還額を伴へる公債又は債務とし千九百二十一年以後は現金現物又は公債（百五十億弗以上の發行は賠償委員會が適當と認むる時期迄許可せず）を以て償還せられざる債務は五分の利子を附し獨逸の債務となる。即ち五分の複利計算を以て債務は增加する。

今日に至りては殆んど何人も眞面目に獨逸の賠償能力を信じる者は無い。少くとも數十年に亘り獨逸國民は餘剩價値の全部を外國人のため奪はれねばならぬ。『獨逸は國民に非ず國家に非ず、債權者により取立人の手に委された商的事業である。』而して商的事業として社會主義國民が長く其經濟的活動を繼續し得るものであらうか。尙條約中には『何れの時代の專制治下の人民にも增して其行動の獨立並に經濟上倫理上の進步に對する各人の希望を奪はれる』條項がある。其一は前記千九百二十年五月一日以前に支拂はれる五十億弗の償還に當つるため獨逸の內外を問はず一切の資產に對し賠償委員會に取得の權限あることである。此規定は同期日迄世界萬國に於ける獨逸の企業を不安の基礎の上に置くものである。其二は「エルベ」「オーデル」「ニーメン」「ダニューブ」「ライン」の諸河の管理をば國際委員會の手に委し此委員會に於て獨逸は常に小數の代表者を有することである。獨逸の工業は大抵海より遠く離れ原料製品の運搬は主として河川による水運に待つが故に、此河川の支配權を握る者は其工業組織の死命を制し得ると云へる。第三に「賠償委員會」は實質上獨逸國の租稅制度をして同委員會に代表せられる國の

最惡の租稅制度と同樣になさしめ得ることである。

依是觀是獨逸の經濟は字通りに聯合國の意の儘になるものである。世人は獨逸人民の秩序に對する執着を基礎とし、如斯き耐へ難き生活條件の下に孜々として聯合國のため、而も背信的平和條約履行のため「金の獲得のための生產」を續けるものとなすか。

余は惧る。獨逸人民の苦痛と絕望は遂に彼等をして「スパルタカス」の說に傾聽せしめ、過激派露西亞と握手せざるか。獨逸自身の文化上並に經濟上より云へば獨逸人民を救ふ途は資本主義國との關係を絕ち農業國たる露國と合し、社會主義的國家を爲すに存するかも知れぬ。露國過激政府の成功は恐らく獨逸人民の耳朶を打つ屢々であらう。併し少くとも佛國の軍國主義が衰へざる間は地理上獨逸の過激派は前者の侵略を防ぐことは出來ない。而も何人が、間も無く佛國に於て斯かる「償金のための戰爭」「一國民の奴隸制度」に反對する輿論の生起せざるを斷言し得る者ぞ。併し此點に關する研究は又別な機會に詳しく說こう。



誇るべき數學界の名著！

我國最良の高等代數學講義!!

增訂八版出來

理學士 河野德助著

增訂改版

代數的解析論

菊判上製六百廿頁 函入總マーブル付頗美

正價金四圓廿錢 送料十八錢

世に所謂高等代數學のことを獨逸や佛蘭西では代數的解析論と云ふのである。されば本書を通俗に命名すれば高等代數學の講義と云ふべきである。………第一高等學校を始めとし全國の高等學校。高等師範學校等で教授せらるゝものは不等代、代數函數の觀念、極限値のこと、級數の收斂發散、一般の二項定理、部分的分數、連分數、不定方程式、等すべて本書の順序と大差がない。………されば本書を繙けば同程度の代數學を窺ふ事が出來るのである。……

文部省の教員檢定試驗で出題せられるやうな問題には特に接觸を努めてある。其問題には何れも叮嚀な模範解が附せられてある。或人曰く代數學は殊に一段高い處から見渡さなければ其神韻縹渺を賞する事が出來ないと。………本書の如く難解の個所を巧みに懇切に說明し、且つ問題を解剖し解說したる書は少い。敢て此絕好の書を斯學の研究者に推薦す。……

最新刊

理學士 秋山武太郎著

わかる三角法

四六判上製 貳圓卅錢 送料十錢

訂正十版

理學士 秋山武太郎著

微分積分早わかり

一圓五十錢 送料十錢

訂正十三版

理學士 河野德助著

最近微分積分學精義

參圓八拾錢 送料十八錢

發行所 東京神田 裏神保町 高岡書店 振替東京二一四三二番 電話神田三一九三三番



丸善と三越

金米糖

子供の時分から「丸善」といふ名前は一種特別な意味をもつて自分の耳に響いた。田舍の小都會の小さな書店には氣の利いた洋書などは固よりなかつた、何か少し特別な書物でも賴むと番頭は早速丸善へ注文してやりますと云つた、中學時代の自分の頭には丸善といふものに對する一種の憧憬のやうなものが潛んで居たのである。注文してから書物が到着する迄の數日間は何事よりも重大な期待と不安の戰であつた。そして其れが到着した時に感じたあの鋭い歡喜の情は最早二度と味ふ事の出來ない少年時代の夢の想ひ出である。

東京へ出るやうになつてからは時々此丸善の二階に上つて棚の書物を隅から隅へと見て行くのが樂しみの一つであつた。欲しい本は澤山あつても財布の中はいつも乏しかつた。併し唯書棚の中に並んで居る書物の名を硝子戸越しに眺めるだけでも自分には決して無意味ではなかつた、唯それだけで一種の興奮を感じ刺戟と鞭撻を感ずるのであつた。神社や寺院の前に立つ時に何かしら名狀の出來ない或る物が不信心な自分の胸にも流れ込むと同じやうに、此等の書物の中から流れ出る一種の空氣のやうなものは知らぬ間に自分の頭に滲み込んで、丁度實際に讀書する事によつて得られる感じの中から具體的な凡てのものを除去したときに殘るべき或物を感じさせるのであつた。今でも覺へて居るがあの頃此處の書棚の前に立つて物色して居る時には自分の眼が妙に上釣りになつて顏全體が緊張するのを明に自

覺した、そして棚の硝子戸に朧氣に映る自分の顔をひそかに注意して見た事もある。それから又或る時自分にしては比較的高價な本を買つた時に應接した店員の顔の何處かにちらと閃いた不愉快な冷笑の影が自分に不思儀な興奮を與へた事も想ひ出される。あの頃には書物の値段は正札でなく一種の符徴で記してあつた。尤も其の符徴は大抵誰れでも知つて居たので、秘密の暗號でも何でもなく唯數字の代りに片假名を使つたといふだけのものであつた。例へばアンカナといふのは一圓二十五錢の事であつたが、此れが自分の頭によく殘つて居る。以太利の地名のやうだと思つた事があるから其のせいだか、或は此の符號のついた本を比較的に多く買つた爲だか、兎に角此のアンカナの四字を何かの象徴のやうに自分の腦髓の隅の方に刻み付けられて居る。

昔の丸善の舊式なお店式の建物が改築されて今の赤煉瓦に變つたのは何時頃であつたか思ひ出せない、多分自分が二年ばかり東京に居なかつた間の事であつたらうと思ふ。元の薄暗い窮屈な室に較べて天井の高い窓の多い今の二階の室は比較にならない程明るく氣持がいゝ、併し自分にはどういふものか昔の陰氣な方が、少くも自分の頭に巢くつて居る「丸善」といふ觀念には相應しい。今の室は餘りに明るく餘りに樂に廣々として居る爲に其處に陳列された書物が普通のデパートメントストアの商品のやうな感じがしないでもない。此に反して以前の窮屈な室へはいつた時には何となく學者の私有文庫を見せて貰ふやうな氣がした。此れを或る友人が評したやうにつまり自分の頭が舊式であつて書物と其内容を普通の商品と見做し得る程に現代化し得ない爲かも知れない。

色々の理由から所謂散歩といふ事に興味を持たない自分の日曜日の生活は殆んど型にはまつたやうに單調なものである。晝飯をすませて少し休息すると僅かばかりの紙幣を財布に入れて出掛ける。三田行の電車を大手町で乘り換へたり、或は其處から歩いたりして日本橋の四つ角迄行く。白木屋に繪の展覽會でもあると這入つて見る事もあるが大概はすぐに丸善へ行く。別にどう云ふ本を買ふあてがある譯ではないが、唯何かしら久し振りで仲のいゝ友達を尋ねて行く時のやうな漠然とした期待を懷いて正面の扉を押しあける。

正面をはいつた右側に西洋小間物を賣る區劃があるが自分はついぞ此處を覗いて見た事がない。どういふものか自分は此處だけ、他所の商人が店借りをして入り込んで居るやうな氣がする。どうして此の洋品部が丸善に寄生或は共生して居るかといふ疑問を出した時にP君はこんな事を云つた。「書物は精神の外

套であり、ネクタイでありブラシであり歯磨きではないか、或人には鞄でありステッキではないか。」から云はれて見ればそうであるが、自分は唯何となく此處を覗く氣にならないで何時でもすぐに正面の階段を登つて行く、そして二階の床に兩足をおろすと同時に輕い呼吸切れと興奮を感じるのである。

階段を上つて右側に帳場がある。或人は此れを官衙の門衛のやうだと云つたが、自分もどちらかと云へば多少そんな氣がしないでもない。此れは建築者の設計の中に神經過敏な顧客の心理といふ因子を勘定に入れなかつた爲であらう。

自分は何時でも此の帳場の前を通つて先づ獨逸書の在る處へ行く。此處は一寸一つの獨立な區劃になつて居る、戰爭前には哲學美術科學と其れ〴〵の部門に亘つて系統的に分類して陳列されて居たのが、此頃ではもう目欲しいやうな者は大概賣り切れてしまつて、色々な部門のものが雜然と入り亂れて居る。獨逸自身の缺乏と混亂とがこんな處迄も波及して居るかといふ氣がする。實際鷄卵や牛乳や靴の缺乏は聞くも氣の毒な狀態であるらしいが、唯驚くのは彼國の科學者、特にペンと紙の外には物質的材料を要しない種類の科學者が依然として極めて重要な研究の結果を着々發表して居る事である。

獨逸書の棚の前で數分を費した後に佛蘭西の書物の處へ出た事は丁度伯林から夜汽車で巴里へ着いたといふやうな心持がする。此れは恐らく唯簡單な自分だけの或る經驗から生じる連想の爲ばかりではあるまい。獨逸書の裝釘なり印刷なりには獨逸人のあらゆる歷史と切り離す事の出來ないものがあると同樣に佛蘭西の本にはどうしてもパリジアンとパリジエンヌの匂ひが浮動して居る。假令一字も讀めない人に見せても此の著しい區別は感じられないでは居られまい。自分は獨逸で出版された佛文の本をもつて居る、可也佛蘭西臭くこしらへてあるが、併しどう見てもそれは矢張り獨逸の本である。表紙に畫かれた人物にもクラナッハやヂュラーの影法師が見へる。

何時だつたか此の佛書の處で佛蘭西の飛行將校が小說か何かをひやかして居るのを見かけた事がある、其時唯何となしに好い氣持がした。此の將校の顏から、臂からページを繰る手付きから、大きく肥つた指先までが其の書物と自然に調和して全體が一つの纏まつた繪のやうに思はれた。今の日本の書物は何處となく英吉利や亞米利加臭いところがある、そして昔の經書や黃表紙がちよん髷や裃に調和して居るやうに今の日本人には矢張り此れがふさはしいやうな氣がする。

佛蘭西の文學美術書が科學書と一處に露店式に並べてある處がある、シヤヴンヌやロダンが微分積分と雜居して其れに隨分

書が積つて居る事もある。それはいゝが其隣りにガラスの蔽蓋をして西洋向きの日本書を並べたのがある。あれを見ると自分はいつでも獨逸で模造した九谷燒を思ひ出す。

自分の專門に關係した科學の書籍を漁つて歩く時の心持は一種特別なものである、眞面目であると同時に At home といつたやうな心持であるが、しかし其處には自分の頭にある「日曜日の丸善」といふものが生ずる幻影はなくて寧ろ常住な職業的の興味があるばかりである。

英米の新刊書を並べた露店式の臺が二つ並んで居る。此處を覗いて見ると政治、經濟、社會其他あらゆる方面に亘つて重大な問題を取り扱つたらしい書物が並んで居る。ロイドジョーヂとかウイルソンとかいふ名前が眼にはいる。そうかと思ふと飛行機の通俗講義があつたり探偵小説があつたり、其上にヘッケルの宇宙の謎の英譯の安直版がころがつて居たりする。此の露店の處へ來ると自分の頭が急に混雜して餘り愉快でない一種の壓迫を感じる。そして自分の日曜日の世界とは餘りにかけ離れた爭鬪の世界を覗いて見るやうな氣がして、つい落着いて見る氣になれない。又實際此處はいつでも人が込み合つて居てゆる〱は見て居られないのである。考へて見ると近頃世間で騷がしくなつて來た色々な社會上の問題が一部の人の信ずるやうに主に外國から流れ込んで來たとすると、其のやうな問題や思想の流れ込んだ少數な樋口の内でも大きなのは此の丸善の方數尺の書籍臺であるかも知れない。其れにしては餘りに貧弱な露店のやうな臺ではあるが、併し熱海の間歇泉から噴出する熱湯は方尺にも足りない穴から一晝夜僅に二回しかも毎回數十分出るだけであれだけの温泉宿の湯槽を充して居る事を考へれば此れも不思議ではないかも知れない。此處から流れ込むものが澤山な樋に分流し其れに色々の井戸から出る水を混じて書物になり雜誌になつて提供される。温度の下らない内にと忙がしい人の手で忙がしく書かれた著書や論文が忙かしい讀者によつて電車の中や床屋の腰かけで讀まれる。それで二三ケ月も勉強すれば誰れでもラッセルとかマルクスとかいふ人の名前位は覺える事が出來るのだらう。

街路に向つた窓の内側に淋しい路次のやうになつて哲學や宗敎や心理に關する書棚が並んで居る。

不思議な事に自分は毎年寒い時候が來ると哲學や心理がゝつた書物が讀み度くなる。自分の病弱な肉體には氣候の變化が著しく影響する、冬が來ると身體は全くいじけてしまつて活動の力が減退する代りに頭の方は却つて冴えて來て心の眼が兎角に内側へ向きたがる、其のせいかも知れない。こんな氣分の時に

は此處の書棚を物色する事が屢々ある。讀んで見たい本はいくらでもあるが、時間と金との缺乏を考へる爲にめつたに買つて讀む事はない。唯色々の學者の名前と本の名前を一とわたり見るだけで滿足する場合が多い。誰れかゞ『過去の產出物の內で、眼に見へ、手に觸れる事の出來る三つのもの』の一つとして書物を數へて居るが、此の言葉を此處で屢々想ひ出す、そして書物に含まれて居るものは過去ばかりではなくて多くの未來の種が滿載されて居る事を考へると、此等の澤山の書物のまだ見ぬ內容が雲のやうに又波のやうに想像の地平線の上に沸き上つて來る。其雲や波の形や色が何であつてもそれは構はない。唯それだけで何かなしに自分の眼は遠い處高い處にひきつけられる。考へて見ると自分も結局は一種の偶像崇拜者かも知れない。しかし此んな偶像さへも持たなかつたらどんなに淋しい事だらう。

P君は Moral といふ文字と Ethic といふ言語に對して不思議な反感を抱いて居る。そして此れに相當する日本語に對しては一層烈しい殆んど病的かと思はれる程の嫌惡を感じるやうである。それで自分は丸善の書棚で此の二つの文字を見るとよくP君を想ひ出すのである。P君は此等の言語を見るか聞くか――特に或る人人の口から此を聞く場合には反射的に直ちに非常に醜惡な罪と汚れを連想するそうである。自分は充分に其の心持を酌みとる事は出來ないが、唯もしや昔の宗教革命者などの內にはP君のやうな型の人が見出されはしないかといふ氣がして居るだけである。

此の書棚の次には美術に關した書物がある。大抵版が大きくて値段も高い、自分は此處へ來た時によく餘分な錢が欲しいと思ふ事がある。此棚の前には安い小い美術書を並べた臺がある、此處で時々買物をするが、其度にいつでも店員の中の或るものが一種の疑の眼をもつて自分を注目して居るやうな氣がしたり、或は自分の美術に對する嗜好を或る意味から不快に思つて居るらしい或る人達の誰れかゞ不意に自分の肩をたゝいて「相變らずやつてるね」とあびせかけられはしないかといふ氣がする。いつかクルイクシヤンクの評傳を買つた時に傍に立つて居た年少の店員が「クルイクシヤンク〳〵」と云つてクス〳〵笑つた時に何故か顏面が急にほてるやうな氣がした。此の少年は多分此畫家の名前が可笑しいから笑つたのだらうが、自分はあのときどうしてあんな氣がしたのだらう。こんな感じのする人は外には少ないかも知れない。併しよく考へて見ると自分は自分の手近な「義務」と餘り直接の關係のないあらゆる享樂を味ふ時には、假令其事自身が卑近な感覺的なものでなくても何だか一種の不安を感じる場合が多い。いつか田舍から出て來た親戚の

老婦人を帝劇へ案内して菊五郎と三津五郎の舞踊を見た時に其婦人が『餘り面白くて、見て居る内に私はこんなに面白くてもいゝのかしらんと思つてなんだか空恐しくなりました』と云つた。此の婦人は隨分人生の不幸を嘗め盡したやうな人であつたからそう思はれたのかも知れない。併し此の一例から考へても同じやうな經驗は存外多くの人に共通なものかも知れない。ウイリアム、ジエームスの心理學の中に『音樂の享樂に耽る事でさへも、其人が自分で演奏者であるか、或は其音樂を純理知的に受け入れる程に音樂的の天賦を有するのでなければ其の人の人格を弛め弱めるといふ結果を生ずるだらう。……此の弊を矯めるには演奏會で受けた感動を其後で何か主動的な方法で表現しないでは措かないといふ習慣をつければいゝ。それはどんな些細な事でも構はない、例へば自分の祖母にやさしい言葉をかけるとか、乘合馬車で坐席を讓るとかいふ位な事でもいゝが、兎に角何かしないではおかないやうにするがいゝ』といふ一節がある。此れを讀んだ時に成程と思つた。昔から世界の色々な人種の間に行はれた禁欲主義の根本にある一面の眞理に觸れて居るとも思つた。併し美しい藝術が人の心に及ぼす影響はすぐ其の場で手取り早く具體的な自覺的行爲に兩替してそれで濟まされるものだらうか。それでは餘りに物足りない。假令音樂會の歸りに電車の中で喧嘩をし宅へ歸つて家族を叱たりする事があり得るとしても、其の日の音樂から受けた無自覺な影響が後に想ひもかけない機會に或る積極的な結果として現はれる場合が可也多いのではあるまいか。…此は自分に取つては可也に痛切な問題であるが未だ充分腑に落ちるやうな解釋に到着する事が出來ない。

丸善の二階の北側の壁には窓がなくて其處には文學藝術に關する書籍が高い處から脚元までぎつしり詰つて居る。文學書ではどちらかと云へば近代の人氣作家のものが多くて眼につき易い處に並んで居る。自分の中學時代に最も多く耳にしたやうな著名な作家の名前は餘り目に立たない。西洋の畫廊で古い畫ばかり見て日本へ歸つて見て始めてキユーピストやフユチユリストを見せられたやうな心持がする事がある。實際今の日本の文學者の前でホーマーとかミルトンとかいふ名前を持ち出すのは誰れでも氣がひける事だらうと思ふ。文學に限らず科學の方面でも今時ベーコンやニウトンの書いたものを讀むのは氣がさすやうな周圍の狀態である。古いものを新しい眼で見るのや新しいものを古い眼で見るやうな閑つぶしの仕事は忙がしい今の時代には閑人の道樂でなければ能率の少ない事業として捨てられなければならないと見える。

Everyman's Library などのぎつしり詰つた棚が孤立して屛

鳳のやうに立つて居る。自分が一番多く買物をするのは此處である。實際此んな難有い叢書はない。容易に手に入らないか、さもなければ高い金を拂はなければならない物が安く得られるのである。戰爭の爲に此の本の代價までが倍に近く引き上げられた事は自分ばかりでなく多數の人の感じる損失であらうと思ふ。

此の叢書の表紙の裏を見ると"Everyman. I will go with thee and be thy guide in thy most need to go by thy side."といふ文句が記されてある。此の言葉は今日の所謂專門主義(スペシアリズム)の鐵門で閉された圍ひの中へは餘りよくは聞こへない、聞こへても其れはやゝもすれば惡魔の誘惑する聲としか聞かれないらしい。それだから丸善の二階でも各專門の書物は高い立派な硝子張りの戸棚から傲然として見下して居る、片隅に小さくなつて居るむき出しの棚の中に窮屈さうに此の叢書が置かれて居る。例へば昔の人は見晴しのいゝ岡の頂に建てられた小さな小屋の中に雜居して四方の窓から自由に外を眺めて居た、今は宏大な建築が澤山の床と壁とで蜂の巣のやうに仕切られ、人々は銘々の室の唯一つの窓から地平線の僅かな一部を見張つて居る、唯さへ狹い眼界は望遠鏡で更に狹められる、此等の人の爲めに此の大建築から距れた處に小さな小亭が建てられて居る。此處へ來れば自分の住つて居る建築が目ざわりにならずに自由に四方が見渡される。然るに折角建てた此の小亭が餘り利用されないで徒に風雨に曝されて居るとすれば此れは惜しい事である。此れは人々が餘り忙がし過ぎるせいかも知れない、さうだとすれは人々を驅使して居る家主が責任を負はなければなるまい。併し中には暇はあつても不精であつたり又わざ〳〵出かけるよりも室の片隅で茶をのんだり骨牌でもやる方がいゝといふ人があるならばそれは其人々の勝手である。

此の叢書の邊迄見て來ると可也草臥れる、特に此處で何か買ひでもすると、もう急に根氣がなくなつて地理や歴史などの處はほんの覗いて見るだけでおしまひにする場合が多い。決して此の方面の書物に興味がない譯ではないが、唯自然に習慣となつた道順の最後になる爲にいつでも此處が粗略になるのである一度位は此の何の理由もなしに定めた順序を變へ或は逆にしてもよさゝうなものであるが實際には其のやうな試みをした事はない。眞逆に右利きの人間は右廻りの傾向がある譯でもあるまいし、體操の時に「廻れ右」をするが「廻れ左」はやらない事と關係がある譯でもないだらうし、唯自分に限られた習癖に過ぎないかも知れない。併し誰れか物好きな人があつて丸善の二階で見張つて居て、澤山の顧客の歩く道筋を統計的に調べて見

たら存外面白い結果が得られはしまいか、心理學者や生理學者の參考になるやうな事が見付からないとも限らない。それ程でなく共少くも丸善の經營者が書棚の配列を變へる時の參考には確かになるだらう。漁業者がたて網の中にはいつた魚の廻游する習癖を知つて居るから一度はいつた魚が再び逃げ出さないやうな網の形を設計すると同じやうに。

階段を下りる時に新刊雜誌を並べた臺が見下される。其處には同じやうな體裁で同じやうな內容の雜誌が色々な發音まで似かよつた名前で陳列されて居る。表紙だけすりかへて置ても人は何の氣もつかずに買つて行くだらう。少年や幼年の讀物にしてもどれを開けて見ても中は同じである。そして若い柔い頭の中から美に對する正しい感覺を追ひ出す爲にわざ〱考案されたやうなけば〱しい、繪と云ふよりも臟腑の解剖圖の樣な氣味の悪い色の配合が並べられて居る。此樣な雜誌を買ふ事の出來ない程に貧乏な小供があれば、其子は少くも此點で幸福であるかも知れない、何といふオリヂナリチーのない出版界だらう。

階下の日本書や文房具の部は大抵もう草臥れて見ないですます事が多い。それに此の方は寧ろ神田あたりで別な日に見る方がいゝといふ氣がするのですぐに表の通りへ出てしまふ。そして大通りの風に吹かれると、別の世界に出たやうな心持になつてほつとするのが通例である。

丸善を出てから銀坐の方へぶら〱歩いて行く事もあるが又時々三越へ行く事がある。白木屋の邊から日本橋を渡つて行く間に、よく廣重の「江戸百景」を想ひ出す。あの繪で見ると白木屋の隣りに東橋庵といふ蕎麥屋がある。今は白木屋の階上で蕎麥が食はれる。こんなつまらない事を考へたりする。「駿河町」の繪を見ると正面に大きな富士が聳へて前景の兩側には丸に井桁に三の字を染め出した越後屋の暖簾が紫色に刷られてある。繪に記錄された昔の往來の人の風俗も吾々の眼には珍しく面白い、中でも著しく自分の眼につくのは平和な町の中を兩刀を挿して歩いて居る武士の姿である。

富士山の見へる日本橋に魚河岸があつて其の南と北に丸善と三越が相對して居るのは何だか面白い事のやうに思はれる。丸善がP君のいふやうに精神の衣食住を供給して居るなら三越は肉體の丸善であると云つてもいゝ譯である。

よくこんな風な事を考へたりしながら三越の玄關をはいる。此の玄關の兩側にあるライオンは丸善の入口にある手長と足長の人形と同樣に寧ろない方がよいやうに思はれる。何か置かなければいけないといふ規則でもあるのならそういふ規則を改めた方がいゝ。

入口をはいると天井が高くて頭の上がガランとして居るのは氣持がいゝ、櫻の時節だと造花が一杯に飾つてあつたりして、正面の階段の下で美しい制服を着た少年が合奏をやつて居る事もあつた。色々な商品から出る匂と多數の顧客から蒸し出される瓦斯とですつかり入場者を三越的の氣分にしてしまふ。

自分が用のあるのは大概五階か六階であるから多くの場合にすぐ昇降器で上つてしまふ。しかし時には凡ての階を隅から隅迄歩かせられる事もある。歩いて見ると矢張り歩いて見るだけの價値は充分にある。隨分色々の物を覺へ色々の問題にぶつかる、そして色々の人間の色々な現象を見せて貰ふ事が出來る。

世の中には隨分色々な事が自慢になるものだと思ふ。或る婦人は月に幾回三越に行くといふ事を時と場所と相手とにかまはず發表したがるかと思ふと、或る學者は未だ一度も三越に行つた事がないといふ事を宣言するのを其の人の主義を發表する簡易な方法の一つとして撰んで居るやうに思はれる。併し自分のみならず多くの人は三越に行く事を別に名譽とも恥とも思つては居まい。

正面の階段の上り口の左側に商品切手を賣る處がある。何時でも人が込み合つて居て、數百圓のを持つて行く人もあれば數十圓のを數十枚買つて行く人もある。そうかと思ふと一圓のを一枚意張つて買つて行く人もある。此處には人間の好意が不思議な天秤にかけられて先づ金に換算され次に切手に兩換される、現代の文化が發明した最も巧妙な機關が据えられてある。此の切手を試に人に送ると反響のやうに速に反響のやうに弱められて反つて來る。田舍から出て來た自分の母は『東京の人に物を贈るとまるで狐を打つたやうに還して來るよ』といつて驚いた。此れに關する例のp君の說は隨分變つて居る。『切手は好意の代表物である。しかし其の好意といふ事は可也多くの場合に自己の虛榮心を滿足する爲に相手の虛榮心を傷けるといふ事になる。それで敵から砲彈を見舞はれて默つて居られないと同樣に侮辱に對して侮辱を贈り返すのである。速射砲や機關銃が必要であると同樣に切手は最も必要な利器である』如何にもp君の云ひそうな事ではあるが、若しや此れが幾分でも事實だとしたらそれは何と云ふ情ない事實だらう。

一階から二階へ人を搬ぶ爲にエスカレーターを運轉して居る時がある、或人は間違へて此をライスカレーといつた。此れは餘り氣持のいゝ者ではない。あの手欄の上を辷つて行くゴムの帶も何だか蛇のやうで氣味が惡いと云つた人もある。自分は或る日此處で妙な連想を起した事がある。自分の小供を小學校へ入れてやると何時の間にか文字を覺える算術を覺える、六年位た

瞬く間に經つて小供はいつの間にか一かどの小さい學者になつて居る、實に難有いものだと思はないでは居られない。丁度エスカレーターの最下段に押して入れてやれば獨りで二階迄は持つて行つてくれるのと同じやうなものである。此頃は中學や高等學校の入學が大分困難になつて來たが、それでも一度入學さへすれば兎に角無事にせり上つて行くのが通例である。此れから見ると昔しの人は不完全な寺子屋の階段を手を引いて貰つてやつと上ると、それから先きは自分で階段を刻んだり、蔓にすがつて絶壁を攀ぢるやうな思ひをしなければならなかつた。それで大概の人は途中で思ひ切つてしまつただらうが、登りつめた人の腕や脚は鐵のやうに鍊へられたに相違ない。

三越の商品の主なるものは何と云つても呉服物である。かういふ物に對する好尚と智識の極めて少ない自分は反物や帶地やえりの處を永い時間引き廻はされるのは可也に迷惑である。そして此れ程迄に呉服といふものが人間に必要なものかと思つて驚き怪しむだ事も一度や二度ではない。『東京の人は衣服を食つて居るのか』と云つた田舍の或る老人の奇矯な言葉が思ひ出される。

何番といふ番號のついた賣場に妻子をつれて買物に來て居る人がよくある。細君の品物を撰り分ける顔付きや擧動や、其れを默つて見て居る主人の表情は様々である。色々な家庭の一面が此處に反映して居る。所謂寫實小説を見るよりは此の方が遙かにためになる。同じ陳列臺の前を行つたり來たりして居る女の顔にはどうかすると迷や悶への氣の毒な表情があり〳〵讀まれる事もある。

婦人の美服に對する慾望を通例虛榮心といふ簡單な言葉で說明されて居るやうである。嘗て何かの雜誌で「萬引の心理」といふ題目で大いに論じたものを讀んだ事がある、其の中にも此の虛榮心の事が大分長たらしく書いてあつたやうに記憶して居る。それを見ても通例女の虛榮心といふものは人間のあらゆる本質的な慾求の團塊のほんの表面の薄膜に生ずる黴位のもののやうに取扱はれて居るやうであるが果してそんなものだらうか。此やうな婦人が美服に對した時にあらゆる理知の束縛を忘れ當然な因果を考へる暇もなく盜賊の所行を敢てするやうになる衝動はそれ程淺薄な不眞面目なものばかりとも思はれない。其衝動の背後には卑近な物質的の慾望の外に存外廣い意味に於て道德的な理想に對する熱烈な憧憬が含まれて居るかも知れない。若し例へば社會の組織制度に關する或る理想に心醉してそれが爲に奪ひ殺し傷ける事を敢てする團體があるとすれば、何處か其れと共通な點がないでもない。此の婦人の行爲は利己的

である、社會的理想はそんな者と根本的にちがつて居ると一口に云つてしまつていゝものだらうか。一體普通に使はれる利己と利他といふ兩つの言葉程無意味な言葉は少ない、元來無いものに附せられた空虚な言葉であるか、さもなければ同じ物の別名である。唯人を非難したり辯護したりする時や、或は金を集めたり出したりする時に使ひ分けて便利なものだから誰れでも日常使つては居るが、今自分の云つて居るやうな根本の問題には何の役にも立たないものである。誰れも此疑問に對して自分の腑に落ちるやうな解釋をしてくれる人はないものだらうか。例へば所謂共產主義を論じる學者達が現在の社會に行はれて居る此の萬引といふものを如何に取り扱ふかゞ聞きたいものである

三越へ來て數千圓の帶や、數百圓の指輪を見たり或は萬引の事を考へたりして居ると誰れかゞ云つた寢言のやうな謎のやうな言葉に多少の意味があるやうな氣がする『富む事は美德である。富者は其の美德を餘りに多く享有する事の罪を自覺するが故に其贖罪の爲に種々の痴呆を敢行して安心を求めんとする。貧乏は惡德である、貧者は其の自覺の抑壓に苦しみ、富の美德を獲得せんと焦慮するが爲に働き或は盜み奪ふ……』

呉服の地質の種類や品位については全く無智識な自分も、染織の色彩や圖案に對しては多少の興味がある。それで注意して見ると近頃特に歐洲大戰が始まつて後に三越などで見かける染物の色彩が妙に變つて來たやうな氣がする、或人は近頃はこんな色が流行すると云つた、併し或る人は又戰爭の爲に染料が缺乏したから據なくあんな物ばかり製造して居るのだとも云つた。もし此二人のいふ事がどちらも本當であるとすると、吾々の趣味や好尚は存外自由に簡單に支配され得るものだと思ふ。もし試に十年位の期間でもいゝからあらゆる染料の製造と販賣と使用を停止して見たら吾々の社會的生活にどんな影響が生じるだらう。實行は六かしいが此うゆふ假設を前提として一つの思考實驗を行つて見る事は甚だ面白くもあり又有益でありはしまいか。尤もそんな事はもう社會學者や經濟學者達が疾の昔にやつてやり古した事かも知れない。多分そうだらうと思はれる、そうでなくては成り立ちそうもない學說やイズムが吾々素人の眼に觸れる程だから。

三越の四階に食堂がある、たしか以前は小さな室であつたのが其後擴張されて今のやうな大きな部屋になつたと思ふ。一寸清潔に簡便に食慾を滿足させ、時間をつぶすに適當なやうに出來て居る。普通の日本人の食事時間でない時でも不斷に賑はつて居る。草花の鉢を飾つたり、夏は花を封じ込めた氷塊がいくつも据へられて居て、天井には大きな煽風器が廻つて居る。田

會から始めて來た人などに此處で汁粉かアイス一杯でも振舞ふと意外な滿足を表せられる事がある。此處の食卓へ坐をとつて周圍の人達特に婦人の物を食つて居るさまを見ると一種の愉快な心持になつて來る、或る人のいふやうに淺猿しいなどゝいふ感じは自分には起らない、吳服賣場や陳列棚の前で見るやうな恐ろしい險しい顏は餘りなくつて、非常に人間らしい親しみのある顏が大部分を占めて居る。此の食堂を發案したのは誰れだか知らないが、其人は色々な意味でえらい人のやうに思はれて仕方がない。

食堂の外には食品を販賣する部が階下になる。人によると近處の店屋で得られると同じ罐詰などをわざ／＼此處迄買ひに來るといふ事である。買物といふ行爲を單に物質的にのみ解釋して、かういふ人を一概に愚弄する人があるが、自分は其れは少し無理だと思つて居る。此れに限らず他人の內部の生活に對して餘りに盲目的な批判を下すのはどうかと思ふ。

伯林のカウフハウスでは穀類や生魚を賣つて居た、倫敦の三越のやうな家では犬や猿や小鳥の生きたのを賣つて居た。生魚はすぐ隣りに魚河岸があるからいゝが、併し三越でも猫や小猿やカナリヤを販賣したら面白いかも知れない、少くも小供達に對する誘惑を無害な方面に轉じる事になるだらうし大人に對しても三越といふものゝ觀念に一つの新しい道德的な隈取りを與へはしまいか。生き物だから飼つて置くのは面倒だらうが。

『三越に大概な物はあるが、日本刀とピストルがない』と何かの機會に大變興奮してP君が云つた事がある。『帶刀の廢止決鬪の禁制が生じた近代人の特典は、何等の罰なしに自分の氣に入らない人に不當な侮辱を與へ得る事である、愚弄に酬ゆるに愚弄を以てし、當てこすりに答へるに當てこすりを以てする事の出來る場合には用はないが、無言な正義が饒舌な機智に富んだ不正に愚弄される場合の審判者として此の二つの品が必要である』此れには自分は大分異論があつたやうに記憶する、併し其時自分の云つた事は忘れて唯P君の言葉が記憶に殘つて居る。

五階には時々各種の美術展覽會が催される。今の美術界の趨勢は帝展や院展を見なくても幾分は此處だけでも覗はれる、のみならずそう云ふ大きな展覽會に出ない人達の作品まで見られる便利がある、そして入場は無料である。

此處では又色々の諸美術品が陳列されて居る。陶磁器漆器鑄物其他大概のものはある。此れも今代の工藝美術の標本であり又一般の趣味嗜好の代表である、何でもどちらかと云へば、あらのない、滑つこい無疵なものばかりである。いつか此處で大變面白いと思ふ花瓶を見つけて序のある度に覗いて見た。それ

は少し薄ぎたないやうなものであつたせいか永い間買手もつかず其處に陳列されて居た、此れと始めの内に同居して居た澤山の花瓶は段々に入り代つて行くのに此れだけは木守りの澁柿のやうに殘つて居た。ところが此間行つて見るともう此の自分の好きな花瓶も見えなくなつて居た、何だかやつと安心したやうな氣がしたが、果して賣れたのか、或は餘り賣れないのでどうにか處分されたか、其れも分らないと思つた。

六階にあつた所謂空中庭園は近頃取り拂はれて今では玩具の陳列所になつて居る。一階から五階迄の間に群がつて居る澤山の人の皮膚や口から出る色々の生温い瓦斯が此處迄登りつめたのを上から蓋してしまつたせいか、此處へ來ると空氣が惡くて長く居ると此れが頭に利いて來る。其のせいでもあるまいが自分は此處にある玩具に對して餘り好い氣持はしない。例へばセルロイドで作つたキユーピーなどのてか／＼した肌合や、ブリキ細工の汽車や自働車などを見てもなんだか心持が惡い。それでも年に一度位は自分の小供等にこんな玩具を奮發して買つてやらない譯ではない。玩具其物の效果については時々教育家や心理學者の講話を新聞や雜誌で讀んで見るが、具體的に何商店のどの玩具がいゝといふ事を敎へてくれないのは物足りない。實際買はうと思つて見渡す時に自分が安心して此れならと思ふ品が誠に少い。こんな親父を持つた小供等は不仕合でないかと思ふ事もある。自分の小供の時代に田舍で弄んだ自然界の玩具には充分な自信を以て小供等に與へ度いと思ふものが澤山あるが、此の三越にあるやうな玩具については悲しい事に積極的にも消極的にも自信がない。玩具といふ者に關して書いた書物も隨分あるだらうと思ふが誰れかえらい人のそういふ著書があれば讀んで見たいものである、序に大人の玩具に迄も論及したものであれば猶更面白く有益であらう。

六階で以前の儘なものは花卉盆栽を賣つて居る溫室である。自分は三越へ來て此處を見舞はぬ事はめつたにない。何時でも何かしら美しい花が見られる。宅の庭には何もなくなつた霜枯れ時分に此處へ來ると生れかはつたやうに好い心持がする、特に三越の一階から五階迄ありとあらゆる人工的商品をこまごま見せられて疲れ渇いた眼には此等の草花がどんなに美しく見えるだらう。花ばかりでなく色々な美しい熱帶の觀葉植物の燃えるやうな紅や汚れのない綠の色や、少しの無理もない典雅な形態を見れば誰しも蘇生する心地のしない人はあるまい、そして此吾々の衣食住の必要品や贅澤品を所狭く煩しく置きならべた五層樓の屋上に此小樂園を設くる事を忘れなかつた經營者に對して假令無自覺にしろ一片の感謝を表しない人はないでらう。

から思つて居たが段々色々の人に聞いて見ると中にはあの温室へはいると氣持がわるくなるといふ人もあつた、花だつて貧弱なのばかりぢやないかと云つた人もある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

丸善から三越へ廻つて歸る時には大抵いつも日本銀行前迄歩いて其處から外濠線に乘る。どうかして電車がしばらく來ない時には河岸の砂利置場へはいつて御堀の水をながめたり、吳服橋を通る電車の倒影を見送つたりする。丸善の二階で得た色々な印象や、三越で受けたさまざまな刺戟が此の河岸の風に吹かれて緊張の弛んだ時に色々の變つた形や響になつて意識の上に浮び上つて來る。歸てから考へて居る著書を早く書き初めなければならぬと思ふ事もある、或は鄕里の不幸や親戚に無沙汰をして居る事を思ひ出す事もある。

併し又時として向ふ河岸に繫つて居る荷物船から三菱の倉庫へ荷上げをして居る人足の器械的に動くのを見たり、船頭の女房が鍋で菜の葉を刻んだり洗つたりするのを見たり、或は若芽を吹いた柳の風にゆらぐのを見たりして居ると、丸善だとか三越だとかいふものが世にもつまらない無用の長物だといふ氣がする時もある。

電車に乘つて歸つて宅の門を潜ると、もうこんな事はすつかり忘れてしまつて其れで自分の日曜日或は月曜日の自分は消へてしまふのである。

社會現象として觀た自殺の研究

寺田精一

□人類と自殺

人類のみがなし得て他の動物がなし得ぬものには、固より様々なことがある、私がここで問題とした自殺も亦其一つである。「人類は自殺し得る動物なり」といふ説明が、人類の定義となるといふ一部の論者の意見は、確に或眞理を捕へたものである。不老不死の藥の發明に苦心したり、醫藥の進歩に依つて死にかけたものの生命を引き延ばしたりする人類であつて、そこに初めて自分の生命を勝手に斷たうとする人類となるのである。けれども考へて見れば不可思議なことともいはれる。自然が生命を與へた生物であつて、生きやう生きやうと努めるのが自らの運命であるのに、それを自ら進んで自己の生命を斷たうとする不自然を敢てするのが自殺の現象である。誠に自殺を以て人生の謎とするのは、無理からぬことである。

勿論、如何に人類が自殺し得るものであつても、何人も機會だにあらば自殺しやうと、平常から考へたり用意したりして居るものではない。若しさういふ人があつたとすれば、それは決して普通の精神の所有者ではないのである。本來からいふならば、人類は其精神生活が精緻に發達して居つて、何れの方面に向つての欲望も、最も強く又最も深く現はれて居る、生命に對する欲望でも、恐らく人類が總べての生物の內で、最も強く且最も深く所有して居るのであらう。これはいふまでもなく人類が、自らの意志から生命に對する欲望に向つて樣々に努力し得る丈けの發達した精神を持つて居るからである。換言するならは生命に對する最も強烈な欲求のあるところに、自殺が起つて來るのだとも見られるのである。矛盾したやうなこの言ひ表はし方は、必ずしも誤つたものとはいはれないのである。

但し、何人も生きたいのにそれを自殺するのであるから、そ

こに幾分の異常を認めない譯にはいかない。かくて通俗な統計の示すやうに、精神錯亂を以て自殺の原因中主たるものとなすことは、强ち不當なことではない。卽ち常態とは相違した精神狀態の何物かが見られねばならないのである。嘗てあつた自殺の例に次のやうなのがある。或學生が當時入學の最も難關であるといはれた或學校へ首尾よく入學することが出來た時に、餘りの喜ばしさに常態を失ひ、「俺の頭は中々いいぞ、中々しつかりしたものだ」といつて、石垣に自分の頭を强く打ちつけながら、「こんな石垣なんど、とても俺の頭にはかなふまい、どうだ勝てないだらうが」と、狂つた勢で、とうとう死んでしまつた。かかる場合になると、どうしても其精神狀態に異常があつたと認めねばならない。只これなどは自らは死ぬ積りでやつて居るのでなくて、自分の頭のよさ加減を實驗して居る積りであるから、普通の意味に於ける自殺とはいはれないかも知れないが、一般の自殺の中には、幾分程度上の相違こそあれ、これに類したやうなものも決して稀ではない。

けれども吾々は、人類にのみ行はれて居る自殺の現象を單純に精神錯亂若しくは厭世といつたやうな事實で解釋し去るには、餘りに其複雜な場合の存在するを認めねばならない。のみならず此不可思議と觀られる現象が、決して珍しいものではなくて、吾々の社會に極めて多く見られることをも思はねばならない。今、我邦に於ける自殺の旣遂數を調べて見ると、次のやうな結果になつて居る。

年度	大正元年	二年	三年	四年	五年
自殺者數	9475	10367	10902	10153	9599

卽ち年によつて多少の動搖は見られるけれども、概略一年に一萬人の自殺者があるといふことはいはれ、又全人口五千餘萬人を有して居る我邦では、人口一萬人について年々約二人の自殺者を出して居ることとなるのである。而して我邦に於ける一年の死亡者の全數は幾何になつて居るかといふに、大正二年には一〇二七二五七人、三年には一一〇一八一五人、四年には一〇九三七九三人、五年には一一八七八三二人となつて居る。卽ち概略百萬ばかりの死亡者が一年の内にある譯であつて、其内の一萬が自殺となつて居るのである。從つて我邦では百に對する一丈けが自殺で以て死亡して居るのである。換言すれば吾々日本人は百分の一の自殺率を以て居るとも、又百人に一人は自殺で死ぬ運命を持つて居るともいはれる程、自殺といふことが重要な關係を持つて居るのである。

かくの如くに、我邦のみでも年々一萬人づつを失つて居る自殺の現象は、固より其原因に千差萬別あるのはいふまでもないことであるが、其數の少からぬ丈けに、吾々人類の生活とも樣々な點で興味ある關係を持つて居るといはねばならない。私は以下に私の見解から自殺に關する一面の觀察を下して見たいのである。但し私は、自殺の可否といふやうな道德問題には觸れないで、單なる社會現象として見た自殺其ものを觀察するのである。

□欲望の倒錯

ここで私が欲望の倒錯といふのは、自然から賦與された欲望が、自然の現はれ方と反對な又は矛盾したやうな現はれ方をして居る場合をいふのである。この種のことは、必ずしも人類にのみ限られたことではないけれども、複雜な精神生活をなして居る人類に於て、殊にそれが屢々見られるのである。のみならずかかる現象は、決して或特殊な欲望にのみ限られたものでなくて、種々な欲望に於てこれを見ることが出來る。性慾異常として取扱はれる同性の戀愛もこの種のものである、精神病の一症狀として現はれることのある食物拒絕症の如きも亦この種のものである。尙例を擧げるなれば、男でありながら女の衣裝を常に好んで着けるが如き、土塊や木炭を嗜む異食癖の如き、特別な理由を持つて居ないのに孤獨をのみ好むが如き何れもそれであつて、自然が吾々に賦與してくれた欲望の現はれ方と相違した形式に現はれたもので、私のいふ欲望の倒錯である。私が今、問題として居る自殺も、亦この種の顯著な一つの例である。

自然は吾々に生きよ生きよとの渾命を與へた。そこで吾々は生きやう生きやうと努めて居る。それが普通の行き方である。かの下等な動物等が生れ出でてから死に至るまで、殆んど常に自然の力に抱かれて、食を望む時に食を求め、休息を求める時に休息し、そこに何等複雜な努力といふものがない。假令、複雜な努力らしいものが見られても、それは要するに努力と知つての努力ではなくて、自然の命ずる本能的な簡素な努力に過ぎない、そこに何等の反省もなければ又何等の疑惑も起らない。只通り一本の營々たる自然的努力に留まつて居る。けれども吾々は、少くも多少の文化に浴して居るものであるなれば、このやうな單純な行き方では過ごされない。吾々は自然からの供給に飽き足らなくて耕作をして居る、自然の寒さを避けるやうに衣服を着て居る、それればかりでなく吾々自らの樣々な欲望を達するやうに種々な創造をして居る、のみならず吾々は自分以外のことを批判すると共に、自分を反省することも出來る。言葉

を換へていふならば、吾々は自然のままに生きて居るのでなくて、生きやう生きやうと意志的に努めて居る、自然的の放任では死するやうな場合にも、生き度いと思ひ又生きる道を考へて居る。

かくて吾々の生命の保持は、下等な動物のやうに單純なものでなくて、一面に生を享けたことを樂しみ得ると共に、他面に於ては生を享けたことを悲しむこともある。生の樂しみを感ずる點は吾々の發達した精神を有する爲めの幸福である。けれども下等な動物などが自然の力に任せて死滅の境に入り得るのに、吾々は强烈な生命の執着を有し、死の煩悶を味はねばならない。のみならず生の樂しみを感じ得る吾々の精神は、生の苦しみをも感ずるものである。生の意義や生活の苦惱や生存の失敗などに對する煩悶は、人類に於てのみいはれることであつて、そこに又人類のみの有する生の厭はしさや悲しさといふ事が起つて來るのである。生きよ生きよとの自然からの運命は吾々に生きやう生きやうと意志的に努めしめ、かくて其努力の結果は上に擧げるやうな色々な煩悶に至らしめ、更に生命の欲望の自然的な現はれ方と矛盾した死を求めるの倒錯に進むのである。

けれども私は、自殺の現象を單に上のやうな意味に於ける欲望の倒錯としてのみ、說明し得られるものとは思はない。それには種々な條件が加はつて、興味のある現はれ方をして居るのに注意しなければならない。

□氣候の關係

氣候が生物に及ぼす影響の如何に大なるかは、喋々するまでもないことである。同一の地方であつても、春夏秋冬のあるところでは、植物ならば花が咲いたり實が結んだりする變化があるのである、それ程に氣候は生物に影響の深いものであるから、それが吾々人類の生活にも少からぬ關係のあるのはいふまでもないことである。勿論、文化に浴して居る人類は、自然の氣候に對して少からぬ用意をなし、寒さ熱さに樣々な方法を講じて居るけれども、大自然の偉力は、それで以て決して防がれては居ない。かくて吾々の社會に於ける自殺にも、この大自然の力殊に熱さ寒さといふことが、少からず關係して居るのである。

今、我邦に於ける自殺を、明治四十二年乃至大正二年の五ケ年の年平均にして見る時には、次のやうになつて居る。

月	平均數
一	718.4
二	698.0
三	865.0
四	1050.6
五	1132.0
六	1026.2
七	1184.6
八	1095.0
九	938.4
十	850.6
十一	758.2
十二	717.4

即ち自殺の少いのが、十月・十一月・十二月・一月・二月の五ケ月であつて、就中最も少いのが二月で、これに次いでは十二月と一月とである。而してこの自殺の最も少く現はれて居るのが、我邦では一番寒い時期である。次に自殺の多いのが、四月・五月・六月・七月・八月の五ケ月であつて、就中最も多いのが七月で、これに次いでは五月で、それから八月といふ順になつて居る。而してこの自殺の最も多く現はれて居るのが、我邦では春夏の候であつて、温暖の時期を過ぎて漸次に熱さに向ひつつある時期である。かかる事實は、決して我邦のみの現はれ方ではなくて、温帶に位して居る文明國の自殺が、大體に於てこれと相類した狀態に現はれ、嚴冬の候に少くて春の終りから盛夏の候にかけて多くなつて居る。只我邦で六月に一時的の減少の見られるのは、稍注意すべきことであつて、殺人罪や傷害罪なども、我邦では他の文明國と相違して六月に一時的の減少を見るのである。これは六月の候が我邦の雨季であつて、濕氣の多いといふことと、濕氣のある時は感情が沈靜に至り易いが濕氣の少い時は興奮し勝ちであるといはれる事實と相關係して興味のあることである。即ち六月に雨季のあるといふことが我邦の特徵であつて、そこに我が邦の殺人や傷害や自殺に特徵を與へるらしいのである。

尚、四月頃から自殺の増加することは、昔から木の芽時といつて氣分が焦々し感情生活に動揺を起させ易いことと、精神病の發作が顯著に現はれたり、其素質のあつたものが精神病に罹り易いこととを相關聯せしめて考へると、頗る注意すべき事實の存在に思ひ至らねばならない。即ち草木の芽の萠え出でる頃は、草木にさほどの變化を與へるやうに、我々の身體や精神の上にも亦著しい變化を與へるのに相違ないのであつて、其結果普通の人々に向つても、其感情生活に異常を呈せしめ、又病的傾向のある人々に對しては、甚症狀を明かならしめるのであらう。

而して自殺の多い春夏の候が、衣食住に伴ふ生活上の難問題を多く有し、それが爲めに自殺を多からしめはしまいかとも考へられないことはないが、然も事實はこれに反し、春夏の候は寧ろそれ等の生活上に好都合な時期である。かくて春夏の候に自殺の多いことは、要するに春夏の候殊に濕度に因る自然の偉力から來るものといふべきである。勿論、自殺の増減が上述のやうな氣候の影響のみに因るものではないけれども、社會狀態に特別な變動のない限りは、大體の趨勢は氣候に因つて定まつて居る。從つて若し自殺の最も多い時分に、生活上の苦惱を招くやうな偶然の事實が發生するに於ては、比較的容易に自殺

敢てするやうなものを頻々輩出せしめるものといはねばならない。

□遺傳と自殺

遺傳の事實の疑はれぬ今日、自殺を研究する場合にも、これを等閑視されぬのは當然なことである。吾々の氣質といふことが、一般に感情生活を中心として見られ、且それが遺傳的影響によつて定まることの少くないと見られる點でも、自殺と遺傳との關係を重要視しなければならない。

自殺の行はれる場合に、樣々な知能の働くのはいふまでもないが、然も其最も主要な働きをなして居るのは感情である。而して吾々の有する感情生活の働き方は、上述するやうに遺傳的素質によつて、大體の傾向の定まる場合が少くない。そこで境遇から得られる偶然な事情は殆んど相選ばぬものであつても、それが主觀的に受け取られる場合には決して同樣な結果とはならない。即ち甲は比較的に冷靜な態度を持し得るのに、乙は比較的興奮な態度に至ることもある。尙、一步進めていふならば、生れながらに自殺し易い人と然らざる人とがあるのである。この素質は、自殺した人の近親に自殺者を見る場合の稀有でないことからも推察されるが、又感情興奮に異常を呈し易い精神病者の近親に自殺者の出でる場合のあることからも推察されるのである。

祖先に君主に殉死した人があつて、其の後に又殉死者を見ることが往々ある。それなども單純に君主の死に對する哀情の切なる血の流れを、賞讃するならばそれまでである、けれども道德的の問題を別にした自殺現象の研究に入るならば、祖先の名を辱しめてはならないといふ信念の力も忽にはされないが、自殺に至り易い感情興奮性の素質の遺傳をも、亦閑却することは出來ない。或は國事に奔走して悲憤慷慨の極自殺した人の子孫に、又國事のことから憤死する人を見ることも稀ではない。これなども吾々は、愛國の熱情の旺盛を認めると共に、又其家系に自殺に至り易いやうな氣質の遺傳をも認めるのである。何となれば、國家や君主に對する奉公が、必ずしも自殺が極度のものとは限らない、寧ろそれ以外に選むべき適當な方途は、如何なる場合にも決して少くないからである。

國を異にすると共に、自殺の起り方も相違して居る。即ち一八七〇年乃至一八八〇年の歐羅巴の各國に於ける自殺率を、人口百萬人に對する割合で示すと、次のやうな結果になつて居る。瑞典は一一八人、那威は一四五人、丁抹は四〇七人、和蘭は五八人、英吉利は一〇七人、普魯西は二一〇人、バイエルンは一

四八人、ヘワセンーダルムシタツトは三〇九人、バーデンは二五七人、ザクセンは四四七人ウルテンベルヒは二七二人、白耳義は一一六人、佛蘭西は二九〇人、墺太利は二二八人、匈牙利は四八人、伊太利は六一人、瑞西は三六三人である。我邦は明治三十七年乃至大正二年の十ケ年の年平均は、人口百萬人に對して自殺者が二〇三・三人となつて居て、上の諸外國の中では普魯西と最も接近した結果になつて居る。

これ等の統計で墺太利が普魯西とは相類した結果を示して匈牙利とは著しい相違を示して居る點などから見ると、民族の異同と自殺の多寡とが關係のあるやうに思はれるのであるけれども、同じ獨逸民族でもザクセンがバーデンの二倍も自殺者を出して居る事實から見ると、それを一概にいふことは出來ないのである。即ち其社會狀態が甚だしく關係するものであるから、單に民族の如何を以て直に自殺者の數量を論ずることは出來ない。けれども同じやうな社會狀態に生活するものであるなれば、其民族の有する遺傳的な特殊な感情性が、自ら自殺者の數量に關係を與へて來ることは、疑ひのないことといはねばならない。

□機會の偉力

何人も生きたい生きたいといふのが自然であるのに、自らを殺すのが自殺であるから、自殺の場合はくよくよの場合といはねばならない、けれども實際に於ては、それが必ずしもよくよくな場合とのみに限らないで、割合に單純な機會が有力な誘因となつて居ることが少くない。元來、自殺のみではなく、一般に普通の狀態ではなさないやうなことや、なし得ないやうなことが、機會で以て行はれることが頗る多い。所謂「つい失策した」とか、「もともと其積りではなかつたが、ついやつてしまつた」といはれる「つい」は、ここで私のいふ機會である。

人を殺さうと企てたものが、兇器を買ひ求め、それを携へて被害者のところへ行つたにしても、上述した機會が得られなくて未遂に終ることは少くない、これに反して殺害の意志は左程強くなかつたにせよ、ふとした機會例へば先方の些細な態度言語等が誘因になつて、極めて容易に殺害に至るやうなことも稀有でない。

或は又互に罵り合つて居つても、直ぐに投ぐり合ひには至らないものであるが、二人の間に於ける僅かな語勢や態度が或は外國からの僅かな出來事が、極めて容易に投ぐり合ひに導くものである。恰も將に破裂せんとする狀態にあるゴムの膜に加へられた微細な傷のやうなもので、傷自らは極めて微細であるけれども、破裂せんとする狀態のゴムの膜には、容易に破裂に導

く原因となるのである。「切るぞ切るぞ」と詰め寄つても、先方が眼瞼に爭である場合には、中々に切つてかかれるものではないが、「馬鹿め」とか「切るなら切れ」とか罵られると、極めて臆病なものであつても、頗る容易に刄傷を敢てするものである。自殺も亦その道理に外れては居ない。

　水死の途を選び死の場所に立つたものも、直ちに飛び込むことは極めて稀である、人の話聲が近づいて來るとか、風が颯と吹いて來るとかいふことが、機會になつて自殺に導くことが多いやうである。縊死の途を選び紐を釣して死の用意を整へたものも、刹那刹那に念頭に浮ぶ種々な回想は、それからそれへと限りなく起つて來て、死の決意を鈍ぶらし又後らして居る、そこへ鼠が音をさしたり木の葉が頭へ落ちたり寺の鐘の音が聞えたりして、それが一つの機會になつて自殺に導くやうなことが多いやうである。

　のみならず機會を逸したものは、假令其時までは強い自殺の欲求を持つて居ても、そこで自殺に少からぬ頓挫を與へるのが常である。今將に死せんとして居つたものを、偶然に他人が見つけて「暫く待つた」と抱き留めた場合には「死なして呉れ」と叫んだり、「お情に見捨てて下さい、死なねばならぬ身ですから」と泣いたりして、抱いた腕をもぎ取つて逃げやうとするのが、」殆んど常のやうである。けれどもかかる場合に大目に見て死なする人もないから、確實なことはいはれないけれども、このやうに自殺の刹那に機會の奪はれたものは、もはや捨てて置いても多くは自殺するやうな氣にならぬものだといはれて居る。これは恐らくさうであらう。何となれば感情興奮の極に達し又は深い冥想に耽つた爲めに、自殺を企てて居たのであるから、其興奮や冥想を他から阻害された場合には、自然自殺からも遠ざからねばならない狀態となるのである。

　かくて如何なる機會が、最もよく自殺に導くかは、其場合により又其人によつて、それを一樣にいふことは出來ないけれども、自殺といふやうな重大事が、極めて微細な出來事から決行の糸口を見出すことは、誠に興味のあることといはねばならない。

□苦悶の脫却

　自然から與へられた歡樂を、人爲的に持續せしめ又は高調せしめ得る吾々は、自然から與へられた苦悶はいふまでもなく、自ら招いた苦悶をも、柔げたり却けたりすることを心得て居る。ここからも自殺といふ現象が起つて來るのである。即ち下等な動物のやうに、苦悶を柔げたり却けたりすることを知らぬもの

であつたならば、苦悶を脱却しやうといふ欲求も起らない道理であつて、只單に苦悶を苦悶として經驗するばかりで、それに對しての特殊な心の働きは現はれないのである。卽ち苦悶に盲從した自然の苦悶として終るのである。けれども苦悶を脱却しやうとする欲求を起し得る人類は、苦悶を單なる苦悶としてのみ經驗することは出來ない、苦悶とそれを脱却せんとする努力との闘ひとなつて、特殊な別の苦悶が附加されて來るのである。從つて人類は、歡樂を他の動物などの知らないやうな程度に強く深く經驗し得ると共に、苦悶をも他の動物などの知らないやうな程度に強く深く經驗しなければならない運命を持つて居る。

尤も、ここに所謂苦悶は廣い意味からいふのであつて、必ずしも精神的のもののみではなくて、身體的のものをも包含せしめていふのである。精神的の苦悶は、偶然な境遇上から生き甲斐のない身となつたといふやうな形式で來るものも少くないが、精神病理的に來るものが頗る多い。例へば常に惡魔の類を幻視として經驗し、又は「早く死ね、死なねば苦しめて殺してやる」といふやうな幻聽として經驗し、或は又何等理由のないことであるに拘らず、妄想の爲めに常に責罪的な苦悶を有して「ああ、惡るかつた惡るかつた、死んで申譯をする外に途はない」とか「自分のやうな罪の深いものは生きて居られない」といつたやうな念慮に捕はれて居つて、幽鬱に苦惱を重ね、遂に自殺を企てるやうなことが少くない。精神病者の自殺は、この種のものが主である。固よりかかる精神病理的なものでなく、境遇上から得られた苦悶に堪えられなくて、自殺に至るものも珍しくはないが、然かも其人の稟性に關係することはいふまでもないことである。

次に身體的の苦悶は、多くは疾病若しくは外傷等に因るもので、心臟病などで苦痛の加はつた時に、或は又大負傷などした人が苦痛の極に達した時に、「早く殺して呉れ」と呻吟し悲鳴をあげるが如き、苦悶脱却の痛切な叫びである。苦悶を却け得る人類であつてこそ、この痛切な叫びを敢てするのである。かの慘忍な拷問にかけられたものが、自ら舌を嚙み切つて死んだといふやうなことは、嘗ては屢々あつたことのやうであるが、これなども死に依つて苦痛の脱却が得られると知る人類に於て初めて見られることである。かの人の厭ふ癩病や不治の精神病や難治の肺病などに罹つた人に於て、自殺者を見ることは少くないが、これは上述のものと異つて身體其ものの苦悶といふよりは、寧ろそれ等の疾病から得られた精神的苦悶が其主なものである。例へば人前に出られない身體を生き永らへても死に勝る

苦痛があるとか、前途の望もなく死の迫つて居るのを知りつつ生きて居ることの無意義で苦悶に堪えられないとかいふ精神的事實が、自殺の直接の原因となるのである。

かくて自殺を選ばしめる苦悶には、大體精神的のものと身體的のものとがあるが、其何れを主ともされないやうなものも少くはない。けれども一般的に自殺の現象から見ると、苦悶の脫却に因るものは、其性質からして割合に單純なものといはねばならない。從つてこの種の形式は、相當の文化を俟たないでも見られるものである。

□生存の懷疑

自ら生存して居ることに心づかぬものは、生存に對する疑惑をも經驗しない。自然のままに生きて、自然のままに死して行く下等な動物は、生存の懷疑を知らない、又自己の生存を問題としない吾々の子供も、生存の懷疑に遭遇しない。かの敎唆や模倣や遊戲などから聞き行はれる特殊な自殺を除いては、低能者や子供に普通の自殺の殆んど行はれないのは、彼等が生存に心づかず又生存に懷疑を得ない事實が、極めて重要な原因をなして居る、下等な動物に自殺の見られないのも亦さうである。換言するならば、自ら生存に心づくところに、生存に對する懷疑が起り、そこに又自殺が起り易いのである。

固より生存の懷疑は、必ずしも常に單純な形式と內容とを以て現はれるものではなくて、或は人類一般の生存そのものに對する懷疑となり、或は自己自らの生存に對する懷疑となり、或は又自己の社會生活の上に於ける價値や使命などから社會的生存の懷疑となることもあらう。而してこれ等は明確にいふことは出來ないけれども、大體に於て甲と乙とは空想乃至哲學的思索から得られる人生觀に因ること多く、丙は對境遇若しくは對人的の空想から得られる人生觀に因ることが多く、何れも自己を孤獨に押込み捨てるのである。そこで私は、年齡とそれに伴つた精神狀態との關係を參考して、少からぬ感興を得るのである。何となれば年齡は、內的生活に於ける精神的の發達と、外的生活に於ける社會の境遇とに、極めて重要な條件となるものであるからである。今我邦に於ける自殺が年齡と如何なる關係をなして現はれて居るかを見るに、年度によつて幾分の相違は

年齡	自殺數
10—15	130.1
15—20	995.1
20—25	1403.1
25—30	945.5
30—35	727.2
35—40	707.5
40—45	606.7
45—50	641 0
50—55	619.2
55—60	757.2
60—65	748.0
65—70	732.7
70—75	580.5
75—80	366.0
80—85	191.2
85—90	61.0
90—	11.7

あるけれども、大正二年乃至五年の年平均自殺既遂數は右のやうになつて居る。

但し、この自殺數は、人口數に甚だしい相違を有する各年齡期に對する平均實數であるから、これを以て各年齡期に於ける自殺者の多寡を論ずることは出來ない。そこで私は、各年齡期の人口一萬人に對する自殺者の數を計算して、大體次のやうな結果を得た。

年齡	自殺數
10—15	0,2
15—20	2.1
20—25	3.4
25—30	2.4
30—35	1.9
35—40	2.0
40—45	2.1
45—50	2.4
50—55	3.1
55—60	3.6
60—65	4.2
65—70	5.2
70—75	6.7
75—80	8.8
86—85	7.5
85—90	5.7
90—	5.4

これを以て觀る時には、自殺の現象は決して年齡の增減と共に單純な關係に存しないことに心づくのである。即ち年少の時期に於ては、先づ自殺は年齡と共に次第に增加し、二十歲乃至二十五歲に於て第一の頂點に達し、それからは又漸次減少し、三十歲乃至四十五歲に於て著しい減少を示し、四十五歲乃至五十歲に至つて再び增加の趨勢となり、年齡の進むと共に頗る規則正しい增加をなし、七十五歲乃至八十歲に至つて第二の頂點殊に一生の中に於ける最多の極度に達し、それから又年齡の增加するに從つて反對に自殺者は次第を追ふて減少して居る。かくて人生に於ける自殺の危險期は二つの時期のあるものといふべく、一は漸く成人の域に至りこれより一人前の人としての社會生活に入りかける二十歲乃至二十五歲に於て見られ、二は五十五歲乃至六十歲といふ頽齡期から著しく增加しつつ、廢頽期ともいふべき七十五歲乃至八十歲で其極度をなして居るのが見られる。

ここに於て私は思ふ。二十歲乃至二十五歲は、未だ生活の安定期に入らないで、異性に關する問題や眞面目な生存の問題に苦惱せる結果、自殺の途を選ばしめる場合が多いのであらう。次に五十五歲以上の人生は、大凡自己一生の運命に對する見極めのつく時であり、又體力の衰退から、壯年期の如き奮鬪は不可能となり、直接の生活問題から坐ろに生存の意義や價値に思ひ至り、ここに懷疑や苦惱の痛切なるものを經驗して、遂に自殺の途を選ばしめるのであらう。吾々は眞劍に自己の生存に思ひ至る時、そこに最も深刻な途に向ふものである。それが懷疑に進むか解脫に進むかは、要するに其時の境遇と其人の稟性や訓練とに因つて定まるものといはねばならない。それに反して吾々が最も奮鬪の能力を有し且社會的陶冶を得た三十歲乃至四十五歲は、最も生存の安定を得て居る時期であつて、それが又吾々をして自殺といふやうな自己否定や生存放棄や悲慘から、」

遠ざかしめる時期となるのである。尙年齡に關するこれ等の事實は、人類が宗敎的信仰に入る時期等と關聯せしめて論ずべき點に乏しくないが、ここでは單に自殺者を多く出す年齡期が、又入信者を多く出す年齡と頗る相類することをのみ述べるに留めて置く。

□死滅の嘆美

萬物生成の春を賞づる吾々は、草木凋落の秋を賞づる吾々でもある。燦然たる文化に飾られた繁榮の都に憧憬する吾々は、古都の廢墟に立つて其處此處に見られる荒敗の遺蹟に詠嘆する吾々でもある。

何人も自らの生存を喜び死を厭ふのは自然である。けれども複雜な精神を持つて居る吾々は、上述のやうに自らの生存に思ひ至る時、そこに生存の懐疑を得ることあると共に、生存の醜惡な現はれに心づき、人生は死滅に依つてのみ淨化されるといふやうな思想を得ることも少くない。かの一部の悲觀的な厭世的な人生觀には、この種のものが往々見られる。東天から明煌々と輝き出でる朝の日は醜穢に滿ちた現世の照覽に過ぎない、けれども西山に刻一刻と沈み去る夕の日は、醜穢の萬象に薄明の幕を垂れしめるものである。從つて朝の日よりも夕の日が、悲觀的な厭世的な人生觀の所有者の心には、よく徹した共鳴したものである。人の將に死せんとするに臨んで、「これで醜惡な人生を逃れ得るのだ」と滿足し、喜んで死の境に入り得る特殊な心の所有者は誠に上のやうな思想に支配されて居るのである。これが私のいふ死滅の嘆美であつて、そこに又或種の自殺が生れて來るのである。

宗敎的の信仰に基づく惑溺から行はれる自殺には、この死滅の嘆美の樣々なものから行はれることが少くない。例へば極端な斷食から行はれる修行的自殺などは、一日一日と迫まる死の境を、悠々と喜び迎へて衰滅の苦痛を忍ぶものである。而してこの種のものには、往々贖罪的思想が加味されて、死を以て醜穢に滿ちた人生の罪を贖ひ得るものと信仰し、贖罪的自殺の行はれることもある。かかるものは死のみが唯一の贖罪であるが故に、死を見ること歸するが如く、假令少からぬ惑溺と興奮とを經驗することはあつても、歡喜と慰藉とに滿ち滿ちて、或は火に飛び込み、或は淨水に投ずるのである。殊に印度のガン河のやうに、其水の淸麗が人生の總べての罪業を洗ひ去ると信ぜられて居るやうな場合には、それに投じて死するのが嘆美すべきこととされて居る。

けれども死滅の嘆美は、人生の醜惡を現世の萬象から見出さ

ねばならないから、假令其批判が誤つて居るにせよ、相當に文化に浴したものでなければ出來難いことである。若しかかる經路によらぬ死滅の嘆美であるならば、盲目的信仰から導かれた人生觀に基づくものである。從つて後者は、比較的に單純な宗敎的惑溺に於て見られることが多い。但し前者に見られる死滅の嘆美の如きは、必ずしも素直に死其ものの嘆美によつて自殺に導くものでなく、矢張り嘆美者自らの精神生活に、深い關係を有して居る場合が珍しくない。例へば自己の境遇や運命に於て何等の光明が認められないで居るやうな時に、最もよく死滅の嘆美に力を與へて來る。歡喜と繁榮と希望とに滿ちた人々の心から死滅の嘆美を求めんことは、吾々の精神生活の通則に矛盾したものである。かくて何人もが、春を捨てて秋をのみ賞で、又何人もが繁華の都を厭つて古都の廢墟をのみ好むとはいはれないのである。

□死後の悅樂

死滅の嘆美と共に自殺に關係して忽にされないのは死後の悅樂である。靈魂の存在は極めて廣い範圍に行はれる思想であつて、古來靈魂の輪廻とか不滅とか再現とか復歸とかいふ信仰は、種々な宗敎の主要な又は補助的な事實となつて居つた。この爲めに殆んど何れの社會に於ても、又何れの時代に於ても、民衆の少からぬ部分は自己の靈魂の未來に於ける運命に對して、多大の望みと恐ろしさとを感じたものである。而して自殺が、來世に於ける靈魂に關して起る場合は、常に死後の悅樂や希望を夢みてのことである。何人が、死後に於ける苦痛や悲慘を豫想して、生き永らふべき自己の生命を故らにむざむざと斷つであらうか。現世の苦悶や敗殘や廢頽の運命から、死後の悅樂や希望に滿ちた心となつてこそ、そこに自殺の意が熟するのである。「まゝならぬ此世を去つて、來世では手を取り合つて天下晴れての仲にならう」と、無理な戀愛の惑溺者が情死をするのも、「此世では添はれなかつたが、せめてあの世では一蓮托生の身となりませう」と、果敢ない二人の相愛者が情死するのも、「七度生れて賊を亡ぼさん」とか「此世では力及ばなかつたが、今度死したら惡鬼となつて報いてやらう」とか叫んで最後を遂げるのも、皆死後の靈魂に信賴すればこそ、現在の生命を故らに斷ち得るのである。

殊に佛敎に於ける極樂淨土の全美を盡した叙述の如き、又來迎信仰の說明の如き、善因を蒔いた人の善果として、如何に死後の悅樂に對する冥想を逞しうせしめたものであらう。但し私はかかる特殊な思想の普及されたことを以て、直ちに佛敎傳

來我邦に自殺者を增加せしめたといふのでは勿論ない。只吾々の社會に於ては、樣々な原因から自殺に至るべき運命のものを、自然の社會現象として常に認めねばならないのであるが、これ等が佛敎の極樂や來迎に關するやうな信仰を得て、少からぬ慰藉や希望を懷きながら、自殺を安らかに又容易に敢てすることは認められることである。元來吾々は、都合の惡い時にも好都合な理屈をつけたいのが常である、自己の生存の途に窮して自ら生存を否定せんとする場合に、死滅して後に一道の光明を發見することは、誠に眞劍の願望であるに相違ない。その一道の光明となつたものが、上に述べるやうな宗敎上の信仰である。のみならず現世に於て苦悶や敗殘や廢頽な運命を持ちながら、八方塞がりとなつた人の心は、其逃ぐべき途が何處にあらう。現世が八方塞がりで脫することが出來ないならば、現世を離れた死の轉換によつて、覺束ないながらも一方の血路を選む外に途はないであらう。かかる場合に最も好都合な受け容れられ易いものは、死後の快樂の信仰である。

全能ならぬ吾々人類は、何時もこのやうな好都合な血路を見出すことに苦しんで、然かも大方は無理ながらもそれを見出し得て居る。かくて躊躇しつゝ辛うじて生存の途の開かれて行く間は、毫末も死後の問題に觸れるをも厭つたものですら、愈々萬事窮して生存の途の閉ざされるに至るや、今更のやうに死後の悅樂に對して安々と信賴し、のみならず其處に總べての希望を投じて、徒に死を急ぐに至るやうなことが少くない。そこに吾々の薄弱な生存の根柢の見られると共に、又そこに吾々の人間らしさ可愛らしさも見られるのである。かくて死後の悅樂は、正しく吾々を最後の窮地から救ひ上げる一つの有力なものとなるのである。

□歡樂の愛惜

けれども精緻な感情生活を營む人類は、以上述べたやうな生存の苦しみや死後の樂しみなどからのみ、自殺を敢てしては居ない、もつと異つた方面の欲求が、其主な原因をなして居ることがある。私は其一として歡樂の愛惜を擧げて見たいのである。「歡樂極まつて哀情多し」とは、古來吾々の祖先が痛切な經驗の下に漏らした詐らざる言葉である。吾々の感情生活の基調は何處までも快と不快との二方面であつて、感情の動く時其何れかを經驗して居るのであつて、何人も快を求めて不快を避けやうとするのが、人間本來の至情である。けれども吾々の境遇は斷えざるの快を味はうことの出來ない場合に富むばかりでなく、假令或種の快を味はつて居ることが比較的永續するにして

も、同じやうな快に永續して接することを却つて不快とする傾向を有して居る。且吾々の感情生活は、如何にそれが自己に好ましく思はれるものであつても、其强度が甚だしく昂進する時には、極點にまで達して後に、又特殊な不快を以て迎へるやうになると共に、極點に達して快を持續することと自らが、不可能である性質を備へて居る。こゝに「歡樂極まつて哀情多し」との深刻な叫びが發せられるのである。

世上吾々が見聞する自殺に、次のやうなものが往々ある。即ちそれは多く情死の場合に見られることであるが、當事者相互間は極めて幸福な愛情の結合によつて公の夫妻となり、周圍からは何等の障碍をも與へるやうなことのないのみでなく、何れも其結合と二人の將來とに祝福して居るのに、其上二人の何れにも何等の苦悶の種の見られないのに、新婚旅行の間に何等の遺書をも認めないで、突然の不可解の情死を敢てするやうなことがある。或は又遊里などで見られる合意情死の中に、往々原因不明のものを見ることがある、即ち男にも女にも何等差し迫まつた窮狀のないのに、その日まで極めて晴れやかな狀態で居つたのに、何等の遺書もなく極めて不用意に情死を企てるやうなことがある。固よりかゝる情死にも、人知れぬ機微なところに、自殺を決行しなければならないやうな事情の伏在して居ることもあるであらう。けれども私はこの種のもの丶一つの說明として、性的惑溺からの歡樂を高調せん爲めの感激の强要を擧げたいのである。上述のやうな情死者の情死せんとした時の性的生活はこれを知るに由ないことで、他から兎角の推斷を試みて其當を得るや否やは勿論問題であるけれども、少くも感情方面を主とした特殊な性的惑溺を有して居つたことは、大體に於て認められ得ることである。のみならず歡樂に耽るもの丶「このまゝ死んでしまひたい」といつたやうな感投語は、單純な感投語としてのみ見られなくて、眞に其境を味ひつゝ瞑目するの幸福を思はせる場合もあるのである。これは性の歡樂のみとは限らないで、酩酊の歡樂に於ても、春の野に長閑かな日を浴びた心地よさの歡樂に於ても、見られ勝ちな事質である。

尤も吾々は必ずしも常に、歡樂が其極に達する時に哀情の至るべきことを豫想して、そこで極に達して居る歡樂を引き留めやうと努力するものではないが、自らの感情生活に於て、受け容れらるべき極度の歡樂に、かの極度の悲しみや苦しみに堪へられないと同じやうに、假令悲しみや苦しみのやうにそれから逃れやうとはしないのみならず、寧ろそれを愛惜するにしても、特殊の堪へられなさを感ずるのは自然である。これは悲しみの極、氣の狂ふことのあると共に、嬉しさの極、氣の狂ふことと

あるのから考へても、決して不當な推論ではないのである。こゝに私は、客觀的には不可解な自殺と目されるものゝ内で、幾分の恐らくは主要な説明となるものを認めやうとするのである。

□脅威と假裝

普通の考からいふならば、自殺程眞劍なことはない、兎にも角にも自己の生存を斷つてしまうのであるから、極めて特殊なものを除いては、何れも戯れごとゝしては見られない。けれどもこの自殺に對する所謂眞劍が時々には樣々な方向へ外れて現はれることがある。其内で最も興味のあるのは脅威としての自殺と、假裝としての自殺とであつて、兩者共其目的に於て頗る相類したところがある。即ち一般の自殺は自殺したところを他から見られるのを好んでは居ないのに、脅威や假裝に因るものは其目的が對他的のものである丈けに、多くは他から見られることを要求して居る、のみならず強いて見られんことを希望しつゝ、それに應じた手段と場所とを選ぶことが多いのである。

昔の戰爭で敵陣に取り圍まれながら、もはや防戰の覺束なきを認めて自刄の決心をなし、敵兵から最もよく見える高樓の上などへ登り、腹をかき切つた其上に、五臟六腑を摑み出して壁に投げつけ、如何にも怨恨骨髓に徹したやうにして最後を遂げるが如き脅威を加味した自殺といふことが出來る。或は、餘り怜悧でない感情性のものなどが、他から甚だしく罵しられたり辱しめられたりした時に、其者を驚かし嚇してやらん爲めに、自殺を企てることなどが間々ある。自ら死んでしまつては問題にならないのであるが、そこが一時的に昂進した感情の爲めに不怜悧を暴露した愚さの致すところである、かゝるものは婦人の場合などに見られ易いのである。尚又、辱しめを與へられたり陥れられたりして、其悔しさに自殺の途をとつたのであるが、同じく死ぬならば人が見て愕然とするやうな死にざまをして、自分を辱しめたものや陥れたものを恐れしめ、世上からもそれを悄くましめ、以て自己に同情の向けられるのを望むものも往々ある。從つてかゝるものは人に見出され易い場所を選んで自殺し、時には怨恨を感じて居るものゝ家の庭や其近くで自殺して、自分の應報が一見何人にも明瞭になるやうに企まれることもある。これ等は何れも、自殺其ものゝみといはんよりも、自殺によつて他の目的を達しやうと努められ、それが力強く加味されて居るのである。

次に自殺の假裝を述べやう。これは時に眞の自殺となり終ることもあるが、本來は自殺せんと見せるところに目的があるの

であつて、自殺其ものが目的ではない。嘗て次のやうな實例があつた。或遊蕩な男が、何時もながらの不行跡から、親戚も故舊も一顧を吳れ無くなつた、丁度其頃三四回目の情婦が出來た、然るに其情婦は藝妓をして居るもので、切りに男に强請して足を洗つて一家を持たうと攻め立てた。そこで男は及ぶ限りの奔走をしたが、何人も相談に乘つてくれるものがない。遂に已むを得ず自殺の狂言をすることに思ひ至つて、或日情婦に其旨を含め、相共に携へて相當に人通りのある道に近い池の畔に佇づみ、通行人の來るを見定めて二人は相抱いて池の深からぬところへ飛び込んだ。それを見た通行人は「待つた待つた」と急いで二人を池から引き上げると、二人は「死なしてくれ」と賴む。通行人がよく事情を聞くと、金の融通がつかなくて生きては居れぬといふので、通行人はそれは氣の毒なことだと身許へ照會した。すると親戚故舊では、それ程ならばといふので、所要の金を調達して二人を添はした、二人は自殺の狂言がうまうまと成效したのを喜んだのである。

而して一面から考へる時には、自殺といふことが極めて重大事で眞劍なものである丈けに、脅威や假裝に試みられても、それが相應に眞面目なものとして解釋され、又假令それが假裝の場合であつて、其假裝らしさの可成りに明瞭な場合であつても、それを實見したものが見ぬ様をして過ごすことの出來ないのが人の至情である、そこを又自殺の假裝者は不心得にも惡用するのである。

□自殺の劇化

吾々は相應にさし迫まつた場合でも、豫想外な一種の餘裕を持つて居ることが稀でない。自殺のやうな思ひ切つた興奮的な行爲を敢てする場合にも、可成りな餘裕さを示して居ることがある。そこで私の述べやうと思ふ自殺の劇化といふことは、其の主な一つの場合である。固よりかゝる自殺の劇化には、種々なものがあつて、これを一樣にいふことは出來ないけれども、刹那の間に働く吾々の出來心や機智や虚榮心や戯れなどが、相當に强く關係して居ることは明かなことである。强ちに死出の思ひ殘しといふやうな、はつきりした考から行はれるでないにしても、或意味から頗る要領を得た又所謂氣のきいたものもあるのである。殊に敎養のあるものによつて行はれる自殺に於て、この種のものが見られ易い。

このやうな自殺の劇化といふことは勿論種々な形式をとつて現はれて居る。一つは、自殺に至る迄の徑路であつて、故らに紆餘曲屈を拵へて如何にも業々しく、又は如何にも華々しく、

或は又如何にも自殺の原因に勿體らしさを與へ、自殺者自らはそれで以て人知れぬ果敢なき微笑と滿足とを味つて、死に就かうとするのである。二つは、自殺の方法であつて、從來餘り試みられなかつた仕方を考案して、特殊な自己の誇示をなさうとするものである。例へば或絶壁から飛んで自殺した男の如きは、先づ咽喉部をかき切つて、其上に自分の着衣へ石油を振り掛け、それに火を放つて生きながらの不動尊のやうになり、更に數十丈の斷崖から火炎に包まれながら飛び降りた。飛び降りれば確實に死を招き得るやうな絶壁であるに拘らず、このやうな複雜な手數を煩はして居る。これなどは表面に現はれた丈けの自殺の確實を得ん爲めの所爲としては、餘りに芝居じみた仕方であつて、恐らくこの自殺者も單なる飛び降りで自殺には充分であることを知らなかつたのではあるまい、殊に其絶壁の直ぐ下が通行の相當にある道路となつて居る點などから推察すると、只に死んでしまへばよいといふやうな單純なものではなくて、少からぬ劇化の加味されたものといふことが出來やうと思ふ。この種のものは決して少くはないのであつて、帝國劇場の三階から平土間の觀覽席へ飛び降りて、金持連を驚かしながら死に就からうと試みたものの如き、又は白晝淺草の十二階から、雜鬧の巷へ向つて飛び降りて自殺した如き、何れもそれ相當の言ひ分はあつたらうけれども、幾分の劇化を認めない譯に行かないのである。三つは、死に場所や死に時である。劇的傳説のある土地を背景にして、又は清淨なところや名勝のところを、わざわざ選み出して自殺したり、或は多くの人々が注意して居ることのある時に、不意に自殺したりするのはそれである。尤もかかる場合に、自殺者自らが或意味の劇的氣分を味つて居て、それを強ちに他に誇示せんと努めるやうな形跡の全然ないことも少くない。換言せば故意ならぬ自殺の劇化といふことも認められるのである。かくて劇的自殺の行はれた場所は、後にも述べるやうに、間々頻々として追從者を出すことがあるのである。

　卽ちそれが假令作爲でなく故意でないにして、自殺といふことが人生の重大事件である丈けに、自然にそれに豐な內容や意味を附加したいのが、多少敎養のあるものの至り易い欲求である。又假令「死出の思ひ殘しに一芝居打つてやらう」といつたやうな餘裕の綽々たるものはないにしても、社會的生活をして行かねばならぬ運命の吾々は、知らず識かずの間にも對社會的な方向へ導かれて行くのである。この現はれが、ここにいふ自殺の劇化といふことにもなるのであつて、それが又人類の自殺に樣々な色合を附けて行くのである。

□現世の執着

「こんな世の中に生きて行けるか」と虚勢を張つたり、「味氣ない世に住む氣にもなれない」と悄氣返つて、自分の社會に背いてしまふのが自殺であるけれども、現世への執着は種々な事實を附加せしめて、矢張り人間本來の社會生活的欲求を現はして居る。

この意味で最も興味のあることは、自殺に於ける醜態の厭惡といふことである。感情激昂の結果誇示的に行はれる自殺は例外として、死に態に可成りな用意の加へられて居ることが少くない。亂れ姿にならないやうに婦人が膝を衣服の上から固く縛つて置くのも、故らに盛裝して死に就くのも、轢死の慘しさを避けて他の方法が選ばれ勝ちなのも、同じく水死をするにも、土左衛門となつて浮き上がる醜穢を厭つて大洋航行中の甲板から投水するのも、永遠に遺骸の葬り去られ易い噴火山の火口に飛び込むのも、多くは皆死後の醜態を厭惡してのことである。死して後のことであるから、遺骸が如何にならうと、見られる場合の自分は生なき肉塊に過ぎないから如何やうでも善さうであるけれども、吾々の本性はそれでは滿足しない。自殺者自らから見れは自分を容れなかつた又自分が果敢なんだ現世であるけれども、尚そこに現世への執着は強く働いて居るものと觀ねばならない。

次に又、私はこの種の一つの場合として、自殺者の死處に於ける遺物と、死後に於ける特殊な希望とを擧げて見たい。特殊な精神病などから行はれたり、歡樂の愛惜から行はれたりするものは例外として、殆ど如何なる自殺者も、死處に又それに近き個處に何等かの遺物を留めて、自殺の表示をして置くものである。人目につき易いところに、下駄を揃へて脫いで置いたり、洋傘を立てて置いたり、遺書めいたものを殘して置いたりするのは、自殺の行はれる場合によく見られることである。勿論かかるものには、自己の近親舊知に知らせん爲めのものもある、けれども何れもが必ずしもさうでなく、全然秘密で通して死に就かうとするも、愈々死を決行しやうとなると、少からぬ現世への執着がむらむらと動いて來る、それが人間としての當然なところである。從つて近親や舊知はいふまでもなく、社會一般を怨み拔いて自殺に向ふものも、亦遺物を留めて置くことが多いのである。又遺書にしても何人に示さうといふ目的でもなく、只旅行者が深山や幽谷へ行つて、何氣なくも自己の姓名を岩に書きつけたい氣になるのと相類したやうな一時的欲望の爲めに、漠然たる意味の遺書を留めることも珍しくない。藤

村操君が華嚴の瀑布へ投ずる前に、木を削つて悠々たる哉天壤遼々たる哉人生云々と書き遺したのなどは、色々に解釋もされやうが、上に述べるやうな意味も、明かに含まれて居るものと思ふ。

而して死して後の希望に、現世への執着を見るものが亦往々ある。例へば情死したものの遺書に、「二人の遺骸は一つ墓穴に埋めて下さい」と哀願して居るものなどは、死後の一蓮托生を夢みる外に、比翼の塚として葬られ、愛情の成立を現世に於ても滿足せしめた形式にしたいと希望するのである。來世の生活に深い憧憬を以て死んだものに、尙この現世に於ける執着の現はれるところが、吾々の人間らしさの見られて興味を感ぜしめるのである。

□自殺に我儘

どうせ一思ひに死んでしまうのだから、さつさと死に就けさうなものであるが、事實は決してこんな單純なものでなく、吾々の我儘な行き方に自然と支配されながら現はれて居る。自殺は不自然に生命を斷つのであるから、大體に於て相當な苦痛を忍ばねばならない、けれども其苦痛を出來る丈け少くしやうといふのは、誰しも起すべき欲求である。

朝鮮などのやうに、嚴冬の候に零下幾十度も降る地方では、間々特殊な自殺の方法が行はれて居る。即ち冬の頃自殺しやうとする場合に、先づ夕方腹一杯濁酒をあふつて街路に眠むるのである。酩酊狀態から醒め切らぬ中に、外氣の寒威は襲つて來て凍死狀態に入らしめ、酩酊の心地よさと凍死に至る眠むたさとで、朦朧たるままに死んでしまうので、極めて安々と自殺される道理である。僅かな費用で、且さしたる醜態をも示さないで、目的を達することが出來るのみでなく、心地よさの中に死期に入り得るところに、朝鮮の下層民などの心づきさうなところが窺はれて興味があるのである。「どうせ死ぬなら安樂往生を」といつたやうた欲望は、決してこのやうな場合のみでなく、何處の國でも見られて居る。魔睡劑の使用の如き、其例といふことが出來る。

熱さ寒さといふことと自殺の仕方との關係から見ても少からぬ人間の我儘さが見えて居る。卽ち夏と冬とを比較して見ると、夏には割合に水死が多く行はれるのに、冬になるとそれが著しく減少して居る。今一例として東京府下に於て行はれた入水に因る自殺を、各月に於ける既遂の自殺數に對する百分比の割合で計算して見ると、大體左のやうな結果となるのである。

月	大正四年	大正五年
一	14.2	30.1
二	23.8	29.8
三	29.0	25.6
四	43.4	45.5
五	43.3	38.0
六	47.1	46.2
七	45.2	43.3
八	53.8	45.0
九	37.1	43.3
十	37.5	40.0
十一	38.3	24.4
十二	27.0	8.5

卽ち年によつて幾分の動搖のあることは明かであるが、冬期に水死が少くなつて、夏にそれが甚だ多いといふことは爭はれぬ事實である。これは限られた東京府の僅二ケ年のみの現はれ方であるが、他の府縣も又何時も、殆んどこの例に一致して居る。かくて同じく自殺するのにも、寒い時には冷い水死の避けられ勝ちな傾向のあることを認むべきで、かかる際にでも吾々の自然の性質を示して居る。

次に又、同じく死に方を考へるにも、脅威や假裝や又或種の劇化によつた自殺を除いては、成るべく自殺の決行に好都合な方法が選まれる。「誰か助けて呉れるかも知れないから人目の多いところでやらう」などといふやうな自殺は、自殺の本來の心理を脱したものである。かかる場合の例として注意すべきことは、人口の稠密な都會地を主とした地方と、人口の稀薄な村落地を主とした地方とでは、自殺の行はれ方に著しい相違があるのである。私は假りに人口の點から見て、大都會を主とした地方の例として、東京府と大阪府と兵庫縣とを擧げ、村落を主とした地方の例として、鹿兒島縣と千葉縣と靜岡縣とを擧げて見たい。何れも河川を有し又は海に多く接した點では相類した地方である。ここに擧げたのは大正三年度の統計であるが、他の年もこの種の關係は大體に於てさした變動は見られないのである。

		水死	縊死
東京府	男	205	221
	女	155	66
大阪府	男	141	145
	女	155	60
兵庫縣	男	110	167
	女	133	61
鹿兒島縣	男	5	95
	女	14	46
千葉縣	男	39	113
	女	37	30
靜岡縣	男	3)	114
	女	54	45

卽ち東京府も大阪府も兵庫縣も共に、男の自殺者は、水死と縊死と其數が接近し、女の自殺者は、水死の方が何れも縊死の二倍以上になつて居る。これに反して鹿兒島縣も千葉縣も靜岡縣も共に、男の自殺者は、水死が縊死の約四分の一にしか達して居ない、殊に鹿兒島縣では極めて水死が少數となつて居り、女の自殺者は、鹿兒島縣は水死が縊死よりも遙に少いが、他の二縣は僅かに多いのに過ぎない。かくて前の三府縣と彼の三縣の相違點を見るに、大都市の存すると否とか主たる相違になつて居る。而して前の三府縣は、人口の點からいふても、自殺者が

大都市に於て最も多く現はれるのはいふまでもない。かくて私はこの事實を、大都市を主とした地方では、縊死が人目の關係と其適當な死處の關係とから割合に少くて、村落を主とした地方と反對に、水死が選ばれるのであらうと思ふ。

更に又、統計にも表はれて居るやうに、男と女とを比較すると、女は男よりも大體に於て多く水死を選んで居る。これも亦男の性質と女の性質とを考へて、縊死と水死との相違に及ぶ時には、自らそこに自然的な行き方をして居るのに心づくのである。

□死神の誘惑

自殺を考へる上に、死神の誘惑といふことを忘れてはならない。「彼處はよく人の死ぬところであつて、何となく引き込まれて死ぬ氣になる」とか「彼處で物思ひに耽つてゐると魔がさすのだ」とかいふ話は、普通の談話にも往々上ぼることである。固より私は死神を認めやうなどとは思はないが、上述のやうな事實の存在は、これを暗示の影響として認めるのである。

何れの國でも大凡自殺の行はれる名高い場所がある。我邦でいふならば、關東では海で由井ケ濱と山で日光や淺間、關西では海で須磨の浦や和歌の浦、九州では山で阿蘇などが、天下に聞えた自殺の場所となつて居る。其他又地方地方でも彼處の淵此處の池といつたやうに、自殺の繰り返へされる所謂魔の場所があるものである。これ等の場所の中には、名勝舊蹟等で人の多く集り勝ちな處もある、又此世に希望を失つた人々が、最後の心遣りに見物に來る機會も亦あり勝ちである、從つて自殺者が多く現はれるのであらうと。これも一應の理はある、けれども天下の名勝舊蹟が必ずしも自殺の流行地となつて居ない點から見て、正當な解釋とはいはれない。今、自殺の名所となつて居るやうなところを觀察するに、多くは世人の注目を惹いたやうな自殺の先驅者があるのである。例へていふならば、藤村操といふ一青年が華嚴の瀧に投じ、それが當時の教育家や思想家の問題となつて、喧傳されるやうになつてから、其追從者を頻々として出すに至つた、又須磨の浦で不幸な嫁が入水したことがあつて、これが新聞や雜誌などで喧傳され、活動寫眞にまで演ぜられるやうになつてから、特に須磨の浦に婦人の入水者が多くなつたといはれて居る。

尤も自殺の名所となつて居るやうなところは、如何にも人間の小を嘆ぜしめて自然の大に感ぜしめるやうな光景や、夢の如く幻の如く冥想に耽つて居るものの心に適したやうな自然や、決行すれば必らづや失敗の醜態を暴露せずにすみうな狀態など

を備へて居ることが珍しくない。斷崖に立ち、急流に臨み、瀑布の奔落に面して、其時に經驗される特殊な視覺の爲めに、死ならうか死ぬまいかと迷つて居たものが、決行の機會を得ることも固よりないことではない。けれども多くの自殺者を遙々と遠方から死に場所として招くには、矢張り自殺者の心に共鳴したやうな先驅者のあることが、極めて有力なこととなるのである。暗示の力の如何に強く、又模倣の作用の如何に著しいかを、樣々な他の社會現象の上に於て知る吾々は、それを自殺の上にも認めない譯には行かない。かくて死神の存在を、吾々の祖先が思ひついた程に、或一定の個處に於て多くの自殺の追從者を生ぜしめるのである。

この事實は又裏面からも觀察される。かの自殺の名所として相當に世上に傳へられて居るところであつても、一二回自殺が失敗に終つたり、甚だしい醜態が暴露すると、從來のやうに自殺者を多く見なくなることがある。或は又一つの森に幾本もの木があるのに、其中の或一本で二三回自殺が試みられると、それが死神の宿る木となるのであるが、然もその木が切られてしまうと、もはや追從者を出さなくなることが少くない。これ等の事實から觀ると、自殺の決行が滯りなく行はれたことや、前に自殺した人のある經歷などが、有力な暗示となるといはねばならない。

(二) 文化と自殺

文化の進步と共に自殺が增加するとは、多くの論者の主張するところである。私が初めに述べたやうに、自己の生存を知る人類に於てのみ自殺が見られ、殊に自己の境遇や運命を反省し得るものに於て普通に現はれ易い事實から推しても、文化の進步に伴ふ自殺の增加を、大體に於て認めることが出來る。けれども十年や二十年の文化の發達を以て、直ちに自殺の增加を知ることは困難である、又文化に浴して居る民族と其然らざる民族とに於ける自殺の多寡の問題も、民族性の相違や生活狀態の相違から、直ちにこれを斷ずることは出來ない。我邦も最近に至つて急劇な文化の發達を見るに至つたけれども、未だ自殺の數を顯著に增加せしめる程、明瞭な影響は現はれて居ない。今明治三十二年乃至大正二年に至る十五ケ年間の我邦に於ける自殺數を、人口一萬について見るに、次のやうになつて居る。

年度	自殺割
明治三二	1.89
三三	1.88
三四	1.88
三五	1.90
三六	2.11
三七	2.14
三八	1.90
三九	1.84
四〇	1.88
四一	1.94
四二	2.10
四三	2.11
四四	2.08
大正元	2.11
二	2.23

即ちこれによつて見る時は、年を追ふて著しい增加は見られな

い、けれども明治四十一年以來幾分の増加的傾向を示して、それが再び明かな程度に於て減少して居ないこと丈けは、認めることが出來るのである。

かくて自殺は、少くも我邦などに於ては最近に著しい減少は見られなくて、寧ろ増加の傾向となつて居るが、これは固より文化による民衆の覺醒に伴ふ結果とも見られる、けれども所謂文化の影響たる生活上の困難や煩雜や過勞や苦惱などを忘れてはならない。これ等が吾々の精神生活を混濁せしめ狂亂に向はしめ易き事實は、現代の如き文化に伴ふ社會生活からは、今後愈々益々濃厚に且深刻に迫まり來るものと認めねばならない。この意味で今後の人類は、其祖先よりも生きたい生きたいといふ本然の欲求を捨てなければならないものを、頻々と輩出せしめるやうな運命を持つて居るものといはねばならない。

自然界の恩惠にのみ任された素樸的な經濟狀態では、吾々人類は其恩惠の淺かつた時に於て悲慘な饑饉に遭遇して、已むを得ざる不自然の死を招くものが少くなかつた。文化の進歩につれて自然界の恩惠に少からぬ制御を加へ、發達した經濟狀態を現出するに至つて、又往々其複雜な經濟狀態に突然な恐慌を招き、その爲めに素樸的な社會生活者の夢想だもしないやうな敗殘者を生じ、ここに少からぬ精神的打撃を受けたものや自殺者を出すやうになつた。かかる場合に自然は、人類の遠き將來を眺めて、特殊な微笑を洩らすであらうか、將た又特殊な同情を起すであらうか。

最後に文化と自殺との關係は、自殺の方法に於て漸次新しきものを加へることの方面に、吾々を注意せしめる。卽ち人類は自らの向上發展の爲めに、苦心を以て研究した結果に依つて、自已の生存をも斷たうと企てる矛盾を持つて居る。例へば治療の爲めに作られた藥品が、自殺の材料として使はれる、生活改善の爲めの電力が、自殺の爲めに用ひられる、交通發達の結果たる汽車が、自殺の道具にされる、今に自殺の爲めに、飛行機の使用されることも起つて來るであらう。

不可思議な現象と解される自殺には、このやうに樣々な興味ある問題が關係して居る。私は、陽春五月といふ我邦では一年の中自殺の極めて多い時に臨みながら、其上に又、經濟狀態の甚だしい變動の起つて居る社會を見ながら、この興味ある自殺といふ大問題を取扱つて、不完全ながらも人生の一つの側面觀をした積りである。

新任二大臣一總裁

文學博士　三宅雪嶺

口

二大臣一總裁の新任は平凡のやうで、實際政局に何の價値ないやうで、原首相の苦心の餘に出て居る。更迭でなく、新に三つの職を設けた丈けであり、其職も從來の職員又は新たなる職員で結構爲し遂げ得るのであり、結構と云へぬにしても前と變りのない丈けに爲し了せるのであり、長官は殆ど全く印を捺す役に止まる。長官自ら事〻決定する時は、餘り善からぬ事情の附き纏ふを示す。今に始まつた事でなけれど、原首相の遣り口は、如何に國務を擧げるかよりも、如何に位置を維持するかを念とする。原に限つた事でないとし、原の此遣り口を見遁す譯に行かぬ。如何に國務を擧ぐべきかと云ふに重きを置かぬのに一理ないではない。今は以前と違ひ、大臣の手腕次第で國家が盛衰するやうな事はなく、普通り考へるのは、皮相の見を免かれぬ。如何なる才人とて出來る事は出來、出來ぬ事は出來ぬ。國運の發展は國力全體を以てする。日清戰役は伊藤が起したのでなく、日露戰役は桂が起したのでない。國家は一人を以て興り、一人を以て亡ぶと云ふが如き、漢學者の口吻であつて、事實を失ふも甚だしい。何人が出てたとて成る樣にしか成らず、強いて國務を擧げようとするなど、無理な註文であり、擧がる時は誰の手でも擧がり、擧がらぬ時は誰の手でも擧がらぬ。原首相はかう極め込んで居り、人に望むに大いなる働を以てせず、其場に適する人を置きさへすれば可いとする。閣員中誰某が不適任とか無能とか云へば、原首相は冷かに笑を噛みしめる。それを更迭して何が出來るものかとの意味合である。誰が代つたとて現在以上の事を爲し難いとする。彼は閣員を信賴し切つて居る形があり、閣員も之を德として居る。之が比較的地位を固くする主要の事情にも成つて居る。二大臣一總裁を擇ぶにも、全く此調子に於てする。別段之れぞと云ふ事もなく、有つても無くても變りないと考へられるが、國務上にこそさう見ゆれ、位置を固めるに隨分考へた跡がある。元田氏を鐵道大臣とし、小川

氏を國勢院總裁とし、それで何の成績が擧がらうと誰しも思ひはせぬ。要するに官職の増加した丈け黨員を當篏め、黨勢擴張の一端に供する事になつて居る。

□

併し全く職務上について考へぬのではなく、之れならば別段の間違なからうと考へた所もある。元田は鐵道に就いて特別の知識あるべきでないが、問題の起るに臨んで全く理解し得ぬ方でない。鐵道は政友會が地方に一つの食餌とする所にして、選擧區の興廢は往々之で決する。政友會に屬して居りさへすれば鐵道を敷く事が出來ると考へる者が尠くない。各々自分の立場より利害を考へ、之を申出して來る。互に各々線路を敷かねばならぬとして爭ふ。元田氏は廉潔と稱すべきでなくても、利益問題で腹を肥やす者の中に在つて、割合に惡い事をせぬ。種々の事情から考へて、元田ならば先づ安心といふ所がある。際立つて之れぞといふ所なく、案と云ふ案は概ね下から呈出するのであつて、鐵道政策が何う成らうと、元田に希望を囑する事が出來ぬが、憖じ實業關係の者にやらすよりも弊が無い。鐵道に就いて通を振舞はす者は、兎角儲けようとする。元田は相應に人の話が解り、而して餘り儲けに焦せらぬので、藥にならずとも毒にならぬと見られて居る。然し鐵道は地方への食餌である丈け、黨の利害をも考へる必要があり、頭から正不正を以て判斷して貰ふても困る。元田は儲けようとしなくても、いろ〳〵と事情を考へ、黨略上已むを得ぬとして許し、或は大目に見て置く事があらう。餘り儲けに焦せる者は國務に與らしめてはならず、さりとて凡ての事情お構ひなしとあるのも困る。平氣で不正な事をする方でなくても、野暮を云はぬ位の呼吸を呑み込んで居らねばならぬとする。原首相に於ては、元田を篏り役と見立てたであらう。

□

小川氏の國勢院總裁は看板丈けとしか思はれず、總裁が冗員でないかとも云はれる。國勢調査に就ては何程の知識無い事は知れ切つて居り、院務を總括するの名稱を得る丈けであつても、之れ亦全く職員の言ふ事が解らぬ方でない。國勢調査は專門とすべきものであるとし、事柄が複雜してる居る丈けの事、常識で判斷し得ぬ性質のものでない。餘り輕蔑した程のものでない。事務を擧げようと努めたならば相應に擧げるであらう。專門家の名ある者よりも適當な事が無いとせぬ。專門家は自分獨り承知し、人の迷惑を構はぬやうな事があつて困る。全く分らなくても仕樣が無けれど、小川で相應にやつて行けるでないかと原首相が云ふであらう。元田とて小川とて、管轄事務について何程

も知らぬやうでも、無能の名を下すべきでなく、政黨から擇び出しては其邊りが有能であらう。原首相は單に能不能を考へず、政友會内に於ける位置をも考へたのであつて、此邊ならば一般に承知するであらうと見て取つて居る。何でもないやうでも古參連に安心させると共に、新參者に希望を懷かす所がある。舊い者でも濫りに捨てず、相應の經歷ある者は相應の取扱ひする事を怠らぬといふを明かにし、同時に少壯者をして働き甲斐あるかに感ぜしめようとする。元田も隱居役として外調丈けに片着けて置いては、古い連中が面白く感ぜぬ。前に望が無いやうに思ふ。元田でも未だ十分に働けると見せる所で、原もなかく頼みになると思はれる。然しそれ許りでは固定し過ぎる嫌がある。小川は若くもなけれど、衆議院議員中最も多數を占むるのは五十以上五十五といふ位の所では、若手の中に加はる。大岡か小川かと云ふ場合、後者が少壯者側に列する。少壯者の隊長らしくもある。其上北信八州會の關係があり、小川に位置を與へるのは政黨を纏めるにも都合が好い。小が平と云ふて冷評かし言葉にするが、其小が平を親任官にする所で原の手腕が顯はれる。政友會内では小が平でもあの通り、われ等も何時か相當の位置を得るであらうと樂しんで居る。□

元田と小川とは黨略上からも考へたのであるが、大木伯を司法大臣にしたのは、之と違つた考に於てする。之も全く職分の適不適を考へぬのではなく、彼ならば相應にやつて行けようと思つた所がある。司法省は先代からの關係があり、省内で惡い感じが無い。而して普通の華族と違ひ、判斷力もあり、一種の氣慨もある。肌合ひの面白い所がある。司法部内は固定する程に固まつて居り、惡く云へば惡固りに固まつて居るが、若し大臣に何等かの膽力を要するとあれば、大木は一應之を具へて居ると云へる。年齡が長じ、家計も豐かでなく、前ほどやんちやを云はぬにしても、時として自らの存在を明かにしようと勗めるであらう。先代は自ら守るに長じ、苟くも他から攻め來れば何とかして之を禦ぎ、容易に隙を見せなんだ。薩長藩閥の中で位置を占めたのは、伴食としてでなく、自ら能く位置を守つたのに由る。教科書で失敗したのは、猿が木から落ちたのに過ぎぬ。今の伯は先代の知識なく、又其手際はなけれど、豪快な所で人好きがする。或る肝要な場所で際立つた事を爲るであらう。然しそれ丈けでは原首相にだて安心がならぬ。飼犬に手を嚙まれる惧がある。そこには家計の豐かならぬ所よりしてか、株式の事情が附き纏つて居る。之れは伯許りでなく貴族院にいろいろあり、大連でも問題になつて居る。大木は不正な事を爲る

氣か無いが、政治界は斯くの如きもの、杓子定規で通つて行けるかとの肚がある。強いてこだはるのを野暮臭く感ずる。政治家たる者がさういふ事に拘泥して堪るものかと大きく出でる所に、原が乘つて出る餘地がある。事情を說かれゝば已むを得ぬとする。脫線するやうで案外融通が利き、或ひは利き過ぎはせぬかと疑ばれる。然し貴族院での逸才たるには相違なく、原が之を大臣に引上げたのは、手並の程を見せて居る。曩きに互選で落選した者を大臣にするなどアヂなやり方とする。原の性質を知るので別段の事に思はぬが、他人が大木を入閣させたとあつては、隨分の奮發と思はれたであらう。

□

然し原はあながち大木の人物に見る所あつての事でなく、明かに貴族院を操縦するの意を含んで居る。決して研究會の代表者としてゞなく、斯かる事を爲し得べきでないを承知して居る。研究會と交涉し、代表者を出さうとせば、事の纏り樣がなく、面倒の起る許りである。原はそれ程單純なる男でない。大木を法相にしたのは種々の事情よりするが、池に麩を投げ、或る緋鯉に食べさせたといふ所がある。他の多くの緋鯉に相談したのでなけれど、他の緋鯉も其邊に麩が落ちて來るかとまひ／＼して居る。斷念して他方に泳ぎ出すまでに程がある。大木伯を大臣としては之と同等以上を以て處る人々は、何時麩が落ちて來るかも知れぬぞと、待つとはなしに迂路ついて居る。位置に限りがあり、澤山與へようもなく、之を望む連中は失望するを免かれぬが、當分希望を繫いで置けば可い、何時までも繫ぐに及ばぬ。其内に世間の事情も變つて來る、何とか仕樣もある。貴族院議員中いろ／＼の不平があらう、研究會でも不平を云ふのがあるけれど、原に取つて只不平を云ふのは何程にも應へぬ。不平は云ひたいものであつて、云ふのに無理がないとする。然し大木に食餌を與へた以上、不平連も遠くに去るまいと多寡を括つて居る。不平を云ひつゝ內閣の爲す所に附いて來るであらうと考へて居る。貴族院に原の裏を搔く者があるか何うか。臨時議會でいくらか樣子を察し得るが、今のところ原の計略が圖に中つて居るらしい。三人の新任は平々坦々、何の企みもないやうで、隨分趣向を凝して居る。原も此邊でなか／＼の凝り性と見える。

時論

法學博士　吉野作造

總選擧の結果に就いて

總選擧の結果に就いては、新聞紙上などに於て相當に論評し盡くされて居ると思ふから、玆には唯一般政治的進歩と交渉ある二三の點を觀察して置くに止める。

第一、總選擧の結果が政友會の誇稱するが如く國民の判斷其物の枉げられざる表示でないことは云ふまでもない。今次の有權者は國民の一小部分に過ぎないといふ非難は、必ずしも當らない。何故なれば有權者は制度の精神上一般國民を代表する意味のものであるから。然し事實の問題として今度の爭點となつた普通選擧問題に就いては、無權者の殆と全部が投票の結果に不滿である事は明白であるのみならず、有權者と雖も、少くとも政治の事を積極的に心配して居る程のものは、概して普選論に贊成であつた事も略ぼ疑いない。此點に於ても選擧の結果は國民の本當の判斷と違ふと云ひ得るが、併し此點は明白に證據を上げ得ないのだから姑く別問題として置かう。吾々の何うしても見逃す事の出來ない點は、由來我國の選擧は何時でも政府の勝利に歸するやうになつて居り、國民の自由なる判斷の結果が政府を左右すると云ふ事が絶對に行はれて居ない點である。選擧は國民の自由なる判斷の表示である。之れ有ればこそ選擧は國民の意見を問ふといふ意味もあれ。然るに我國に於ては此大事な自由が事實國民に與へられて居ない。何故なれば國民は消極的には此意味に訓練されて居ない。のみならず、更に積極的にいろ／＼巧妙なる方法を以て、知らず識らずの間に自由意思の活躍を遮げられて居る。即ち我國の選擧は國民の判斷を求むる爲に行はるゝのではなくして、政府が自分により好き境遇を作る爲めになす所のものである。鹿爪らしく國民の判斷を問ふなどと云ふのが寧ろ滑稽である。況んや勝つたとて國民の信賴我に厚しなど﹅誇稱するに於ておや。

第二に總選擧の結果は國民の本當の判斷とは何の關係も無いが、然し國民の判斷を問ふと稱して解散し、又其勝利を國民的信賴の表示と吹聽するものに對しては、何處までも其論理を一

貫せしめなければならぬ。都合の好い時には國民の判斷を云々し、都合の悪い時には之を捨てゝ顧みざるが如き行動を許すのは、啻に之を敢てするものを憎むべしとするのみならず、政治道德の維持の上に遮げがある。玆に於て吾々は絕對多數を下院に占めた政友會の今後の行動を監視することが必要である。道塗傳ふる所に據れば、政友會は全盛の絕頂に登り詰めたを期として內閣を官僚に明渡すだらうと。此方法は次の機會に樂に再び政權を掌握するに好都合ではあらうが、併し斯ういふ事は吾々の政治道德の觀念からは許し得ない。國民の判斷乃至其信任が大事だと云つて議會を解散までした政府が、更に一層大なる信任を得た形になつて居るのに、何ぞ內閣を退く理由があるか。國民の信任を楯として倚ほ一層政權に嚙り付くのは可い、拋げ出す道理は更に無い。吾々は單に之を議論上から迫る許りではない。政友會が行く所まで行く事が、一つには官僚との押合ひを排斥する事であり、又一つには政友會に對する國民の批判を明確ならしむる所以であると信ずる。

第三に政府側の干渉は相當に猛烈であつたやうに見える。無論小選擧區になつたので取締りは樂になつた、從つて違反は少い。警察官憲は此事を指摘して、今度の選擧程公明正大に行はれたものは無いと云つて居るけれども、吾々の觀る所に據れば干渉は餘程巧妙に行はれて居る。其事實は蔽ふ事は出來ない。殊に之は田舍に多い。巧妙とは干渉らしくない形を取つた事を意味する。同じく人の首を絞めるでも、荒繩で締める法もあれば、眞綿で締める法もある。同じく人を殺すでも、刄を以て切る法もあれば、遂に自殺せねばならぬ境遇に陷れるといふ法もある。前者の場合は殺人の罪に問はるるけれども、後者の場合は我關り知らずと濟まして居られる。反對黨の有力な運動者を縛り上げるといふは稍露骨な方法だけれども、何といふ理由なしに警察へ毎日のやうに喚び出して下らない事を訊くなどは、形は用が有つたから喚んだと云ふに過ぎないけれども、實際の效果に至つては立派な干渉である。僕は或田舍の町へ選擧最中學術講演に行つた。警察官憲は講演の結果が選擧に影響あるべきを思つてにや、陰に陽に干渉の手を加へた。其內少しでも政談に亙つたなら中止を命ずる意嚮があつたので、僕は講演の初め日本の法律が特別に取締る所の政談とは單に政治に關する談といふ意味ではない、何を政談と云ふかは警察官よりも僕の方が熟く知つて居るから安心せられたいと云つたので幸に事無きを得た。が、後、他の地方に於て僕の能く知つて居る警察關係の役人に、普通の政談と日本の法律が取締る政談との區別を御存知かと聞いたら、知らないと答へた。そんなら何うして取締

るのかと反問すると、まあ政府に都合の悪い講演の時之を政談として取締つてさへ居ればいゝのだといふ答だつた。此一例を以て他を推す譯には行かないが、干涉といふ證據を捉へられないやうな形に於ける干涉は相當に激しかつたと思ふ。

第四に注意すべきは、以上の如く直接間接の干涉が激しかつたに拘らず、豫想外れの非常に多かつた事である。政界の古剛者として、又運動上手として何の點からも當選確實を豫期せられた人で落選した人が可也ある。政府の保護の下に莫大の金力を擁して、所謂鬼に金棒の觀ある御用候補者の落選したものも亦た甚だ多い。而して是等の人々の落選によつて出て來たものは、多く所謂年の若い新人物である。此現象は何事を語るかと云ふに、選擧民が政黨の仕事師の計劃通りに動かないといふ事と、從來の經歷や金や權力よりも青年の元氣を歡迎するといふ事を示すものである。此新しい機運に促されて出て來た人物は、最新の文明の空氣を呼吸して居るといふ事の外、餘り取る所の無い人かも知れない。落選した先輩に比して甚だ遜色あるとしても、然し斯ういふ人々が出られるやうになつたといふ事は、確かに一の進步であると思ふ。世間では目前の結果のみに就いて兎や角云ふを常とするも、兎に角選擧民の自由意思が段々政黨の計劃に反抗するやうになつたといふ事は、何うしても之を慶ぶべき現象と認めざるを得ない。やつと自由になつた許りの選擧民の考が當初多少判斷を誤る位の事は怪しむに足らない。彼等はやがて選擧の經驗を度び重ぬるに從ひ、だん／＼聰明を開發して、立派な人物を生ずるやうになるだらう。

之と關聯しても一つ注意すべきは、今度の選擧戰で自由意思を最も活躍せしめたものは三圓階級、詳しく云へば新選擧法の納稅資格低減に由つて新たに有權者となつた階級であるといふ事である。之も數學的に證明は出來ないかも知れぬが、大體の觀察として誤りない。又吾々の豫ねての確信から云つても、選擧の腐敗といふものは選擧民が進んで之を敢て爲るものでなくて、所謂政治家から誘惑されて初めて之を爲すものだから、從來の選擧權者が寧ろ多く此弊習に泥み、新たに權利者となつたものは比較的潔白な筈のものである。而して此事が今度の選擧戰で幾分證明されたとすれば、そは結局普通選擧の立場を支持する材料になる。

尤も右述べたやうな豫想外れの現象は都會の一部に限り、全體としては豫想が當つたのが多い。だから政友會は豫定通りの絕對多數を占めたではないかと云ふものがあらう。成程それに相違ない。故に物事を分量的にのみ觀る人は、今尙ほ選擧界の曖昧を斷定するに相違ない。然し數の多い少い丈けを以て物事

を判斷しては不可い。一葉落ちて天下の秋を知るといふ事があるが、たつた一枚の葉でも春落ちたのでは偶然の出來事に過ぎないけれども、秋落ちれば爾後の風物の前兆として大いなる意味を有つ。今日都會の一部の青年階級が大いに政治的に開發したといふ事は、之れ正に天下の秋を表徵する前兆ではないか。若しも此事に氣附かずして政黨者流が尙ほ依然として舊式の懸引きに甘んずるならば、此の次きの選擧では必ずや意外の失敗を招ぐだらう。

終りに今度の選擧戰で最も刮目すべき現象は青年の活躍であつた。中には輕跳浮薄な動機に出でたものもあらうが、大體に於て吾々は之を舊式政治家の傳習的慣行に對する、純眞無垢の青年意氣の反抗と認めざるを得ない。而して彼等は起つて先輩排斥に突進した。凡ての古き物を打破せんとして菽麥を辨ぜざるの嫌はあつたらうけれども、之に依つて政界の惰眠を驚かした功は蔽ふ事が出來ない。若し都會の一部に於て豫想外れの現象を見たとすれば、それは多く是等の青年の運動の結果である。尤も選擧界に於ける情弊の久しき、一朝一夕に之を拔き難い。彼等の非常な努力に拘らず、其實效が意外に少かつたのは吾々の遺憾とする所であるけれども、然し吾々は彼等の努力の效果はこの次ぎの選擧に著しく顯はれるだらう事を豫期して、內心私かに滿足するものである。

日支學生提携運動

先月央ば東京に於て日支學生提携運動なるものが起つた。事は北京大學學生卒業生五名が我國學生並に青年思想家を訪問すべく來京したといふ事に端を發する。數度會見を重ねて大いに疏通共鳴する所あり、今後は彼我相往來してます／＼親善の實を擧げ、並に東洋文化の開發の爲めに協力すべき事を誓つたといふ事である。

すると政府の方では何ういふ譯で此種の運動を國交に害ありと觀たのか、此夏休みに同じ目的で支那に遊ばうといふやうな學生があつたなら成る丈け之を阻止するように、といふやうな通牒を各大學に發したさうだ。兩國學生の提携する運動は國交に害ありとでも觀たのであらう。

去年の暮から本年の春に懸けて、東京帝國大學の學生二名支那に遊び、上海に於ける學生聯合大會に臨み一場の演說をした。之が駐在日本官憲の忌諱に觸れ、斯くの如き者の渡來は甚だしく國交を遮げる原因となるから、以後は斯ういふ種類の者を寄

起さないようにといふ注意が來たと聞いて居る。

今日日本と支那とが精神的に大いに阻隔して居る時に、只纔かに青年學生の間に意思の疏通を見んとして居る。而して官憲は之を國交に害ありと云ふ。果して此種學生の提携運動は、兩國民族本當の親善を害するや否や。

今日支那と日本とが甘く折合つて居ない事は隱れもない事實である。全體としては甚だ仲が惡いが、其中に在つて仲の善い階級が二つある。一つは昔から久しい腐れ緣で繫つて居る兩國の官僚軍閥である。一つは昨今新たに諒解の端緒の着き懸けて居る青年學生の提携である。而して兩國の一般國民は官僚軍閥を繫いで居る腐れ緣が、實に兩國の本當の親善を阻隔し、併せて東洋の平和を脅すものであると信じて居るに對し、官僚軍閥は又青年の提携運動を以て非常に危險なものと觀て居るのである。

支那の官僚軍閥は、日本のそれが日本の國民に不評判なる以上に、支那國民に不評判である。又事實日本の官僚軍閥が爲す以上に、彼等は自家階級の利益の爲めに國利民福を犧牲にして居る。そこで甚だ國民の非難を蒙つて居るが、之にも拘らず政權を擁して我儘を押通し得る所以のものは、他國の直接間接の援助を恃んで居るからである。而して日本の官僚軍閥は支那の形式上の政府を援ける事が卽ち其代表する支那民族を援くる所以なりとの錯覺に陷り、稀には惡意を以てする者もあらうが、多くは支那の爲めに計るといふ善意を以て支那の官僚軍閥の橫暴を援けつゝある。斯く觀て支那の志士は、自國の官僚軍閥を憎むが如く亦我國の官僚軍閥を憎む。而して最初は只これ丈けの理由で日本を憎み、夫の排日運動の如きを起したのであつたが、昨今はだん〳〵東洋の平和とか世界の文化とかいふやうな高い見地から、官僚軍閥に通有なる一種偏僻な思想を排斥するといふ風に變つて來た。是に於て彼等の立場は遂に吾々の立場と合致するやうに成つて來たのである。吾々は何故に官僚軍閥の侵略主義に反對するか、又何故に從來の政府の對東洋政策に反對して來たかは更めて說明するまでもなからう。要するに吾々は彼我兩國の官僚軍閥の提携を東洋の平和を攪亂する禍根であると考へて居る。それにも拘らず兩國の官僚軍閥は民間の反對あるや、自衞の必要からでもあらう、ます〳〵提携を深くして、而して彼等の提携は卽ち兩國の親善なりとする一大錯覺より醒めない。自分達の立場に反對する者があれば、直ちに之を兩國國交の防害者と看做す。而かも彼等の所謂國交を深くすれば深くする程、兩國民全體の阻隔は大きくなる許りである。

官僚軍閥の間違つた政策に累せられて、兩國の間柄は永く親しまなかつた。而して其事からいろ〳〵の苦しみと禍とが出て來るので、堪へられなかつた。何とかして親善の實を擧げやうと苦心したが、軍閥と軍閥とが結んで居る間は如何ともする事が出來ない。而して軍閥提携の行詰りは猛烈な排日運動となつて現はれたが、斯うなると軍閥者流がます〳〵焦せる。彼の國の軍閥をして高壓的に此運動を抑へやうと努めたけれども、效果の擧るべき筈は無い。此際に於ける吾々の立場は、本當の親善を擧ぐるの途は先づ自分の過を反省するといふ所から初めなければいけない。換言すれば侵略的對支政策の非を十分に承認する所から初めなければいけないといふのである。さうすれば必ずや吾々は支那の諒解を得る事が出來やうといふのである。此考に對しては隨分激しい反對を受けたが、結局吾々の考は酬ひられた。尤も吾々は支那の靑年學生が猛然起つて排日運動を起すや、この感情的に昂ぶつた排日的暴論の中にも、精密に觀察すると侵略主義の排斥といふ一種の道德的立場の潜在するを認める。即ち彼等も亦吾等と共通の思想的根據を有するを認めて、彼等も亦話せば譯るといふ感を抱いたのである。此自信の上に立つて吾々は、本當の日支親善は官僚軍閥を捨てゝも、寧ろ是等の眞面目なる靑年即ち第二の國民は提携すべきである事を唱へたのである。多少此點に國民の反省を促すべく努めた事は、本誌の讀者の記憶して下さる所であらう。

是等の運動の結果にや、支那の方でも日本に對する考がだん〳〵變つて來た。初めは日本人は徹頭徹尾侵略主義者であると認め、猛烈に排日の氣勢を揚げたのであつたが、だん〳〵日本にも彼等と思想上の立場を同じうする者ある事が解り、彼等はだん〳〵吾々は日本人の凡てを排斥するのではない、官僚軍閥の橫暴に反對するのであるといふやうになつて來た。日本にも侵略の日本と平和の日本とあるといふ事は、朧氣ながら彼等の認むる所となつた。今まで日本は侵略主義で一貫して居ると考へて居つた誤を覺つた。而して從來の日支親善は、兵權を擁して萬民を虐ぐる支那の軍閥が侵略の日本と提携する事を意味したからいけない、是からは平和の日本と吾々が提携する事にならなければならない、之が本當の日支親善であるといふ風に考へたのである。斯ういふ風な考は去年の夏頃から兩國靑年の胸裡に鬱勃として起り、謂はゞ見ぬ戀に憧れて居つたやうに形であつたが、最近漸く實現の端緒に着いたのが即ち兩國學生の提携運動である。是より日支兩國は初めて當然あるべき本來の親善關係に入らうとして居るのに、之を國交に害ありと云ふのは、

吾々は甚だ其意を得ない。

兩國學生の提携運動は誰が何と云つて妨害しようが、一旦其緒についた以上今後ます〳〵盛んになるに相違ない。而して此提携運動の第一に目指す所の敵は官僚軍閥の侵略主義である。故に侵略主義を以て對支政策の根柢と考へて居る人に取つて、吾々の運動は邪魔になる。さうでない以上、此提携運動は何等非難さるべき道理は無いのである。

尤も此運動を非難する者は次のやうな謬見に囚はれて居るのかも知れない。一つは支那の青年の運動の陰には過激派の手が潜んで居るとする考である。も一つは支那の人の前に日本人が日本の惡口を云ふのが惡いとする考である。第一の點は就いては餘りに馬鹿々々しい疑惑で辯明する勇氣も無いが、第二の點に就ては少しく國民の反省を促して置く必要がある。支那に「兄弟墻に鬩ぐとも外侮りを防ぐ」といふ諺があるが、之を誤解して何んな惡い事を内でやつても、外へ行つては黑を白と言ひくるめるのが愛國的態度だと考へて居る人が多い。封建時代ならばいざ知らず、今日の世の中では以ての外の誤である。外國人であらうがなからうが、黑は黑・白は白と事實を有りの儘に明かにしないでは、何人も眞面目に相談に乘らないではないか。昔のやうに彼我の事情が分らず誤魔化しが利くならいい。日本人が何處で何を爲たかは、日本人自身よりも外國の人の方が能く知つて居る。(日本では政府の秘密政策の爲めに、知つて居るべき事を知らされない事が少くない。)それを鹿爪らしく辯解しては、聞く者は寧ろ其白々しさに驚くであらう。日本が辯解すればする程、外國の心ある者が或は怒り或は顰蹙するといふのは、全部正しいとは云はないが、亦決して無理もない點がある。吾々は自分の惡い事は何處までも其惡を承認し、彼等の非難に相應の理由があるならば進んで之を傾聽し、而して自ら其の改むべき所以を明かにして話を進める事が、本當の解決に到る唯一の途であると考へる。

之を要するに、支那と日本とは大體に於て大いに阻隔して居る。之が爲めには支那も困れば日本も困つて居る。何とかして一日も早く親善の關係を恢復せねばならない。それには現に親善の關係を作つて居る一部の運動を擴張するより外に途はない。然らば現に親善の關係を作つて居るものは何かと云ふに、官僚軍閥と青年學生とである。而して吾々は官僚軍閥の提携に依つて日支親善の實を擧げる事が出來るか、官僚軍閥の提携は更に國民的提携に擴張せらるゝの見込みがあるか、官僚軍閥の提携を傷けさらんが爲めに青年學生の提携を遮ぐるが日本の爲

め、將た東洋の爲めになるか、是等の點に關する愼重なる考慮を煩はしたい。

小題小言五則

●**普選論の名目に拘泥する勿れ**　予が多年普通選擧論者としての看板を掲げて居る事は讀者の知らるゝ通りである。そこで先達ての總選擧で、所謂普選論を標傍する候補者から隨分應援の依賴を受けたのであるが、之を予は概して斷つた。之れには選擧の應援は單に政見の同一といふ事丈けでは——少くとも日本では——爲すべきものではないといふ考にも由るけれども、單に普通選擧論者であるといふ丈けでは政見の同一を斷ずる事は出來ない。所謂普通選擧論の中にも實は似而非なる普通選擧論もないではない。此點に於て獨立の生計を條件とする憲政會の普通選擧論の如きは、謂はゞ羊頭を掲げて狗肉を售るものに外ならない。吾々は本當の普通選擧の行はれん事を希望するが故に、斯くの如き似而非なる普通選擧論に對しては十分警戒する必要を認むるものである。先達て東京で普選論を標榜する當選代議士の招待會を催うせるものあり、大いに普選論の爲めに氣焰を上げたといふ事であるが、之れなども考へやうによつては徒らに名目に囚へられて玉石同架の嫌ひなきを得ないやうに思はるゝ。世間には普選論を喰ひ物にする者が少くない。吾々は同じ看板の中にも眞贋の別あるを警戒し、本物の健全の發達の爲めに、贋物を壓へつける丈けの聰明と熱情とを有たなければならない。

●**無記名制度に對する誤解**　選擧の當日讀賣新聞社は二三知名の士に向つて何人を選擧するかを聞き合した。之に對して無記名の制度の精神に鑑みて口外を憚ると答へた方があつた、然し之は全然無記名制度の意味の誤解である。選擧本來の精神から云へば、自分が誰を選擧するかは公然明かにしていゝ、更に人に勸めてもいゝ、聞かれて云はないのは寧ろ男らしくないのである。從て無記名よりも記名式の方が理想的なのであるけれども、一般の民衆はそれほど志操堅確でないから、動もすれば他人に威壓されて意思の自由を立て通し得ない。而して選擧には自由意思の自由判斷といふ事が最も尊重せられねばならないから、そこで已むを得ず無記名制度を採用して、强者の壓迫を遁れ得るの途を弱者の爲めに講じたのである。即ち弱き者は人に聞かれても云はなくともいゝ、又已むを得ず云つても結局之に拘束されなくともいゝ、無記名だから誰に投票したか分らない。即ち弱い者の自由意思を保護する爲めの規定で

強い者までが之を利用せねばならぬといふ筋合のものではない。從て誰に投票するやの明答を迫まる權利は無いが、亦之が答辯を避くる義務も無い。答辯を與ふると否とは各自の勝手だけれども、先覺者を以て任ずる者は、寧ろ之に明答を與へて一般民衆の參考に供するのが適當であると信ずる。

●政府黨たるの有難味　「田舍の一讀者」から次のやうな意味の手紙を貰つた、「政友會に席を置く我が村の自稱政治家某なるもの、政府筋の勸に由つてか先達て大急ぎで土地開拓の事業を創めた。俄に人を狩集め、俄に山林に手を入れるから、さう急いだつて開拓が出來るものではない、本氣にやるなら少しづゝ着々やれと云つたら、そんな事をしては補助金が取れない、來る何日まで何町何段の開拓に着手したといふ形を整へさへすれば補助金をやると云ふ事になつて、之れさへ貰へば開拓の方は何う成つてもいゝと答へたのであつた。補助金を彼は幾許貰つたか知らないが、果せる哉開拓の方は全然放擲されて居る。之れだから政府黨員たる事は、物貰ひと同じやうに一度やれば廢められないものらしい」。田舍の讀者はこんな事を珍らしいと思つて投書されたのかも知れないが、田舍許りではない、中央の大頭はそれ相應に大きな計劃をして所謂國家の爲に努力して居ると云ふ事である。努力に對する報償は缺かさず與へらるゝけれども、結果は殆と常に毫も擧つて居ないと云ふ事である。

●再び日の會に就いて　前號に於て建部博士の元々社と並べて日の會を上杉博士の指導するものと書いたが、後に聞く所に據れば、鹿兒木員信、大川周明の諸氏の指導の下に、東京帝大の學生を中心とする社會問題思想問題の研究會だといふ事である。察する所もと興國同志會に屬し中途所謂上杉派なるものに慊焉たる人々の組織する所らしい。少くとも所謂上杉派なるものと行動を共にするを欲せざる人々の會合である事は明がである。此種の人々の立場は我々の立場と大いに色彩を異にするものではないかと考へらるゝけれども、大川氏は未見の人ながら平素欣慕して措かざる所であり、鹿兒木君は人格に於て學殖に於て予の最も尊敬する友人であるから、兩君の指導に係る以上、日の會の今後大いに思想界に貢獻するものたるを期待すべきである。我々は近き將來に於ける同會の前途に對して此處に豫め祝意を表し、併せて多大の希望を其前途の發展に繫けて置く。

●十字街に立てるデモクラシー　エム・デー・ペトレ先生原著、植原悅二郎先生校閲、關未代策譯として上記の標題の本が最近出版された。廣告文に據ると之は「後藤男が歐米漫遊より歸朝の際皮肉なる歸朝土產として仲小路男に贈りし

もの」とある。予の記憶にして誤らずんば、後藤男の歸朝土産なるものはハルンショーの著でペトレではない。原書の名が殆ど同じなので彼と此とを間違ひたのではあるまいか。ペトレの著もハルンショーの著も一時丸善の樓上に相並んで飾られてあつた。ハルンショーの著は予も後藤男の歸朝に先立つ事半年許り前から、學生諸君や友人に頻りに吹聽したものだ。其爲めでもあるまいが丸善では直ぐと賣れたと云ふ事である。新聞には「十字街に立てるデモクラシー」といふ本だとあつたので、ペトレの本が目に着くや仲小路氏を男爵と誤つた流儀に、これこそ後藤男の歸朝土産なりと間違つたのではあるまいか。併しこんな事は何うでもいゝ、或は我輩の方が誤りかも知れない。其點は孰れになつても構はないが、只我輩が學問研究者として何うしても讀者に告げねばならぬ事は、ペトレの著書は大した偉い本ではないといふ事である。予の識れる或學生も間違つて此本を持つて來た時に、わざ／＼貴重な時間を費して讀む必要が無いと答へてやつた。若し現代の政治、殊に戰爭といふ熔爐を潜つて來たデモクラシーの政治を理解せんが爲めの參考書として讀まうと云ふなら、是非共ハルンショーに行かなければならない。分量から云つてもペトレ本の五六倍もある。內容價値に至つては何十倍なるか分らない。其內容の大體に就ては去年の夏頃予は「我等」に簡單なる紹介文を書いた事がある。

思潮

中澤臨川

ソシアル・デモクラシイの新精神

「××××××××××××××××××。×××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××。××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××。×××××××××××××！」（編者曰く、以上の數行の文字當局の注意により抹殺）

之は誰も承知の如く『共産黨宣言』の最後の數句である。これを書いた頃のマルクスは感激の絕頂に立つてゐたかに見える。で、是等の數句は近代社會主義の誕生を紀念する文章としても初期黨員の單純奔放な情熱を窺ひ知る爲めの記錄としても貴いものである。

然るにこのソシアル・デモクラシイの精神は、その後二十年五十年と經過するに從つて、いろ〳〵の變遷を閲みした。幾度かの Sturm und drung がそれを試めし、それを柔らげ、最後にはそれを墮落さした。マルクス自身がその長生涯に於て自分の主義に對する世間の解釋の相違、彼自らが起した運動の精神の變遷を、眼のあたり見なければならなんだ。老いたる彼は曲げて時勢に同意しなければならないことさへあつた。

今マルクス派社會主義が戰前に發達した歷史を見るに、之を三期に分つことができる。その第一期は革命的靑春時代、第二期は愼慮的壯年時代、第三期は退嬰的老年時代である。近き未來に於ける「黃金時代」の可能を豫想し、一夜の革命によつてそれを仕上げようとしたところの、純な感激の時代は永く續くべくもなかつた。フランスに於ける一八四八年の革命の失敗が與へた敎訓は、今日の革命が明日直ちに理想を實現するものでないといふ苦い戒であつた。そこで愼重の態度を採るべく餘儀なくされた壯年時代が來た。その頃のエンゲルスの手紙に次のや

うな文句がある――「革命は一夜にして成就されるものだと想像する大きな誤謬を、獨逸人は常々から犯してゐる。然るにその實、革命なるものは普通數ケ年に亙るところの民衆運動の集積である。一夜にしてなされた革命は、一八四八年のそれの如く、却て豫期したとは全く反對の結果に導く」。

突變的革命の否定――それは眞理であるにしても、一たん革命の理想から離れた社會運動が、奈何して結熱の高潮を保ちうるかが疑問である。果してその通り退嬰の時代が始まつた。外にはビスマルクの高壓政策に逢ひ、内には日暮れ道遠きを嘆く獨逸の社會民主黨が、ベーベルを死なしたあとで、ベルンスタインの修正主義に漸く一道の活路を見出したのはさもあるべき事である。一九〇一年、時の宰相ブューローは、彼をして社會民主黨を率いさせることの便宜を想ひ乍ら、長い流浪の旅からベルンスタインを呼んだ。獨逸に於ける社會民主黨はその後數に於てめき／＼増加した。併しその精神は之と反比例に墮落して、獨逸に於てはそれが官僚の走狗と化し、英國に於ては紳士閥の自由主義と殆んど撰ぶところがなかつた。

ジョーレスは嘗て獨逸の社會民主黨の腑甲斐なさを痛罵してかう言つた。「汝の力のふえればふえるほど、投票數と代議士の頭數との増加によつて外見的に計られる汝の政治的勢力と汝の眞の勢力との間の矛盾が愈々判然する」と。かやうな狀態にあつた社會黨が、開戰と同時に易々とカイゼルの頤使に甘んじたといふことに少しの不思議もない。

併し五個年に亙つた苦い經驗が、實際の戰を負擔した諸國の民衆に何か深い或物を教えずに終らうとは思はれない。既に戰前からサンヂカリズムの擡頭をみ、政治的デモクラシイに對する絶望と同時に「直接行動」や「革命」の福音的宣傳が行はれてゐたところを見れば、萠芽は既に種子の中で熟してゐたのである。戰爭はたゞ我等が現に見るところの世界的民衆運動の口火を切つたものに過ぎない。

かやうな運動の第一烽火は、一九一七年、然かも世界を通じて戰爭熱の高潮してゐた最中に、ロシアに於て擧げられた。それは實際の革命であつた。絶大の權力を有してゐたロマノフ家が一夜にして倒され、之に代つた者は雜り氣のない第四階級であつた。世界は驚愕の眼を瞠つた。奇蹟的の「革命」が必ずしも不可能でないといふ觀念が再び魅惑的に人の心に復活した。併し啓示的なこの光明の裏面には大きな陰影が潜んでゐた。帝國主義と資本主義とに據つて立つところの諸強國の間に挾まつて共産的國家を樹立しようとする事のどれだけ困難であるかは想

像するに難くない。内には保守的勢力の擡頭を防ぎ乍ら新しく秩序を整へ、外には列強の武力的及び經濟的壓迫に堪へて行かねばならない。革命後一個年のロシアは實に言語に絶した辛勞の歳であつた。彼女が動亂と飢渇とのなかに僅かに懷いた一縷の望は、世界の――少くともその隣邦の――プロレタリアが彼女の例に倣ふであらうといふことであつた。

歴史の教えるところによつてみれば、革命は傳染的である。一九一八年一月、果して獨逸及墺太利の勞働者はロシアの仲間の後に從つた。こゝでも革命の第一歩は成功であつた。ホーヘンゾルレン及ハプスブルグ兩家は一夜にして倒された。併しロシアと同じやうな困難が踵を接して起つた。彼等は西歐の勞働者の來り援けることをどれだけ待ち設けたことであらう。

かうして革命の波は漸次に擴がつた。戰後、フランスや英吉利や亞米利加や伊太利の勞働者の採つた手段は、露獨のそれの如く震駭的でなかつたにしても、その精神の强烈さに於ては敢て下るものでなかつた。皮層的の觀察者が、革命熱の失敗と沈靜とを說いてゐるあひだに、ロシアで生れたかの偉大な青年は西へ西へと其足を運んだ。

かやうな新しい民衆運動が我等に暗示するところの教訓に就て、私は次に說くであらう。わたくしはそれをソシアル・デモクラシイの新精神と言ひたい。それは古いソシアル・デモクラシイの精神の復活であると同時にその改造である。

第一は革命主義から進化主義に隨了した社會主義が、新しく革命主義に再燃したことである。革命は魅惑的である。堪へがたい社會的不正義を忍んでゐる者又はその狹い因習の捕虜となつてゐる者が、或者は靈感的に、或者は絶望的に、革命の奇蹟を仰望する心理は、その人の之を意識してゐるとゐないとに拘らず、殆んど一般的である。革命の思想を失墜した社會主義が喪神的の骸であることは、天國を有たない宗教のそれの如きものである。革命は社會的創造の代名詞である。ロシアが一度それを行つたときに、世界の幾萬人の心が――彼等の理智のそれを否定するにも拘らず――之と或る共鳴を感じたことであらう。佛蘭西革命の際或る貴族は狂喜して其爵位を返還したといふ話があるが、之が人間の奥深くにある心理である。その社會改造論に於て革命を說くことを喜ばないラツセルでさへ、ロシアの革命に關してかう言つた――「若しもこのロシア革命が獨逸に於ける革命と伴つたならば、かやうな變化の劇的急激性は必ずや一時、その因習的思想から歐洲を震ひ去つたであらう。友愛の觀念が閃光の如く實際政治の世界を射通ほしたであらう。…

……手段としての革命を否定し、漸進的小刻みの發達を以て社會的進歩の道と考へる人々は、全人類のムッドと信念とを變化せしめるところの劇的事件の效果を見落してゐる。獨逸とロシアに於ける同時的革命は確かにかやうな效果を有し、そして新世界の創造を可能ならしめるであらう」。

そのと間もなくラッセルの希望した如き革命が獨逸と墺太利に起つた。それが世界の因習的思想を震駭して、友愛、國際の觀念を強く人心に吹き込んだことは事實である。併しこれ等の革命が直ちに「新世界の創造を可能ならしめる」だらうといふ豫期は多く當らなんだ。我等はこゝでも一夜漬の革命の十全でないといふ苦がい經驗をえた。

併し革命は失敗したのではない。革命は猶ほ續いてゐる。それは青春の元氣を以て西へ西へと共歩みを運んでゐる。で、我等が之から學びえた事は、修正社會主義者の如く革命に對する絕望ではなくて、革命は可能ではあるが、併しそれは一夜にして完成されるものでなく、幾年かの努力による幾階段によつて初めて成就されるものであるといふ事である。今例を英國に採つてみよう。この國の社會運動にどれだけ強く革命の理想が燃えてゐるかといふことは、昨年七月の勞働黨大會に於ける決議の要旨から窺ふことができる。曰く、「今日の社會的缺陷は部分的の諸政策を以ては決して救濟されない。曰く、この社會はその根柢から改造されねばならない。曰く、我等は產業の民主化を要求する。而して其手始めとして鐵道、鑛山及電力の卽時的社會化を主張すると。かうした態度を、その以前に於けるフアビアン派のウェッブなどの改良主義と比較するならば、誰しも變化の顯著なるに驚くことであらう。然るに英國に於けるかやうな革命熱がロシアや獨逸のそれの如きストライキングな外形をとらない理由は、第一は革命に對する理想が突發的、空想的から階段的、實際的に進化したからであり、第二は英國が古くからデモクラシイの精神及び制度の上に立てられてゐた爲めに、同一の革命熱も前二者の如き荒々しい形をとらずして濟みうるからである。

革命が決して一夜漬に成就されるものでないといふ經驗、革命の理想へ到達する爲の最も安全な道筋はデモクラシイの普及に待つべきであるといふ實訓は、戰前一たび消へかけたデモクラシイの理想を再び社會運動の中に復活する機會を與へた。私がソシアル・デモクラシイの新精神と稱するのはそれである。昨年十一月の臨時勞働組合聯合會(英國)に於て、鑛夫組合長のジエ・ジエ・トーマスは次のやうに演說してゐる――「若し鑛夫組合の立場が公共的利益を民主的及代議的討議により決しようと

する方針にあるならば、我等の採るべき唯一の適當な方法は、公衆をして我等の立場の正しいといふことを會得せしめるより外はない。之をなすには、我等は我等の運動の政治的方面を閑却してはならぬ。政治的運動は我等の目的を達成する手段として決して直接行動に劣るものでない。我等の投票によつて我等の目的へ進むのは、ストライクによるよりも容易で且つ經費が嵩まない」と。

之を要するに、戰後の社會運動の特色として數ふべきものは、

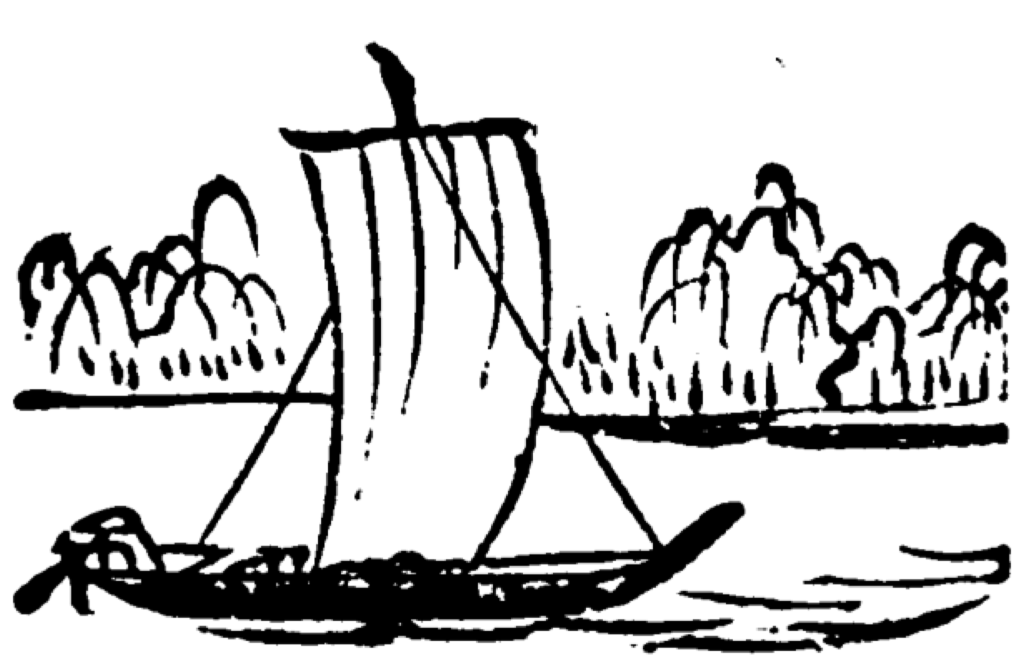
(一)革命の理想の復活したこと、

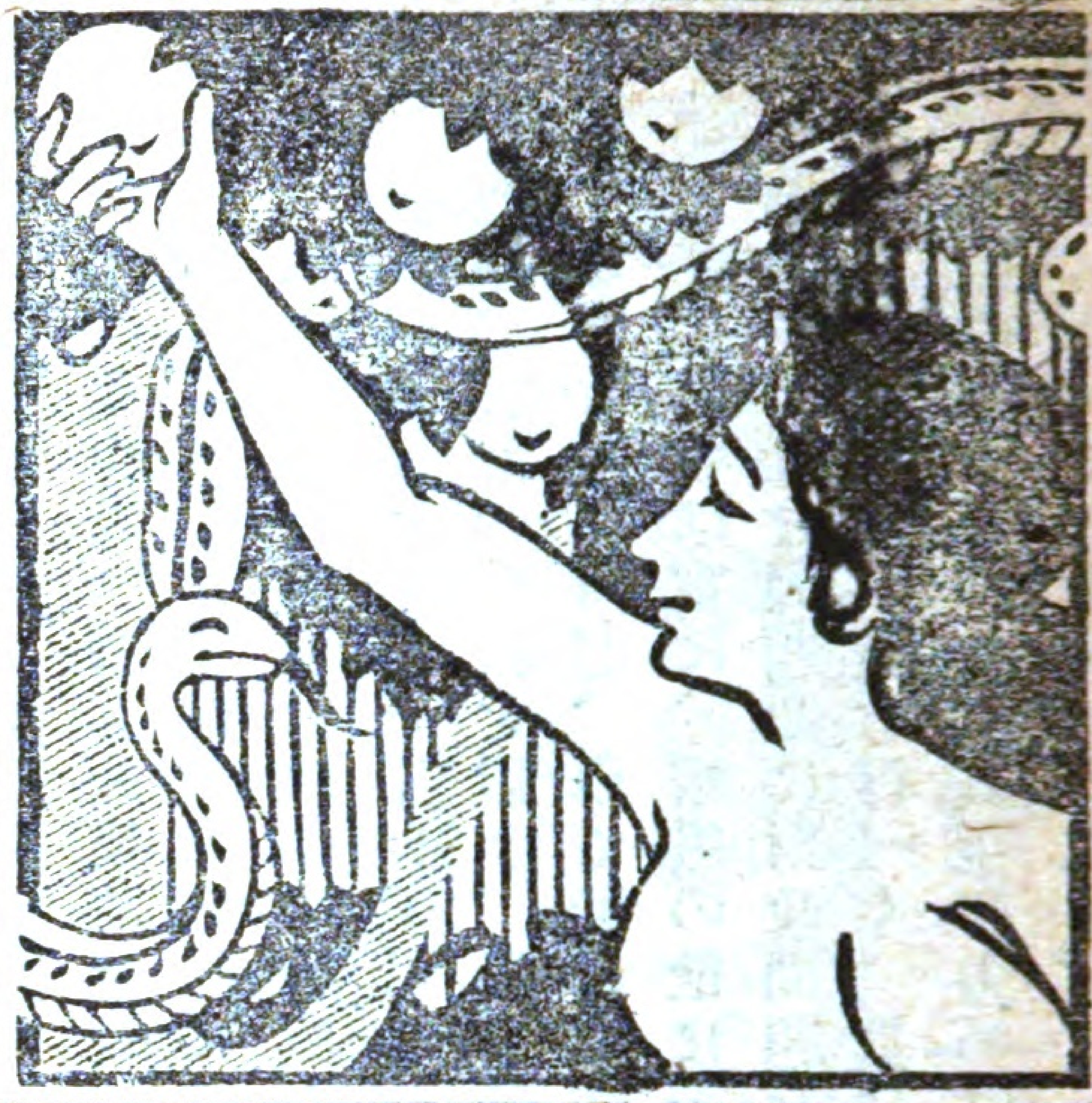
(二)併しその革命の理想は、マルクスやクロポトキンの空想した如き突變的のものから階段的、實際的のものに進化してゐる事、

(三)一たびは絶望的に棄てられようとした政治的デモクラシイの精神が再び蘇生したこと、

などである。

猶ほ、ロシアや獨墺の孤立的革命が非常に困難な立場に陥つた經驗に鑑みて、「國際的」の理想が再び勞働運動に眼覺めかけてゐるといふこと、昔のソシアル・デモクラシイが「權力（オーソリティ）を通ほじての正義」を考へてゐたに對して、新興の主義が一様に「自由を通ほしての正義」に向ひつゝあること――などは特に注意すべきであるが、それ等は他日の詳論にゆづらう。





堺利彦著 男女爭鬪史

◆美裝箱入定價金壹圓六拾錢・送料金拾錢◆

(主要目次の一部)性交無制限時代、夫婦思想は社會の組織賊、血族群婚、妻を客に貸すの風、一時的自由性交の風習男女心身の差異、伊勢參宮と歌垣、希臘の白拍子、賣淫、姦淫、男色獨り神と双ひ神、人の妻、掠奪婚、一夫一婦制の發達、婦人解放、自由戀愛(其他數十項)

發行所 東京麴町區有樂町一の三 棠川堂(振替東京六七七番)

大賣捌 東京神田 東京堂書店

禁煙風味液　解毒風味液

○一日で煙草がきらひになる

禁煙パイプ

■禮狀數千通公評如下

解毒パイプ

○卷刻に併用で煙毒を消す

■平民病院發行平民醫學評…記者も之に依て禁煙を斷行したる一人なり、物はためし一度かつて記者の言の妄ならざるを知り給へ……

■日本評論評…一貫社の禁煙パイプは禁煙斷行上最有效……

■東京評論評…風味液の效能顯著なる例は多々あり現に砲兵工廠に於て……

■日支貿易綜攬評…一飲該液即見靈驗

■實業界評…記者も實驗中だが確に煙草がのみたくないし、又のんでも煙草の味がない誠に國家衞生の爲に結構な發明である……

■朝鮮時報評…禁煙斷行に最效あり……

ニセありダマサレ賜ふな見本進呈郵二錢

風味液…小壜五拾錢 德用壜九拾錢

パイプ(水牛上製四拾五錢 同特製八拾錢 象牙製壹圓貳拾錢)

サック…參拾五錢

送料拾貳錢海外四拾五錢

募賣店月百圓以上の利を見てゐる人多し

東京神田猿樂町三ノ四よ號

發賣元 一貫社

振替口座東京參壹壹貳七番

法學博士 小川郷太郎著

社會問題と財政

四六判全一冊

定價 上製 四圓五十錢 並製 四圓二十錢

送料各十二錢

「社會問題は目下我國の重大問題である、其問題が持上てから段々社會主義が宣傳せられ、無政府主義が鼓吹せられ、延て革命思想の横溢するやうになつた」若し此儘に放任せんか、國家の前途は未だ容易に知るべからざるなり。誰か思を玆に致して肌に粟の生ぜざるものあらんや。此時に當り我國財政學の權威たる著者は本書に於て先づ社會主義を排し、無政府主義を斥け、社會政策に立脚して財政の方面より研究を進め、官業の擴張を說き、社會的租稅政策を論じ、貧者の利益を擁護するの政策を辨じ、以て社會問題解決の敢て難きにあらざる所以を明にす。本書は實に、暗黑の世に一道の光明を與ふるものと謂はざるべからず、社會問題並に財政問題を研究せんとする士にして此書を讀まば、以て難關の鍵を得べく、眞に國家の前途を憂ふるの政治家にして此書の論ずるが如く實現に力めば、以て革命を豫防し社稷を泰山の安きに置くことを得べきなり。

本書は社會問題政策に關聯したる論文を集め之を系統的に配列して第一編總論、第二編官業の社會化、第三編租稅の社會化となす社會問題の解決は社會主義に依るべきものに非ずして社會政策に依るべきを說明し社會政策は又財政を待ちて初めて實行せらるゝのみならず財政を手段としても亦之を實行することを得べき所以を明かにするを以て根本主意として之を以て革命思想の横溢を豫防せしむるに足るとなす時務に亘りて有用適切の論究といふべし………（國民新聞の評）

東京市京橋區加賀町●京都市三條通御幸町

帝國地方行政學會發行

振替東京一三・大阪六四二

賣捌所銀座東海堂●神田有斐閣

京都丸太町弘文堂●其他有名書店

森戸辰男氏譯（コール、メロー共著）

最新刊

ギルド社會主義

定價四十錢 送料二錢

英國を風靡したるギルド社會主義の思潮は、忽ち海を超えて全歐洲を風靡し米國を席捲し、今や一擧にして世界の思想界を支配せんとす。斯くて一度行き詰まらんとせる勞働運動、社會運動は、ギルド社會主義に於て一の新たなる光明と活路を見出だしつゝあり。然らばギルド社會主義とは何ぞ。曰く社會改造の哲學なり。勞働運動の新理想なり。集產主義を排しサンヂカリズムを斥け、國家とギルドとを併せて其處に統一ある組織を見出ださんとするもの、蓋し現代最も進步せる社會理想の具體的表現たらんか。本書は此の派の驍將コール、メロー兩氏の著にして、最も平易簡明にギルド社會主義の眞髓を說きたるもの、譯は森戸學士が苦心の餘になり、流暢明快、眞に譯の範たり。最新の社會思想を知らんとする人は、先づ一本を坐右に備へざるべからず。

岡悌治氏著（好評三版出來）

社會改造思想史

四六版クロース上製函入 正價壹圓八十錢（送料十二錢）

社會は今や根本的に改造を要する時代となれり。而も如何に之を改造すべきかはプラトーン以來の問題と云ふべく今日世界の思想家にして此の問題の爲に頭を惱まさゞる者殆ど無し。本書は、苟も社會改造に關して古今の學者哲人が腦漿を絞りたる一切の成果を網羅し、之を批評し研究して、學者及び社會改造家の參考に資したるもの。發行後忽ち賣切れの處今や三版出來。苟も社會改善に志ある人士の必讀を要する書なり。

堺利彥氏譯（ベラミー原著）

忽三版

社會主義の世になつたら

定價四十錢 送料二錢

社會主義の世になつたら……資本家は何うなる？勞働者は何うなる？知識階級は何うなる？財產は何うなる？男女關係は何うなる？政治組織は何うなる？產業機關は何うなる？凡そ萬人が知らんと欲する此等の疑問に答ふる爲に、社會主義の理想を具體的に平易に面白く小說に仕組んで說明したのが本書である。原書は先に米國に於て數百版を重ね、洛陽の紙價を高からしめたる近代の名著。一讀頗る興趣不盡。

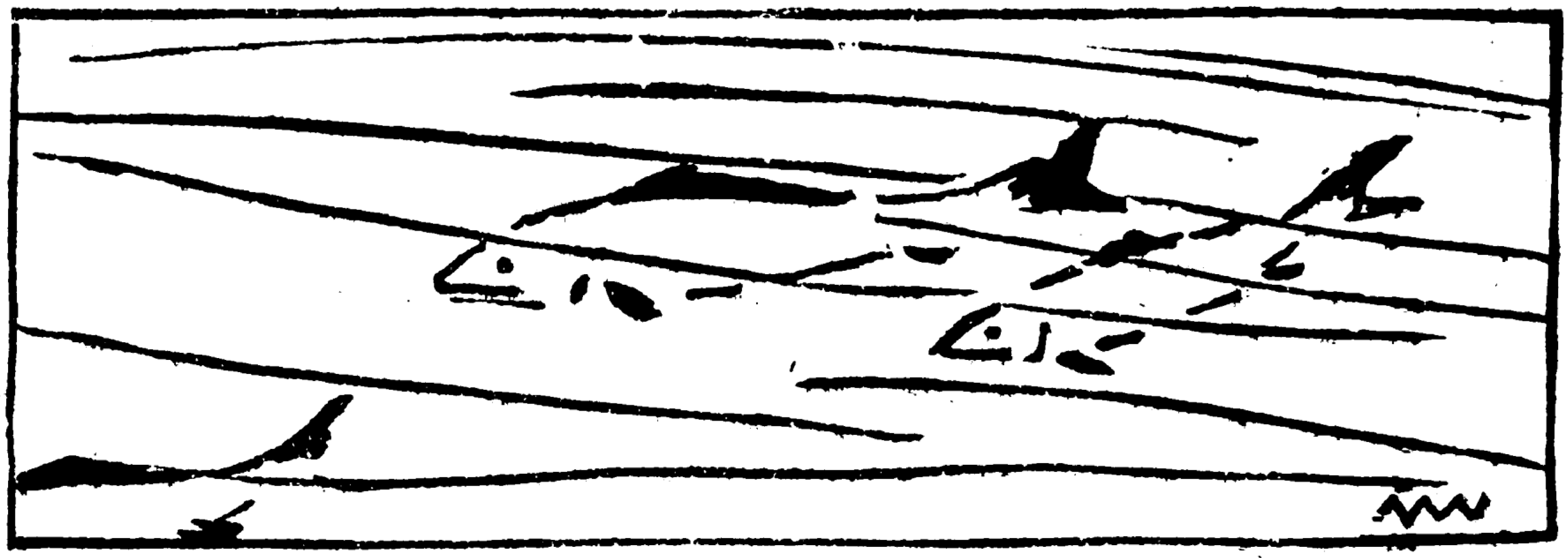
井箆節三氏譯（コール原著）

忽再版

勞働組合の話

定價四十錢 送料二錢

發行所 東京小石川小日向臺町二ノ一九 振替口座東京七二八〇番 文化學會出版部



古き毒草園

室生犀星

一

そのころ東京から中村千鶴といふ役者の一座が、私どもの市街の中央座にかかつて、古いお城下町がひと頻りその噂や下馬評でもちきつてゐた。むかしから芝居見物などの旺んなところだけに、町家はもちろんのこと、遠くから轉任してきた地方官の家庭などでも、このお城下町に住み馴れると、決つたやうに物見遊山にも耽けるし、例の芝居小屋の空氣にも馴れてしまふのであつた。

中央座は、香林坊といふ市街の眞なかの、やや高臺になつた大神宮と隣り合つて建てられた古い劇場で、そこの境内には四季とりどりな見せ物小屋がかかつてゐた。ろくろ首が水壺から首を出したり大蛇の小屋掛けがあつたり、また、うす暗い陰つたやうなところに、冷たい魚釣りの水盤をかこむ薄寒い田舎者の幾人かの群があつたり、さうかと思ふと、藤棚の房々したのを抱き込んだ美しい紅梅壽しの店があつたりした。ことに中央座の繪看板はこの町の古い畫家の手になつた極めて美しい極彩色の、たとへば、女の顔にしろ粋姿のさむらひや坊主にいたるまで、細緻をきわ

めた精巧なもので他國には殆見られないほど正確なものであつた。常信とかいふ代々の畫かきが、いつもこの繪看板にその纎麗な刷毛を執つてゐたのである。私などが子供の時などに、よく學校がへりには茫乎としてその悩ましい夜叉姫の髮のみだれや、あをあをした御殿坊主のあたまを眺め入つたものである。

その香林坊は、ちやうど、このお城下町の下町からと、山の手からとの大通りの中心にあつただけに、芝居の開幕のあとさきには、山の手からは上品な切髮の隱居をつれた若い母親や娘さんなどが徒歩で、幾群れとなくそはそはとやつてくるし、また、町家あたりの内儀さん連中は、まるまると肥つた娘などと一緒に、これも急ぎ込んだやうな嬉しさうな足どりでやつてくるのである。それに、この市街の西と東とにわかれて一廓を劃つてゐる加賀藝者が、大通の町筋に鋭く白いヌキ襟を車の上に浮かしながら、幾十臺となく、その派手な、姿を運ぶのであつた。

中村千鶴一座が乘り込んだころは、永い雪も消えて間もない恁ういふ北國にありがちな、梅や櫻が一時に咲き出したころで、香林坊の廣場の老ひた柳がなよなよと芽ぐんで、よれよれに青々しく垂れはじめたころであつた。毎日のやうに町廻りする觸れ太鼓の華やかな響と、芝居小屋の櫓の上で打つ開幕を知らせるカンカラ太皷が、その新らしい猫の皮鳴りを、ぽかぽかと暖かい光のみなぎつた空にひびかして、やがて町家の窓々に朝髮を結ふらしい女等の耳々とに、濃い美しい時代物のいろいろなシインを描かせるやうに、勢ひよく、なまめかしく打叩かれるのであつた。一時に、どつと咲き出たやうな溫かい匂ひある空氣や、濃い蜜のやうな四月の日ざしの明るすぎるほど、澄み透つた輝きは、一切の市街の屋根や樹木や庭園にふりそそいでゐて、大通りには乾いたあたたかい砂ほこりが、懐かしく浮きでて見えた。半年あまりも家のうちに冬籠りをしてゐたひとびとは、みな明かるい顏をその軒なみにあらはして立つたりしてゐた。その反對に全市街は、うちからこんもりと肥りあがる若々しい肉體のやうに締まりかへつてゐた。

さういふ日、私のうちでも芝居氣狂ひの母のお里は、すぐ近所のお湯屋の薫といふ娘とその母親、それに私をまぜた四人づれで芝居小屋にでかけた。薫は私とは二つ年上の二十であつたが、小柄なやうにも見え、大きなからだのやうにも見える、奇體に會ふごとに見當ちがひな感じのする女であつたが、どちらかといへば、大きな目と、ひとつは健康さ

うな一と皮ひん剝いたやうな地のまゝな紅い顔で、おしろひをつけるよりも、つけないはうが美しかつた。お母さんは早くから後家になつて、私の母と同じぐらゐな四十を餘程越した人であつたが、芝居はかはり狂言をぬかしたことがなかつた。

私たちは桝を二坪ばかり占めて、いろいろな重詰をひらいてゐた。この町のならはしのやうになつてゐる芝居とつきものになつてゐる塗のよい重箱には前の晩から煮しめたり茹でたりした食べものが、桝ごとに開かれた。筍の柔らかい走り、くわゐ、小味な魚の素燒　すしなどが入つてゐて、あちこちで、はづかしさうに袖で口もとを隱しながら食べてゐる娘さんや、若い妻君などもゐた。酒のいける私の母は、杯を前に置いてちび飲みを初めてゐた。

「あんたも一つおやりなさい。」

母はほろ醉になると、薫にすすめたが、薫は躊躇つたが酒のことになると執念い母を知つてゐるので

「ほんの、すこしいたゞきますわ。」

と言つて杯で唇をぬらした。薫のお母さんもぽつと紅くなつてゐた。

私は薫の横にゐたので、重いやうな膝のところが押しよせられので堅くなつてゐたが、電燈がつくと、氣がくつろいだので私のはうからもぴつたりと押すやうにしてゐたりした――夜に入つてから、あちこちの桝から、町家の隱居などが聲色をしたり、すぐ母のつぎの桝にゐたお針のお師匠さんらしいのが、

「おひとつ如何です。おそまつな物ばかりでございますが……。」

まだ若いつやつやした顔を酒でそめながら、少しばかりのさかなを小さい九谷の皿に入れて侑めたりした。さういふことの好きな母は

「まあ、たいそう、おいしくいたゞきました。これを一つお食がり下さい。」

自分のもつてきた重詰から色々なものを皿に入れておかへしたりした。さういふ取り遣りが彼處此處に起つて、わけて騷がしい女だちは喋り合つたりした。

千鶴の出幕になると、拍手がさかんに起つた。なんでも一心太助のやうな役であつたが、そのきりつとした男らしい顏立ちと、妙に口を綻ぢらして物言ふ含みごゑが、異常にきれの長いぱつちりした目尻の紅と一しよに、女だちに好かれてゐた。母は、だんだん醉つてくると

「うまい。うまい。」

懸聲をするので、私はよく赤くなつて小さい聲で注意をしても

「お前なんぞは見てゐてもわからん。うまい。うまい。」

なほ叫ぶのであつた。薫は、さも母のさういふ道化さが興味さうに

「まあ、お母さんが……。」

と言つて、ふふふと口のうちで笑つてゐた。薫のお母さんも笑つたが、釣り込まれたやうな、これも芝居氣狂ひにありふれた手つきで、しきりに拍手をしてゐた。私だちの桝が舞臺に近かつたためと、女がさういふ叫び聲をあげたせいでもあらうが、ふしぎに千鶴は、その素早い視線をほんの瞬間的に母や薫のお母さんや、また薫などにちらりと投げたりした。そのたびに、見巧者な母は手を拍つたりするので、私はきまりわるく、なるべく役者がこちらを見てくれないやうにと思ふのであつた。

幕が下りると、一時に騒がしく埃立つて、あちこちの女が座を立つごとにひらつく紅い蹴出しが、次第に濁つた空氣に疲れた私の目に、ちらちらと幻のやうに映つてゐた。

「よござんしたわね。」

薫さんが言つて、すり寄るやうにしたが、私は

「何んだがベタベタした役者だね。こちらばかり見てゐたつけ。」

冷やかにいふと

「でも、あんないい役者はあまりゐませんわ。」と言つて、そのうつとりと草臥れたやうな目を私にうつした。いつでも

芝居にくると薫は、こんな黒目をまんなかにぢつと座らしたやうな目をするのだと思ひながら

「僕はきらひさ。」と言ふと「すぐ好きになりますわ。」といつものやうに指さきをいぢくりながら言つたが、けふはことさら、千鶴をすきになれと進めるためにさうしてゐるやうにおもはれた。

母は、隣の桝のお師匠と、しやべくつてゐたが、

「本當に評判ほどあつて、うまいものでございますね。第一、東京者だけに江戸前な言葉つきがよござんす。」と言つて

「も一つお重ねなすつて――。」と、さし合ひながら、もうトロンとした目つきをし出した。私は母のこのトロンとした目つきを見るたびに、いまはしい嫌惡の氣もちが心の内で逆立つてきてならなかつた。第二の母であるとはいへ、手づから育てられたも同様の母であつたため、なるべく控え目にしてゐたが、いつもその酒に親しむと、妙に氣の荒立つことや、ことにそのうつとりした酔つた目を見つめてゐると、ふしぎに或る淫蕩な、しかも放縦な言葉づかひなどが氣になるばかりでなく、ふしぎに憎惜しい感情になるのであつた。その大きなぶつくりとふくれた脂肪過多な肉體の中に、まだまだ静まりきらない、しかも恁う考へつめると何處か濁つたやうな氣をおこさせる内部の勢力が、あまりにまざまざとその濁つたままの姿で、わけてもそのトロンとしたやうな眼のうちに表はれてゐるやうで、醜汚たないものを見るやうで不快でしかたがなかつた。

次の幕になると、母は、かなり酔つて譯もなく拍手したり、懸聲したりするごとに、千鶴はその切れの長い目を母にときどき送つた。そればかりではなく彼處此處から、急に吃驚したやうな見物が、みな母を注視しだしたので、私はすつかり赤くなつて、いつそ一人で先きに歸つて了ふかと、幾度となく中腰になるほど腹立たしくなつたが、それでも凝然と我慢をしてゐた。が、耐らなくなつて

「お母さん。みんな人が見てゐるから、手を叩くのは止して下さいよ。見つともないから。」

思ひ切つて言ふと、薫のお母さんが宥めるやうに、低い聲で

「お芝居だから誰も何とも思ひはしませんよ。いいから默つてゐらしやい。」

私は薫のお母さんの浅黒い眼の窪んだ顔を忌々しくちらと見たが、すぐ外方を向いて默つてしまつた。母は、すぐ酔きかかるやうに

「默つておいで。何です。生意氣な――。」

すぐ眼を怒らした。大きな瞳孔がかすんだやうになつて、溶けてしまひさうな酔をふくんでゐた。だいぶ酔つてゐるなと、すぐ私は對手にならないやうにした。

すると薫までが、ひくい聲で耳のところへ唇をもつて來て

「酔つていらしやるんだし、お芝居だからいいわ。」

うす操く生あたたかい呼吸で囁いた。私は、薫までが母の方に味方いてゐるので、また不快をかんじた。

「だつて女が見つともないぢやありませんか。下らないところで、拍手したりなんかしてまるで氣狂ひだ。」

と言ふと、薫は、れいのこそこそした聲で

「いいわ。默つてゐたらいいのよ。」

妙にからだを擦りよらせるやうにして、わざとらしく、菊が美しいとか、東京の役者はきびきびしていいとか言つた。私は、そのたびにいい加減に返事をしてゐたが、その惱ましく着飾つた絹物のしゆしゆ鳴るからだが、わざと甘えるやうな、また何んだか欺かすやうに私の方にもたれることに、尠なからず快よい刺戟を私は私のからだにかんじた。妙にしびれ藥のやうなものが、薫のからだから沁み出てきて、それが私のからだに少しづつ注射されるやうな恍惚さがしてくるのを、私はむしろうつとりしたやうな心になつて感じてゐた。

大詰近くなると、掛茶屋の黒い色眼鏡をかけた男が、(それは狂言のかはる度に家へ役割の印刷物や、手拭などを配つてきてゐて、みんな知り合つてゐた。)いろいろな料理の金をあつめに來た。桝と桝との格子になつてゐる危ない板の上を、黒と紺との仕着をきて巧みに渡りながら、私だちのはうへもやつて來た。さうして、懐中からのし紙で包んだ小さい女持の扇子を三本取り出すと

「座長からおつかひになつて下さるやうにとのことですよ。お收めなすつて。」
母の手にわたした。私は、そのとき母がどんな顔をするかと思つて見てゐると、飛びつくやうな笑聲になつて
「まあ、さう。よろしく言つて下さいね。可愛らしい扇子ですね。」
右の手ですぐ小さい紙包みをつくると、辭退する小者に無理におさめさせた。小者はぴよこぴよこ挨拶をして、つぎの桝へ行つた。
「これがお母さん。それから薫さん。お取りなすつて——。」
薫に渡すと、薫は、その磨きのかかつた澁い竹細工の扇子に、强い紅文字で「中村千鶴」と印行風に捺されたのを開いて見て、嬉しさうにぱちぱちやりながら
「ほんとにいい扇子ですわね。こちらにはありませんのね。」
私の母にささやくと、母はさういふ贈り物を受けた喜びとも得意とも、どつちつかずの感心したやうに口を眞面目らしくきつとさせて
「ちがつたものですね。東京の方は氣前がようござんす。」
頭をひねるやうに振つたりした。薫のお母さんも
「ほんとにいいものを戴いた——。」
年甲斐もなく帶の間にはさみ込むと、薫も、派手な繻珍の帶にはさみ込んだ。が、また、それを拔いて
「これをいただいたんですのよ。よく出來てゐますのね。」
私にも見せた。わたり四寸に足らない細づくりの此の扇子は、お弄品めいてゐたが何處かそれなりで優しさをもつてゐた。が、私はそれを見ると、すぐ不快な氣もちになつて、ぽんと、薫の膝の上に投げて
「まるでお弄品ぢやないか。詰らない。」
唇のさきで輕蔑するやうに言ふと、薫は、すぐ手にとつて厭な顏をした。しかし悧巧な女だけに

「殿方にはむきませんのね。」

それが平常の聲とはすつかり異つた特に空々しい優しさを含んだやうな聲なので、私は急ぐ外方をむいてしまつた。

大詰の幕のとき、千鶴は著しく、それと感じられるやうに私だちの桝に目をとめてゐた。その眼尻にさされた紅の冴えたいろまで、舞臺に近い桝だけに目に入つてきて、私は一種の氣詰りをかんじて、なるべく千鶴の顔を見ないやうにしてゐた。けれども千鶴のほうで、その藝のゆるんだ時間(あいま)を偸んでは卑しく投げる目が、いつも私のとなりの薫にそそがれた。その度に見まいとしながらゐる私の目と打つかり合つて、慌てゝ目のやり場を失つた私は赤くなつて俯向いてしまつた。役者なんぞ何だと思ひ切つて烈しい反感に燃えた目をあげると、大膽な、しかし優しい目の光は、隣にゐる薫にそつとそそがれてゐるのに能く出合したりした。ことに、薫は上氣した頬をあからめ、ときどき俯向いたりしながらも、白い舞臺の顔を見つめてゐる瞳は、れいのうるんだやうな動かない据つた底に、なにか、ちらちら燃えるやうな乾いたものが光つてゐるやうで、私はしまひには憎々しくなつて、わざと膝の座り工合をなはすやうな風をして、桝のよこ板のはうへ押しよせるやうにしてやつた。

そのうちハネの太皷が鳴ると、私どもはみな前茶屋からぞろぞろ出はじめた。そのとき母が木倉町のおばさんに會つたので、挨拶をし合つてゐた。

「ちつとも氣がつきませんでしたよ。ずつと前にゐらしつたんですか。道理でわからないと思ひました。」

母と古い友達の、やはり芝居氣狂ひのおばさんが言つた。私はそのとき、おばさんのすぐ背後に桃割に結つたなりの高い、どこか人形のやうな顔をした娘のおゑんをちらと見た。二年ばかり見ないうちに、すつかり大きくなつた上、非常にきもちよい撫肩のながれと、その二重瞼の大きな眼とを眺めた。母はすぐ答へて

「氣のつかないときは、わからないものですね。あ、おゑんちやんも御一緒でしたか。」

おゑんは、しづかな、そつと倒れる瓶のやうに長い腰を折つて、しとやかに少し氣取つたやうに母にあいさつをした。

「わたし、お母さんらしいと思つてゐたんでしたけれど、さうでないやうにも思はれましたの……。」

ちらと私を見て、微笑して、すぐまた母に目をもどらした。私はその美しい大きな目のあとを追つて、その皮膚に穴でも穿るやうに凝視めた。

おゑんのお母さんが私を見つけると

「まあ、大きくおなんなすつてね。ゑん（と言つて娘のほうを見て）は知つてゐるんでせう。」

といふと、おゑんは

「ええ。ぞんじて居りますわ。」

また私にほほゑんで見せた。私もそれにこたへると、薫とは年も下だつたせいか、何か新らしい氣になるのをかんじた。薫のやうなじとじとにあぶらぐんだやうな美しさはなかつたが、すつきりと立ち上つた挑割の大きなのをいただいたおゑんは、ほそ面のすつと描いたやうな美しい鼻すぢに、前茶店の紅提灯の柔らかい光をやどらしながら、すぐ私のうしろの薫に目をうつしたが、その何處か自分にくらべて、ぽたぽたと肥つてゐるために見劣りのする姿から、すぐ目をはなして冷たく唇の尖端で微笑した。いかにも落ちついてゐて、一種の爽やかさをそよがせるやうなところがあつた。さうした態度には明らかに薫を輕蔑してゐるやうなところも窺知はれた。

みんなは茶屋の小者に送られながら、大通りへ出ると、母は、木倉町のおばさんをつかまへて

「あんないい役者は滅多に來ませんね。藝といひ、綺倆と言ひ……。」

賞めると、おばさんも

「久しぶりでいい芝居を見ました……。」

などと言つて賑やかに歩いてゐた。薫はお母さんと一しよに歩いていたし、私はうしろから、おゑんのなりの高い頸すぢを、寢しづまつた大通りの街燈の光のなかに眺めながら、一人でぶらぶら歩いた。

更けた街路は芝居がへりの一どきの騒がしい人通りで埋まつたがゆつくり歩いてゐた私だち一行だけが、みんなに

れてしまつて、母の醉つた疳高い聲だけが、女下駄の地べたをからころ鳴る音と一しよに、あたりにやや高くひびいてゐた。私はいくたびもおゑんに話しかけようとしながら、つい喉まで出かかつてゐる聲が、なぜだか掠れてしまふやうな氣になつて、もぢもぢ歩いたが、おゑんは、だんだん私の方に歩き寄りながら、そつと低い聲で

「ちつと遊びにいらしつてくださいまし。いつも家に居りますから。」

落ちついた聲で言つた。私は、すぐ答へた。

「え。そのうち行きますよ。私もぶらぶらして居るもんですから。」と言つて、また「けふの芝居は面白かつたですか。」

私はおゑんの氣を引いて見るやうに言ふと

「いいえ。わたし、あんなのが嫌ひなんですの。母が無理に連れ出したものですから行つたんでございますけれど。」

と言つたが、私はすぐに

「あの千鶴といふ役者はどうです。おすきですか。」

おゑんは微笑つて

「わたし、あんな厭味な下品なのはきらひなんですの。」

私の氣もち通りを言つて貰つたやうな氣がしたので、特におゑんが氣取つて言つてゐるのでないことも解つた。

「僕もさう思つてゐるんです。私の母なぞも賞めてゐるんだけれど、何もわかつてないんだと思ふんだ。」

私は、母をひき合ひに出したことを自分で不愉快にかんじながらいふと、おゑんは微笑つたまま

「わたしの母もすきなんですの。珍らしいからなんでせうね。」

冷たい皮肉な唇元をキと結んで言つた。

「薫さんてのをあなたご存じですの。一しよにいらしつた方――。」

と前に歩いてゆく薫を眺めながら、私の顔を見てそつと囁いた。私は、しよつちう母親同士が知り合つてゐたので、いつも話しはしたが、そんなことを言つても仕方がないと思つたので

「家へくるひとですが、さう親しいひとぢやないんです。」

といふと、「さう。」と言つて、何か考へるやうな風をした。つまらないことを言つて感情をそこねるのも嫌だつたので、私は、いくらか聲をまぢへて言つた。けれども、私はやはり薫を見たり、そのそばに居たりすることは、その生あたたかい體温をふつと感じるやうな親密さで、いつも愉しまれた。しかし此おゑんとくらべものにならない――とも考へた。おゑんとは、いつも學校のゆききの途で會つたり、おばさんに連れられてよく家へあそびに來たりしたが、一年ばかり見ない間にこんなに大きくなつたのだ。私は、そつと目を上げてその細い頸を見たりした。

大通りの勸工場の角で、向ふから兄の愼一が迎えにやつてくるのが、提灯のあかりですぐ知れた。やはり私と同じい貰つて育てられた川向ひの生れであつたが、そのころは或る役所に勤めてゐた。母は、その姿を見るとすぐに

「まあ、お前迎えに來てくれたのかい。さむいのに……。」

非常に蒼白い陰氣な顔をしてゐる兄は、おちついて何時ものやうな冷かな言葉づかひで「あまり遲いものだから……。」と言つて、やはり冷たい目で、母の顔をじろりと見たが、すぐ薫を見ると

「面白うございましたか。」

と言つて、初めて靜かに微笑した。薫は、すぐ愼一のそばへ擦り寄るやうにしながら、例の甘い故意とらしい優しい聲音で、いくらかおゑんにあてつけるやうに

「大へん、ようございましたわ。どうしていらしやらなかつたんですの。」

兄は澁いやうな聲で

「留守番の方がいいんですよ。結局、つかれなくてね。」

と言つて「いや、大へん母がおせわになりました。」と、お湯屋のお母さんや木倉町のおばさんに、ていねいに調子よく挨拶をした。しかし、それは堅い皮肉な、そこの冷たいところがあつた。おゑんを見ると

「おゑんちやんも一しよだつたの。」

と、なれた聲で言つた。おゑんも私にしたよりずつと柔らかい打解けた微笑をうかべながら

「出口の茶屋でみなさんにおあひしたんですの。いらしやらなくてよかつたわ。つまらないんですもの。」

兄とすれすれに肩をならべたので、撥き飛ばされたやうに私はすぐにおゑんのそばを離れた。さうして、急にむつそりした蒼い兄の顔を見ると、イヤな嫉妬に似た烈しい怒りをこころにかんじた。が、私はすぐ兄のそばへ寄つて

「提灯をもたうかな。」

吃りながら、言はなければならないやうな窮屈な氣になつて言ふと、冷やかに先刻から一度も私を見なかつたやうに、じろりとひと目を呉れると

「いや、おれが持つてゆく。」

と言つて、またおゑんと話し出した。燕は燕で、すぐ兄がおゑんの方へ行つたので、寂しさうに一人で歩いてゐた。私はきうに可哀想なやうな氣がして、そばへ行かうとしたが燕はなぜだかツンとして、私のそばへ行つたことに氣がつかないらしい風をしたので、私は、また、つき戻されたやうで一人であるいた。

母は、兄が迎えにきてから、急に「兄は孝行者だ。」とか「あんなに溫和しい子はないんですよ。お芝居にゆくと、いろんな煮物まで手傳つてくれて、もう出掛けるばかりにして呉れるんですよ。」などと、わざと、兄に聞えがしに言つてゐた。私は私で、そのたびごとに皮肉を言はれたやうで厭な氣がして、ふいと、兄を見ると、やはり冷やかな笑味を唇もとにたたへて、鼻さきで母の言葉をあしらつてゐるやうであつた。

街かどへくると、おゑん親子は、道がちがつてゐるので皆にわかれた。愼一は、何かおゑんと立話しをしてゐたが、間もなく別れた。私も兄に氣をかけながら、內心兄なんぞ何を考へたつて關ふものかと、おゑんのそばへ寄るとおゑんは

「こんどいらつしやいましな」

さう言つて別れて行つた。兄は、むづかしさうに一人で歩き出した。燕も何も言はないで皆は川を渡ると、そこでわかれた。

家へかへると、父は床のなかにゐたが、母が座敷へはいつてくると

「あゝ、草臥れてしまひました。」

と言つて、酔を吐いたが、父は起き直るやうにして

「面白かつたかの。」

といふと「ええ。お陰さまで面白い芝居を見ました。」と母は言つて着物をぬぎかかつた。父は、たばこを一服のむと

「そりや、よかつたね。」

人の善ささうに言つて又夜具をかむつた。私だち兄弟は同じい部屋でねむつたが、やはり兄はむづかしさうな蒼白い顔をして床のなかに入つた。が、またすぐ起き上つて臺所へ出て行つたやうだつたが、きつと毎晩きまつてゐる母への寢酒を燗してゐるらしく、茶の間の鐵瓶の蓋の金屬らしい堅い音がした。「あれが兄の遣り口だ。どこまで悧巧なのか解らない。」と私は呟いてゐると、兄は歸つて又床のなかへはいつた。默つて見ると蒼白い上品な顏立ちが、やはり苛々してゐたが別に怒り出すといふことも滅多になかつたのだ。私は間もなく睡り込んでしまつた。

二

つぎの狂言の變り目に、やはり嫂とお母さんと、私の母とが出かけて行つた。ぽかぽかと温かく明るい町へさして出かけて行つたあとで、やかましい母が居ないのを機會に、私や父はゆつくりと暖かい椽側へ出てゐた。あまりに激しい春の日光は暫く蹈んでゐると、もう暑すぎるほどであつた。父は、手ごろな紫檀の煙草盆を前に、ちよこなんと小さいからだを座らせてゐたが、

「けふは芝居のなかは暑すぎるだらうな。こんな陽氣ではね。」

青い空を見上げながら言つた。

「さうでせうね。けれども好きで行くんだから爲様がない——。」

埃と煙とで茫とかすんだやうな内部で、ありかはらず拍手をしたり、懸聲をしたりしてゐる氣次のない母を目にうかべた。眼の窪んだ顔のお母さんの飢えたやうな顔つきや、その母親とよく似てゐるねちねちした肉感的な顔を思ひ出した。

父は一服のんで

「わしの寺へ來がけの時分は、みんな親で行つたものだよ。あのころから、母は芝居が好きちやつたが……。」

もう父は寺の方を隠居してしまつてから、すつかり體軀が弱くなつた上、何一つ逆立つて母に小言をいふこともなかつた。何でも母の言ふなりになつてゐた。——父は、さういふ風にひとり言のやうに云つたが、何か思ひ出したらしい薄い目を瞬かしたりした。

「芝居なんて何處が面白いんだか。つまらない物が好きになつたものだ。」

私は父の前もあつたので、いくらか母を批難するやうにから言ふと

「わし等にわからんところが面白いんぢやろな。」

人の善さそうに、私の言葉を快よく聞いたらしく、機嫌よく父は言つた。いつでも私は母をけなしつけて置いて父と話してゐたが、父はそれを子供のやうな、ほくほくした顔できいてゐた。

母は、ある料理屋の娘であつたころから、父と一しよになつたが、年が非常に隔つてゐたために母は我儘をつくしてゐたのだ。も一つは、父が非常な美貌であつた點からも、母のほうからお諂りをだしに、するするに夫になつたらしくも思はれた。

夕方になると愼一は役所から疲れてかへつて來たが、私のかほを見ると

「また芝居へ行つたのかい。」

蒼白い顔をいらいらさせて言つた。

「あ、慕さんとも一しよに行つたんです。おかげで家は靜かでいい。」

私も冷やかに然う言ふと、

「ふん。」

鼻さきで言つたが、別に何にも言はなかつた。

晩になると、母は、お湯屋の親子に送られてふらふらになつて歸つてきたが、

「愼一や、酒をつけておくれ、お役者衆が來て下さつたのだから。」

薫親子につゞい入つて來た蒼白い、どこか死んだやうな皮膚をしてゐる男が、私と目を合した。私はすぐこの男が千鶴だなと、その切れ長な眼と、いつも髭をかむつてゐるので、もぢやもぢやになつた少しばかりの髮の毛と、頭のてつぺんの禿げたのとを眼に入れた。千鶴は微笑んで、なれなれしく怪訝な顔つきでつッ立つた私に

「今晩はお邪魔にあがりました。お留守番でございましたか。」

いつも舞臺で聞きなれてゐる聲を、私は自分の家で聞く不審さに變な氣になりながら

「おあがりなさい。」

と言つて、その背後につゞいた薫に目をやると、嬉しさうに紅いつやつやした頰をしながら

「遲くお邪魔してすみませんわね。」

私はそはそはした顔を見ると烈しい不快をかんじた。

そこへ兄がのつそりと出てきたが、眉のところに強い不愉快な皺をよせたが、すぐ消えた。さうして

「やあ、いらつしやい。」

と言つて挨拶をすると、母は千鶴に紹介した。

「これが一番の兄です。いつも年寄を大切にしてくれますので、わたしも安心して居ります。」

と言つて「お前、お酒をね。それから婆やに何かすぐ出來るものを拵へさしておくれな。」と兄の顔色を讀み讀み言つた。愼一はむづかしさうな顔をしたが、すぐ立つて臺所へ出て行つた。

「田舎のおうちは、のんびりして宜うござんすな。何んでも頑丈にできてゐますね。」
じろじろ四辺を眺め出した。私はそのとき泌々、その非常に蒼白いつやのない顔を見た。妙に張つたやうな皮膚がざらざらしてゐる上、口つきが捩ぢれてゐるやうで冴えた色をもつてゐた。
「雪がふるもんですからね。さあ、お母さんお二階へ行きませう。」
母は千鶴をさそつて二階の座敷へ案内した。千鶴は、手のひらを出して、中腰になりながら踊るやうな浮足になつて
「御免なすつて――。」
と私の前を通つて二階へ行つたが、兄だけは、てれたやうにもぢもぢして残つたが、私は
「あんたも二階へ行つたらいいでせう。一しよに。」
と言ふと、れいの生優しい聲で
「あとからでよござんすわ。けふは何故いらつしやらなかつたんですの。」と言つたから
「芝居なんて詰らないから。これからも行かないつもりだ。」と言つてやつた。
目を細めるやうにした。そこへ兄が出てきて
「あなたも二階へいらつしやい。何處にゐるのも同じだから。」
兄は追ひ立てるやうにしたが、微笑ひもしなかつた。もぢもぢと行きたさうにしてゐるのが、その落ちかない腰つきでも私にはわかつた。
すると二階から母が下りてきて
「ねえさんもいらつしやい。」と言つたが
「わたし、きまりがわるうござんすから、あとで参りますわ。」
上りたさうにしたが、酔つた母はすぐその手を引つぱつて

「なにが恥かしいものですか。さあ、いらつしやい。」

引き立てたが、「でもお母さん……。」と言ふのを無理に押すやうにして二階へあげて行つた。

「莫迦め。行きたいくせにぐずぐずしてゐやがる。」

私はぎらぎらする氣もちで耐りかねたやうに言つたが、兄は、すぐ私を見ると

「寝たらいいぜ。何を一人で怒つてゐるんだ。」

眉根に竪皺をよせながら、つツかかるやうに言つた。

「役者なんか引つぱつて來る奴があるもんか。しかも女が何んといふことだ。よその娘まで引つぱり込んでさ。」

私は兄のいらいらとした額を見ながら言ふと、兄は眼で眼を捻るやうな刺々しい表情をしながら

「それがお前に別段どうといふことがないぢやないか。お前なんぞは口出しをしなくともいいんだ。人の娘だからどうでもいいぢやないか。」

壓しつけるやうな語勢で、ひびの入つた茶碗のやうに眞蒼になつて言つた。

「だつて外聞がわるいぢやないか。しかも夜更けにだ。」

私は毒々しく言ひ放つと

「寝ろてんだ。下らないことを言つて……。」

「何が下らない？　何が下らない——。」

私は頭が破裂するやうな劇しい怒りに震ひ上つて言ふと、兄は、見る間に顔ぢうを破れたやうに弛めて、陰氣にくつすりと氣味惡く微笑ふと

「お前は妬いてゐるんだな。」

と、そつと撫でるやうな低い聲で言つて、また、くすつと微笑つた。私はその妙に落着き拂つて腹の中まで射抜くやうな眼光を憎々しく眺めたが、

「妬くもんかい。まだ、お父さんが起きてゐるぢやないか。それで言ふんだ。」
「お父さんが起きてゐる――。」と口移しに言ふかと思ふと、兄はちよいと暗い顏をした。が
「いい加減にしないか。下らないことを根掘りに言ひ出して――。」
と、酒の燗をつけなほすと、二階へ上つて行つた。そのあとを見送ると、母の機嫌ばかり取つてゐる兄を今さらのやうに、ぎりぎりと齒鳴りするほど憎々しく感じた。
私はそつと奥の間を覗くと、父は、寢苦しさうにぼんやり目をあいたまま、年寄りらしい晒したやうな青い顏を天井へむけながら、ときどき、目をしばたたいてゐるのを眺めた。私はそつと坐敷へはいると、父はちらと私を見たが、
「誰か來てゐるのかい。芝居がすんで歸つて來たらしいが……。」
懶い聲で言つたが、私はそのとき、その青い顏や老年期に入つた疲れたやうな聲をきき澄したが、すぐ
「役者が來てゐるんです。中央座のやつなんです。」
と言つて了つてあとから惡いやうな氣がした。しかし父は、やはり落ちついて
「さうかい。燕さんのお母さんも一しよにかな。」と言つた。
私はその顏を見てゐると、動くといふほどもない微かな不愉快さが、やや父の眼にあらはれてゐるやうにおもはれた。私はきうに父が可哀さうな氣になつた。何でも默つて濟ます温良な父を時々齒痒く思はないでもなかつたが、と言つても、いつも劬はつてあげたいやうな氣がさきになるのであつた。
「一しよなんです。お母さんは、まるで醉ふと馬鹿だ。」
と言つてゐるうちにも、二階では何か話し込んでは、高い騷がしい笑ひ聲が起つた。何といふ奴等だ。あの中へ飛び出して行つて、そこらぢうの酒や食器を思ふさま蹴飛ばしたいやうな、ぐらぐらした氣になつた。かうして温和しい父はやすんでゐる。老年期の總ての人がさうあるやうに、うるさいことに係はらないでゐる。しかも、その彫刻的に削りとられた頰の尖がりや、白い顎や、おつとりした上品な、その心のままな正しい優しさに充ちてゐる目や、それらが今

私の前に、あくまで深い孤獨にとりまかれてゐる。微動一つしない眉や頬にも、どこか輪廓が消えてなくなるやうな寂しさが漂つてゐる。氣の毒だ。さう思つて私は

「何かほしい物があつたら、取つてきて上げませうか。」といふと

「いや、何にもない。それよりお前はもう寢たらいい。」靜かに言つた。

「ええ。」

父が寂しからうと思つたが、間もなくそつと茶の間へ出た。兄は、ぽつねんと長火鉢のところで燗番をやつてゐたが、私を見ると

「まだ起きてゐたのかい。」

「うん。」

「お父さんに言ひはしまいな。二階に客のあることをな。」

私の目を見つめて言つた。

「言つて了つた。起きていらつしやるんだから仕方がない。」

兄はすぐ目を怒らして

「何でそんなことを言つてあるくんだ。」

私はまたカツとした。

「どうせ知れるんだから言つた方がいいんです。奥の間まで二階の話し聲が皆はつきりと聞えるんだもの。ちやんと知つてゐらしつたよ。」

私はさう言つて座り込んだ。愼一は、私のこの言葉をきくと、きうに默り込んだ。私も默つて居た。その白い額が醉立つたやうに苛々してゐた。

そこへ千鶴の迎への車が來たので、二階へ知らすと、間もなくみんな二階から下りて來た。母は醉つてふらふらし、

から

「あ、醉つた。醉つた。」

と、手首をぐなぐなにさせて振りながら二階を下りるのを見ると、私は、逆上せたやうになつて睨むやうにした。すると、兄は、苦り切つて尻目に見てゐたが、

「や、どうも大へん御馳走になりました。」

千鶴は、ふらふらしながら言つて玄關さきで倒れやうとすると、薫が駈けよつて

「お危うございますわ。」

と肩をささへた。

「いや、大丈夫。これしきのことに武士たる者が……。」と、せりふを眞似て言つて、大きな聲で笑つた。すると薫は一さあ……。」と言つて、これもほんのり染めた頬をなほ赤くした。と、薫のお母さんが、

「お送りしませうか。」

染めた醉であかくなつたので、なほ猿のやうな顔になつて、そのぼんやりした目が淫らがましい厭な餓えた光をもつて言つた。千鶴は、また手を玄關について

「いや、それには及ばず……。」

また皆を笑はせた。

兄は苦い顔をしてつッ立つてゐたが、母はそれにも頓着せずに

「また入らしつて下さい。」と言ふと

「ちよいちよいお伺ひします。」

と言つて、そとへ出た。薫とお母さん、母が送りにでたが、そこでも何か巫山戯た高い笑ひ聲が寢靜まつたあたりにひびいた。私は車が駈け出したあとまで、薫がさよならを繰り返してゐるので、何んだか蹴飛ばしたいやうな氣がした。

「ほんとおやかましうございましたらうに、どうも有難うございました。」

とお母さんが挨拶をすると、兄は、とつて付けたやうに微笑つて

「お構ひもしませんでした。」と冷たく言つて送つてでた。

薫は、そはそはと顔ぢうに紅い波をうたしたやうな、ぐたぐたに疲れさせてゐたが、兄のそばへ寄つて

「済みませんでしたわね。」

妙に嬌態をつくて言つた。兄は

「ぢや、お休みなさい。」と言つた。

そのとき、私はちらと薫に鋭い怒りを交ぜた視線を叩きつけるやうに走らせて、そつぽを向いた。

みんなが歸へると、母は、くたくたになつて長火鉢にかじりついてゐた。私はその目を見まいとしながらも、つい、睨むやうな氣になると、母はすぐ飛びつくやうに怒鳴り立てた。

「何だねお前は……親の顔を睨んだりなんかして――。」

酒癖が悪いだけに私に喰つてかかつた。私は

「女が何です。そんなにぐらぐらになつて自分で恥かしいと思つたらいい。」

吐き出すやうに言ふと、すぐ私の方へ向き直つて、瞳をすゑて

「もう一度言つてごらん。言ひやうによつてはきかないから。さあ言つてごらん。言つてごらん。」

じりじり膝をすりよせた。私は又かと思つて、けふは酷く酔つてゐるし對手になるまいと思つたが、父のことを考へると、頭がぐらぐらして

「何度言つても同じです。役者なんか引つぱり込むといふことがあるもんか。腐れ役者なんぞ……。」

私は襲ひ上つて噛みつくやうに言ふと

「腐れ役者だと――もう一度言つてごらん。何といふ親不孝者だらうお前は……。」

もう泣きじやくりながら叫び立て出した。兄は

「もう寢たらいいぢやないか。お母さんもお母さんだ。いま何時だと思つてゐるんです。」

いつになく怒氣をふくんで言ふと、母はさういはれると機械的に柱時計を見あげた。長い針は二時をさしてゐた。寂しい深更の時間が白け切つた時計の肌のところに、かつちりと指されてゐた。母はトロンとした目でしばらく凝視めてゐたが、その瞬間ぐんなりしたやうに膝を崩して坐りなほすやうにしたが、すぐ元の姿勢になつて

「二時か……。」

と言つて、あまりに遲い時間なのに醉つてゐても、それを感じたらしく、やや、しやんとしたが直ぐ手をふつて

「あ、醉つた。醉つた。」

と、つつ伏してしまつた。それがテレ隱しのやうにも思はれ、また、本統に醉ひ疲れたらしい自然なやうなところもあつた。兄は、しばらく凝視めてゐたが、その眼はぎらぎらした光をふくんでゐた。「あれが兄貴の性惡だ。默つて卒倒するまでああやつて我慢をしてゐるのが兄貴のやり口だ。」と、私は心でつぶやきながら、へし潰れたやうな母をながめた。まるで風呂敷のまん中を持つてそつと置いたやうな大きな肉體から、靄のやうな酒氣が吐かれてゐた。

兄は暫らくすると、低い聲で（それが又泣くやうに私には聞えた。）

「お前は足の方を持て。おれは頭の方をもつから。」

と言つて、自分でそつと母のあたまに手をかけた。私はその足袋のさきを自分の腹にあたるやうにして、やつと二人で持ちあげたが、大きな肉體だけに、まんなかの背中がたるんで疊の上にするずると引摺られた。いつか見世物で見た大蛇を小者が引擦つたときの、ざらざらした鱗ずれを私は心のうちで感じながら慄然とした。母はもぐもぐと口の内で何か呟いたが、すぐ薄目をあけて二人を見た。さうして

「お前だちは孝行者だ。」

睡さうに言つた。兄は引き裂けたやうに、きみ惡くにたりと微笑つたが、私は淺猿しさにがたがた顫ひながら母を[illegible]

んだ。寢床へ寢かしつけると、父は目をさました。
「また醉つたのか。」
私にそつと囁いた。
「え。しかし大したことはないんです。」
と言つて置いた。父は横を向いて、母の後髮をちつと見つめたが直ぐ横になつて睡てしまつた。
私と兄とは父等の居間を出ると、婆やに二階を片づけさせたが、二人とも默まつて座り合つてゐた。兄は
「もう寢たらどうだ。いつ迄起きてゐるつもりなんだ。」
先刻からの覺えるやうな不快さうな顏を私の方にさしむけながら言つた。
「兄さんこそ寢たらいいだらう。」
と言つて置いて、自分の室へ私は行つた。時計が三時を打つた。寂しく。

三

……私はそのとき表の戸が開いたので、兄が勤めから歸つてきたのだと、直覺的にそつとおゑんに囁いた。おゑんは
「さう。困つたわね。」
どぎまぎしたが、その眼をごまかく顫はせるやうにした。
「そこの陰へ隱れるんだ。そこへ。」
牡丹の大株の背後を指した。それほど私の家には古い大株な牡丹が、毎年いまごろになると四五十輪の濃厚な花をつけた。私の背丈よりも高く、深くうしろに擴がつて、渋々しいやつと萌えたばかりの綠葉ではあつたが、隱れゝばすぐに人目に立たなかつた。
「え。これでいいの。」

と、蹈んだ。透して見ると牡丹の株や古い枝といふものは、妙に晒された骨立たしいものであるが、その隙間から袖口や帶や、白い頸などがちらちら見えたが多分縁側の方からはわからないだらうと思へた。

兄は袴を脫ぎながら座敷のほうから縁側へ出てきて

「牡丹が咲いたな。(とひとり言のやうに言つて。)お母さんは――。」

牡丹の花をかぞへながら言つた。私はなるべく兄が庭へ下りないやうにと思ひながら

「芝居です。また晩いんだらう。」と言ふと

「芝居――か。ふん。」

と言つて、すぐ座敷から出て行つた。私はやつと落ちついて牡丹の方へ向くと、おゑんはすつきりと高いたりを伸びさせた。低い枝の方から

「もう、いいの。わたし、どきどきして了つたわ。」

ちつと呼吸を詰めてゐたらしい含みをふくんだ皮膚が、黑ずんだ濃い大輪の花とくらべて調子はづれに白くなつて見えた。

「氣がつかなかつたらしい。しかし役所から歸つたばかりだから、急に外出をしないだらうしね。困つたね。」

「さうね。だから姿さつき歸へるつて言つたんだけれど、あなたが惡いのよ。」

そろそろ牡丹のかげから出てきたが、「今出ると何時兄貴がくるかも知れないからいけない。」と言つて、私もその陰の方にうづくまつた。内心ではかうしてなるべく長くおゑんを止めておきたいのと、兄に見つけられさうな不安と、その二つが私をそはそはと落ちつかない戰ふやうな氣もちにならせたが、見付けられたつて關ふものかといふ氣もあつた。それに妙におゑんが慌ててゐて、兄に發見せられるのを怖がつてゐるのが、兄の氣を惡くさせることを恐れてゐるやうで「やはり兄を好いてゐる。」やうに思はれてしかたがなかつた。いつそ兄の前でかうしておゑんがこつそり讃つてきたことを見せつけておいて、平常からの苦惱を啣んだやうな顏つきをするのを驚かしてやりたいとも思つた。

「だつて晩くなるわ。もう六時よ。」

震え聲で言つて、私と居るよりも早く庭から表へ出たいやうな氣振りを見せたが、私は默つて、すぐ目の前の牡丹の、やや陰で咲いたらしい弱い花輪を、そつと嗅いで見たりした。

「おゑんちやんは僕より兄さんの方がすきなんだね。きつと。」

と言ふと

「さうなの。兄さんはすつきりしていらしやるし、あなたは氣短かくていや。」

と言つて微笑した。いつでも兄のことになると妙に私をずつと下に見るのだ。

「ぢや勝手にするさ。しかし今日はいつまでも然うしてゐる方がいい。」

私は陰から出ようとした。

「でもそりや貴方が間ちがつてゐるわ。わたしを蹈へして下さらなければ男として卑劣よ。」

眞顔になつて言つた。卑劣だつて闘ふものか。と、その細おもての美しい大きな目を見たが、これが兄を好いてゐるのかと思ふと、もつと困らして遣りたいと思ふのだ。

「どうせ卑劣だ。兄貴のやうに僕はすつきりしてゐないんだ。」

ふと氣をつけると蹈んだままでゐるおゑんの目が、ぢつと動かないで、瞳が二つあるやうに潤つて大きく私を見上げた。その澄んだ瞳のそこにスペクトールのやうな一點の光が、夕空からずり落ちて影をおとしてゐた。が、すぐ私の方へ來て

「わたし裏門から磧へ出てかへるわ。これで既うあなたに會はないことよ。」

と言ふかと思ふと、すぐに馳け出した。開きにくい朽ちた裏戸をガタガタ音させたが、急になかなか開かなかつたので細身のからだをするつと拔けさせて、日暮れの磧へ出た。私はそのあとを追つて石垣の上に立つたが、馳け出さない前に仲善くかへしてやればよかつたと

「おゑん――おこつたのかい。」と叫ぶと

「また明日よ。よ。」

と言つて、ぱつと大きく微笑つて、いきなり抱きつくやうに最う一度強烈に笑みをおくると、もう磧の石づたへに向岸の上に立つて、手を二三度振ると、すぐ町かどを曲つて行つた。私はそのうしろを見てゐると、おゑんらしく「また明日よ。よ。」と言つた甘えたやうな聲をくちさきで繰り返しながら、やや落ちついた。さうして兄に勝つたやうな氣がしたが、やはり庭に立つてゐた。

日暮れどきに花瓣を毎日凋ませるくせのある牡丹は、紅い風船玉のやうに柔らかく凋みはじめた。その一つづつの花の内部に烈しい晝間の日の光のほとぼりと、粉つぽい濃い黄ろいしべの匂ひがこもつてゐて、木の芽どきの空氣にもつれてゐた。長い間それを嗅いでゐると頭が重くなる……

座敷へあがると、兄は何か考へるやうな目つきで、父のそばに座つてゐたが、私を見ると、

「庭で話し聲がしたやうだつたが、お前ぢやなかつたのか。」

白眼がちで私を上から下まで、一と通り眺めて言つた。私はハッとしたが

「いや、誰もゐません。」

自分でも氣のつくやうな變な氣になつて言つた。兄は「さうか。」と言つて雜誌をよみ出した。そのとき父は

「お前だち二人だけゐるんだね。どうも顏がよくわからんが……。」

あまり良くない目をしばしばさせたが、

「氣のせいかの。」

と言つて立ち上つて、便所へでも行くらしく歩き出したが、その戸とは反對の襖の戸をがたぴし開けはじめたので、私と兄とは知らず識らず顏を見合せた。こんなことは一度もないのだ。私はその曲つた腰つきと、よちよちした手つきを見ると冷たくなるほど驚いて兄の膝をそつと叩いた。

「はてな。」と兄は呟いて
「お父さんは便所へ行くんですか。さうだと左の方の戸ですよ。」
と言ふと
「さうだつたの。目がかすんでよう見えんが……。」
と言つて、妙に蟹のはさみのやうに手をひろげて、蒼白い夕かたの障子の明るみに誘はれて行くやうに、こんどは反對の障子の方へ歩み出した。そこは庭つづきの夕方の長い暮れきらない光線で、一杯になつてゐるのだ。
暫私と兄とは、もう一度顔を見合せた。冷たいものを打合せれたやうにすぐ立つて、父を便所のほうへ連れて行つた。
私は兄の耳もとで
「目がいけないんだな。」
おろおろした聲でいふと、兄も、あまり突然だつたので吃驚したやうな鎮つたやうな聲で
「變だと思つたが、よほど不良いな。」
私どもは、こんどは手をひいて座敷へつれてきた。
「ええと。障子の棧がわかりますか。すぐ其處の……。」
兄がいふと、父は、ちつと眼をすゑてゐたが幾度も手の甲で拭くやうにして、またぱちぱちやつたが
「何んだか茫とかすんで、よう見えん。白くなつて見えるが。」
と言つただけだつた。
すぐ醫者を呼んでくると、虚弱と言つてこれだけの老齢であるし、もう手遅れだとのことであつた。私だちは又顔を見合せた。寒いものが背中をぞつと流れたやうに跪いてしまつた。
晩になると又、熹やお母さん、母がかへつてきたが、やはり千鶴も一しよであつた。そのうへこんどは、丸さんといふ、道化役者が一人加つてゐた。ぶくぶくに肥えてコロコロさんとも仇名されてゐた。もう、こんどは、すつかり剃れ

たやうに、千鶴は私を見ると
「や、先晩は失禮。これが丸君です。」
　と言つて紹介すると、酒の氣のある丸は
「ご覽のとほりのコロコロさんです。將來よろしく御ひいきに願上げ奉ります。」
　土下座をするやうに言つた。私はカツとしたが
「あ、さうですか。」
　冷たく言つた。母はふらふらしながら私を見ると苦い顔をして
「何です。そんなところに衝ッ立つてゐて。お客様があるのに。」
　と言つておいて
「愼一や、お酒をつけてお吳れ。」と奥へ言つて
「さあ、二階へどうぞ。」と言ふと
　一同はどやどや二階へあがつた。薫は、もうそはそはとして、わざと
「あなたもお二階へいらしやいましな、え。おいや。」
　溶けるやうなうつとりとした目で、そつと私を見たが
「まあ、あなたが行つたらいいでせう。僕はいやです。」と言ふと
「さう。ぢやお先きに。」
　一番あとから、それでも靜かに階段をあがつて行つた。兄は默つて酒をつけ出した。「打棄つておけばいいのに、酒なんぞ出すから上氣せるんだ。」と私は腹の中で呟いたが、默つて兄の爲ることを見てゐた。二階では丸さんの聲らしい巫山戯た笑ひ聲がおこるかと思ふと、ずしんと尻餅をついたらしい音響がした。すると私共の座つてる天井の釣ランプの陶器の笠と、それを支へてゐる金具とがガチガチ顫えるやうに鳴つた。そのとき兄の眉がぴりつと動いたが、しばらく意

地悪く浮いてゐてすぐ消えた。私は鋭い舌打をした。

兄は爛ができると二階へ持つて上つたあとで、私は玄關の帽子かけにある、千鶴のらしい中折を見た。が、いきなり手にとると板の間に叩きつけて置いて土間へ蹴飛した。ひと掴みの布片を投げつけたやうに輕く飛んで行つた青い中折を、暗い土間の上に私はぢつと見てゐたが、それだけでも足りないやうな深い憎悪に燃え上つた。――けれども、そのままにして置くわけにゆかないので、拾ひ上げて帽子かけにかけてをいた。が、籐表の黨の派手な紅い緒の雪駄や、千鶴のらしい新しい細作りの下駄を見たときに、またカツとして、そこらぢうを蹴飛ばした。それらは礫のやうにころころ轉がつて行つたが。また私はそれらを一つ一つもとの位置にかへすと、怒々制することのできない激怒にぐらぐらしながらそこらぢうを歩き廻つた。

兄が降りて來たから

「あんたが酒なんぞ、お母さんの言ふなりになつて持つて行くからいけないんだ。」

唾とともに私は火のやうに、兄の顔に燃えついて呻んだ。

「默つてゐろ。おれが酒をもつて行かなきや、家ぢう喧嘩になるのだ。お前なんぞはまだ解らない。」

と言つて煙草をつけた。

私は自分の居間へかへつたが、なかなか寢つかれなかつた。二階から起るいろいろな話聲や笑ひ聲につれて、ふらふらになつた母が、年甲斐もなく何か小唄をうたひ出したり、それにつれて愛想らしい黨のお媼さんの高い笑ひや、丸さんの調子はづれな臺詞や、それらは絶える間もなく私の疲れて睡れない頭にひびいてきた。さうかと思ふと、蒼い顔をしながらぢつと爛番をしてゐる底氣味の惡い兄の默つた顔や、また、ひとりで寂しく床についてゐる父や……「まるで畜生のやうな奴らだ。母も母だ。現在父があやつて默つて小言一つ言はないのを宜い機會にして舐既さわいでゐるのだ。黨にしろ、そのお母さんにしろ、全で餓鬼のやうに性慾的に饑えてゐる奴だ。」さういふ妄念は次から次と起つて、私はぼつかりと一人で眼冴えした目をひらいてゐた。

一時二時……をきくと、やつとどやどやと階段を下りる音がするかと思ふと、薫に何か階段のところで巫山戯てゐるやうだつたが、薫の操るやうな含みごゑで笑ふのがきこゑた。かと思ふと

「ひひひひひ……。」

と丸さんの上膊で笑ふ聲がした。みんな玄關で何か言ひながらゐるうち、車の音が靜まりかへつた市街の町裏になつてゐる方へ、だんだん遠くなつてゆくのが聞えた。薫らもかへつた。

しかし不思議に母の聲がしなかつたので、私はそつと床から這ひ出た。兄はと見ると茶の間に居なかつた。私はそつと階段を這ふやうにして登つて行つて、ふいと顔を出すと、母は俯向けになつて醉ひ潰れてゐて、兄が懐手をしながら眞蒼になつて、手のつけやうのないやうに衝ッ立つてゐた。が、そのとき、上り口へひよいと出した私の顔を見ると、瞬間、ぴくりとしたやうに頬の肉を動かしたが、また、母をしづかに眺め下ろした。私は見つけられたので、のつそりと座敷のなかへ這入ると、座布團の亂れたのや、鷄卵のからや、骨ばかりが刺々しく皿に殘つてゐるのなどが、うすくらい洋燈のかげに置かれてあるのが目にはいつた。それらの一切の淺猿しい取り亂れた有樣は、すぐ母の醉つぶれたのを宜い機會にして、千鶴が薫やお母さんと、あられもなく叫んだり笑つたりしてゐるのを目に描かせた。

私はさらに母がくつしやりと潰れたやうになつて、手と手の上に顔ををきながら、うつ向いたまま睡てゐるのを、まるで死人か何かを眺めるやうに穢汚いものに見下ろした。兄は袋から破つたやうな聲で

「お母さんはこのままにして置かう。お前も寢たらいい。」

「………」私は默つてゐたが、また兄は、

「明日ここを片づけることにしやう。そこにある座布團を取つてくれ。」

そつと母を横に寢直させると、石でも起したやうに大きなからだが、ひと廻り轉があつた。その上に座布團をかけた。足の上にも一枚。

私は雨戸を繰ると、さつと夜更けの風が水氣ぐんで、庭の牡丹の匂ひを含んで吹いてきた。それから妙に木の芽どき

の壁からひ匂ひも、ながれて室にはいつた。

「そつと雨戸を繰らないと、近所で目をさますから。」

兄は低く言つたが「近所は皆知つてゐるのに決つてゐる。あんなにきやつきやつと騷いでゐて知らない奴があるものか。」と腹の中で考へたが、わざと默つてそつと四枚の雨戸を繰りはじめた。

四

おゑんの家の格子をあけて入ると、すぐおゑんらしい聲で

「どなた――。」

と言つたので「僕です。」と、なかの戸をあけて入ると、おゑんが長火鉢のところで微笑しながら「入らしやい。」と言つて、ぷつと笑ひを嚙みつぶしたやうな顏をした。おばさんも變な顏をして、目で挨拶をした。とすぐ入口へ背後を見せて坐つてゐる私より三つ四つ年上の男がゐた。その頭髮（かみ）を長くしてゐる格構が誰かによく似てゐるやうだつたが、どうも思ひ出せなかつた。

火鉢のそばへ寄らうとするとき、その男は不意に私の方を向いて、」

「家に留守居がゐるのか。」

と言つたのは、兄の愼一であつた。はつとして私は赧くなつたが、

「や、兄さんか。」と言つたとき、おゑんは手を拍つて笑ひ出した。私は

「誰もゐないんです。」

兄はきうに改まつたやうに、

「ぢや、おばさん失禮しませう。うちに誰もゐないさうだから。」

私をじろりと見下しながら立ちあがつた。いくらか氣まりわるさうにして居るのが、かうして打ち合つた兄の顏を、

さと堅苦しくさせた。
「いいぢやありませんの。もつといらつしやいましな。」
柔しく、いくらか甘えるやうに言つて、すぐ、ちらとおゑんは私のかほを見たが、何處かそらぞらしく目を外らした。
「また、そのうちに來ます。」
兄は內戶をあけて暗い玄關へ出て行つたが、見送りに立つたおゑんと、何か二言三言話してゐるのが、私に聞かされない特別な意味があるやうに、いらいらして聞いてゐたが、何だが薄暗い玄關がでおゑんの手と兄の蒼白く骨立たしい手とが、しきりに絡まり合つてゐるやうな惱ましさを、私は鐵瓶の蓋の熱した上を指さきで啄つきながら目に描いてゐた。
おゑんは座にもどると、いきいきした目をすこし昻奮させたやうにちかちかさせた上、眩しいものを見るやうに
「どうして兄さんとあなたとは、むづかしい顏を仕合ふんでせう。でも、兄さんはいい人よ。優しくて。」
と言つたとき、おばさんは「おさきに失禮します。ゆつくり遊んでいらつしやい。」と言つて、年寄らしく奧の間へ這入つて行つた。私はおばさんを見過すと
「一體、兄貴はときどき來るのかね。」
「ええ。しよつちう。氣にかかるの。」
おゑんは、コケツテッシュに眼のふちに美しい皺をよせて、おかしさうに微笑んで見せた。
「用もないのに何しに來るんだらう。」
私が言ふと
「あなただつて然うよ。」
おゑんはさう云つて微笑つた。會ふと妙に高びしやなおゑんは、兄と話をしてゐるときは從順であるのも氣にかかつ

た。

そのとき今歸つたばかりの兄が、ガラリと格子戸をあけると、私の名を呼んで

「ちよいと寄り道をするから、さきに歸つてゐて吳れなきや困るよ。」

首だけ格子戸の暗がりに差し込んで言つたので、

「あ、今かへる。すぐに。」

と言つて、私は慄然とした。さきから外に立ち聞きをして居たのではないかと思つたが、何時もの兄のやり口としては、どこか急き込んだところがあつた。——さう云ふかと思ふと、すぐ格子戸が閉められて道路へ出てゆくらしい下駄の音がした。私は心臟が冷たくなつたやうな氣で、おゑんの顔を見たが、やはり微笑つて

「お留守居がなくつちや惡いわね。」

と言つて「どうして其麼コワい顔をなさるの。ひとの顔ばかり見つめて…………。」と、何か氣にかかるために明瞭と話されないやうな調子で言つた。私は兄とおゑんとが私の考へてゐるよりも、ずつと深いところにあるやうな氣がして、おつかりしてしまつた。何を言つたつて駄目だ。と、私はそつと座を立ちあがつた。さうして、生苦しいときに出るあくびを故意とらしくすつとやつて

「僕はかへらう。」

帽子をとると、おゑんはいきなり

「どうして、そんな顔をするの。變なのね。」

私のかほをさし覗いた。

「さうさ。おゑんちやんは兄貴が僕より好きなんだからな。」

「そりや本統なの。でも、あなたも好きよ。あなたとも話してゐたいわ。」

と言つたが、いつものやうに、私をもずるずるに引き摺らうとしてゐるのだと思ふと、私はひどく疲れたやうに玄關

へ出て行つた。玄關で、

「わたし、郵便を出さうと思つてるんだけれど……。」

と言つたから

「誰に……。」といふと「あなたに……。」と言つた。私はこのとき、ほんの少しばかりの新らしい興味を呼び起したが、やはり欺されてゐるやうな苦しい氣もちになつた。欺されたつて關ふものか。おゑんと繋がりをつけておくだけでも兄貴にとられるより增しだとも思はれた。

「でも、お母さんがね。すこしも郵便を出すおあしをくれないんだもの。さう言つていつも貰ふわけに行かないでせう。」

實際、おゑんの母親は小使をもたさなかつたのだ。さうして又

「明日お芝居にいらつしやるの。」

明日は初日で、また母のお供をしなければならないのだ。私はさう思ふと、すぐ暗い不愉快な氣もちになつた。いやだと言へば何かにつけて當り散されるし、結局、行かなければならなかつた

「いやだけれど、行くには行くんだ。ゑんちやんは――。」

「わたしも行くのよ。ぢや、向ふで會へますわね。」

と言つて玄關へまで出てきた。私は暗い道路へでると、家へかへつた。

家の前へくると、そつと格子戸に耳をあてて兄や母が歸つてゐないかと聞き澄したが、靜かで音一つなかつた。唯、古い八角時計がすぐ茶の間にかけてあつたので、それがカチカチと冴えた白つぽいやうな寂しい音ばかりを立ててゐた。

家へはいつて、奥の間へゆくと、父が座布團の上に座つて、私のあしおとを耳に入れると、こちらを向いた。父はあれから間もなく開眼したまま盲ひてしまつてゐた。見たところでは澄んだ美しい目ではあつたが、瞳の底がすつかり冷

たくなつてしまつたやうに、白い幾つかの斑點がかかつてゐて、それが力なくとろんとしてゐた。――その見えない眼がしんとして此靜かな座敷に今まで開かれてゐたのかと、私は悲しげに父をながめた。

「いま、かへつたのかい。」

眼をそらへ向けるやうに、私の聲のする方へ手さぐりで、もどかしく悶えながら向けられた。

「え。――たばこを上げませうか。」

「うん。一服つけておくれ。さつきから搜したけれど、つい傍にないやうだつたが。」

父はいつも手さぐりで冷たい煙管をさがしてゐた。今夜も誰もゐない明るい洋燈の下で、疊の上をざらざらした手つきで、蜘蛛が這ひあるくやうに一人で寂しく煙管をさがしたのだ。と、私はそれをありあり目にうかべた。

「さあ煙草です。」

と、すひくちを指の間にはさませると、かつちりと齒に吸口の眞鍮をあてたが、間もなく濃い煙を吸ふたり吐いたりした。目をぱちつかせながら……私はそのとき、そつと父の眼のすぐそばへ持つて行つた掌で、その眼を蓋するやうにしたが、父は何も感じないやうにぢつとしてゐた。それから掌をしきりに微動させたがやはり何でもないらしい平氣さで、その開いた目でどこを凝視めるといふことなく茫乎として漂はせてゐた。

私はそのとき、また、洋ランプをそつと取よせて、すぐ尺と隔たない目の前にさしつけたが、それでも眼はやはり動かうとしなかつた。餘りにあかるくさしつけた光は、白いたまごの白味のやうな父の眼を、はつきりと浮き出させ、そのなかに小さい灯かげが映つて見えた。

「お父さん。何か見えないかな。何かゞ……光つたものが……。」

私は自分でもそれと氣のつく變なやうな聲で囁いた。父はそのとき機械的にものを搜るやうに縮づいた手さきを膝の上で、もぢもぢと動かした。その蒼白い節高な長い指さきが、みなくの字なりにガリガリと曲つて、なにかを摑もうとしてゐるらしい、かすかな本能的な力をあらはしてゐるらしく見えた。父は同時に眼をぱちぱちやるかと思ふと、こん

どは大きく瞠るやうにしたが……」

「何も見えんが……何か眼の前にあるやうな氣もするが……。」

と嗄れた聲で言ひながら、いつの間にか膝の上に置いてゐた手を、すこしづゝ、震へるやうなのろい速度でだんだん持ちあげた。

「何か……かう灯のやうなものが見えませんか。ぼつとでも」

そのとき父は優しく、しかも樂しさうにゆるく靜かに微笑をもらして、

「さう言へば何かが見える。ぽつちりとだけだが……ほんの少しばかりだが。」

と言つて、また眼を大きくひらいた。が、そのとき例の手さきがだんだんに持ちあげられて、何かを摑もう摑もうとしながら、父の方にさし向けた私の顔にひいやりと觸れた。私はハツとして寒さを背中にかんじたが、父はすぐにつとりして

「お前の顔か。これは――。」

と言つた。私はその手をもとの膝の上へそつと撫でるやうにおろしてあげると

「さつきからのは洋燈（ランプ）ですよ。」

と言ふと

「さうか。ランプか。わしもさういふ氣はしたが。」

父はかう言つて、また寂しく頰笑んだ。

私はまた行儀正しく座つた父の姿を、やや離れてしみじみ眺めたとき、さきからの父を試みたやうな自分を、こんどは誰かゞ傍（そば）にゐて、ランプを持たせたり、手のひらを出させたりしたものが居るやうな氣がして、だんだん靜かな四邊（あたり）が恐ろしくなり出した。僧侶である父は隱居してからもやはり頭を剃つてゐたのが、今夜に限つて背後の襖へかけて、ぼんやりと大きく映つてゐる瘠せた頭だけ大きい影が、からだにつれて動くたびに、襖の闕のあたりから冷々した一寸

法師のやうな濡れたものが、ぴしやぴしやと歩き出してくるやうで氣味が惡くて爲樣がなかつた。それに、へいぜいはちやんと二つの手を合掌するやうにして膝の上に置いてゐたが、妙に今夜にかぎつて兎もすれば疊の目をざらざら引ッ掻くやうにしながら、何かを掴まうとするらしく、幾度となくそれが繰りかへされたのであつた。

「何かほしいんですか。」と言つても

「いや、何もいらん……。」

と言つたあとで、やはり疊の上を引ッ掻くやうにするのだ。そのたびにがりがりと掻餅を噛むやうな惡い音がした。

私はたまりかねて

「お父さん。手をひざの上に置いて下さい。疊を掻かないでね。」

やさしく言ふと、ひとの善ささうに微笑したが、よほど可笑しかつたと見えて

「ふふふ……。」

低く笑ひごゑを立てた。

「や。誰かがゐる。そこに。」と私は、もうすこしで聲を立てやうとした程驚いて、室のすみずみを見廻した。さうだ。障子のそとに濕つた雨戸が閉められてある筈だ。雨戸の……雨戸と障子との暗い窮屈な隙間に、なにかが平つたく潜んでゐるかもしれない。私は立つていきなり障子をあけた。すらりと、が、やはり雨戸だけがぴつたり閉つてゐるだけである。

「いま笑つたのはお父さんですか。」

私はやや大きな聲でいふと

「わしぢや。煙草をつけておくれな。」

別に何も變つたことがなかつた。煙管を手にとると、濃いけむりを吐いた。それがゆらゆらと影をつくつた。襖の白い地の上に、ぼんやり幾つとない影がだんだん裾のほうから消えはじめながら、最後のうすい影がすつと天井の暗みに

這ひあがつた。

そのとき表の格子戸がガツタリと開いて、母が歸つて來た。私はいいところへ歸つて貰つたやうな氣で迎えに玄關へ出ると、今夜も齋の家で酒を振舞はれたらしく、危いふらふらな足どりをしてゐた。私を見ると

「お父さんはまだ起きていらつしやるかね。」

「え。起きてゐらつしやいますよ。」

二人とも奥の間にはいつた。母はおみやの包みから、青い粉のついた祭の菓子を出すと

「いま歸りましたの。一つおあがんなさいましな。」と言つて、菓子を出して

「お口を開けなさい。」

父は子供らしく雀のやうに口をあけて、喉をごつくりとやつたが、母はそれを右にやつたり、左にやつたりして面白がつた。私は醉つてゐても餘りな母の巫山戯た有樣を見ると

「お止しなさい。そんな目の見えない人をからかつたりするのは。」

と言ふと母はつんとして

「またお前の孝行振りかね。」

尻目にかけたが、また

「すぐ前ですわ。ほら。もつとお口をお出しなさいな」

笑ひを忍ばしながら、齋ろい菓子をあちこちと動かしたが、そのたびに、父の寂しさうな口がその菓子のあとを反對に追つてあるいた。それが父にとつて面白い特別な事柄のやうに、その地藏眉や、ぼんやりした目が一杯の微笑をうかべてゐて、母からさうされるのが何かしら嬉しさうになつて私には見えた。

「こつちよ。あら。こつちよ。」

娘のやうな聲を出しながら、片手を壁についてゐる母を見ると、

「いいかげんになさいよ。ばかな。」

と言ふ私も、しまひには大きな口をあけて菓子のあとを追ふ父がいとしくなつて、知らず識らず目を潤ほした。けれども父は

「さうお前のやうに素早く取つてしまつちやいかん。」

と言ひながら、見えない目をみはつて樂しさうに口をあけてゐるさまを見ると、とうてい私には理解することのできない永い間の、父と母との生活を考へるのであつた。父はいつも母の下敷にされたやうに、これまで一緒に生活してきたのであつた。「これが彼等の生活だ。そして父にとつてはああして居るのは快樂なのだ。決して私の嘴を容れるところではない。」と、私はだまつて見てゐると、しまひに母は、その柔らかい餅菓子を父の口にいれた。父はもぐもぐと顔ぢうを動かしながら、甘美さうに食べはじめた。

「お前も一つおやり。」

と言つて私にも呉れた。さうして、また母は

「ほら、もつと此方ですわ。」

父をからかひはじめた。父は可笑しさうに顔ぢうをぐにやぐにやさせて、やはりおもしろさうに母の手のほうへ口をあけては、おもしろさうに追つて居た。――私はそのとき、この一つの小さな事件が彼等にとつて怍愁に近いほどの興味を有たれてゐることを、だんだんに考へ出した。「あの二人の顔を見ろ。その面白さうに微笑ひ合つてゐる有様を見ろ。」と、私はそこに居ることとさへ厭はれて、そつと茶の間へ出て行つた。茶の間は暗く、ひいやりとしてゐた。

「一體目を閉ぢてゐて、ああいふ風に食物を口でさがし當てられるものか。」

私はそこに座ると、右の手で菓子をもつて、私はすぐに目をとぢて、それを口でさぐりはじめた。閉ぢられた視界のはてにおほ方洋燈であらうと思はれるぼんやりした光がうつてゐる外は、濃いくらやみになつて、何んだかちらちら光つた流星のやうなもの、よく雪の積つた野原などを見つめたときに經驗する一種の光が、ちらちら虹いろにひかるばか

りだつた。さうして右の手に菓子をもつて口でさぐり初めると、右の手がまた機械的にだんだん口もとへ向つてくるのであつた。が、やはりすぐ口へは來ないで、冷たく鼻のさきに觸れるのであつた。

「やはり目が働らかないからだ。」と私は、その菓子を土間の方へぽんと投げ出した。そのぐんにやりした柔らかい一つの個體が、粉つぽい黄ろさを洋燈の光にうかせたまま、ぐんにやりと潰れたやうに落ちた。と、そこに坊さん頭の、それはまるで薄墨で描いた輪廓だけのやうな薄い影が、その黄いろい菓子を投げてから、すうつと、濕つたひえびえしい暗い土間の上に座つてゐるのに氣がついた。それには耳も目もない、本當にうつすりとした影のやうなものであつた。

「すこし今夜はおれの氣が變になつてゐるな。」と、目をすゑてまじまじ凝視めると、ふしぎに、殆あるかないかと思はれる程度の線で、その圓い頭が、どこが顏だか耳だか判らないものが、細い綱のやうにくつすりと微笑つたやうな氣がして、私は手に持つたも一つの菓子をまた不意に投げつけた。ぴつしやりと、水の上にでも落ちたらしい濡れた音がして落ちたが、すぐその影が突嗟の間に消えてしまつた。ただ、衣桁に一本の黑繻子の深を身の女持ちが、だらりとかけられてゐるだけであつた。

私はそつと奥の間を覗きにゆくと、父はやはりちやんと座つて、手にきいろい菓子をもちながら、もぐもぐと甘美さうに食べてゐた。その傍らに、母もぼんやりとランプを見つめて、何か考へ事をしながら座つてゐた。

「…………」

「…………」

と、押し默つてランプの光に浮き出た二人は、そのまま永い間ぢつと動かないもののやうに見えた。

そのとき母はひよいと振りかへつて、私の覗いてゐるのを見ると、小さい叫びをあげるほど驚いて

「誰かと思つたらお前かい。あ、びつくりした。」

ぞつとしたやうな蒼い顏で言つた。神經的に父もこちらへ顏を向けた。白眼でやはり何か見やうとしながら……。

母は「人の惡い子だね。そんなところから隙見なぞして――。」と言つたが、私は默つて茶の間へ引き返した。さうして、ふいと見るとさつきの黃ろい菓子がまだ土間に潰れたやうに殘つてゐた。妙に光りながら……。

五

華やかに一時に電燈が點いてから、やや疲れぎみの見物もみな息を吹き返したやうに、あちこちに夕食などの重詰をひらくのが多かつた。その日はわけても場內は蒸し暑く、香料やお白粉や、女の肉體が發散する惱ましい脂じみた匂ひで、こもつた空氣が重々しく頭痛を催させるほどであつた。來るといふおゑんが來なかつたほか、薰親子に母、私を加へて四人づれだつたが、母は、もう、そこらぢうの同じ年輩の女づれと一しよになつて、重詰を頒け合つたり、盃を廻したりしながら忙しさうにして居た。

薰が先刻からしきりに私に何か言ひたさうに、わざと膝がしらをすりよせたり、妙に肩をすれすれにさせたりしながら、荐りに薰らしい誘惑的な甘えた言葉で、何か言ふかと思ふと、ぷつつりと止めたりしてゐたが、そのぐなぐなで、觸れるごとに圓みをこつこつに有つてゐるからだは、強い變な匂ひと一しよに爛熟しきつて、持つたら崩れさうに見えるやうなところがあつた。

「わたしね。あなたにお願ひがございますの。」

ぽつぽつと火照る頰をさし出しながら言つた。私はその昂奮したやうな目を見ながら

「どんなことです。言つてごらんなさい。」

變な豫期を感じながら言ふと

「藥屋へ行つて見たいんですの。知つていらしつて――。」

藥屋なら私は知つてゐる。が、なぜかすぐ千鶴を思ひ出して、吐き出したいやうな不愉快をかんじたが、

「ねえお願ひがございますわ。」

妙にもたれかかるやうな重みを左の肩にかんじたとき、私は厭だといふことばが怎うしても出なかつた。

「ぢや、花道の方から行かう。あそこの下から。」と言ふと

「あなたはさきに入らしつて下さいな。わたしあとから行きますから。」

私は桝から立つて花道から、すぐ下のトンネルのやうな暗いところに待つてゐた。長い土間に板敷きがあつて、歩くたびにガタピシと寂しい音がした。さうして暗いカンテラのやうな小洋燈が點してあつて、冷たい空氣が頸すぢをながれた。間もなく薫がやつてくると、暗いので私をすかして見ながら、そつと私の名を呼んだ。

「暗いわね。でもありがたうよ。」

私の肩にだらりと蛇のやうな手がそつと置かれた。その腕のあたつた肩から胸までが、なまなましい柔かい溫かさを泌みさせてきた。

「此處から奈落へ抜ければすぐなんだけれど……」

私はこんな暗いところへ薫と一しよに歩くのを變におもはれてしかたがなかつた。

「これからね。何んだつて貴方の言ふことはきいてあげるわ。」

と言つて、私は重いものを全身にどつしりと感じたとき、頰の一部がひいやりと濡れたらしい特別な冷たさをかんじた。私は急にガタガタした震えを膝がしらから、腰のあたりに烈しくかんじた。が、私は「あんなことを言つてやはり千鶴に上逆せてゐるんだ。おれはだしに使はれてゐるのだ。」と腹のなかで呟いたが、直接肩の手や、そつと抱かれてゐるや・な結ばりを解くといふ氣にはなれなかつた。

奈落では廻り舞臺が、濕ぽい空氣のなかでぎい……ぎいい……と憂欝な音を立てながら、車の輻のやうな大きなものを廻しはじめてゐた。白いチョオクで矢羽をかいた印のところにくると、ぎいい……と停つて又すこし廻り戻つた。それらは大きな百足のやうな埃ぽい胴體をもつてゐて、いつかはずり墜落さうな危險な肌寒い豫感をあたへた。そこには一つのカンテラが點されてゐたが、すぐ正面の明り窓から仄かな電燈がもれてゐるばかりで、あとはしんとした暗やみで

あつた。

「誰だい。そこへ行くのは……。」

と、闇からつき出た聲があつたので、薫は震えあがつて私にしつかり抱きついた。私はその瞬間どうにでもなれと、わざと薫を抱きすくめるやうにしながら、くらいカンテラの影にうつくまつてゐる男を凝然とすかして見た。それはきつと廻り舞臺の番人にちがひない。ただ、ほんのりと闇と一しよに食つついたやうな影が、いつまでも動かないので。

「走つて彼方へ出よう。あの電燈のともれたところへ。」

まるで齒の根もあはない薫を押すやうにして歩きにくい奈落を越えると、すぐ、そこに梯子段があつた。上るとそこは浴場になつてゐた。其處から長い廊下がつゞいて楽屋になつてゐるのだ。引幕や幟の片布で暖簾のやうに下げた部屋々々には、幾人も鏡立てをしたりしてゐるのもゐた。その廊下には騒がしい草履やスリツパを引きずる音が絶えなかつた。見物のなかから奈落をわたつて來たらしい子供や、商家のかみさんらしいのもゐたが、みな暖簾の布割れのかげから内部をそつと覗いてゐた。薫は、

「あの……行つて見ませうか。」

と私の耳もとで囁いて、ぽつと耳まで紅くしたが、私の氣を兼ねるやうな哀願するやうな目付をした。それがこれまで見たことのないほど初々しいところがあつたので、私は憐れむやうな氣もちになつて

「行つて見よう。あのひとでせう。」

と言ふと

「ええ。」

また紅くなつた。やや恐怖を交へたやうな目がおどおどと、私に縋りつくやうなところがあつた。

千鶴の室は二階のはじになつてゐた。私だちがそこの暖簾のかげから覗くと、うしろ向きになつて鏡下のうす紅いや

つを卷いた頭から、肌のわれめにやや陰を見せた白い水々しい、まるで女のやうに見える肌が、脫がれた派手な襦袢のたまつた腰のあたりまで二つのながれをつくつて見えた。薰はそれを見ると赤くなつて、わきの方へかくれたが、妙にもぢもぢしながら、また、そつと暖簾のそばへ音のしないやうに足袋で爪立てをしてやつてきた。

「はいつたらいいでせう。」

「わたし何んだかこわくなつたの。」

私はふと顏を見ると、かうして此處までやつてきたことが、母親にも知らさなかつただけに一層恐怖させたのか、ぶるぶるとその手がふるえて見えた。

そのとき鏡のなかに映つたのか、千鶴が突然暖簾から顏を出して

「やあ。よくこそ、お這入んなさい。そんなところに居ると殿しいんですから。」

と言つたとき、薰はうしろ退さりをしながら居たが、すぐ千鶴が押し込むやうに室へいれてしまつた。

室へはいると薰は座つて、すぐ眞面目に挨拶をした。それがまた何處か娘らしい、なよらしいところがあつた。千鶴は肌をいれると紙卷をひねりながら

「お母さんに默つていらしたんですか。」

私の目を見て言つた。

「ちよいと樂屋が見たかつたものですから、そつとやつて來たんです。」

私は、そこらに取り散された女形の衣裳を見たが、みな艶めかしい紅い襦袢や、しごきや、帶などが美しい色つやを輝かしてゐた。しかも千鶴は、すつかり出役の女形に眉や唇紅をつくつてゐたが、話し出す聲だけが太い男の聲なので、私は何んだか非常にふしぎな氣もちでつくづくその顏をながめた。つやのない紙のやうな白粉をぬつた皮膚は、張つてゐるやうに笑ひにくさうにしてゐたが、その眼尻にいれた紅がわざとらしく不調和なものに見えた。いつも素顏を見てゐたのに、かういふお白粉の塗られた顏は妙に人形が生きて話してゐるやうで厭な氣がしてならなかつた。

「薬屋なんて呆れるほど汚ないものでせう。いま之から女の着物を着るところなんですから、見ていらつしやい。」
と言ふと、薫は千鶴から私のほうに目をうつして、小さな低い聲で微笑つた。――そこへ髷屋がきて、へんな型の上にかつらを乘せると、とき櫛でほつれ毛の手入れを仕出した。その梳つられる髪の地がしづかに音といふほどもない微かな音を騒がしいあたりにすーすーとさせた。
そこへ衣裳屋がくると、千鶴は立つて紅い燃えるやうな長い襦袢に着換えると、ちらと薫をながし目で見て、
「よく似合ふでせう。いかがです。」
と言つて微笑ふと
「ええ。よくうつりますわ。」
薫はうつとりした目で見あげた。酔つたやうな柔らかい目だ。私はそれを妬ましく見たが、千鶴は
「これから大變なんですよ」
と衣裳を着はじめた。殆ど膝頭で歩くやうにしながら、千鶴の裾をぐるぐる廻つては帯を締めあげた衣裳屋が、最後にぽんと帯の上を叩いた。さうして髷がれいの坊主頭の上にそつと乘せられたのであつた。そのとき私は紛ふことない一人の美しい、むかしは恁うもあらうと思はれる繊麗かな女性を見たのである。ふしぎに髷がしつくりと合つて、その襟脚までが細くしなやかに伸べられてゐるのを見た。
千鶴は立膝をしながら、たばこを喫むと、
「これですつかり女になつたでせう。」
鈴なりの目でぢつと薫を見つめた。薫は殆ど酔つたやうな、ふらふらした目になりながら
「まあ……。」
と深く感動したらしい溜息と一しよに、かう言つて私をふりかへつた。
けれども私は、その顔や身なりに不調和な太い男らしい聲が氣になつてしかたがなかつた。あの聲も女らしいのを出

せないものかと考へてゐると、舞臺の方ではもう拍子木のひびきが初まつた。

「ええ。千鶴さん。出番でござい。」

と言つて、小者が現れてきた。薫は

「かへりませう。」と私に言つて「お邪魔しましたわ。」と出ようとすると

「晩にまたお目にかかりませう。」

暖簾のところまで送つて出た。「晩にまた會ふ。」と言つたが、今夜もまた皆でやつてくるのかと、私は思はず眉をしかめた。そこへ丸さんが例の道化た調子で

「やあ！ お二人づれでよく似合ひます。もつと寄つて歩いたり……歩いたり――」

と言つて笑つて、舞臺の方へ出て行つた。薫は赤くなつたが、また私だちは奈落へ下りはじめた。先刻のやうに怒鳴られはせぬかと、びくびくしながら暗いなかを手さぐりで歩いて、やつと花道の下のトンネルへ出ることができた。私はそのとき、あたりに誰もゐない濕ぽいくらがりのあとさきを見廻したとき、その暗やみと人氣のない靜かさが、しきりに私の胸をどきつかせるほど、薫にたいする或る烈しい衝動を驅り立てて來た。

「樂屋へ行つたことは、お母さんに默つてゐてくださいね。」

薫が言つて、あとさきの暗いのを見すましてから、そつとからだを擦りよせた。

「言ひはしませんよ。大丈夫。」

私はかう言つて二三歩あるくと、そこは、もう一段高くなつて看客席につづいてゐたが、薫は私から離れると、すぐ其處をのぼらうとしたが、私は暗いところに立つて動かなかつた。何かしら私は鹽い苛々した期待に先んじられて、しばらくでも此處を動かなければ、薫が三四歩戻つてくれるやうな氣と、戻つてくれゝば思ふさま薫のからだをどやしつけてやりたいほどの、渇いた激しい情慾のために、私は眞蒼になつて立ち竦んだ。

薫はこちらを向くと

「どうなすつて――。」
氣のせいか少し吃驚したやうな黄味がかつた聲で呼んだ。私は惡寒のやうなガタガタ震ふ足さきを自分で押へるやうにしながら掠れた喉聲で
「ちよいと。すこし……。」
と吃ると、薫が二三歩近づいたとき、私は見る間に薫の顔色がさつと變化つて、私が何を考へ惱んでゐるかといふこと、また、私の考へを透視したやうに、ちらと冷たい澄ましたやうな顔色をその瞬間に表はした。私もそのとき直覺的に薫が處女でないことが、わづか一二分の間に感じられた。いままでの柔らかい微笑んだ顔とまるで反對な、ピンピンした筋ばつたやうな表情(かほ)であつた。が、すぐ、だらりと舐め廻したやうな弛んだかほになつたかと思ふと、いつも鼻に皺をよせて笑ふときの卑しげな、餓えたやうなとろんとした目つきになつて
「もう出ませうよ。ひとが來て見つかると惡いから。」
ぴつたりと胸のところに私はすぐ板のやうなものを張りつけられたやうな、重みと堅さとを同時にかんじた。私はそのとき、くしやくしやと擽つたい髪を自分の耳にかんじたが、虫か何かが這つてゐるやうで、擽つたくて仕方がなかつた。そしてその肩越しに五六間さきに點いたほのぐらいカンテラを見つめた。薫はわざとらしい優しさで
「ねえ。もういいでもう。あつちイ出ませうよ。みんな待つてゐるから――。」
と言つて、ぱつと離れたとき、私は胸がきうに皮を剝がれたやうに冷やりとしたが、同時に烈しい腹立たしさをかんじた。「うまく言つておれを子供にしてゐる。」
とちからを込めて凝視めると
「いらつしやい。すぐに。」
と言つて花道から、そとへ出て行つてしまつた。私はぼんやりと佇つてゐたが、ぎざぎざな憎しみと肉情とをとり交ぜたやうな腹立しさで一杯になつて、しばらく其處にぼんやり立つてゐた。「さうだ、ああしただけで、あれだけでおれ

が何も分らない子供だと思つてゐるのだ。おれはなぜ彼のどき薫の皮膚を一枚だけヒン剝くやうにしてやらなかつたのだらう。」と考へ出すと、さうだ。あの板のやうなものが胸へきたとき、おれはまるで無心になつて、氣のぬけたダム本のやうになつて、ぼんやり彼のカンテラの灯を一心に見つめてゐただけだ。あのカンテラの灯だ。と、また、そこに忍び歩きをしてゐるやうな、薫のなよらしい姿を心に描いた。黒ずんだ大きな唇や、ふさふさと澤山なこんもりした髮の毛や、それから板のやうなものまで……。

と、奈落の方から誰かが來るらしい草履をひきずる音がしたので、すぐわきの紙製の櫻の花や小道具を積んだかげにそつと隠れた。すぐそばへ來るひとを見ると、女形が美しい衣裳を着飾つて來たのだ。もう初まるのかと思ふと、拍子木が鳴つて幕があいたらしく、きうに舞臺の方の騷々しさが水のやうに靜まりかへつた、私は息をのんで見てゐると、役者は花道へ出る段の下で靜かに腰をおろした。はてな、あそこに床几があつたのだなと思ふと、ぱつと燐寸が擦られた。すぐ消えた、生白い、ほそおもての優しい女形であつた。ことに高い鼻すぢが氣もちよく見られた。と、かれは紙卷をのみ出した。そのたびに星のやうな火がちらちらと、かれの生白い顏をすこしづつ浮かすやうにした。その生白いほんのりした色艶が、さきから私の内部にたまつた濁つたやうな肉情をぞくぞくとあふり立てた。あの女形をどやしつけてやつて、齒がゆいやうな自分のぎらぎらした心もちをすつかり晴らして見たいやうな氣がした。上からでもいい、どこからでもいい。抱きすくめてやりたいとも思つた。しまひに私は蹈んだまま、燐のやうな目をしながら眞蒼に凝りかたまつて、ときどき、紙卷きの火でほの白く見える指さきや、紅い帶の一部を見つめた。と、おもんと薫とが半分づつの顏を繼ぎ合したやうに浮んだ。……。

はつとすると、女形は紙卷きを投げすてて草履で揉み消すと、裾もとを鳥渡なほしながら花道から出て行つた。私はそのあとから、人に氣づかれないやうに看客席へ出た。みんなが此方を向いたやうな氣がした。舞臺ではいまの役者が何かしやべりながら、しきり啼くやうな聲を立てた。私は眞赤になりながら枡のなかの薫のよこの席に座ると、やつと人心地がついたやうな氣がした。

幕が下りると、母が
「お前、どこへ行つてゐたのかね。」と言つたから
「ちよいと友達に會つたものですから、おそくなつたんです。」
と答へると「さう。」と言つて氣づかないでゐた。
「お友達におあひなすつたの。わたし、どうなすつたのかと思つてゐましたのよ。」
薫は白ばくれて言つたので、私はきうに浮々しながら、指のさきにあたつた彼女のひざのところを抓つてやつた。
と、すぐ、また向ふからも抓返してきた。が、また
「だまつてゐて下さいよ。ええ。」
と囁いた。私はその妙に柔らかく骨のないやうな、ふくれた襟首から喉の一部を目に入れると、花道のトンネルで見た役者をおもひ出した。大詰になると、私だちはみな表へ出たが、薫のお母さんが前茶屋の小者に何か話してゐたが、間もなく出てきて、母のそばへ息せき走つてきたが
「いまお伺ひしますつて――。」と言ふと母は
「さう。ぢやそろそろ歩きませう。あとで追ひつきなさるだらうから。」と言つて芝居がへりの人をどんどん先きにゆかせた。薫のお母さんが
「一度舞臺のまま顔を洗はないでいらつしやるとよごさんすわね。」
娘のやうに頬ぢうに微笑をたたへて言つた。それが厭らしい筋ばつたやうな顔に、なほ淫らな感じをあたへた。母は
例の酔つたもどかしい口つきで
「そりやいい思ひつきだが、まさかね。」
母はかう言つて、眼の窪んだ對手のかほを見ると、變なかほをした。
薫は私に、べたべたに擦りよつて

「素顔のほうがいいわね。」
と囁いたが、私は
「もう止したらいい。親子そろつて役者の噂でもないぢやありませんか。」
吐き出すやうにいふと、薫のお母さんも耳にいれたのか、ふりかへつて私の顔を見るといやな顔をした。薫は
「酷いことを仰そのね。あなたは。」
口惜しさうに言つた。
「事實だから仕方がないさ。下らない。」
私は嫉妬と憎惡とに、むらむらと眩まひをかんじるやうな怒りを覺えた。こんな奴等がゐるから私の家が亂れるのだとも考へられた。わけても薫のお母さんを見ることが不快であつた。
そこへあとから來た千鶴と丸さんとが、小走りをしながら
「やお待せしました。お湯へ入つてゐたものですから。」と言ふと、母は
「ご一しよにまゐりませう。丸さんも一しよなのね。」
丸さんは
「結構なお供ですよ。いい晩ですな。」
と言つて、何か小唄を一と節うたふと、それが人通りもない街の家並みにもんどり打つて聞えた。新綠の地上はよいほどに濕つて、肌はすずしかつた。薫のお母さんはすぐ千鶴のそばへよつて、何か喋り出したが、千鶴は二三度薫の方をむいたが、そつと近づいて來て
「失刻は失禮しました。ずいぶん樂屋つてところは汚ないでせう。」
低い聲で言つたが、お母さんにも聞えたらしく、自分に言つたのだと思つて
「ええ。」

と振りかへつた。薫はそのとき赤くなつて低い聲で

「あまり見たかつたものですから……。」

千鶴のそばへよらうとすると、薫の母親が急に何かはしやいで話し出した。丸さんも加つてきやつきやつと言つて歩いてゐたが、母は、いつものやうに話しもせず、なんだか寂しさうにした。よくあるやうに恁うして千鶴が薫親子とばかり巫山戯てゐるので、自分だけ退けものにされたやうな氣で、ああして寂しさうにあるいてゐるのだと私には思はれた。私はきうに母と話したくなつて、そばへよると

「どうして默つてゐるんです。そんなに、むつつりして……。」と言ふと

「何でもないのさ。」

寂しさうに言つた。そこへ薫のお母さんが「ねえ然うでせう。」と夢中になつたやうに譯のわからないことを母に言つたが、母は解らないままに氣のないやうに「あ、さう。」と言つたなり默り込んでしまつた。

「どこか不良いんですか。頭でもいたむんですか。」

私は今夜にかぎつて、あぶらのない青いやうな皮膚を見つめながら、かう言つてそばへ寄つた。

「どこも惡くはないんだが……（と言つて急に言葉を切つて。）お前寒くはないかえ。そんなに薄着をして——。」

久しぶりで優しく言つて、何んだか悲しさうにちらと私を見た。

「いや、寒くはないんです。」

喉にごつつりと支へたやうな、變な聲で私はこたへた。それきり私たちは默つて橋をわたつて、すぐ家の前へくると、みんなのあとから、なんだか他人(ひと)の家へでも這入るやうに、こつそりと續いて私も這入つて行つた。

兄は蒼白い睡いやうな顔をしながら、みんなをちらと見たが、機械的に「どうぞ二階へ」と言つてひよいと母の顔を見た。母はひくい聲で

「いつものやうにね。」

沈んだ調子で言つた。千鶴や丸さん、それから薫親子は自分の家のやうにわいわい巫山戯ては、勢よく二階へあがつて行つた。間もなく母もあがつて行つたが、しづかな足どりが何時ものやうではなかつた。兄は酒をどくどくと德利にいれながら

「今夜はお母さんはどうしたんだ。默つていらしやるやうだが……。」

いつも快活なだけに、兄はふしぎさうに私を見ながら言つた。

「僕にもわからないんだけれど、からだでもわるいのかな。」

何時もなら「あまり下らない遊びをするから當り前だ。」とでも言ひかねない私は、かう言つて兄の顏をながめた。

「さうかな。」と兄は言つて、二階へあがつて行つた。二階では千鶴や丸さんの叫ぶやうな聲が、橈しづまつたあたりに高くひびくたび毎に、幾度となく私の神經をいら立たした。まるで料理屋でなけば藝者屋だ。あの騷ぎは何んといふんだらうと、ぎりぎりとむか腹が立つてきた。今夜こそ怒鳴り散らしに二階へあがつてやらうかと思つたが、何故だかいつものやうでない溫和しい母のことが考へられて、二階へ上る氣にもなれなかつた。

兄がのつそりと降りてきて、默つて長火鉢のところに坐つた。そして矢つ張りむづかしさうにしてゐた。そこへ母がぶらりと下りてきて、すこし眩しさうに私と兄とを見たが、

「お父さんはお休みかね。」

兄に向つて低い聲で言つた。兄は冷たい顏をして、ちよいと眉をしがめたが

「晩いからお休みでせう。」と言つた。

其處へ突然玄關さきで

「お宅にみなさんが起きてゐらつしやるんですか。」

誰かが言つた。ハツト皆が顏を見廻したとき、靴ずれと帶劍の音とが同時にさらさらと敷石のところで起つた。

「はあ、起きてゐるんでございます。どなたでございますか。」

と、いくらか顫へ聲で母がいふと
「交番のものがちやがね。表の戸が開いてゐて不用心ですからな。」
と言はれたとき、母の顏色はさつと變つて、すぐ立つて閉めに出て
「どうも恐れ入ります。」
と言ふと、巡査は何か注意をあたへてがちやがちや腰のものを鳴らしながら、しづかな通りへ出て行つた。
私があとから入つたので閉めなかつたのは惡かつたが、しかし誰も咎めなかつた。唯、さういふ些事からも母は靑いかほをしながら、立ちあがると奥の間の父のゐるところへ行つた。兄は冷たい微笑を口もとに浮べたが、だまつて時計をながめたりしてゐた。私はそのうしろ姿を見ると實に久しぶりだなといふ氣がして、ひとりで靜かに微笑んだが、兄は私のかほを見ると不機嫌さうにした。
しばらくしてから、そつと奥の間をのぞくと、父はちやんと座りながら、れいの白味がちな目をしばしばさせて、樂しさうに微笑をふくんでゐた。前には靜かな洋燈があかるくともれてゐて、うしろには母が父の肩から腰を揉んだり撫でたりしてゐた。私はそれを見ると、すぐ顏をすつ込めて母に見られないやうにして室へかへつて涙ぐんだ。座つたままぢつとして。

六

おゑんと私は庭へ出ると、阿蘭陀苺のてらてらと艶めかしく實つた小さい畠に踞んで、ぽつたりした重い紅い實を採つては食べてゐたが、ふと足音がすると、兄がそこへやつてきたことに氣がついた。私を見ると、すぐ目をそらしておゑんに微笑んで見せた。おゑんもすぐ兄のそばへ寄ると、五つ六つ掌にのせた苺を兄の前にさし出して。
「もうすつかり食べられるのよ。おあがりなさらない？　たいへんおいしいわ。」
おゑんは兄とすれすれに立つて、目を微笑ませてしだれかかるやうに言つた。いつでも兄にものを言ふときおんな顏

をするのだ。兄は
「もう食べられるやうになつたのかね。かなり味がある――。」
紅いやつを口で溶かすやうに食べたが、おゑんは妙にあたまを振るやうに媚びた聲で
「もう一つおいかが……」。と言ふと兄は、また一つ取つて口へ入れた。ちやうど兄の胸とおゑんの胸とがぴつたり合ふやうな位置になつて、桃割が兄のあたまをかくしてゐた。私は踞んだまま兄とおゑんの方を向かないで、地上を這ふ蟻を一つ一つ小石で腹立たしく潰してゐた。頭がつぶれてもおしりだけが生きてゐる昆蟲の苦しさうなのを、また小石でこすりつけながら苛々してゐた。熱い日光が樹かげから上つては、あたまの地に沁みこんできた。
「わたし、さつきから捜してゐたんですの。でもお部屋にいらつしやらなかつたでせう。だからお庭へ出て見たの。」
おゑんは甘えた聲でかう言ひながら、何んだか兄の肩さきにでも觸れてゐるらしいやうに、私はあたまを熱くして地べたを眺めて耳をすましてゐた。上乾きした泥土が白くちかちか光つて目を刺戟した。
「だつて彼奴が居れば……此間だつて……同じぢやないか……。」
きれぎれに低い兄の聲がした。よく意味が取れなかつたが「彼奴が居れば……」と聞えたとき冷やりとした。どうしておゑんは兄にも私にも同じやうなことを言ふのだ。ことに兄に會ふと私を打つちやらかしにするのだ。
「わたし何時もくるとあなたがいらつしやらないから仕方がないわ。そんなことを言つたつて――。」
おゑんは何だか俯向きになつて含みごゑで言つたので、私はそつと目をあげると、大きな桃割から白い襟首がやや弓なりに俯向きになつてゐるのが目にはいつた。と、すぐその桃割のかげから兄の蒼白い顔が砥のやうに冷たく覗いてゐた。「いつたいおゑんの手が何處にあるのだ。もしかすると握つてでも居るのではないか。そつと前の方で……」私はぐらぐらする眼をそつと遣ると、おゑんの左の手が生じろく、重いもののやうに垂れてゐたが、右の手が見えなかつた。
「さうだ、右の手が何處にあるのだ。」とまた見つめると、兄の帶のあたりにでもゐるらしい曖昧な袂のふくらがりが、いち早く目にはいつた。「兄の手が……何處にあるのだ。左が見えるがやはり右が見へない――とすると右と右とが…

……」私はガンと頭を毆りつけられたやうに吃驚して飛上るやうな嫉妬をかんじた。が、そのとき兄の冷たい視線がおゑんの肩さきを辷つて、私の目にちらとそそがれた。私はあはてて目を白い地べたに伏せた。あたまがふらふらして來た。白い僅かな地面が非常な廣さで限りもなくつゞいてゐるやうで眩しかつた。いくつも潰した蟻に何時の間にか同じいやうな大きさの蟻が二疋も三疋もあつまつて、それを引いて行つた。わづかづつ運ふてゆくのを戻かしい氣でながめたが、

「……だわ。」

おゑんの聲がした。兄の靜かな笑ひごゑが操るやうに起つた。が、私はいつまでも頭を擡げることが出來なきないやうに、ぢつと白い地面をばかり見つめた。「いつそ立つて行つておゑんを引き戻して話してやらうか。しかしおゑんが私と一しよに話さないで、今やつてゐるやうに兄とばかり話したら私が耐らなくなるのだ。」さう思ひながら、小石で地面をあちこち私は悲しげに掘つてゐた。えり首がだるくなつて背なかから熱い汗がにじみ出た。あつい風がさつと吹いてきた。見つめてゐた微塵な砂とも埃ともつかないものが、きりきりと渦を卷いて、微妙な心棒をまんなかに澄まさせて、やがて風が過ぎた。ふしぎな衝動はそのとき私にからみついて思はず立ちあがつて、奥庭の方へ行かうとした。とおゑんがちらと見たが

「どつちへ入らつしやるの。居たつていいぢやないの。」

睡いやうなあまい聲で言つた。うつとりした目をしてゐた。私はいちはやく手を見たが、二人の手は放れてゐた。「するとと先刻から絡み合つてゐたのかも知れない。ああして呼んだものゝ却つて私が彼處へ行つてくれゝばいゝと思つてゐて、たゞお愛想で言つてゐるのかも知れない。」さう思つておゑんの顏を鋭どく見つめたが、すぐ兄も私を冷かに見つめた。私は

「あすこは暑くて耐らないんだ。」とだけ言つて、茶畠をぬけると柿や杏の立木のかげをぶら〱歩いた。

「わたしもいま行きますわ。あつちイ行きませう。——。」

おゑんがかう言つたとき、兄はぎざ〳〵な目をして邪魔者のやうに私を見すゑながら、默つて一緒に私の方へあるいてきた。「全然私を邪魔にして打つちやつて置くことができないのだ。おゑんの目はあれは一體何といふ目だらう。」と私は、疲れてうつとりと目のまんなかにしんと澄んだ美しい目を見た。まるで裸體になつたやうなつや〳〵した目だ。――そこへ彼等はやつてきた。兄は不安さうに私とおゑんとを見たが、私はいきなり飛びつくやうに

「もう家へ歸るんだらう。そんな時刻だから。」

早く兄を追ひ拂はうと尻目で眺めながら私はかう言つたが

「いえ。まだいゝの。三人で何か面白いことをしませうよ。」

おゑんは、二人にかう言つて見たが、兄は苦々しさうな顏をした。

「三人で何が面白いことができるものか。」

私は思はず兄をちらと見た。兄もすぐ見返したがさう強くはなかつた。先刻からの竹篦返しにされたやうに少しづゝ兄の方が負けたやうな氣分になつてゐるのを、私は鷲摑みにするやうな心になつて

「裏の方へ行かうぢやないか。」

おゑんは「暑いには暑いわね。此處は暑くて仕樣がない。」もぢ〳〵兄の氣を窺つてゐたが、兄は不自然につと冷笑つて見せて

「まあ何處へでも行くさ。」と言つたが、そんなにしたつておれの居るうちは駄目だよとでも言ふやうに執拗く立ち止つてゐた。私はおゑんが煮えきらないのでやきもきしたが

「どうするんだね。兄さんの方へゆくか、僕の方へ來るか。どつちかね。」

さう言つて私は蒼く息詰るやうな氣になつた。兄は落ちついて、冷笑つて立ちながらおゑんの目を見入つてゐた。おゑんも段々變な窮屈な曲つたやうな顏をしたが

「もう家へかへりますわ。なんだか恐くなつてしまつたの。」

どちらへ向いて言ふとなく、二人のぎら〳〵した目を見たが、すぐ刺されたやうに目を伏せてしまつた。が、また、ほ

つかりと上げながら
「睨みつこをして可笑しいわ。二人とも、そんなにぢつとして――。」
故意とらしく微笑つて、ふいとそこらを歩き出した。そのとき私も兄も理由のない空つぽな微笑ひを兩方でくすつとやつたが、おたがひの目でそれがまた鋭どく衝きもどされた。豆鐵砲のやうな呼吸の青ざめるやうな微笑をもう一度やると、こんどは烈しい怒りのために私はがた〳〵震へ上つた。「畜生、どうなることか。」と、私はそこらを歩き回つたが突然おゑんに對つて
「歸へるなら何故かへらないんだ。のろ〳〵して――」いやに勿體振つて――と言はうとしながら喋んだが、庖刀で頭は眞二つにやられたやうに、カツとして私は叫んだ。おゑんは急に落ちついて
「あなたこそ彼處へ行つたらいゝわ。あたし、兄さんと話してゐたんだもの。」
尖つた優しい聲で頰打をくらはすやうに言つたので
「覺えてゐろ。」と私は怒鳴つて、ふりかへると、兄は細く震へるやうな嘲笑に强つて、ふふんと言ふやうに思はれた。
私はさつさと奧庭の方へあるきかけた。「おゑんは二人に好意をもたれたがつてゐるんだ。それとも兄の方を好いてゐるのかも知れない。」私はがん〳〵云ふ頭を引摺るやうにして歩いた。そこへ椽側でひよつこりと母にあつた。
「おゑんちやんは――お前と一しよぢやなかつたのかえ。」
母は私の目をしづかに見入つた。私はきうに母につまされたので、目をそらした。
「兄さんと一しよです。」
低い聲でいふと、母はすぐ私の氣持ちがわかつたらしく、變な顏をして
「さう。」
と言つたきり默つて庭へ行つた。しばらくして私は私でどうしてもぢつとして居らなくなつて歩き出した。と、兄が

歩いてくるのに合つた。蒼くなつて私と目を合すと、鑿で刺すやうに鋭どく刔るやうな目をした。

私は奥庭へゆくと、母が來るのに出會した。母は私のそばへよると、ひくい熱情的な聲で

「おゑんちやん一人きりゐるんだから、お前行つたらいゝだらう。」

母が言つたから私は「さう。」と言つて、感謝するやうに母とゆきちがつた。

おゑんは柿の木のそばに立つてゐたが、眼を一抔に潤ませ、私のそばに來たのを知らないやうな風をして、鱗のやうな柿の樹皮を搖つてはゐた。

「どうしたの。そんなに默つて――。」

私が言つてもやはり默つてゐた。白い手で剝がれた柿の樹皮がぽろ〳〵落ちた。「ほんとにどうしたのだ。」と言つても、やはり默つてゐた。私がそつと肩に手をかけたとき、まるい峀のやうな感じを受けたが、やはり、しつこく默つてゐた。と、いきなり、急にうしろ向きになつて引裂くやうに

「わたし、あなたを大嫌ひ!」

と叫んだ。

「どうしてだ。兄貴がゐるからかい。」私はざら〳〵に心がカチ碎かれて、かう叫びかへすと

「どうしても嫌ひ! ほんとよ。」

と言ふかと思ふと、いきなり肩さきに兩手をかけて、がつちりと引寄せて一と揉みに揉みつけてをいて、ばたばたと母屋の方へかけ出した。

「あれがおゑんの遣り口だ。それにしても母が何か言つたのかも知れない。この町にあんな女がすくないのだ。兄のものになぞさせるものか。」と靑い柿の若葉を浴びながら、私は小指のさきを嚙つては考へ込んだ。

「しかし兄の方を好いてゐることは實際だ。いまも又兄の方へ行つたにちがひない。」私はさう思ふと庭にゐることができなくて、母屋の方へ歩き出した。近くなるとおゑんの笑ひ聲らしいのが、明るく若やいで聞えてくるやうな氣がし

た。「かうして居られない。兄にとられて耐るものか。」と急いで茶畠を飛び越えながら息をついてばた〳〵駈け出して行つた。

おゑんは兄の部屋に居たが、すぐ出た。私はいきなり

「まだ居たのかね。」と言ふと、色を變えてびつくりしたやうな顔をしたが、

「もう歸へるところなの。」と白々しく言つたとき、私は飛びついて肩さきに噛りついた。チヤリと音がした。同時に口のなかを蒸されたやうな息苦しさと動悸とをかんじた。が、おゑんは小さい鋭い叫び聲をあげたが、紙のやうに眞白になつて震え上つて、すぐ肩のところへ手をあてた。白く刻んだやうに顫えてゐた手が、いつもより、ずつと鮮かに白かつた。私はそれをはつきり見た。と、恐怖と戰慄とに足がふるへ出した。

「氣ちがひ！」

おゑんは、喉の奥で鋭どく娘らしくこれだけ言つて、痛さうな泪をにじませながら、唇をヒン歪げて叫んだ。

「さうだ。氣狂ひかも知れない。」と私は青ざめて、手を宙宇に顫はせながら今自分のしたことが、洪水と頭のなかに渦を卷いた。「おれはおゑんの肩に食ひついたのだ。おれ自身さへ知らなかつた瞬間にさゝやつてしまつたのだ。」と思つて初めて、からだから一時にちからが拔け出したやうに膝がふら〳〵した。惡いことをしたと思つた。

「痛むか——。」

私は鼻のさきから出たやうな變な聲で言つたとき、おゑんは、はじめて泣き出した。耐へてゐたのが持ちきれなくなつたやうにである。

と其處へ兄がのつそり出てきた。私は眞青になつて目を兄の顔に投げると、おゑんを見た兄はすぐ

「どうかしたの。弟が何かしたんですか。」

そばへ寄つて囁いたが、おゑんは泣きぢやくりながら

「なんでもないんですの。ほんとよ。」

涙聲でおゑんが言つたとき、私は助かつたやうな氣がした。我慢の強いおゑんだと思つて心で感謝した。
「お前はこちらに用事がない筈なんだ。あつちへ行つてゐたらいゝ。」
兄がかう言つたとき、私は冷たく嘲笑つて
「何處にゐたつていゝぢやないか。」と私は惡寒と憎惡とに物も滿足に言へないやうな、ガチガチ顫へる聲でいつた。
「ぢや勝手にするさ。」
兄は室へはいつたとき、私はおゑんのそばへよつて
「此處だとお母さんに見つけられると困るから……」
さう言つて梯子段の裏のところへそつとおゑんを押すやうに連れ込んだ。おゑんのからだは私のする通りに動き出した。
「ほんとに惡いことをした。痛むだらう。熱が出たらしいぢやないか。」
私はぽつぽつとほてる肩さきへ手をやつてかう言ふと
「痛かないの。わたしも惡かつたの。」としやくり出した。
「ぢや兄より僕の方がすきなんだね。なぜそれを言つて呉れないんだ。」
私が言つたとき、おゑんは又一尺ばかり私から退いた。そして仄暗い梯子段のかげでもなほ光る大きな目を私に向けた。
「わたし、そんなことを言ふことが大嫌ひ。」
怒で裂けた聲をして言つた。
「どつちか言つてほしいんだ。」
私が一歩前へ飛び出したとき
「そんなことを知るもんですか。」おゑんはかう言つて私のそばを離れると、すぐ兄の室へ飛び込んだ。素早かつた。私

はぼんやりして兄の室の前へゆくと、なかでおゑんの泣く聲がした。「何といふ變な女だらう。」と、もう一歩で室へはいらうとしたとき　私はきうに立ち止つた。そしてがつかりしたやうに張りつめた全身の力がまた拔け出してしまつて、ふらふらと空のやうな不愉快な身體で、自分の室へもどりかけた。

「おれはかういふ風に、ぱつくり口をあけて噛みついたのだ。かういふ風に。」

私はいきなりかう考へると、口をさし出して、何かを宙に見えるやうな氣がして、齒を剝き出して噛みつく眞似をした。ぱつくりと開けた口もとに動いた空氣がつめたく、古綿のやうに觸れた。チヤリと音がした。と、白い小さい肩さきに西瓜を割つたやうな齒の痕が規律正しく目にうかんだ。こまかい產毛まではつきりと立つてゐる圓つこい肩さきが、ふと目をうつした生白い障子にうつつた。

「かういふ風に……。」

私は私でないものが、げた〳〵嗤つたやうな氣がして、うしろを向いた。古い梯子段がぞろりと足を投げ出したやうに、苦しさうに二階からずり落ちてゐた。うす暗いところに段々ばかりが妙に雜巾光りがして、下の方へ絶え間もなく繰り出されてゐるやうで氣持が惡かつた。

七

この古いお城下町の寺々から出てくる托鉢僧が、三四人づつ群をつくつては、爽やかな勸經をくちづさみながら枝錫を鳴らしてくる日は、きつとよく晴れあがつた朝にかぎられてゐた。それらの群が軒なみに經をながしてあるく道路は、早起きになれた町のひとによつて、美しい朝のしめりを帶びたまゝ能く掃かれ、庭樹の新しい綠のかげをゆら〳〵に漾はしてゐるのであつた。妙に托鉢僧と朝日の光と、晴れたいそ〳〵した心持ちとが關聯されて、その初夏らしい朝のさわやかさを充分に私どもにかんじさせた。

れいの牡丹は、どこか蓮の實に似てゐるやうな實になつて、やはらかい葉が一杯にしげつてゐた。そこの椽側へ父を

坐らせて私は茶を汲んだりしてゐた。日曜だつたので、兄も椽側へ出てきたが、いきなりうす暗い感じのする今朝の新聞を私のひざの上に投げるやうに置いて
「讀んで見るといゝ。いや三面を見るんだ。三面だよ。」
私は慌てゝ其處をひろげると、私はすぐそこにあつた記事をよみくだした。千鶴、薫、さうして私の姓、それらの關係が爭へないほど事實そつくりに書かれてあつた上に、みんなで競爭してゐるといふ風にもかゝれてあつた。私は蒼くなつて、ふしぎにからだが顫えた。
「どうして分つたんでせう。しかし競爭してゐるなんて酷いな。」
兄は薄氣味わるく、にやりとしたが
「どうにも仕方がないさ。こんなことにもなると思つてゐたんだ。」
冷淡に尻目で新聞紙を見た。
「お母さんはまだ見ないでせう。それとも見たのか。」
私はまだ見ないやうなれば、この記事だけ切り取つてしまつたらいゝと思つて、ナイフを持つて來た。
「まだ見ないだらう。忙しさうだつたから。」
兄は言つたので、私はナイフで其處だけ切り取らうとすると、兄は
「何をするんだ。そこだけ切り取るつもりか。馬鹿だな。」
新聞を引き奪らうとした。
「だつてお母さんに見せるのは可哀想ぢやないですか。」と言ふと、ふゝんと微笑つて
「おせつかいをするな。さうして打棄つてをけばいゝんだ。見なければ見るほうがいゝのさ。」と言つてきた
「家の分を切り取つても世間の分は切り取れないからな。」
兄は落ちついて言つた。私はそれもさうだと思つて

「わるいことが出て了つた……。」

何んだか近所の人々が寄つてたかつて見較べてゐるやうな氣がした。八百屋のおかみや、笠屋のばあさん、髮結などがはしたなく私の母を罵つてゐるやうな氣がした。

父がそのとき

「何か出てゐるのかね。變つたことでもな。」先刻からの私等の低い聲で話してゐた意味がとれなかつたらしく、結句それがいゝやうな氣がした。知れたら大變だとも思へた。

「何も變つたことがありませんよ。もう公園の藤とつゝじが盛りだつて……。」

私はいゝ加減にゴマ化した。すると父は烈しい外光のほうへ向いて

「さうだらうな。いまが見頃だらうの。」

何か目の内部で藤やつゝじの花を描いてゐるらしく、妙に沈んだ目をぱつちりと動かした。さうして又

「うちの牡丹もおしまひになつたかの。」

「え。すつかり散つてしまひましたよ。だいぶさきに。」

おふんが彼處でしやがんでゐたことを思ひ出した。そしてちらと兄を見ると、氣のせいか兄もまた私をちらと見かへした。「誰かゞ庭で話してゐるやうだつたが……。」とあの日兄が言つたことを思ひ出した。父はまたゆつくりしたやうな調子で

「あれが散ると暑くなるんぢや。」

とも言つた。

長閑なしんとした蒼い空が限りもなくつゞいて、すこし暑すぎるやうな、のびやかな日であつた。私は抱き膝をしてぢつと眺めてゐた。

ふとそのとき、蜩が鳴くやうなぶう、ぶううんと……いふ聲がしてゐるので振り顧つて見ると、父のまるい坊さん頭

のまはりをていねいに蔦の輪のやうに廻りながら鳴いてゐる一疋の虻のゐることに氣がついた。父は手で拂ふやうにしてゐたが、別に驚くことなく悠然として目を空にむけるやうにしてゐた。私はうろたえて追ひはらふと
「蜂かい……。」
父はのんきに言つた。自分のあたまのまわりを飛んでゐるのも分らない危なかしさを、私は寂しく感じながら
「虻ですよ。もう行つてしまひました。」
と言つて、私はそつと庭へ出た。庭にも一杯の新綠と日光とが盛りこぼれて、旺んな夏のはじまりかけたことを感じさせた。青梅がもう葉と葉とのあいまにぽつちりと重げにお尻をおろしてゐたり、柿のわか葉がきら〳〵と輝いたり、一番せいの高い杏が潔よく高ばかり亙る風に青い葉を砥がせてゐたりした。と見ると、日かげの板塀に添つて、母がばちやばちや洗濯をしてゐるのが見られた。腰を折つて、うつむきになりながら、妙に茶褐に光つた額を明るいところに晒しながらゐるさまは、やはり年寄くさく、ちぢんだやうな肉體が見られた。あれから二度ばかりも芝居の變り狂言を拔いて見にゆかなかつた母は、いつも玄關さきから薫親子のいそいそと出掛るのを隙見してゐたが、自分では行かないやうにしてゐた。やはり晩になると酒をのんで、いくらか不機嫌さうにしながら居た。けれども、これまでになく家の仕事をしはじめた。
私はぶらりとそばへ行つたが、しやがんだまま上目して母は
「すこし暑すぎるぢやないかね。お洗濯にもいい日和なんだが。」
と言つて、ばちやばちや石鹸をこすりつけながら、夏のものを洗つてゐた。しやぼんの泡がきらきらと美しい虹をつくつてはぶつといくつも飛んだ。
「いい加減にして茶でもおあがんなさい。お父さんも椽側へ出ていらしやるんだからね。」
と言ふと、「さう。あ、腰がいたくなつて了つた。」と言つて、椽側の方へ一しよに行つた。よく拭かれた椽側はひえびえと、いい心持に涼しかつた。

母は茶をいれると、父の手にもたせた。

「そつとしないと零れますよ。そつと、そつと……。」と言ふと、父は嬉しさうに子供のやうに茶碗を手にとつて、茶をすすつた。母もすこし疲れたやうな顏をして茶碗をとりあげた。私はそれらの二人を明るいところに、彫りあげたやうに眺めたとき、そこに彼等が永い間の生活がなほ引き續き、また繰りかへされながら居るさまを微妙に近いものに眺めた。とうてい私どもが其處に言葉をさしはさむことが許されないほど深い根と根とが組み合つてゐることをかんじた。

そこへ兄の愼一がのつそりと來たが、よこにあつた新聞紙をとりあげると、わざと開いて默つて母にわたした。私はヘツとしたが、そのときは母がいぶかしさうに新聞紙を膝の上にのせた時であつた。

「なにか變つたことがあるのかね。」

兄はわざと微笑して

「まあ、ご覽なさい。わかりますから。」

と言つて、椽側へ出て庭をぢつと眺めた。兄も兄だ。ことさらに其麼ものを母に見せなくともいいのにと、顏を見ると、兄は眉に竪じはをよせて鳥渡私を見た。――母は、しばらくの間に眞蒼になつて、新聞をもつてゐる手さきが震ひ出すほど驚いた。さうして又かつと赤くなつたが、その目はすぐに潤つて鱗のやうなものが流れ出した。

「お前もお前だ。こんなものをあたしに見せなくともいいぢやないか。無いことも書いてあるぢやないか。」

泣聲でいふと、素面のときの母を知つてゐる兄は、毒々しいほど落着いて

「でも事實は事實でせう。しかたがないことですよ。ご覽なすつてをいたつて、他人から注意されるよりかいいでせう。」

冷たく言つた。

「だつてお前もいつも默つてゐて呉れたぢやないの。別にどうと言つたこともなかつたんだし、ただお客樣として家へ入れただけぢやないか。わたしこんなに書かれるわけがないんです。」

と、しやくりながら言ふと、兄はおさまり返つて

「だから初めつから此麼ことに最后にはなると思つてゐたんです。私の知つてゐることぢやないんですからね。それに役所の方の友達にも顔むけがならないんですよ。」

やけに紙巻を庭へたたきつけた。さうして不意に立つて奥へはいつて行つた。父は

「どうしたんだ。何か新聞に出たのか。」

と言つたので、母は何か言はうとしたから私は頭をふつて「その事は言はない方がいい。」と暗示すると、母は

「何んでもないことなんですよ。」

と言つたが、その聲が潤つてゐたので、父は手で母の顔をさぐるやうにした。母のかほが變に歪んで見えた。――私はすぐそこをはづして自分の室へ行つた。

晩になると、薫とお母さんとが來た。二人とも蒼く病んだやうな皮膚をしながら、兄の顔を見ると、まぶしさうにした。母が出ると、お母さんが

「飛んでもないことが出てしまひましたね。ほんとに御迷惑でしたらうに――でも、私考へるには誰かが知らしたんだと思ひますよ。」

顔をさし出して、子供が告白をするときのやうな、故意とらしい調子で言つた。母も元氣のない弛んだやうな聲で

「今から何を言つたつて駄目でせうがね。世間の人がみんな此方を見てゐるやうな氣がするんですよ。」

低い聲で言つた。

「實はね。(とお母さんは一段と聲を落して。)昨夜わたしの家へいらしつたんですよ。おそくね。」

凹んだ黒い輪のなかから母の目色を讀もうとするらしい狡い表情をしたが、すぐ私をちらちらと見た。

「ぢや、やつぱり之までお宅へもいらしつたんですか。時々に。」

母は不快な顔を無理に柔らげるやうにして言つた。事實、千鶴は私の母にかくれて薫のところへ行つてゐたらしく、時によると、コロコロさんとお母さん、千鶴と薫といふ風に關係があるらしかつた。お母さんは喉にものがつかへたや

うに、母に
「二三度だけですの。お話しなかつたのはわるうござんしだのね。ごめんなすつてね。」
と答へて、變に白つぽい顏を赤くした。そのとき私は薫の目を刺し透すやうに鋭どく見つめると、やはり赤くなつた。私はすぐさまお母さんが追從笑ひをしたり、また薫が變にからだをくねらせて笑つたりしてゐる場面を考へると、わざと薫の目を凝視めてやつたりした。
母は默りこんでゐたが、
「わたし既う芝居へはゆかないやうに仕ようと思ひますの。これからお誘ひくださいますなね。」
眞顏になつていふと
「でも時々ならよござんすわ。」
薫がいつた。母は薫を見ると「しかし當分はいらつしやらない方がよござんすよ。」と言つて、また默り込んだ。
兄はのつそりと立ちあがると、唇をヒン歪げたやうな冷たい微笑をうかべて
「あなた方は入らつしやい。ことに薫さんはお若いんだし……ね。」
戲談のやうに言ふと、薫は
「酷うござんすわ。そんなに仰つちや。」
と言つて、いくらか冷かされたらしく、むつとしたやうに言つたが、口もとに微笑をふくんでゐた。それが弛んだ黑ずんだ紅いものを見るやうな、毒々しい淫らなものをもつてゐた。

八

晴れた日の午後から、やはり薫親子は着飾つて芝居にでかけるらしく、ときどき私の家の前を通つてゆくのを能く見かけた。重詰を派手な風呂敷に包んで、薫は空氣草履に埃をあげながら、そはそはしい歩き振りでゆく姿は、もう近所の

人が後指をさすやうになつてゐた。けれども二人はそんなことに頓着なく殆變り狂言ごとに出掛けるやうであつた。そのお母さんは痩せてゐたが眼ばかり若々しく輝いてゐた。

私は二人の姿を見るごとに淺猿しい氣がした。さうして恥も見榮もなく夢中になつて行くのが、執念深くしまひには恐ろしいやうな氣がした。二人の座る桝はいつも取つてあるらしく、すぐ舞臺に近い三ツ目位で、ときをり立見などに入ると、いつも小さい抓み上げたやうな丸髷と、薫のたつぷりした束髮とが舞臺の方を向いて、作り物のやうに初日には決つて座りこんでゐた。

母はさうした薫らの芝居にゆく日などに、その姿を見ると寂しさうに背後をながく眺めてゐたが、一しよに行くやうなことがなかつた。どういふものか、さういふ事があつてから、すつかり元氣のない年寄じみたところが、一時にどつとやつて來たらしかつた。も一つは千鶴のことで使つた金もかなりあつたらしく、融通した分も取れないらしかつた。ときどき、腰をかがめて縫ひものなどをしてゐる姿が妙に黑ずんだやうなところができて、ひとりでよちよちと針を運んでゐる手つきが、あぶらがなくなつて宛然で枯木のやうにかさかさして見えた。そのうち妙なことは、私や兄が物を言ふと、すぐ耳をさし出すやうな癖がついて、二度三度も用事を聽き糺すやうなことがしばしばあつた。「どうもお可笑いな。」とおもひながら　ひくい聲で

「お母さん……。」

などと呼んでも聞えないらしく平氣でゐたりすることがあつた。きいて見ると

「耳がすこし遠いやうに思ふんだよ。きうに聞えなくなつたやうだ。」

自分でも私がもの言ふと眼を慌しく動かしてすぐ耳をさし出した。さういふ事があつてから母は私だちの口のうごくたびに、何か言つてやしないかと耳を欹てるやうであつた。きよときよとした怯えたやうな目をしながら……。その爲めに又一層年寄らしいところが、眼にもからだにも今は甚だしく目についてきたのである。

ある暑い晩、私はふとしたことから、父母の寢室の椽側から厠へ行つたとき、父が母の背後から、そつと團扇をもつ

て涼しい風を送つてゐるのをちらりと見た。その弱々しい團扇の音が、ばたばた鳴つてゐたがそれでも母はその風を樂しむやうに見えた。眼の見えない病人に團扇を使はせるといふことがあるかと、すぐかつとしたが、やはり然うする方が父にとつて今はやはり一種の快樂のやうに思はれた。私などの知ることのできない世界に、夜はかうして二人だけに限られて眠つてゐるのだ。さう思つて厠から出ると、母は、

「もつと上の方ですよ。そこだと風がちつとも來ないから。」

ねむいやうな聲でいふと、父は

「さうか。これでいいのかい。」

と言つて團扇をまた動かした。ばたばたする音につれた餘り風が、青い蚊帳をすこしづつ波のやうに搖れさせた。

「あ、それでいいの。たいへん涼しいこと。」

母はかう言つて、のんびりとからだを伸すらしかつた。私は自分の室へかへつてきてから、ひとりでに浮んで來る微笑を自分でかんじながら、やはり私だちとは別な世界に住んでゐるもののやうに思はれた。私にむしろさういふ生活がいつもこの寂しい父と母の上にあるやうに祈られた。――。

七月十五日
發行

中央公論

定價壹圓廿錢
郵稅四錢

社會奉仕の鼓吹

一年一回
定期增刊

夏季特別倍大號

民衆文化の提唱



字による寫生（四篇）

木村莊八

公表するに就て

自分は畫かきだが、畫に依つては出せない、字に依らずには出せない寫生（？）の材料を感じることがある。その都度自分は畫をかくと同じ創作の態度なり心持なりに依つて、之等の小品文をかいた。

之等は無論小說ではなく――自分にはそれは書けない氣がする――或ひは「創作」でもないかも知れない。が兎に角自分の「見た」ものが自分を動かして書かせたのである。字を仲介にして出來た寫生の一つと思つてゐる。

之等の種類は自分の今までの仕事に少なからずあつたのである。然し公表したことは殆んど一度もなかつた。公表するつもりでかいたものでもなく、別にその發表に適宜の機關もなく、一體書きたく思つて然し書いて了ふとついそれで全く氣がすんでしまつたからだ。

然しそれを此度は公表して見たい心になつた。自分のかくの如き字に依る方面をいつまでも全く公けにせずに了ふのも本意でないので。それで、近作

の「接見に行く」「橋上より」を主に、あと二篇は前に書いてあつたものから氣のすむものを選んで、この原稿に作ることにした。初めての自分の文章的方面の公表なのでその存在をはつきりと印象したい爲めに、四篇一所にした。

蛾

（一九一八年十一月十日）

目黑ステーションのプラットフォームで、電車が來ないので、便所へ行つた。つきあたりの木のかこひの上の方に大きな蛾が一匹止まつてゐた。羽に波紋のある、一番大型の蛾だと思つた。

それからもとゐたベンチの方へ來ると、そこに立つてゐる柱に、僕の頭の上ぐらひの高さに、又一匹蛾が止まつてゐるのを見た。普通の茶色の無地の奴だ。矢張り前に見たの位ひ大きく、太つてゐる。柱のそばに何氣なく立つてゐて、偶然柱を見ていきなり又蛾を見付けた時には惡感がした。えゝ、無氣味な蟲だと思つた。

然し如何かしたらこんなものでも奇麗に感じられるかも知れぬと思つた。そして注意する氣になつた。——尤もその時自分には、電車を待つ他、何の考へ事もする事も別に無かつたので。

蛾は柱のコバに止まつてゐて、丁度僕からは横腹が見透せる。段々に興味を持つてそれを見てゐた。蛾は羽をブルブル震はせ、尻を高ひくさせてゐる。ちつともぢつとしてゐない。その中、猶烈しく尻をピクピクさせて、糞をした。ハッと思つた。餘りそばにぼんやり立つてゐたので、まともにかけられたかと思つたのである。そつと胸や袴の邊を注意して、それから眼を下して床を見ると、そこに柱の根もとから二寸ばかりの所に白い(?)點々が二滴落ちて玉になつてゐる。汚ない奴だと思つた。何かバカにされた樣な、とぼけた感じがした。

蛾はそれから羽を前より強く震はせて、足で熱心にコバへかぢりつき、柱をヨチヨチ上の方へ上り初めた。如何する

氣かと思つた。一歩々々、と云ふより身體全體で段々に上る。何所まで上る氣かしらん？今にずつと上の天井の方へ行つて了て見えなくなるだらう。そこでゆつくり眠るつもりかも知れないと思つた。

柱のコバを傳はつて、上つて、スベつて、又上つた。又スベつた。見てゐてハラハラして來る。ずい分身體や羽は重さうなのに、足は弱く、力もなさ相である。それに全く垂直に上へ上るのだ。足は六本(?)とも木の面へしがみ付いてやつと一歩々々踏みしめて重みを上へ運ぶ。大分上つた。矢庭に此度は倍にスベつて落ちた。又かぢり付いてヨチヨチ上つて、見る／＼更に倍位ひまで上つた。いゝ感じがした。然しアッと思ふと又、スベつた。そして此度止まつてしがみ付いたところは、柱の直角のズッと上まで續くコバではなしに、一つの面の中に二三寸えぐれて溝になつた、その凹みのコバであつた。ぢき行きどまりで足がゝりがなくなる。邪道へ下ちたなとフト思つた。蛾は熱心に又上り初めた。

然し間もなく足を踏みすべらせて、下ちた。

僕は見てゐて驚いた。

蛾はまるで氣が狂つた様に、こんなに一生懸命努めても駄目なのか、如何にでもなれ——と云つた様に、此度は何所へも止まらず縱横に飛び初めた。僕の立つてゐる頭の眞上に電氣がある。いきなりそこへ飛んで行つて、ぶつかり、玉のまはりをぐるぐる廻つた。ヒラヒラ粉がとぶ。思はず鼻口をふさいだ。と、スーと下へおりて來て此度は立つてゐる僕のまはりをぶん／＼飛びまはつた。貴樣が見てゐたから柱を上りそくなつたのだと云ふかの様に。僕はアッケに取られて、無闇に飛ぶ蛾を目で追ひながら、見た。

僕の一歩前に、黑い着ものを着た坊さんが立つて、矢張り電車を待つてゐた。電車の來る方角を見て立つてゐる。蛾は僕のまはりや電氣のまはりを何邊飛びまはつたかわからない。結局、くたびれたのかぶつかつたのか、兎に角坊さんの腰の下あたりへ、ぴつたり止まつた。そして羽を休めて動かなくなつた。

坊さんはしきりに暗い線路の向ふの方を見てゐたが、飽きて(?)こつちのベンチの方へ歸つて來た。そしてベンチへ腰かけた。自分は蛾は如何したらうと思つたが、坊さんは腰を下ろして了つたのでその影になつて、見えなかつた。

電車は中々やつて來ない。

暫く腰かけてぢつとしてゐたが、坊さんは又退屈さうにベンチを立つて歩き出した。蛾は如何したらうと思つた。イヤ、如何したどころではない。坊さんの着ものにはもう止まつてはゐなかつた。彼は坊さんが腰かけた時、つぶされて、坊さんが立つたあとには死骸となつてベンチの上に殘つてゐた、——こびり付いてゐた。ちつとも動かずに何か液汁にまみれて。

僕はついこの末の終りまで見屆けて了つたと思つた。——之れはこれでもう絶對に終りである。餘りに事實がはつきりとしすぎてゐるので、異常に撃たれた。

坊さんはそれから後を向いて、はからず自分の座つたあとのベンチにつぶれた汚ない蛾の死骸があるので、不審に思つてゐるらしかつた。しきりに着物のうしろを氣にしたりしてゐた。

一言あの人に僕が今見たことを云へば、不審は明瞭に晴れるのだ。——かくていろいろのことがある。

品川で見た出來事

（一九一九年五月十一日）

今でも思ひ出すと有樣が目に見えて、狹い街の眞中に黑塗の自働車がとまつてゐる。中には坊主が三四人乘つてゐて、一人普通のなりをした下等な顏の男が窓から首を出してしきりに、「急ぐからまあ勘辨してくれ」と云ふ樣なことを云つてゐる。自働車のまはりは一抔黑山の人で、中にも一人の男は無氣になつて自働車の窓から半身車内へ乘り入れ、運轉手にいどみかゝり、彼を車から引き下ろさうとしてやつ氣になつてゐる。——そのシーンやいろいろ——それからのてん末が見えます。品川の町なかで起つた出來事です。丁度大汐の日でしたが、品川沖へ汐干狩に行くことにして朝八時頃青物横町の親類の家から北新宿の舟宿へ——つまり八ツ山の方へ——あの街道筋（と云ふのでせう）を通りました。

その途中で偶然出逢つて見た出來事です。今でも思ひ出すとぞつとします。

道の中途に橋が一つあるのです。僕達――兄弟がみんな寄り合つたのです――はガヤガヤ笑ひ話しをしながらその橋を越した。するとイヤに人がたかつて通りの眞中に何か出來事があるのです。見ると狹い往來一杯に人でふさがつて、人だかりの眞中に自働車が一臺とまり――さつき書いた樣な有樣なのです。イヤ、實は僕達は知らず〳〵此の出來事をもつと前から見てゐた筈、とかくのがより本當です。僕達が歩いて來ると同じ方向へ同じ樣にこの出來事も歩いて來て、とう〳〵この自働車のとまつたところでわずか十分經つか經たぬ中にかなり小さくない事件になつて了つたのですから。

で、僕達がつい後ろの橋を渡つた頃、何でもあとから自働車が僕達をスレスレに一臺通つた。何かうしろに變に事あり氣な感じはした。然しそれに心付くよりも自働車に氣付くよりも先きに、――と云ふか同時にと云ふか――僕は走る自働車の左り手の窓わくに兩手をかけ、外からぶらさがつて、身體を横にして駈けながら引きずられる樣な鹽梅の一人のインバネスの男を見た。何事かしらと思ふ間に自働車はとまつた。忽ち――場所がらで――黒山の樣に見物人がまはりたかつて、僕達もその見物の一人に自然通りがゝりで成つて了つた。僕は往來の一方――何でもうしろに空車がおいてあつた樣だ――そこに立ち止まつて、僕は少し人より背が高いので何所から何時出るのか變にぞろ〳〵前に人垣は出來たが、問題の自働車は然しまともによく見ることが出來た。外から窓に手をかけてぶるさがつた男はつい少し前に走つてゐる自働車へ往來から飛び付いたのです。向ふ見ずの男が窓へ飛び付いて引きずられて來るので、自働車は一時不都合な往來の眞中へとまることになつた。その男は何だか亢奮してひどく怒鳴つて、「不埒だ、不埒が」と叫び、車が止まると踏み臺に立ち、しきりに身體をのばして窓から手をつゝ込み、反對側にハンドルをとつてゐる運轉手を擲ぐらうとしてゐる。と同時に運轉手のからだの何所かを摑んで車の外へ引きずり出さうとあせつて、身を悶へてゐるのです。運轉手は思ひ切り向ふのスミへ寄つてすごい顏で男をにらみ付け、何か口答へしてゐる。その顏は眞正面に僕に暗い自働車の箱の中から見えるのですが、男に爪で引かゝれでもしたか眉の所に一寸血のにじんだ、緊張した靑い險のある顏、

——くせあり相な不穏の感じがした。男は出鱈目に窓から身を入れ、向ふに飛びかゝつて、運轉手を掴み出さうとはやる。飛び上がつては自働車をガタガタゆらせて「下りろ、下りろ」と云つてゐるのです。どうしても運轉手がきかないので腹を立てゝしきりに拳骨を飛ばしてゐるが大てい屆かない。全く窮屈な窓にのしかゝつてもがき喘いでゐるのです。群集はずらりと自働車を取り卷いて無論車は一尺も動くことが出來ない。

此の自働車をとめた向ふ見ずの男にはもう一人連れがあつて、彼もしきりに怒つて男に加勢はしてゐたが、只車のわきに立つてゐた。運轉手は向ふがはの窓から誰か引きずり出すか運轉手自身車を下りるかしない限りは、とても男の云ふ樣にはならないのです。こつちの窓は男のからだで一杯であがきも惡く、假令車内の向ふのスミへへばり付いた運轉手にやつと手は屆いても、それ以上氣のすむ樣には如何にも出來ない。わけもわからずに只男に加勢する連中はあるのですが、一所になつて運轉手を下ろさうとする熱心家はゐないのです。自働車には——何所かへ法事に行くと見える——坊主が默つて驚いて乘つてゐる。坊主のくせに自働車は生意氣だ、など云ふ彌次馬がある。坊主でない一人の客だけしきりに男二人に向つて急ぎだから勘辨してくれと云つてゐるが、假令彼の言葉が極く自分勝手で不快には聞こえやうとも、誰も相手になるものはない。男は益々いら立つばかり、運轉手は又飽く迄も頑固に向ふのスミに固まつて默つてゐる。群集は一帶に自働車側に反對してやれやれと云ふ樣なことを云ひ、すつかり興味に燃え立ち、あとからあとからと集まつて來る。どう納まりが付くか丸で見當の付かぬシーンである。

そこへ町の反對側からもう一臺自働車が走つて來たが、この出來事で通れないので、止まつて、やがて運轉手が下りて來た。彼はこつちの自働車とあたりの群集とに向つて、一寸道をあけて貰ひたいと言つた。突嗟に群集の注意は散り一時出來事は勢をくぢかれた樣に見えた。

男はまだ攻擊の手を止めやうとはしなかつたが、身を車のすみによけてゐた運轉手は彼に向つて、「兎に角道をあけてあの車を通さう、話しはあとで俺が下りて付ける。」と云つた。男はそれでやをら上身を窓からぬいて、勝ち誇つた——その時初めて見たが、お人よしらしい愉快な太つた——顏をこつちへ向け、連れとあたりの彌次馬に同感を求める樣に

口早に云つた。何でも「太い奴だ、もう少しで俺を引かうとしやがつた。何と云つても下ろして一談判してやる」と云ふ様なことをくどく云つてゐた。「トンビの羽を車で卷きやがつた」と云ふ様なことも云つてゐた。彼は一たん往來へおりて向ふの自働車を先きへ通すことに同感した。出來事のリズムは見る〳〵弛んで、あたりは俄かにザワザワした。男は車のそばに立ち、元氣な亢奮した顔にゆがんだ笑みを浮べ又すぐに緊張して、連れとしきりに怒つて話してゐた。彼のインバネスは曲がり、成程腰の邊にタイヤのかすつたらしい砂ぼこりの丸い跡が付いてゐるのを見た。

運轉手も相變らず怒つたすごい顔色でハンドルをとり、喇叭を鳴らした。どつと群集は道を開け、向ふの自働車もゴトゴト音を立てた。僕は思つた、「逃げなければいゝが――」然し又このまゝ道をあける序でに車が動いて、ぐんと一走りして自働車が逃げて了へばそれまでゞある。然し「逃げなければいゝ」何しろ之れで運轉手さへ下りて話しをすれば、多分丸く納まるであらう、今の様子では運轉手の方が折れて、男も和らひだ様であるから。

恐らく男もそれに同感であつたであらう。熱心に連れと二人で立ち、油斷なく動く自働車を監視してゐる。やがて同時に双方の自働車はそろ〳〵と動いて、こつちの車は往來の左りへ向ふは右へ、靜かにすれちがひ入れ變つて向ふの自働車は間もなく勢を増し、反對の方向へ走つて了つた。男は早足でこつちの道をあけた自働車を追つて歩いてゐた、が、矢庭にくだんの自働車は速力を増して案の定逃げやうとした。イヤ逃げた。三四間どどどつと走つた。あ、逃げた――一瞬間憎惡の感じを僕も感じた。

がさう感じるよりも意外のことが改めて三四間先きに改めて起つた。例の男は右側から、此度は連れの男も怒つて同時に左側からいきなり逃げる自働車の泥よけへ横つ飛びにしがみ付き、車體に手をかけ踏臺に這ひ上つて、多分窓からからだを入れ中の運轉手にかゝつたのだ。再び車がとまるのを見た。一時に群集もそつちへなだれかゝつた。

「之れはもう只ではすまないぞ――」

と僕は思つて、困惑と不安心にハラハラした。が好奇心――以上の制しがたい魅惑も僕を動して、急いで車のとまつた方へ行つて見た。僕はすぐ車の後ろへ出ることが出來たが、そこへ着くと同時に目の前に或る後頭部を見てヒヤツとし

た。例の男の頭である。腦天にザクロの様な生きずが口を開いて、血が四方へ實に濃くゴム管の様にふくれ上つて流れ、四筋程に分れてゐる。皮膚の地がギラギラ短かい毛の下でうねる様に見える。インバネスの襟へも血がはねて玉となり、所々にぶるぶる轉がつてゐる。彼は丁度僕が車へ駈け付けた時に右側の踏臺からよろめいて下りたのである。丁度その背のひくい後ろ姿が僕の目の前に立ちふさがつて、つきつけられる如く彼の出來事を見た。彼はよろ〳〵として、左手を頭に上げ、右手に何か自働車用の鍵形の鐵の器具をさげ、「ぶたれた、ぶたれた」と云つた。連れの男がすぐ車の反對側から出て來て男のそばに立つた。運轉手がハンドルか何かの器具で、男が車に飛び付き窓から首をつゝ込むといきなり腦天をなぐつたものに相違ない。

自分は胸がドキドキして、辛い後悔に似た賁湯の如き感情があふれ、全く氣もてん倒して立つてゐた。目の前の男の頭のキズからは益々コン〳〵と出血して止め度がなく、僕の目にその生々しき血の色が燒き付き、自分も頭の何所かをやられた様にシーンと一種の痛みを感じた。

見物人の中にゐたと見える。その時もぢりの外套を着た逞しい男が自働車の窓から世にも荒々しく手を差し込んで運轉手のカラーを掴み、無理やりに彼を外へ引きづり出すのを見た。茶つぽい詰襟を着た眞つさほな運轉手は、――その時自分はチラと彼の顏を見て全く相が變つてゐるのにぞつとした。決死の人の様である。土氣色で眼が乾いて光り、全くの絶望が一眼で知れる。彼はまるで兎の様に、ずる〳〵窓から引きずり出されて往來へ叩き落ちた。然し外套着た男はがむしやらに運轉手の首筋をつかんでゐて離さない。彼は忽ち運轉手を引きずり起し、片方の手で――僕はかゝる悽慘な音を聞いたことがない――滅多打ちに運轉手の頬と云はず鼻と云はず、存分に擲ぐり付けた。僕は名狀しがたい音の中に然し何かその時自分を牽き付けて離さぬものがあるかの様に、胸をドキドキさせて外套の男が運轉手を擲ぐるのをむさぼり感じた。實際息をころしてまともに此の有様を見たのである。

外套の男は一方で襟をこづいて運轉手を歩かせ、片手でピシーリ、ピシーリと横面を打つ。僕は漸く此の時目の前の出來事に「驚く」ことが出來初めたと思ふ。イヤ實に驚いた。けがした男の方も氣になつたが運轉手の方も氣になつた。

一體如何なるのだ！　橋のそばに品川警察がある。外套の男が運轉手をそこへつれて行くつもりは略わかつてゐるが、彼は運轉手をよろめき歩かせ、ピシーリ〳〵とつゞけ様にぶつ。おゝ、はたにゐた彌次馬が又つゞいて顔の正面から運轉手を擲ぐりつけてゐる。彼は首を曲げ、足もしどろもどろに踏んで外套の男にこづき廻されながらよろ〳〵引立てられて行く。ついさつき一瞥した彼のすごい顔が目にチラ付いて自分の心をゆり動かした。「如何なるのか」と思つた。思はず、「あれはひどい、死んぢまふ」と口走つて自分の熱心に氣が付き、ハツとしたことを思ひ出す。こつちまでよろよろした。

反對にけがした男の方は連れに介抱されて、頭を下げて町の横町へはいつて行くのが見えた。醫者へ行くのか。氣のせい――ではなくその通り見たのだと思ふが――段々にからだがぐつたりとして今にも倒れ相にやつと連れにすがつて行く樣であつた。二人共足袋はだしである。さぞ辛く後悔してゐるだらうと思ひ、然しその同情よりもこつちがぞつとする思ひが強く、見るに堪へなかつた。

自働車はそのまゝ往來の眞中に止まつて客はみんな乘つたまゝ身動きもせずにゐた樣である。自分は久しく烈しい動悸が靜まらなかつた。

接見に行く

（一九二〇年四月十六日）

一

自分は今日東京監獄へ在監人接見に行つたが、始終「材料」の中に居る如く感じ、息苦しく思つた。見るもの何れも刺戟してやまない。同道の妻が受付で接見手續きをしてゐる間、自分は玄關前の前廊の柱に倚つて前を見てゐた。そこか

らは煉瓦の正門の裏側がまともに見えて、重く厚い出入口の扉を一人巡査(?)が番して付き添つてゐる。寧ろ門を守つてゐると云ふのが當る。キチッとした黒服を着し劍をさげ、腰に革帶びを卷き、ピストルを吊つてゐる。帽子のアゴ紐を下ろして甲斐々々しく頬をメめてゐる。ぬけ目のないキビキビとした感じだが、又異樣に殺氣立ち、事有り氣だ。彼は扉の片わきに夜守りの如く添ふて烈しく開け閉てに音のする光つた鐵棒――それで戸が開く――を持ち、出入の人を一々洩れなく監視してゐるのである。全く蟻一匹見逃すまいと云ふ不自然に緊張した感じが傳はる。

然し或ひは「彼」は存外その意識もなく、家常茶飯の「職務」の氣持でゐるのだが、たゞ長年の彼の仕事の中の姿型――が、彼をきびしくぬけ目なく感じさせるものか。自分は暫く見てゐて、その仕事の型を何時か次第に感じたのだ。成程、彼は始終注意を張りつめ、緊張してゐるわけではないと感じた。彼は出入の人のある度びに全く同じ傾斜に體を曲げてゴチンと鐵棒をひねり、戸を開ける。その獨得の音までいつも同じである。そして人を入れ、わきの詰所に一歩身を引いて誰何する。又は、反對に人が門を外へ出る時には、同じくゴッチンと戸を半開きにして一人づゝ出る人を送り出し、あとで戸を閉める時サッと「失敬」の手付きをする。それを外へ浴せる。戸は人の出入一々について一々に閉める。出る人を送る時にはいつも決まつて鐵棒を引くまでの手の明きをサッと空を切る如く大きな敬禮に使ふのである。自分は初め人が禮して出るので彼も答禮するのかと思つた。然し強ちさうでもない。子供をおぶつた女の人が、別に挨拶もせずに――氣の毒な彼女は此の無情の門に馴れすぎてゐるのであらう――チョコチョコと出て行つた時にも、巡査はサッと敬禮を浴せた。

自分はそれを見てゐて微笑を感じた。

善い春の溫和な日よりである。正午を少しまはつた。あたりには一面に陽光が照り渡つて、平和に充ちた感じである。靑のうすれた霞空にぬつと四角な煉瓦煙突がぬき出てゐる。そのスカイラインが美しい。――然し、それを感じるとすぐに、今の感じは然し此所には不自然に思ふ。何かさう思ふ「意識」が自分を支配してゐる。

で、かうして自分が前廊の石だゝみに立ちボンヤリとして門の巡査や煙突を見てゐる間に、妻は受付の用事をすませ

て歸つて來た。名や職業、在監人との關係を云ひ、手つゞきをすませて來たのである。
我々は之れから番號の呼び出しまで待てばいゝのだ。

二

我々は前庭一隅の「外來人控所」へ行くことにした。自分達が邪慳に音のする砂利を踏んで控所の硝子戸近く歩いて行くと、事あり氣な――又は事欲し相な――幾つかの顔が一齊にこつちを見るのを感じた。この若い異様な「男女」を。自分は如何してこの一瞬を越さうかと思つた。

控所は男女席別々に仕切つてある。之れが幸となり、我々は別れて座つて、やがて自分が煙草をのみ初めた頃からは、さすがに退屈な物欲しい仲間も追々この新來の夫婦(?)から目を外らした。――飽きたし、思つたよりもつまらなかつた(のであらう。)

彼等はぐつたりとして、互ひにボー然と見合ひ、或る者は念佛の様にゴソゴソ何か話してゐる。一體に靜かで病院待合の様である。然しそれよりも何所か氣のぬけた退屈がある。そして一體にだれてゐる。その中に一脈の悲哀が流れる。それは特別に物憂ひ無慘な倦怠である。或る者は首を腰かけた膝にのせて――と云ふよりも兩膝ではさみ――うだつた様に眞赤になつて居ねむつてゐる。かなりの時間をみんな待たされてゐるのであらう。

自分は男子席の一隅に腰を下ろした。自分は別に見る氣はなかつた。然しあたりの人々の方から一種獨特の「感じ」を以つて、自分に見えた、浮ぶが如く。

三

自分は婦人席の腰かけに水々とした大丸まげの太つた奥さん風の女を見た。その人は色がくつきりと白く、イヤに顔が大きかつた。他の人はみんなかじかんで物おじしてゐる間に、彼女だけはトサカを振る鷄の様に晴れ々々としてゐ

る。此の世にも天國にも一體「罪」に關係なく思へる。何故さう自分に印象したかは今思ひ出しても理由はない。大てい女は髮を引つめにして黑襟でもかけた洗ひざらしの人ばかりである。その中に純山ノ手風に比較的盛裝した彼女がゐたから目に付いたか、――さうして自分の妻も誰かに見られたことではあらうが――無論、自分は何しに彼女が來たらう、と想像心を起した。然しそれは更にわからなかつた。恐らく同席の誰にも、彼の婦人にも、自分や自分の妻が何しに如何して此所へ來たかがわからぬ樣に。

そこでは、互ひに人がそれを云はず語らずさぐり合つてゐる。一寸の話にもみんな耳をすます。たしかにみんな不幸な人達である。不幸の中で猶笑ひたい、氣をぬきたい餓ゑに燃え合つて、然し默つてゐる。誰も彼もあくせくとしてゐる。恐らく今この待合所にボー然としてゐる程長く、時を持て餘して、或ひは自分のことを考へ、互ひに何かしら淺からぬ關係あるそれぞれの在監人のことを思ひ、來し方や行く末を懷ふ、――こんな「無爲」の「退屈」の時間はその常の日常日々にはないであらう。いつも外では世事の塵埃に追はれまみれて眞黑であらう。何れもデョーラーの版畫に出相な顏つきである。苦勞を皺にし、不運を顏色に塗つて、色あせ烈風に吹きさらはれた魂のぬけがらがうつろの眼となり、あはびの樣に光つてゐる。あゝ、自分は在監人についてかいてゐるのか、面會する人をかいてゐるのか――同じことである。ここで「人」を見ると全く誰も監獄へ入れられに生きてゐるとしか思へない。その一面しか濃く見えない。寂しく、共同心がなく、餓ゑてガツガツしてゐる如し。然も互ひに何かさぐりを入れ合ひ、暗鬭してゐる。

四

自分はその樣を見てため息をついた。

丸髮の婦人は然し始終外を見てサバサバとしてゐた。「のんき」ならうらゝかな感じがした。彼女を見てゐると、汽車でも待ち合つてゐる感じがした。然し彼女のそばには下うつ向いて石の樣にかたまつてゐるゴマ鹽頭の老婆がゐた。自分はその頭を見て一瞬ぞつとしたが。

——あとで自分は老婆の顔も見た。顔は皮膚が凡て垂れ下がつてあめの樣であつた。自分は彼女にぼんやりと見られたことを思ひ出す。——

矢庭に、自分の前の腰かけから男がむつくり立ち上つたので驚いて彼を見た。便所へ行くのであつたが、ヒゲのうすぐろく生へたシヨーギの角の樣な顔つきであつた。世にもむつつりとして外へ出て、便所から歸ると又默つて座り込み、ゐない樣になつた。

彼のとなりにゴソゴソ話し合ふうるさい男が二人ゐた。一人は茶の古い中折れを深く被り、唇が厚く、反つてゐた。前の腰かけに足を二本投げ出して話してゐる。相手はわりに上等の着ものを着て夏鳥打をかぶり、皿字の樣な口をしてキョロ〱あたりを定めなく見ながら盗む如く話した。時々二人顔をよせて小聲にゴソゴソ何か話した。自分はその瞬間チラと鳥打の男に見られたが、その眼はコス相に今も自分を何所かで見てゐる樣に思ふ。かと思ふと急に二人は身を引き合つて目を見合はせ、首をちゞめてイヒイヒと笑ふ。——大方共犯者であつたらう、多分バクチの。その共犯の一人が運惡くつかまつて監内に入れられ、此の二人はうまく逃れた(?)。「何しろ好きつて奴は罰よりこはいからな」と中折れが述懐してゐた。

——然し或ひは女の話でもしてゐたのかも知れない。あとで彼等は自分より先きに面會を終つて、知り合ひらしい別の一人の待合所の男（それは肩のないグタグタの樣な男だつた）に、「丈夫でゐたよ。腹をこはして仕方ないから紙と仁丹を入れてくれとよ。可哀想になあ。」と話してゐた。その時彼(鳥打)は言葉の終りに又自分へチラと眼を投げたが、自分はつい彼に笑顔をした。氣の毒だ。——

五

紋付きを着た、頭を分けたニヤケた小男が婦人席へはいつて行つた。何しに來たのかしらん？ 自分は彼を辯護士と思ふが、彼はツカツカと顔の白い丸髮の婦人は近よつて、大きな憚からぬ聲で用談を初めた。

「大分長くかゝりますよ、今日は。」

婦人は立つて彼に丁寧に會釋をした。その立ち上つた彼女を見て、矢張り寂しいいたいけな氣がした。彼女はその横顏が「のんき」に出來てゐるのである。多分。紋付きの男と話してゐる間、彼女は始終立つてうつ向いてつゝましやかにしてゐた。或ひは非常な過ぎたる不幸があるのではないか？ 彼女には何とも分別の仕樣がなく、魂ぬけて逆にのんきに晴々しく見えたのかも知れない。路傍の自分には。――さう云ふ事もあり得ると思ひ、鬱して來た。

辯護士(?)は大聲にガチガチ談話器具の如く話しをして結局、

「一寸こつちへ來て下さい」

と云ひ、さつさと控所を外へ出て行つた。彼の侵入は控所の空氣を破り、みんな一時に女と彼を見た。女は全くうつ向いて羞恥そのものとなり、たじろぎつゝ控所を出て男について行つた。

自分は辯護士に不快を感じた。イヤな、下等な奴である。此の不幸の個所を我がもの顏してゐる。

「ねえ諸君、イヤな奴だね。あんなのをバカと云ふんだね。」とみんなに大聲に云ひたい氣がした。イヤ寧ろさうみんな彼を見て思つたと感じた。一瞬の室内のどよめきに依つて。自分は向ふ側の妻と顏見合せてあきれ合つた。然し存外人々は彼にもあきれなかつたらしく、又暫くすると元のぐつたりとした靜けさに戻つた。くし卷きした女がその前から男女席のさくに頬杖ついて考へ込んでゐた。――或ひはこれ等の人には、あの場馴れた辯護士體のキザ男も羅針盤の如く思へるのではないか、あゝ。

六

その時向ふで、小さな狸の樣な年よりの巡査が「七十番、七十二番、八十番、八十五番……」と番號を飛び飛びにしほから聲で呼び立てた。控所の我々はみんな待ちかねてぞろ〱玄關の方へつめかけた。が、呼ばれたのは五六名に過ぎず、改めて我々は玄關わきの石造の詰所に場所がへをした。小さな巡査はひどく威張つて見下してゐたが、何所か滑稽

で愛があつた。

自分は席がないので詰所の入口に立つことにしたが、そこへはいるといきなり中年の女の人が眞劍な顔して自分にスレスレに近づき、ひくゝ「渡邊さんではありませんか」と聲をかけた。自分は實際ギヨツとした。

「いゝえ、ちがひます。」

無氣味を感じである。女は默つて引返して行く。

七

やがて「九十一番」と呼ばれて自分達は面會室にはいり、或る監内の人と久しぶりで逢つた。國事犯で入れられてゐる。彼だけは特別待遇になつてゐるので、接見の我々も看守から丁寧にされ、三十分程盡きずいろ／＼な話しをした。

八

が、彼は瘦せて、顏色蒼く、頭髮もひげも剃り落して、柿色の汚れた――その下に許されて私物の厚い毛の寢衣を着てゐるとは云へ――獄衣を着てゐる。古き梅干の樣に色が惡い。襟に牛馬の如く番號符が縫ひつけてある。自分はわりにくつたくなく四方山の話をして、別れる迄は別に意識もしなかつたが、「今日は忙しいから之れで閉めさせて頂きます」と看守が我々に云つて四角い接見窓の板戸を下ろす。そこにはかなあみが細く一面にはつてある。彼は板戸がゆるくおりるにつれ顏を段々に下にさげて我々の返る挨拶を笑つて受けてゐる。――それで我々は別れて來たが、板戸の下りる時彼の顏が下がつて次第に見えなくなり、自分はその瞬間ひしと心を刺し通された。悲しみでもある。それ以上に「不正」に刺されたのである。自分は見る可からざるものを見た樣に思ひ、胸が充ちた。その觀念は刻一刻に自分に擴がつて刺戟した。歸途監獄から遠ざかれば遠ざかるにつれ、時間が經てば經つにつれて、次第にはつきりと濃く暗く「彼」の獄衣の姿を思ひ出す。それが四角に限られたかなあみの窓の中に、暗いバツクの中に蒼白く浮んでゐた「肖像」を思ひ起

す。それが兩眼に燒き付いてゐて刺戟となる。その「地獄の肖像」の上から次第に木の蓋が蔽ひ下がつて來る。「彼」は笑みをふくんで我々を目送し、次第に首を下げる。蓋は段々に彼をかくす。鼻を蔽ひ口を蔽ひ、「彼」はそして無くなる。あゝこんなことがあつていゝことか。

「彼」でもさうなのである。差入れの自由、足袋をはくこと、その他段ちがひに別待遇されてゐる彼でも。その「彼」の如きに逢ひに行つても。

普通は接見三分か五分であらう。看守が一人づゝ窓わきに立つて談話を手帖にかきとめてゐる。時が來るとカタンと戸をおろして互ひに無情に隔たる。「今日は忙しいから之れで閉めさせて」とは云はないのだ。夫でも子でも妻でも父でも友人でも兄弟でも「その顏の前に蓋がおりて」容赦なく消へて無くなるのだ。あとにはそれぞれの接見者の眼の底に、拂へども消へず、子の、父の、友の、又は夫の「柿色の幽靈」が燒き付いて離れぬ。そして日夜彼等を惱ます。恐らく今日控室で各自孤獨にバラバラに座り合ひ、さぐり合つてゐた彼等の凡てに。

自分は彼等に共通の暗く重き背景を思ふ。寂しく思ふ。然し之れ以上にどうしたらいゝか。（四月十六日夜）

橋上より

（一九二〇年四月二十二日）

一

途上、或る橋を通りかゝつたが、フト川中を見るとその橋杭とスレスレに一艘天滿舟が沈んで水びたしになり、川幅の半分をはすに無慘にふさいでゐる。異樣に刺戟がある。自分は思はず立ちどまつて下をのぞいた。

自分は橋の欄干から水面を見下ろして仔細に沈沒船を見、いろ／＼好奇心に充ちて久しぶりの「川」に見とれたが、次

第に身を水流へ引き入れられる思ひがした。ぢつと見つめてゐると、如何かした拍子に水がカチツと靜止して橋の方が自分を乘せたまゝあとへあとへとスルスル動き出す。沈沒船もこつちと糸でつないである樣に橋と一所に後退する。之れは面白い――と思ふと又妙に意識が返つて來て、橋も船もぴつたりと止まり、水がゆるゆる川上へ流れる。ぐるぐる廻りながら樂しんで流れて行く思ひがする。ワラや木きれや何か、子供の時によく見たと全く同じ種類のものが流れて行く。

遙かに河上の方を見ると、もう一つ向ふの橋の下から青く塗つた石油蒸滊の舟が旗を立て提灯をつるして、人を滿載して出て來るのが見える。汐干船である。

善く晴れた四月二十一日の午後である。自分は友達と深川木場に散歩に來て今此の橋の上に立ちどまり、かうして川を見てゐる。何と云ふ何所の橋かは知らないが海が比較的近いと見えて、遠くの空や一體の「空氣」にその淸凉の感じがある。我々はもう二里近く方々を歩いたであらう。その疲れがあるので、かうして橋の欄干にもたれてゐるとつい立つて歩き出すのがおつくうになる。

自分はボンヤリ水が動いたり又橋が動いたりする目のいたづらに牽かれて下を見てゐたが、矢庭にその目の下へ獅子がしらの樣な――しゆろで卷いてある――コゲ茶のものがぬうと出て來たので驚いた。が舟のみよしだとすぐにわかつた。みよしが出るとつゞいて左右にあとへあとへと擴がりつゝこべりの孤線が現はれ、「船」になつた。船の胴が目の下に出た。綿を袋にしたものが一杯に積んであり、しゆろボーキがあり竿が何本もねかしてあり、何所まで大きく胴のひろがる船であらう――が、さう思ふ頃から追々と兩わきはつぼまつて全くその橋位ひの大きさある太つたダルマ船が皮をはぐ如く現はれた――又は橋下から「生れた」と書く可きであらう。するといきなり丸太の樣なものを目の前へスルスルスルと光つてつき出されたので「危險」を感じたが、その時には船はすつかり全形を現はして赭顏の船頭をすぐ下に見た。彼の長い竿が我々の目前をかすめたのだ。

船には三人、人がのつてゐた。船頭は竿を持つて綿荷の上へ乘り、白鉢卷をして、コンのキチツとした服裝をしてゐ

た。彼はズルズルと竿を水中へ突込んでウンと肩でふんばる。トモに妻君がゐてカヂをとつてゐた。彼女はボロと云ふもの丶色の了解出來ぬ服裝をしてゐた。彼女に近く、船内への入口があつて、そこに六七歳の女の子が立つてゐた。彼女は比較的奇麗な青い服裝をしてゐた。

ダルマ船のあとからは本船へぶつかつたり又離れたり、あつちこつちへじやれる如く身を曲げてちつぽけな田舟が曳かれてゐた。田舟にはカイ一本が乘つてゴロゴロしてゐた。

――この船の前にも幾度も船は橋下を出入りしたが、之れ程悠々と大きく現はれた「異觀」はなかつたのである。我々はすつかり魂をこの船にすひ取られて見とれた。ダルマ船は川の中程にみよしを横たへてゐる沈沒船に通路を邪魔されて、橋を出切つた頃には川幅を餘程左りへ片より、川岸の石崖に二間ばかしのところへ出た。そして進行がにぶくなつた。

そこへ後からみよしの尖つた砂利船がかなり早く現はれて來た。――自分は見てゐてどうも向きが變だと思つたが、案の定砂利船はずんずん進んでダルマ船――その時彼は我々の目から十間ばかしの川中に通行を止めてゐた――のトモの左りへ進路をつゝ込んだ。元來ダルマ船が川岸へ近い、それより猶川岸へ近い――恐らく淺瀨へ。

我々の目の前にはさうして船が二艘とまつた。

二

ダルマ船の船頭はその時既でにすつかり通行の止まつてゐる自分の船の積荷の上からボンヤリ後ろの「間抜けな」砂利船を見下ろしてゐた。自分も砂利船を見た。何故ダルマ船を右へよけずに左りへはいつたのであらう、ダルマ船が止まらうとは思はなかつたからか――何にしても、そこには三人船頭がゐる。血氣の半裸體の男とボロ〳〵の白シヤツを着た小僧と、かじとりと。彼等は船のみよしが先きの見えぬ川岸近くへはいつたので一たん竿で懸命にゴースタンをして――その時弓の樣に丸太がしなつた――船を止め、血氣の船頭は小僧をがなり飛ばして、棒使ひの樣に竿をふりま

はし、カッキと川岸を突き、踏張つた。小僧もコペリへ身をフナムシの様につけて逆に竿を押してゐる。が中々船は動かない。然し血氣の船頭はあらゆる方角へ竿を差し竿とびの様に身體全體をそれにまかせて反つて非常な努力である。カヂトリも同じ様にする。先きのダルマ船からはおかみさんが砂利船へ下りて來て小僧と力を合せ、舟を離す様にダルマ船のトモへ上半身を當て息んでおしてゐる。小僧はあせつてシャ二無二兩手で突張つてゐる。斷へず血氣の男にがなり飛ばされてゐる。

その中、砂利船は少しづゝ少しづゝ後ずさりを初めて――それでおかみさんはあはてゝ元船へかぢから登つた――やがて一たん橋の下へ半身をかくし、すつかり自由になり、改めて進路を直して進めることになつた。此度はダルマ船の右を通つて悠々と川上の方へすべりぬけることが出來た。

ダルマ船の船頭はそれを始終默つて見下してゐたが、自由を恢復した砂利船が右わきをすれ〳〵に先きへ通りぬけて行くのを見ると、何か早口に云つて、ナワの輪を手早く砂利船へ投げ渡した。砂利船ではカチトリがそれをトモの棒杭へ結ひ付け、餘りのナワはざつくり水中へ浸つた。然し砂利船が進行するにつれ次第にナワはダルマ船とそれとの間にまつすぐになり、やがて水が切れて宙へピンと浮き上り、緊張した。その瞬間砂利船は遙か先きの方で停止した。――自分は砂利船の船頭がそれから力を倂せてつゝぱりそれに牽かれて止まつたダルマ船が動くかと思へた。然しさう思ふよりも早く、ナワが一直線に空中へピンと張られたかと思ふと、砂利船では結いたナワをバサと解き放して「望みの綱」を斷ち、ずん〳〵進行をつゞけて了つた。

然しダルマ船ではそれを當り前と云ひ相な顔してゐた。

自分には彼等の此の時の心持が殆んど納得出來ないのである。餘りに兩方平氣すぎる。恐らく舟ではさう云ふ習慣なのか。

で、一時失敗した砂利船はもう健康の進路に返つてずん〳〵川上へ行つて了ふが、ダルマ船は相變らず停止して、益々そこに停止して、ぴくともせずにゐる。

自分はその時漸くこの大きなダルマ船がこの小さな川中でとまつたと云ふことは大變なことなのだと云ふことを感じた。その船を殊に一人の「力」で動かさねばならぬあの船頭のことを思つて、大變だと思つた。

恐らく然し船頭もその時分からさう思つた。「之れは存外厄介なことだ」と。又は、この橋下を越す時に沈沒船をさけて船が思つたより川岸近くへ寄つて止まつて了つた時、既でにその觀念をしたであらう。――どつちにしても、彼は餘りに平然としてゐた。

然し次第にあせり初めた。

三

彼はやをら――と云ふ感じがした――竿をとり直して泥深さうな川岸寄りへ突込み、おもちやの猿の樣に兩手でそれに後ろ向きにつかまり腰を曲げて、うん、うん、うんと三度程力を籠めた。が船はビクともしない。

おかみさんは相變らずカヂの所につかまつてボンヤリとしてゐる。娘も相變らず室への入口に腰かけて何かしてゐる。それ等を見ると事もな氣である。然しそろ〳〵船頭は氣が氣でなくなり初めたらしい。

彼は心を決めたらしく、のつしのつし積荷の綿を蹈んでトモへ下りて、一たん我々からは船の向ふ影へかくれ、見えなくなつた。が、彼はそのかくれた場所からお伴の田舟を引きよせたのである。田舟がうれし相に綱に引かれて船の向ふ影へはいつて行つた。と忽ちガックリ一ゆれして、小波を起し、船頭にカイで漕がれて我々の目の下へ現はれて來た、彼は一たばの丈夫相なナワを蛇の樣に卷いて積んでゐた。

そこへ又橋の下からギ、ギ、と音がして衙足りが一艘現はれて來た。二人人がのつてゐた。水夫と巡査と。トモに艶な旗がうす汚なく付いてゐる。「水上」である。

巡査は沈沒船を調べに來たものと見える。その水につかつたみよしへ近づくとオモカヂで船を大曲りさせて、巡査だけ沈沒船の僅かに出てゐる――そこだけ乾いてゐる――コベリへ乘り移つた。彼はちよつとすべつて丸太乘りの樣な形

ちをした。如何云ふわけかその瞬間落ちるといゝと云ふ感じがした。

彼はオッチョコチョイ感じがした。所がそれは「感じ」だけでなしに、時々刻々彼の正體となつた。彼は沈没船へ乘りながら沈没船を出ずに向ふの方を見、ちよつとふり返り、それから橋杭の方を見た。

その時ダルマ船の船頭は丁度ナワを積む田舟を橋杭近く押ぎよせて、今ナワを杭へ一巻き巻かうとしたところであつた。

「何シチョルカ」と云ふ實際そんな風の聲を巡査がかけた。

我々にもわかつたが、船頭は橋杭へナワを巻いてそれとダルマ船のトモとつなぎ、船上から力任せに引いて、せめてトモだけでも動きのとれ易い川中へ出さう、從つて船の動きに最後のエネルギーを與へやうと企てたのである。成程うまい考へと思つた。とつさにその場所や、狀態を生かして使ふ彼の經驗の機智に感心した。

彼はそのことを朴訥に說明した。が巡査は云つた。

「いかん！」

「かせぎの苦勞——」だからと云ふ様なことを船頭が訴へた。

「いかんと云つたらいかん！」

このバカ巡査と我々は上から思つた。然し巡査は平氣で、船頭が切角結んだナワを再び橋杭から解くのを見、田舟が本船へ返るのを見送り、それがすむと、沈没船のみよしにかゞんで水中へ落ち入つてゐるそのいかりづなをヌルヌル々々々々引き上げた。ツナは先端ドロまみれとなつてたぐられて出て來た。然しいかりは無かつた。「いかりは無し」とでも書いたのであらう、手帳を出して何かつけて、それから靴を少し濡らして水面にすれ〳〵のこべりづたひにひよい〳〵トモの方へ廻つた。何か調べる様であつたが何をしたか知らない。

一艘の天滿船が快活な船頭に竿さゝれて橋下から出て來た。彼は沈没船に巡査を見ると竿をつかひながら彼に「だんな」と聲をかけた。——その聲は朗らかで甲高くその言葉は一種別の國語の如く不明瞭ではあつたが——彼は雄辯に何

でもこの沈沒船が非常に邪魔であること、トモに竿を立て結んで上げ汐を待てばうまく通路の横にどけられることなど、自信ある實驗の態度で手眞似をしながらしやべつた。さうして彼は通りすぎたが、巡査は終始「親切な」彼に見返りさへもしなかつた。

我々はかなり不愉快に彼のことを思つた。

四

或ひは彼のさう云ふ冷淡極まる態度も然し彼の世渡りの經驗から味はつた「程よき」ところであつたらうか。自分は一度電車で土方の噂する技師のことを見聞きしたことがある。技師は初任らしく、正直さうな青年で土方に親切に何か翌日のことをさしづしてゐた。土方はヘイヘイして聞いてゐたが、間もなく技師はちやんと挨拶して先きに電車をおりた、毎日請負仕事の先きへでも通ふらしい。土方は二人ゐたが、技師がゐなくなると何か「しやくにさはる」らしく、否技師の親切がしやくにさはるらしく、電車の出口を輕蔑の眼で見ながら云つてゐた。あいつは新米で情けを知らない、カタイことばかし云つてやがるがもし都合があつて休むなら屆けてさへくれゝばいつ休んでもいゝとよ、工賃は如何するんだ工賃は、ベラボー奴屆けで休む位ひならわかつてらあ、何ツてやがんでえ――と云つてゐた。もう一人年とつた方も「さうよさうよ」と云つてゐたが僕は滑稽と業病の樣な彼等のかたくなの日影根性を感じた。

「情け」を知らない。あんな親切な正直さうなカタい技師が。

さう云ふ、我々まぢめな者にはわからぬ「情け」が彼等の間にはあるのであらう。親分かたぎと云ふ。始終はツンケンとして然したまに「飲みな」と云ふ樣なことを巧みに云ふ。サボターヂュなどは社會問題へつれなく切り離す前に要領よく內輪で大眼に見る。お互ひにそれで持ち合つてゐる。

或ひはあの冷淡な巡査もさう云ふコツを呑み込んでゐるのか。彼は沈沒船の結局何しに來たのかわからぬ「見分」がすむと、さつさと船に乘つて歸つて了つた。俺は俺だけと云ふ感じである。恐らく自分がゐなくなれば船頭が又橋杭案

をやることはよく知つてゐた？

船頭は巡査が橋向ふへ行つて了ふとすぐに同じく田舟を引きよせて、「いかん！」と怒鳴られた同じ仕事をもう一度初めた。――彼はその爲めにまあ仕方なく鬼のゐる中黙つてゐた。

然し我々見物人は、どつちにせよ、早く巡査が消へうせて了ふといゝと思てゐた。

五

我々は知らずについもう脱出しがたく此の小事件の渦中に卷きこまれてゐたのである。橋の欄干は黑山の人であつた。自分はフト思つた。かうして見てゐる我々は然し船頭にとつてはさぞイヤな彌次馬であらう、と。然し立ち去る氣にはなれなかつた。立ち去るにしては少し餘計に船頭夫婦に同情してゐた。如何にも出來ない同情。――せめて橋杭へナワを卷きうまく行つて船が動いてくれるといゝ。

船頭は巡査に「かせぎの苦勞」と云つた。かせぎと云ふ語感が氣になる。もうそろそろ三時である。大ていの荷揚げ倉庫は六時にしまるであらう。それが何所にあるかは知らないが、ここでこうして時をとられてはどの道あの船はおそくなる。倉庫の刻限が切れゝば切角今日荷がついたのに、空しく荷揚は明日となり、一日マイナスに手が明くであらう。早く船が出てくれるといゝ。

船頭もさつきから巡査の邪魔などで稍いら立つてゐると見えて、前には決斷深くゆつくりと田舟をこいだのが此度は粗暴にこぎ、ナワもグチャグチャに積んで、橋杭へ近づいた。彼は橋杭へナワを卷き、輪にして田舟へのせ、又こぎ返つた。心なしかイマイマし相に見えた。さつき巡査がゐなければもうここまではとうにすんだのだ。彼はナワを引きつゝ本船へ近づき、しきりにトモに立つて彼を見てゐる妻君に聲をかけた。然し重ねて世にも荒々しく聲をかけた――と云ふより怒鳴り付けた。僕は見てゐてため息をついた。とうとうかうなつたのだ。妻君は又一摑みナワを下ろした。船頭はそれを手荒く受取つて自分の方のと結んだが一本ナワがよぢれて引いても引いても來ない。彼は何か非常な聲で怒鳴

つた。すると妻君が全く泣く様な聲で怒鳴り返した。ナワはやつとうまくつなげたが彼等はイライラして互ひに信じ得ない様であつた。亭主が田舟から本船へ上る間に先きにかみさんが一引き杭と船をつないだナワを引いて見た。がすぐに亭主が上がつて來て彼女をおしのけ、こべりへ足をかけて、齒を食ひしばり――それが白く見えた――ナワをうんと息きにかゝつた。橋杭の方にギシツと云ふ音がしたが一引で既でにナワは針金の如く緊張した。彼はえいえい齒をむき出して引いた、妻君も後ろで手をかして引いた。ナワはキシむで異様なしぼる様な音を立てた。

が船はビクともしなかつた。

六

それから如何うなつたであらう。自分は此所迄しかこの小事件を見屆けなかつた。見るに堪へなかつたし、船頭の様に、自分も力落ちして欄干を離れたのである。船頭は折角のナワの無効果を知るとバッサリ手を離してトモにつつ立ち、默つてゐた。萬策盡きたのだ。――何時間かの後に來る上げ汐を待つ他なかつたであらう。(その時は然し次第に上げつゝあつた様には思へる。)

我々(四人)は手をかしてナワを橋上から受取り、力を併せて引いて見やうかなどゝ話した。然し希望がまるで見えぬので乘氣出來なかつた。

我々は變に滿たぬ心持で――然し何か胸一杯の感じに充ちながら――橋を離れ、歩き出した。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正九年五月三十一日印刷納本
大正九年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（小石川一四四一・小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,70; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.